

---

# その悩みをぶち壊す！万事屋『幻想殺し』

マルコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その悩みをぶち壊す！万事屋『幻想殺し』

### 【Nコード】

N9418N

### 【作者名】

マルコ

### 【あらすじ】

10年後の学園都市で当麻が始めたのはどんな事も金さえ払えば何でもやる何でも屋であった。様々な人達の悩みを当麻やインデックス

その他の色々な仲間達とともに解決していく。ドタバタ人情コメディ

ー  
どんな悩みをぶち壊す万事屋『幻想殺し』に依頼が来る時、物語が始まる！

## 万事屋『幻想殺し』（前書き）

早速出来たの載せようと思います。

今回は色々な話を作れるように何でも屋と言っ設定です。  
では第1話行きます！

## 万事屋『幻想殺し』

学園都市、高い高層ビルや大きなデパートといったものが立ち並ぶイメージがあるが、

実際には街から離れていけばレトロな雰囲気を漂わせる街も存在していた。

高層ビルではなくごく普通の2、3階建ての家やお店が並ぶといった、学園都市の外でよく見かける光景がそこには広がっていた。そんな外との区別が余りつかない町並みを一人のとある少女が歩いていた。少女はある店の前に来るとバックからチラシの様な物を取り出して広げて暫くの間チラシと睨めっこを続けると意を決したように扉のドアノブに手を伸ばした。少女がドアを開けると客が来たことが分かるようにドアの内側についていた鈴がカラントツカランツとなった。店の中に入ると、中には8名ほど座れるバーカウンターのような席と5、6人が座れるであろうソファアの真ん中にテーブルを置いてある席が2つあった。

「いらつしゃ〜い！」

鈴の音に気付き、カウンターの奥の方から黒い髪を伸ばし、淡い緑色のエプロンをした一人の女性が現れた。その女性は少女をジツと見つめるとにこやかに話かける。

「見ない顔だね？」

と言われビクツと体を震わしたがそんな少女に優しく優しく微笑んだ。

「よつこそ喫茶『佐天』へ！何にする？」

「いえッ！違うんですッ！……………」

少女はバツクからチラシを出すと広げて目の前の女性に見せた。

「あーハイハイ！それね！それは家じゃなくて上の階の方なの…」

チラシを見て何かを悟った女性はどこか申し訳なさそうに続けた。

「でも今、上の人ちよつと出かけてるの…」

「そうですか…」

「でもすぐ帰ってくると思うからちよつと待っててくれる？」

「あっはい…」

「座って待ってて」

少女は言われるがまま取りあえず座る事にし、カウンター席の真ん中辺りの椅子に座った。

「はい、これサービス」

女性は座った少女の前に一杯のコーヒーを出しながら笑いかける。

「あっありがとうございます」

「別に気にしないで、私はこの亭主で佐天涙子っていうの…」

「あの…あなたはこれとは…」

「あゝそれ？違うの、私はこの上の家を貸してるだけで私がやる訳じゃないの普通に近所さんの付き合いだけなの」

「じゃあここはただの喫茶店ですか？」

「まあそうは言っても夜は学校の先生達を通う居酒屋に変わるんだけどね」

少女は佐天と名乗った女亭主に暫くの間、色々と尋ねていると

「喧嘩だアアア!!!」

突然、店の外から誰かが大声で叫んだ。何かかと思い二人で外に出てみると、店の近くで二人の男が向かい合っていた。

「みんな離れるオオオ!!!」

「能力者同士の喧嘩だアア!!!」

周りでは巻き添いを恐れた人達が次々に逃げて行ったが、そんな周りの迷惑も考えず

「テメエ!なめた口叩くんじゃねえ!!!」

「テメエこそ生意気なんだよ!!!」

片方の男は手から炎を出して、もう一人の方は手に水で出来た球体を持っていた。

「まずいですよ佐天さん!早く逃げないと!!!」

「あー…もう大丈夫みたい」

佐天がどこか笑いながら、そう言うのを聞いて少女は再び喧嘩する能力者達の方に目をやると

「おい、お前らなにしてんだ?コラア…」

突然二人の間に一人の男が割り込んだ。

「ああ何だテメエ!?!」

「質問を質問で返すんじゃないやねえよ、バカかお前は…」

男の言葉に腹を立てたのか、男達の目は割って入ってきた男にだけ向けられ、

「邪魔なんだよ！！！！」

炎と水が一斉に男に向かって飛んできた。だが、

「お前らが……………邪魔だアアアア！！！！！！」

男は炎と水の球体に右手で殴りつけるとそれらは綺麗に消え去り、男はそのまま拳を能力者達に叩きつけ殴り飛ばした。

「そんなに暴れてえなら「新世界」にでも行って億越えのルーキー達とでも戦ってやがれ、この野郎…」

殴り飛ばした男達を見降ろしながら男はウニのようなツンツンした頭をポリポリとかきながらめんどくさそうに言った。

「グッドタイミング！！！！当麻さん！！！！」

少女の隣にいた佐天は親指立てグツと手を握りしめながら男に近づいて行った。

「ああ、佐天悪いな…卵一人一パックなんだってさ…インデックスでも連れていきや良かったんだが」

そう言いながら上条と呼ばれたツンツン頭の男は左手に持っていたビニール袋を佐天に渡した。

「あつ！それよりもほらッ！！お客さん！！！」

袋を受け取りながら、佐天は尋ねてきた少女の存在を彼に教えた。男は少女を見るとああと頷き、ゆっくり近づくとポケットから名刺を出して、戸惑う彼女に手渡しながらふざけた感じで言う。

「どうも…万事屋『イマジンブレイカー幻想殺し』やっています…上条当麻です」



## 万事屋『幻想殺し』（後書き）

今回はここまでです。

佐天さんが喫茶店をやるというアイデアはどこかのSSで見たのでそのままパクりました。すみません

そして、この設定も分かりますと思いますがボウ人気ギャグ漫画から貰っています。

この万事屋『幻想殺し』はまだ終わりを考えていないのでとりあえずはひたすら色々な話を作っていくと思います。

ではまた今度…

依頼（前書き）

出来たので第2話行きます!!!

## 依頼

「どうぞ上がって下さい」

当麻は少女を喫茶『佐天』の上にある万事屋に案内した。招き入れられた家は喫茶『佐天』と元は一つの家だったのか外見と家の中の雰囲気もどこか似たものがあつた。

「奥で話を聞きます」

玄関を開けた先には普通に2、3人は並んで歩ける廊下が3、4メートル続いていて

廊下の先にドアとそこに行くまでに二つの扉も見かけた。

当麻について行き、奥の扉を開けると7、8畳ほどの大きな部屋の真ん中にテブルと人が2、3人座れるソファが2つ向かい合つて置いてあり

その奥には何かを書いたりするのにちょうどよさそうな高さの机があつた。

「ただいま～インデックス」

「うん…お帰り…当麻」

当麻の呼ぶ声に一人の銀髪のシスターの様な格好したが少女がソファから起き上つて、当麻と共にいる少女を見るなり顔が強張つた。

「ああ！！また当麻が女の子と帰ってきた！！今度は何！？帰る途中にリングでも落とした女の子を助けてもした！？」

「ちげえーよ！客だ客！！」

当麻がウンザリしながら返事を返すと銀髪シスターはあぁと言った顔をした。

「そついや茶もコーヒーも切らしてたな…インデックスちよつと佐天とこ行ってもらって来てくれ」

答えた後、当麻は何かを思い出したようにインデックスと呼ばれたシスターにそう言うと少女は指示に従って下の喫茶店に行く為、玄関に向かった。

「あとお茶菓子も貰ってこいよ」

「分かった!」

少女が去った後、当麻は尋ねてきた少女をソファに座らせて、自分は向かいのソファに座って少女と向かい合った。

「すみませんねー待たせちゃったみたいで」

「いえ!お気になさらず…」

「あ〜お茶が来るまでまだ時間もあるので簡単な用件だけでも…えつと〜」

「あつ!兼古です兼古かねこくみ亜美…」

「あ〜じゃあ兼古さん…今回の依頼はどういったもので?」

「え〜つと、ある人について調べてほしいんです」

「人を調べる…来て貰つといてなんなんですが…そういうのは探偵事務所とかに頼むのは?」

「いえっ!そんな大それたことをして欲しい訳じゃないんです…」

「では、どういった」

当麻が話を聞いているとにそれを遮るようにガチャと部屋のドアが開けられた

「ごめんなさい遅くなって!どうぞ」

戻ってきたインデックスは下の喫茶店に入れて貰ったであろうコーヒーをお客である兼古の前にゆっくり丁寧に置いた。

「おゝ悪かったなインデックス…」

自分のコーヒーを前に置くインデックスに謝っていると不意に目に入った何も乗っていない皿を見つけた。

インデックスはそれを何事もなかったかのようにテーブルのちょうど中央辺りにそれを置いた。

「なあインデックス…これなんだ？」

当たり前の反応を取っていると、インデックスがその何かのカスが沢山ついた口を動かした。

「いやゝ来る途中で階段でこけて見事にヒックリ返しちゃって…このインデックス一生の不覚なんだよ」

「…俺は口の周りのクツキーの屑が残ってるのが一生の不覚だと思っけど」

「はっ!?しまった!?!」

「何してんだコラア!?!」

慌てて口を隠そうとするインデックスに当麻は右手で汚れた口周りを掴み思いつきり力を込めた。

「テメエは何回同じ事言わせりゃ気が済むんだ!？」

「しょんな事いちゃって…」

口をギュツと絞められながら不貞腐れながら言い訳をした

「わたしゆの前にクツキーをおきゆなんて腹をすかせたりライオンの前にお肉を置くのによと同じなんだよ…」

「テメーとライオンさんを一緒にすんじゃねえ！ライオンさんはなあ！安全に食事をする為だったら！他の動物が食事を終えるまで我慢できる精神のお持ちの方々なんだよ！！！」

「でもライオンって自分で狩りをするよりも他の動物が取った餌を横取りしたりするから結構卑怯かも」

「常に横取ってばっかのお前にライオンさんも言われたくねエだろうよ！！！」

二人は暫くの間何やらライオン談義を始めたが、依頼主の兼古は突然の事にどうしていいのか分からなかったのだらう、そのまま軽く30分ほど続いた。

~~~~~

「なるほど…彼氏の浮気調査」

30分ほど討論した二人は漸く兼古の存在を思い出し、ウホンツと咳払い一つし本題に戻った。

「はい…実は友達から彼の良くない噂を聞いて」

「噂？」

「はい…他に色々な女性といるところを目撃したとかで」

「なるほど…それがホントかどうか調べてほしいと…」

「はい…」

「でもそれって私たちよりも探偵の仕事かも」

インデックスがそう言うのと当麻はインデックスの頭を後ろからパコン！と叩いて、

インデックスの首に手を回し口を耳元に近づけ呟き始めた。

痛い)

バカ野郎！ここでせつかくの仕事無くす気が？

だって…メンドクさいんだもん

あのなあ…ここでこの仕事逃したら明日からのご飯、砂糖と塩だけになるからな

えっ！？

単純な仕事なんだから、ちゃっちゃんとやればいいんだよ、ちゃっ  
ちやと

分かった

二人の微妙に聞こえる会議が終わると当麻は目の前で戸惑っている  
兼古に笑顔を向けた。

「分かりました！引き受けましょうー！」

「ホントですか!？」

「ええ！報酬は後日相談と言う事で…あっ！でも」

「でも？」

「すみません…そのコーヒー代だけは払ッとして下さい」

と当麻は申し訳なさそうに言った。残念ながら彼の事務所で出される  
ものでタダの物はない





## 依頼（後書き）

以上です。この依頼の話は多分あと3、4話で終わります。その後はまた色々ドタバタと進めていこうと思います。ではまた今度

## 調査（前書き）

出来たので載せます

## 調査

「あれがターゲットの花山勇治かやまゆうじ…亜美ちゃんと同い年で17歳の無能力者…」

当麻とインデックスは電柱に隠れながらとある一人の少年を見ていた。

少年はごく普通の黒髪にごく普通の顔立ち、服装も学園都市の若者がよくやりそうな格好をしていた。

「見たところ普通の子みたいだけど…」

「分かんねえぞ…最近はガキどもは普段は大人しくても影ではなにをやってるかなんて分かったもんじゃないぜ」

調べると言ってもただの浮気調査、別に聞き込みなどをする訳でもなくただ二人は遠くから依頼の少年を見守っていた。だがそこで、漸く事態が動き出した。見守っていた少年が駅前に来ると駅の近くにあった看板のもとに行き、そこで待ち合わせていたであろう少年よりも数歳年上の女と仲よさげに歩き始めた。

「はいアウトー」

インデックスはつまらなさそうに言った。

「いやいや…待て待て、決めつけんのは早いって…」

「何を今さら…どう見たって浮気じゃん」

「いやいや…ほらあれだよ、どうせ「実はお姉ちゃんでした」的

なやつだつて」

「何？そんなと同じ年上好きを庇いたいか？この変態…」

「おい！口調変わってるぞ！！大体年上好きの何がいけない！？俺はギヤーギヤーうるさい年下よりも落ちついている年上の方がいいに決まってるだろ！！」

「そういう自分本意の目先の事はつか考えていくと最終的に年取つた後、若い子好きになって援交に走ったりしちゃうんだよ！！」

「しません〜！俺はそんな過ちは犯しません〜！てかお前さっきから声でかいんだよ！！」

「先に大声出したのは当麻でしょ！！」

「ほらまた大声！！テメーばれたらどうすんだ！！」

実を言うと先ほどのはいアウト くらいから結構な大声を出していたのが、もう喧嘩をしている二人はそんな事には気付いていない。

「あの〜すいません…バレバレなんですけど…」

最早電柱からも出てしまっている二人に申し訳なさそうに先ほど見張っていた少年が声をかけてきた。

~~~~~

「そうですか…亜美の奴が…」

「ええ…」

「ねえ当麻…そんな簡単に話しちゃっていいの？」

「もつこここまで来たら話すしかねえだろ」

結局バレバレは尾行の為にばれてしまった当麻達は正直にすべてを話す事にし近くの公園へと向かった。公園には遊具があつたが誰もおらず、取りあえず座る場所が欲しかつたインデックスはブランコに乗り当麻はブランコの周りを囲む腰よりも低い塀の様なものに座つて、少年も二人から少し離れて塀に寄りかかりながら話をした。

「でっ？さっきの女は何なんだ？」

「それは……………」

「ほら！やっぱり言えない…つまり浮気つてことなんだよ…」

「ちっ！違います！！」

突然、少年が大声を出したのでインデックスはメンをくらつたような顔になつた。

当麻は目の前の少年、勇治の表情から何か理由があると悟つたのか、真剣な顔で尋ねた。

「何か理由があるなら言ってみろ…そうじゃなきゃ俺は亜美ちゃんに見たままの事を話すぞ…」

少年は暫く黙つたが意を決したように語りだした。

「誰にも言わなつて約束してくれませんか？」

「……………内容にもよるけどな」

「さっきの人はお客なんです…」

「客？」

「僕は…ホストのバイトをやつてるんです」

「ホストつてお前、そりゃ…」

「ええ…違法な事です」

「えっ！？違法なの？」

インデックスは意外そうな顔をした。彼女は決してそのような事に詳しい訳ではないがホストという物が違法ではない事は知っていた。

「ああ、普通に外だったら問題ないが、学園都市は子供の街だ…子供の為の法律ってことで子供の教育の為もしくは守る為にと理屈を並べてそういったものは禁止されてんだよ…まっ割合では子供が圧倒的に多いが人数だけなら大人だって何万何十万といるからな…わざわざ外に出るのが面倒な奴の為にとその手の商売をしてるって噂も聞いてたが…実際に見るのは初めてだな……そうか、客っていうのはそういうことか」

「はい…多分他のお客といたところを彼女の友達に見られたんでしよう…」

「なるほど…でもなんでそんなことを…」

「金がいるんですよ…」

「金？なんの為に？」

「彼女と…結婚する為に…」

「結婚だあ？」

あまりの突拍子のないことに当麻は思わず変な声を上げてしまった。しかし勇治はそんな当麻を気にせず顔を赤らめながら続ける。

「ええ…その…卒業したら取りあえず彼女と暮らそうかと」

「その為の資金作りってことか？」

「はい…正直僕は頭も良くないですから…将来はあまり期待できないかと…」

「それで違法な仕事に手を出したと…」

「ええ外で暮らすとなるとここでの暮らしみたいにはいきませんか」  
「ら」

「でも…だからってホストは彼女にとっては…」

「分かってますよ!」

インデックスの言葉に若干の苛立ちながら勇治は当麻とインデックスに向き合った。

「ホストなんてまともな仕事じゃない事くらい…でも、まともな方法じゃ彼女を養っていくほど儲かりませんし…それに」

「それに？」

「証明したいんですよ！無能力者の僕でも…彼女を幸せに出来るって…！」

右手を握りしめる彼を見て当麻は若干笑みをこぼした

「いいんじゃないねえの！別に…」

「えっ!？」

「金は天下の回りもの…どんな風に稼いでも、それをどう使うかは所詮は稼いだ奴の心掛けしただ」

「当麻さん…」

当麻は立ち上がると勇治の近くに行き、肩に手を置いた。

「まあ確かにホストはお客さんを騙すような仕事かもしれない…でもお前はそうしてまで彼女を幸せにしたいんだろ？だったら胸を張れ！恥じることはねえさ…俺の友達にも似たような奴がいてさ…一人の女助ける為にすべてを投げ出すような奴だけどさ…それでも絶対に後悔をしないように生きてきた、そんな奴なんだ、お前も似たようなもんだ…もっと自信を持って」

「…はい!!」

当麻の言葉に力強く頷き、当麻もそれを笑って見守った。

「まあ…亜美ちゃんにはうまく言っとくよ」  
「はいっ！ありがとうございます！！あっ！」

勇治は何かを思い出したように携帯電話を見て時間を確認した。

「すみません！バイトの時間なんでもう行かないと！！」

「ああそうか…がんばれよ！」

「はい！ありがとうございます！！！」

二人に手を振りながら勇治は公園から出て行った。

「…あつという間に終わっちゃったな…」

「でもいいの？当麻…ホストだよ…」

「関係ねえだろ？そんな酷い事してるわけじゃないし…さて！仕事も終わったし…後はのんびりしてようぜ…」

「当麻…まさか後2、3日なにもしないのにその分のお金取る気？」

「なんだよ…別にいいだろ…すっごい真実を隠すんだ、その分の料金貰ったって…」

なかなかの小悪党っぷりに呆れながらもインデックスは公園を出ていく当麻の後について行った。



## 調査（後書き）

以上です

依頼主の彼氏の名前はなんども考えたのですがいいものが出れず  
なんだかありきたりになってしまった気がします。  
名前を考えるって言うのも結構難しいです

## 急変（前書き）

夜載せようかとも思いましたが  
出来たの載せようと思います。

## 急変

3日後……………

「へえ〜いい子じゃないですか…」

依頼を受けてから3日後の午後2時当麻は事務所の下にある喫茶「佐天」を訪れて依頼人が来るまでそこで時間をつぶす事にし、その時間を利用し佐天に事の顛末を一通り教えた。

「それで？今日、結果の報告ですか」

佐天は当麻にコーヒー、インデックスにはホットミルクを入れて二人を持って成した。

「ああ…まあ何もなかったって答えるつもりだけど」

出されたコーヒーをすすりながら当麻は続ける。

「もうそろそろ来る頃だけど…」

「じゃあ漸く家賃払ってくれるんですか？」

次の瞬間当麻はコーヒーをブバツ！と噴出してしまった。

「いや〜どうかな〜大した事しなかったから大した額じゃないし…」

「じゃあ何時になったら払ってくれるんですか？」

呆れながら佐天が尋ねていると、店のドアについでる鐘がカランカランとなった。当麻は最初は依頼主である兼古かと思っただが視線を向けた先にいたのは学生時代から良く知る当麻の知り合いだった。

「あつ！吹寄さん、いらつしやい！」

「なんだ…吹寄か」

「なんだとはなんだ！？貴様！！私に頼んでいた事を忘れたのか！？」

「頼んだ事？」

吹寄はサラリーマンの様にピッタリとしたスーツを着ていて見るからに仕事の出来る女のイメージを持たせるが、今の苛立っている顔からはそのイメージを粉々に破壊していた。そんな風に見える事も気にせず吹寄は乱暴に持っていたバックから茶色の封筒を取り出した。

「貴様に頼まれた男の調査だ！！」

高校を卒業した後、吹寄は大学に進学してその後は弁護士になる為日夜勉強しながら弁護士の事務所働いている。弁護士事務所働いているだけあってその情報収集力はかなりのものであったが、今回はその情報収集力はまったく必要なかったと思っっている当麻にはまったく興味を持たなかった。

「あゝあれか…別に大したことなかったわ…悪いな取り越し苦労させて」

「何を言ってる！？」

吹寄は苛立つ顔をさらに強張らせてカウンターに座る当麻に近づい

て茶封筒の中の書類の様なものをカウンターにバシンツ！と叩きつけた。

「貴様に言った男！とんだ悪党だぞ！！」

吹寄の言葉に当麻は漸く書類を手に取った。

「じりゃ…」

書類には依頼主に頼まれ調べていた男、花山勇治さらに何人もの女性の経歴が書かれた書類であった。

「コイツ…どうやら裏で手に入れた武器やらクスリやらを女に預けてわ売りさばいてるらしいぞ！」

「「えっ!?!」」

声を出したのは当麻ではなくインデックスと佐天であった。

「おまけに売ったのがバレたら全部その女に罪をなすりつけて逃げるというとんでもない男だ！！」

当麻は吹寄の言葉に耳を傾けながらも黙々と書類を読み続けた。

「さらに悪いのは、これだけの事が分かっているのに、そいつは留置所送りもま逃れている！！」

「どうしてですか!?!そんなの被害者からの証言があれば!?!」

「なかつたのか…」

当麻はすべて悟ったように呟いて、続けた。

「この書類に載ってる女の子達…全員行方不明になってる」  
「えっ！？あつ！ホントだ！」

佐天は当麻が読み終えた書類に目を通した。当麻の言う通り書類に載っている女の子達は学校に入るまでの経歴はちゃんと書かれているのにどういふ訳かそこから先に至ってはすべて不明となっていた。

「その通りだ…その被害にあつた女性は自分の無罪を訴えて置きながら、数日後に忽然と姿をくらました…「警備員」<sup>アンチスキル</sup>は結局犯行がばれるのを恐れた彼女達が逃げ出したと考えて大した調査もせずに調査を打ち切った。おそらくみんな」

「人身売買つてどこか…」

「ああ…おそらく」

肯定する吹寄の言葉に啞然としながら佐天は書類を見続けた。

「そんなことって…」

「学園都市の裏となれば珍しくもない…金も稼げて証拠となる女も消える…一石二鳥だ…だがコイツは…人材派遣<sup>マネジメント</sup>なのか？」

「いいや違う…ただのゴロツキだ…」

「おいおい…だったら裏の連中は何してんだ？人材派遣<sup>マネジメント</sup>でもねえ奴が好き勝手やってるのに、何のお咎めもなしか？」

「それもまた、抜け目のない事だな…奴は一定の料金を納めることである程度の商売を裏から保障されているんだ……まだまだ分からん事はあるが奴は間違いなく悪党だ！！」

佐天もインデックスも信じられないと言った顔だったが、吹寄は気にせず続けた。

「私の先輩はかつてコイツの裁判で証拠不十分でこいつを捕まえら

れなかったと後悔していた：貴様に言われて調べてみたときはまさかとは思ったが：取りあえず依頼主に会わせる！念のため彼女を保護する！」

「まだ来てねえんだよ…」

するとインデックスが時計を見て思い出したように言った。

「そう言えば当麻：亜美ちゃん：2時には来るって言ったのにもうかれこれ1時間は経ってるよ」

そう言った瞬間、当麻はバツ！と立ち上がり入り口のドアに向かって走った。

「インデックス！メット持ってこい！！」

「うっ！うん！！」

当麻に言われ少し遅れてそれに続いた。当麻は喫茶「佐天」の裏に止めてあるバイクのもとに走り、インデックスは二階に繋がる階段へ行った。当麻が裏からバイクを引きずってきてエンジンをかけていると佐天と吹寄が慌てて出てきた。

「当麻さん！？」

「彼女の家に行ってみる！」

エンジンをかけた当麻は勢いよくバイクに跨った。

「佐天！！彼女は華根城高校だった！寮がどこか分かるか！？」

「えっと…華根城は第7学区の端だったから大通りから外れた…あつ！つい最近つぶれたコンビニの近くです！」

「よし！吹寄！お前は今の事を「警備員」アシスタントに伝える！！」

「分かった！任せる！！」  
「当麻！」

2階に向かったインデックスは持っていた2つのヘルメットの片方を当麻に向かって投げた。

「サンキュ！！早く乗れ！！インデックス！！」

当麻はすぐにヘルメットをかぶってインデックスが後ろに乗ると同時にバイクを走らせた。



## 急変（後書き）

以上です。

スクーターがバイクか迷いましたが  
やっぱりバイクの方がカッコいいですね。

小者（前書き）

完成しましたので載せます

## 小者

バイクを勢いよく走らせ当麻が行った先は依頼主である兼古亜美が住む学生寮であった。

彼女の通う華根城高校は大それた能力者もおらず普通の学校と大して変わらない為、

能力開発を目的とする学園都市ではあまり重要とみられず、寮の状態はこれと言っていないものでもないが、立地条件は悪く駅やデパートといったものから遠く、大通りからも外れていた。当麻は寮までの道は大体把握できていたが、近道の為、車一台通るのがやっとな一方通行の道を無理やり通っていた。

寮の前に来た当麻はすぐにバイクを止めて、バイクから降りようとするインデックスを置いて寮に向かって走り、エレベーター近くにあった管理人室窓をドンドンと叩いた。

「おい！兼古亜美の部屋はどこだ！？」

「へっ！？」

管理人は50代ほどのおじさんで最初はよくわからないといった顔だったが

「早くしろ！！誘拐されたかもしれねえんだ！！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

管理人さんは最初は戸惑っていたが当麻の気迫（胸倉を掴まれ脅迫に近い）によつて渋々部屋まで案内することにした。5階にある彼女の部屋に行く為、エレベーターにのつた。当麻は5階につくと同時に部屋に向かつて一気に駆けし、部屋のドアを叩いた。

「おい！！亜美ちゃん！！いねえのか！！俺だ当麻だ！！」

かなりの大声で叫んだが、中からは返事がなかった。

「変ですねえ…彼女が出かけた記憶はないんですが…ちょっと待って下さい、今開けますから」

そついつて管理人がカギを取り出した瞬間、

「チエストオオオオオ！！！！！！」

当麻の蹴りがバコオオン！！とドアを蹴破つた。

「えええええええ！？何してんの！？あんた！！今開けるつつつたじやん！！！！！！」

おっさんの鋭いツツコミも無視し当麻は中に入った。

「亜美ちゃん！！」

部屋は昔当麻が住んでいた寮と大して変わらず、キッチンにリビング、あと風呂などがあるだけだった。

「いませんね…」

後ろからついてきた管理人さんがポツリと呟いたが、当麻はそれに答えず部屋の奥にあった、押入れの扉に手を伸ばした。

「ちよつと！いくらなんでも！！」

管理人さんが止めるを聞かず当麻は押入れを勢いよく開けた。すると中には部屋の雰囲気合わないゴツリとした大きな銃から小さな銃、さらにかかりの量の弾が入っていた。

「こつこれは！？」

「ちつ！！」

驚く管理人さんをよそに当麻はすぐに部屋から出た。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

当麻が外に出ると心配そうな顔をしたインデックスが近づいてきた。

「当麻！！」

「最悪だぜ、ビンゴだ！！」

はつとするインデックスを無視し当麻は携帯を取り出して電話をかけた。

「吹寄！」

『上条か！？どうだった！？』

「残念ながら当たりだー！」

『なっ！？彼女は！？』

「いねえよ…おまけに部屋の押入れにはこれでもかかってぐらい銃が置いてあった」

『くそ！遅かったか！！』

「アンチスキルは！？」

『連絡はした…動いてはくれている………だが』

「期待はできねえか……くそっ！」

当麻は右手で頭をワシヤワシヤ搔きながら考えた。

(どうする！？この街中を探し回っても見つかる訳がねえ…だったらいっその事人身売買の店をひたすら見張るか！？…いや、駄目だ俺一人じゃ無理だし、アンチスキルの協力も見込めねえ……くそっ！！…こんなくならね小者一匹見つけれないのか！？)

当麻は頭の中で自分を非難したが、しかし、頭によぎった一言を当麻は見過ごさなかった。

(待てよ…小者？)

当麻は再び携帯に向かって話しかけた。

「おい！吹寄！！奴の取引相手はどんな大者がいる！？」

「はっ？大者？……いやこれといってすごい奴はいないぞ…さっきも言ったが奴は抜け目のない奴だあまりにも取引するには大きすぎる奴とは商売しならしい」

「てことは…相手は小者ばかりか？」

「ああ…みんなブラックリストに居場所も載らない小さな組織やスキルアウトなどだ」

「スキルアウト…」

「ああ…武器の取り引きだったらスキルアウトがほとんどだ」

「そうか…それだけ分かればいい」

当麻の言葉に何か吹寄が言ってきたのが少し聞こえたが、当麻は気にせず電話を切った。

「だったら…スキルアウトにはスキルアウトだ…」

## 小者（後書き）

以上です。次回は解決編です。  
それではまた



## 解決（前書き）

出来たの載せまゝす。

## 解決

第19学区、学園都市の中では一番寂れてしまった学区であり、ここには滅多に人が来ないといってもそれは一般人に限ったことであり、こんな場所でもつかわれる事もある。特に人にばれたくないことをする連中にとっては、

「たくつ…まいったぜ…まだ全然稼がせてもらってねえのに…」

とある倉庫で縛られ眠っている少女を見下ろしながら花山勇治はイライラとした表情で言う。

「コイツのせいでもう売り払わないといけねえや」

「別にそこまで警戒する事はねえんじゃねえか？」

後ろからいかにも不良っぽいイメージを持たせる男が声をかけてきた。

「いや…念のためもう全部売っちゃまう…一回妙な奴らに嗅ぎまわられたからな…」

「へっ相変わらずだな」

おそらく商売相手であろう数人の男達と花山が話していると、眠っていた少女が目を覚ました。

「んっ…ここは？」

「ああ…起きたか…」

「勇治…君」

「たく…オメーが変な奴ら雇うもんだからこんな事になっちゃまった

んだ…よ！」

最後の言葉と同時に花山は倒れる少女の腹に蹴りかかった。

「アアアアア！」

「おい！あんまり傷つけんなよ…売れなくなっちまだろ…」

痛々しい叫び声を上げたにも関わらず男達はまったく止めようともせず、ただ笑いながらそれを見守っていると、どこからか何かのエンジン音が聞こえてきた。

「おい…なんだ？」

「バイク？」

「こんな所をか？」

男達は不思議そうな顔をしていたが、次第に音が大きくなって行く事に気付き少しずつ顔色を変えていった。そして、もうはつきりと聞こえるくらいエンジン音が大きくなると、突然、倉庫の窓ガラスがバリッ！と割りながら一台のバイクが倉庫に突っ込んできた。

「なっ！何だ！？」

突っ込んできたバイクはもうほとんど横滑りに近い感じで男達の溜まってる場所に突っ込み男達を数人巻きこんで壁に叩きつけられた。

「いって…ちょっと無理しすぎたか」

みながバイクの方に目をやっていたが、その言葉に全員が一斉に声の方を向いた。

「テメエ一体何なんだ!？」

「えっ!？何そのフリ?あれか、「通りすがりの仮面ライダーだ!」的なものを言っただけかい?まあ答えてほしいなら言っただけだよ」

あまりの緊張感のなさに全員がポカンとしていると

「っ!かお前ら人のバイクに何してくれてんだ?ちゃんと修理代払えよ」

「オメエーから突っ込んできたんだろ!！」

「なんだお前!？当たり前でももっとマシなたかり方するぞ!！」

訳のわからない男の存在に男達が驚く中、その人物の名前を知る少女はポツリと呟いた。

「上条さん……」

「へっ……わざわざ女を取り返しに」

花山は当麻の高度をあざけ笑つかのように言う。だが当麻は

「取り返す?その程度済むと思ってるのか?」

花山の言葉に冷たく返した。

「オメエがどつかの悪党っぽく一流の悪党と言えるようなタマだったら改心する暇も与えるが」

と当麻は腕を回しながら準備運動のような事をしながら言った。

「テメエらみてえなら流の悪党は……改心する暇も与えねえ」

明らかに今までの雰囲気との違いに男達は少しひるんだが、数で言えば絶対有利のため男達はすぐに動いた。

「カツコつけんじゃね！ たった一人で何が出来る！？」

「やっちまえ！！」

合図と共に数人の男がそれぞれ銃を取り出したが、男達が銃を向ける前に当麻は一気に近づき、まずは目の前の男を殴り飛ばした。それに反応した近くの男が当麻に銃の照準を合わせ、引き金に指をかけた。それに気付いた当麻は即座に近くにいた男の襟を引っ張り、その男を無理やり自分の前に出して盾にした。銃を構えていた男は一瞬の判断で僅かに照準をずらしたが、すでに引きかけていた指を止める事は出来ず、そのまま味方に向かって銃を撃ってしまい、銃弾は味方の肩に当たってしまった。

「ガアアアア！！」

「銃は使うな！ 味方にあたる！！」

銃を使えなくなった男達は素手やナイフをもって当麻に挑んでいったが、向かっていく者はすべて一撃でのされてしまい。何人かで取り囲み一斉に攻撃をするも当麻はそれらをすべてスラリと交わして、攻撃に合わせてカウンターを入れていく。やっている事は実に単純だがそれでも男達は仲間がどんどんやられていく状況を打破する事が出来なかった。残った男達もはや5人ほどしかいなくなり、状況が不利であると判断した花山は誰かが落としたナイフを持って倒れている少女に突きつけた。

「動くな！！！！こっ！この女がどうなっても……！！」

「当麻！！」

花山の言葉を遮るように一人の少女が倉庫に入ってきたかと思うとその手に持っていたヘルメットを当麻に向かって投げつけた。

「必殺！！メットシューツトオオ！！！！！！」

当麻は自分に向かって飛んできたヘルメットを見るなり勢いよく飛びあがりオーバーヘッドキックの様にヘルメットを蹴りつけ、ヘルメットはすごい勢いで花山の顔面に向かっていきゴキン！！と鈍い音をだしながら、顔面を直撃した。

「ブハア！！！！」

当麻のメット攻撃に花山は完全に意識を失い、蹴った当麻は即座に立ち上がった。

「そういう悪党らしい台詞はちゃんとした悪党が言え！このヤロー」

花山がやるうとした人質作戦はほんの一瞬に終わってしまい、男達が次はどうするかと考えていると何かを思い出したように一人の男が言った。

「おい…今当麻って」

「んっ？……ああそれにあの女は上条とも言ってたぜ」

残った男達が暫くの間考えていると一人の男が

「まっ！まさか！！！！上条当麻！？」

一人の男が言った言葉に誰物が息をのんだ。

「あの！かつて学園都市最強の超能力者として君臨していた『一方通行』<sup>ラレラ</sup>に拳一つで挑み、勝利し今となっては唯一肩を並べる存在と言われる！！」

「伝説の無能力者！」

「……上条当麻！！」「……」

「は？い、そうですけどなにか？」

慌てる男達と対照的に当麻はおちゃらけた感じに言ったが、その一言でその場にいた男達はみな弱腰になった。

「勝てる訳がねえ！！」

「逃げるオオ！！」

倒れている仲間を見捨てて、残った男達は出口に向かって走り外に出ると、工場の前に車や大勢の武装した集団が待ち構えていた。

「『警備員』<sup>アンチスキル</sup>だ！！ここは完全に包囲されている！！大人しくでてくるじゃん！！」

倉庫の周りは最新鋭の武器を装備した『警備員』<sup>アンチスキル</sup>によってガチガチに囲まれていた。

「『警備員』<sup>アンチスキル</sup>だああ！！」

「囲まれてるぞオオ！！！！」

倉庫内いた男達は皆慌てどうすればいいかとパニックになり、そこに当麻がとどめを指すように言った。

「で？俺にやられるのと警備員アンチスキルに捕まえるのどっちがいい？」

~~~~~

「おら！さっさと乗るじゃん！！」

結局、男達は無駄だと悟ったのか抵抗をやめて大人しく捕まる道を選んだ。

みな手に手錠をかけられて、続々とトラックほどの大きさの車に乗せられていった。

「大丈夫？亜美ちゃん？」

少女を縛っている縄を解きながらインデックスが尋ねた。

「はい…本当に危ないところどうもありがとうございます…」  
「まっ気にすんなって」

深々とお辞儀をする亜美の様子を見て大きな怪我がない事が分かり安心していると、

「随分なお手柄じゃん！上条」

「あっ先生！」

当麻が普通っていた学校の先生でもあり『警備員アンチスキル』でもある黄泉川愛穂が声をかけてきた。



「いや〜ワザワザありがとございました…」  
「いやいや礼を言うのはこっちじゃん！結構な悪党を捕まえてくれてたじゃん」

4人はそろって『アンチスキル警備員』の車に押し込まれる花山を見つめた。

「あいつは元々黒い噂が絶えなかった奴じゃん…調べれば色々出てきそうじゃん」と、そーだ」

黄泉川は亜美の方を向き大量の武器が写っている一枚の写真を見せた。

「もう君が手に入れた訳じゃないのは分かってるけど、一様関係者じゃん…ちよつと取り調べを受けて貰う必要があるじゃん」

「はい…分かりました」

それを伝えると黄泉川は現場を指揮をとり再び倉庫へと向かった。

「じゃ！俺達はもう帰るな…」

「えっあの〜あなた達は事情聴取は？」

「ああ大丈夫大丈夫、これが初めてじゃないから…」

「そうなんですか…あつ！そーだ依頼料…」

「あ〜もう！勘弁してくれ…今日は無駄に働きすぎて疲れてんだ…俺は」

当麻は頭をかきながら面倒くさそうに言う。

「また、その内でいいから…またコーヒーでも飲みに来い…勿論自腹でな」

「……………はい…」

当麻の言葉に笑顔で答えると亜美は『警備員』アンチスキルに連れられて倉庫から去っていった。当麻とインデックスも突っ込んだバイクを取りに行くと、バイクを引きずりながら倉庫を後にした。暫く歩いていると我慢していたのかインデックスが鬱憤を晴らすように怒り始めた。

「もおー！！当麻ったらー！！あーやってカツコつけるから報酬貰い損ねるんだよ！！」

「貰い損ねてねえよ…亜美ちゃんならちゃんと後で払ってくれるさ…」

「じゃあ今日のご飯はどうするの！？もうお金ないんだよ！！」

インデックスにとってはそれが一番の問題らしいが、当麻の顔から余裕の色は消えなかった。

「ふっふっふ…バカ言っちゃいけねえよインデックスちゃん………  
じゃじゃ〜ん！！！！」

当麻は突然上の服をバツと上げてベルトに干すような形でつけている大量の財布を見せた。

「どうしたのその財布！？」

「倒したあいつらのポケットから抜き取った！」

当麻はベルトにある10個近くの財布を満足そうに叩きながら笑う。

「こんだけありや暫くは飯の心配はねえだろ！」

「さすが当麻ー！！」

「さーてとっ！まずは佐天に家賃払ってから焼き肉でも行くか！」

「わーい！！お肉お肉ー！！」

そのまま二人は笑いながら家へと帰っていった。  
最後の最後にヒーローらしくない事をするが彼は全く気にしない、  
なぜなら彼自信自分がヒーローだなんて思っていないからだ。

## 解決（後書き）

— 先ず第一話完って言ったところですね。

ほかにどんな話を作っていくかはまだ決まっていませんが  
こんな感じのホノボノコメディーで行きたいと思います。  
ではまた今度

## 金欠（前書き）

話は前回で一区切りですが  
まあ付けたしといたところす。

## 金欠

とある日の朝、浜面仕上は窓から差し込む光によって目を覚ました。覚ましたと言っても目は薄目を開ける程度しか開けておらず、ほって置けばまた眠ってしまいそうである。そこに

「……………はまづら」

目を覚ましかける浜面にやさしい声がかげられた。最初は何を言われているか良く分からなかったが、暫く立つとその声の主と何を言っているのが分かった

「はまづら…起きて」

「滝壺…勘弁してくれ…昨日仲間達と飲みすぎて…頭いてーんだ

…

「…飯冷めちやうよ…」

「ああ…もう少し」

浜面を起こしに来た滝壺はこのままでは起きないと悟ったのか浜面の耳元で魔法の言葉を呟く事にした。

「はまづら…」

「ん〜？」

「もし起きてくれたらキスしてあげる」

そう言った瞬間浜面は掛け布団をバツ！と蹴飛ばした。

「ウオオオオ！一日酔いがナンボももんじゃあい！！！」  
「…………おお」

死にかけの勇者が死の淵から蘇るようにすさまじい勢いで立ち上がっている、ピンポンつとチャイムが鳴った。

「誰だろ？…出てくるね…」

「ああ」

出て行った滝壺を目で追いつつ、もう目が覚めてしまったことに気付いた浜面はそのまま着替えることにした。

「はまづら…」

ズボンのベルトを締めていると後ろから滝壺の声が聞こえてきた。

「どうした？」

「これ…」

着替え終わった浜面が振り向くと滝壺の前に一人の浜面の良く知る人物ともう一人彼とよく一緒にいる銀髪のシスターが首から『ご飯を食べさせて下さい』と書かれたプレートをぶら下げて、捨てられた猫の様な目で浜面を見つめてきた。

「あゝ滝壺…」

「何？」

「元いた所に捨ててきなさい！」

「この人でなし！！！！」

~~~~~  
~~~~~

「いや〜助かった!」

不機嫌な浜面の前に座る当麻が満足そうに言った。

「はい…インデックス」

「ありがとう!りこう!」

当麻の隣のインデックスはまだ満たされないのか3杯目となるご飯のおかわりを滝壺から貰っているところだった。

「いや〜米も底ついてどうしようかと思ってたんだ」

「その度に家に来るな!お前から来るたびに(ほとんどが暴食シスターのせい)家の米が一気に無くなっちまうんだよ!」

イライラ顔で叫ぶ浜面をあしらうように当麻はお茶をすすりながら言う。

「なんだよ、どうせ俺が来なかったらエロい事でもするつもりだったんだろ…正直に言え、この万年発情ヤロー」

「うつせーよ!万年金欠ヤロー!!!」

「仕方ねーだろ金欠は慢性の鼻炎みたいなもんなんだから…俺達は常に金欠と生きてかなきゃならないデステニーなんだよ」

「知らねーよ!オメーの生き方なんて!」

当麻との口喧嘩?に疲れたのか、浜面は立ち上がってベランダへと向かった。



「ちよつと煙草吸つてくる…」

「おっ…じゃあ俺も…」

一緒に立ち上がった当麻を見てインデックスは食べるを止めて当麻に尋ねた。

「あれ当麻って煙草吸うの？」

「んっ？タダなら吸う」

「これもたかるんかい！！」

~~~~~

ベランダに出ると浜面は煙草を銜えて火をつけた。

「この前は悪かったな…わざわざスキルアウトまで使って調べて貰つて」

吸った煙をぷは〜とはきながら浜面は答える。

「別に気にすんな…あれくらい大したことねえよ…」

二人はベランダの柵に寄りかかった。浜面の住むマンションは昔当麻が住んでいた寮に似ているが部屋は当麻の寮より多く、駅や大通りから離れている為か家賃も比較的安いものであった。ベランダから見えるのは似たようなマンションがずらりと並んでいる光景だった。

「…また何かやらかしたそうだな」

浜面はどこかニヤリとした表情で言うと、当麻は別にといった顔で答える。

「……別に、大したことじゃねえ…俺は自分の依頼を果たしただけだ」

「それが厄介なんだよ」

浜面はもう一度煙草を吸ってはくと、当麻を横目で見た。

「あまり派手に動くなよ…やりすぎると流石に親船さんも庇いきれねエだろ…」

「ふっ…まあ親船さんには感謝してるが、俺は今の生き方を変えるつもりはねえよ…」

当麻はグーっと手を伸ばし伸びをしながら言う。

「人に生まれた以上、自由に生きなきゃそんだろ？」

「相変わらずだな…お前は…でもずっとそう言ってるか分かるねえぞ」

「なんかあつたのか？」

「いや…ここ最近、ローマの動きがおかしくなってるらしい」

「なんだ？また打倒、学園都市か？」

「さあな…何にしる不穏な動きがあるらしい…だが今一番厄介なのはこの街かもな」

「学園都市がか？」

「ああ…また暗部で小競り合いが始まるらしいぞ………こりゃ、近いうちに呼び出しがかかるかもな」

なかなかシリアスな話だが当麻はふーんと興味なさげに言ったが、  
浜面そんな当麻にため息をつきながら呟く。

「まったく…なんでこう何時も…世界つてもんは面倒なんだろうな」  
「別に…世界はなんだ変わっちゃいねえ…俺達人間が面倒なだ  
けなんだよ…」

~~~~~

「じゃ〜ね〜、りこう！はまづら！」  
「御馳走さ〜ん」

当麻と浜面の難しい話をする事30分後、インデックスの「おな  
かいっぱい」の一言で二人の話は中断、当麻はもう帰る事にした。

「つーか本当に飯食いにきただけなんだな…」  
「また来てね…」  
「もう来んなよ〜」

帰る二人に温かい言葉と冷たい言葉をかけ二人が帰るのを見守った。

「ねえはまづら…かみじょうと何を話してたの？」  
「ん〜…ただの世間話だ」

浜面は適当に答えた後、もうほとんど底を尽きかけている食糧を補  
充しにいくた出かける準備に取り掛かった。



## 金欠（後書き）

今回はここまでです。

とりあえず暫く短い事件を書いていこうと思いますが

そのうち、長編も書いていきたいです。

とりあえず今回は複線みたいのをいくつか残しとこうと思いました。  
では、また今度

依頼？（前書き）

いろいろあつて遅くなりましたが  
新作です。

依頼？

とある日の午後、当麻とインデックは客間にある少し大きめな机の下に身を潜めていた。

決して地震などの災害から逃れる為に避難している訳でない。彼らが机の下にいる理由は今まさに玄関の前にいた。

「上条さくん！いないんですか？」

彼らから家賃を回収しに来た佐天はひたすらチャイムを押し続けていた。

「いいか、インデックス…気配を消せ、息を潜めるんだ」

「わかった」

机の下に隠れるという奇妙な状態だが、そんなことをお構いなしに二人は小さな声で話した。

「いいか…自然と一体になれ、お前は宇宙の一部で宇宙はお前の一部だ」

「宇宙が私の一部！？すごい！どんな悩みも小さく思えてくるかも…！！」

「うるせー！声がでかいんだよ！！」

「むー！そう言ってる当麻の方が声大きいかも！！」

「違います〜！お前の声の方が大きいです〜！！」

「どちらの声も大きいと思いますけど…」

二人の討論に割り込むよう突然、聞こえてきた声が聞こえる方を二人が見てみると二人が隠れる机の上に髪をツインテールにまとめた当麻のよく知る人物、白井黒子がいた。

~~~~~

家に立てこもり作戦が失敗した当麻、インデックスは下の階の喫茶

『佐天』を訪れ、コーヒー（有料）を飲むことにした。

「ちつ…白井を使うのは反則だろ…」

「家賃滞納してる方が人間として反則です…」

もつともなことを言いながら佐天は渡された家賃の札束（ほとんどが千円札）を数えながら言った。

札束を数えた後、佐天はあきれながらため息をつく。

「まったく…これじゃ一月分の半分にしかありませんよ…」

「仕方ねーだろ…それ以上払ったら俺達の食事代が危ないんだよ…」

喫茶『佐天』のコーヒー（有料）を啜りながら当麻は呟くと、視線を少し離れたところに座る白井に移した。

「まったく…『風紀委員長』ともあろうお方が…ワザワザ家賃の取り立てとはご苦労ですな…」

『風紀委員長』学園都市の治安を守る『風紀委員』の学区ごとに存在する支部をまとめる5人のリーダー達であり、『風紀委員』の中



でも特に優秀であり、尚且つ大能力者以上でなければならぬといふ学園都市きつてのエリートの実証である。

「別に私はついでに佐天さんのお願いを聞いただけですの…今回、私は私で依頼がございまして…」

「依頼？」

「ええ…実はストーカー被害にあつてまして…」

ため息交じりの白井を見ながら当麻は暫く時間が止まった。

「……………はあ…いいか白井そつというのは自意識過剰と言つんだぞ」

「……………はあ？」

「そんなもんどうせ勘違いだろ…だいたいなんでお前なんかストーカーキングするんだよ…」

お前をストーカーキングするくらいだったらアリンコのストーカーキングでもしてた方がよっぽど面白いぞ…」

「はり倒しますわよ…あなた」

腕を組んで足を組みかえながら白井はイライラを押し殺しながら、落ち着いた感じに言った。

「私ではなくて初春ですよ！」

「ほう…そりゃ心配だ」

「ぶちのめしますわよ…」

白井がもつともな怒りをあらわにしていると、白井の怒りによって張り詰める空気を何とか和ませようと佐天が会話に入ってきた。

「そついえば私も昨日、初春から相談受けたんですよ…なんだか最

近、後をつけられたり、何か変な物がポストの中に入っていたりつて

…」

「へ」

「近いうちに私から上条さんに相談しておくからって言って置いたけど…まさか白井さんの方から来るなんて」

「いや、別に仕事だって言われれば別にいいけどさ…報酬の方はどうなの？誰に請求すればいいの？」

どこかやる気のないような声に白井はため息をついたが、突如佐天が閃いたように言った。

「わかりました！じゃ解決してくれたら、今溜まってる家賃全部手ヤラにして上げます！」

佐天の言葉を聞いた途端、当麻は椅子から立ち上がって手を敬礼ようにおでこにあてながら宣言する。

「この上条当麻！！命に代えても初春様をお守りします！！」

依頼？（後書き）

以上です。

これはまあそこまで長い話ではないと思います

遊戯（前書き）

出来たので載せます

## 遊戯

依頼を受けた3日後、上条当麻はとある公園で立ち尽くしていた。

(どこだ?…どこにいる?)

立ちながら当麻はひたすら鋭い眼光を公園のあちこちに向けていた。

(いや…例えどこにいても、この俺の数キロ先の双子の顔の違いを見分ける俺の目と数キロ先の魚の焼ける臭いも嗅ぎわかる俺の鼻の前からは…逃げられはしない)

当麻が全神経を公園全体に張り巡らしていると、不意に当麻の後ろからガサツと草の揺れる音がした。

「そこだアア!!」

当麻が勢いよく振り返った先にはビクツと体を震わせた小学校低学年ほどの少年二人がいた。

「サトルにリョウタ見いっつけ!!」

そう言うと当麻は一気に公園の中心へと全速力で走った。

「缶ぶっんだつと!!」

余裕の笑みをこぼしながら缶を踏む当麻に少し遅れて少年達が悔しそうに当麻の傍によって来た。

「あゝ！また負けた！！」

「これで9連敗だよ…」

「はっはっはっ！この上条さんに勝とうだなんて10年早いほらっ！もう一回だ！！」

どう見ても当麻の大人げない行動としか思えないが少年達は楽しそうに公園のどこかに散らばっていった。

暫くしてから再び捜しにいくと、今度はものの2、3分たらずで少年達を見つけた。

「ほらっ！二人とも見つけ！！」

そして今度も大人げなく走り缶のもとに行くと、振り返り少年達がまだ遠くにいる事を確認し、余裕を持って缶を踏もうとした。

「缶ふゝんっ」

「オラアアアア！！！！」

そこに缶を踏もうとする当麻の余裕の声とはまったく違う凄まじい叫び声を上げた佐天が横から勢いよく缶を蹴り、遙か彼方へと飛ばした。

「だアアッ！！！！俺の貴重な10連勝がアア！！」

嘆く当麻と「勝った」と喜ぶ少年達を無視し佐天は携帯を手に取った。

「もしもし初春？うん、バカ発見した。近くの公園…うん、そう…早く来てね…」

「なんて事すんだ佐天ツ!?俺の10連勝を!!!」

「知りません!そんなこと!!!てゆーか何してんですか!？」

「見て分かんねえか?缶けりだ!!!」

「いや!何がじゃなくて!!!何でそんな事してるのかってことですよ!!!」

二人が討論していると、少年達が公園にあつた時計を目にすると当麻に向かって手を振りだした。

「じゃあねお兄ちゃん!もう帰るね!」

「バイバイ」

「あつ!待てお前ら!!!勝ち逃げか!？」

少年達を追おつと歩き出す当麻に

「あんたが待て!!!」

佐天は後ろから首の襟元を掴んで、そのまま地面に叩きつけた。

~~~~~

「はい!これ持って下さい!!!」

不貞腐れる当麻の前に佐天はいくつもの買い物袋を置いた。

「は〜…なんでこんな事しないといけないんだよ…」

「缶けりしてた人に言われたくないです!大体なんで今回一緒にい

るか分かってるんですか？」

「いや、護衛は分かるよ…だからって何で荷物持ち？」

並べられた買い物袋を見つめながら不満たらたらに当麻は続ける。

「大体な、女に連れ回されて両手を買い物袋でいっぱいにするなんて、今じゃ『りぼん』のデートシーンでも見やしねえよ…せめて月9くらいのクオリティにしてくれ」

「無理です上条さん…あなたはTOKYO MXの25:30顔です」

「なんでそんなピンポイントな顔なんだよ…」

公園の入り口近くで二人がそのような会話をしていると

「すいませ〜ん！お待たせしました〜」

二人のもとに黒い髪を伸ばし、佐天より少しばかり背の低く、頭に花飾りをのせた女性が息を切らせながら近づいてきた。

「大丈夫、初春…今バカ叱ってたところだから」

笑顔で答える佐天と対照的に隣でしかめっ面の当麻を見た初春がどこか心苦しそうに話しかけた。

「すいません、上条さん…長い間お待たせしちゃって」

「あゝまあ気にすんな…オメエはよくやったよ…」

「缶けりしてたあんたが言うな！！」

何時もよりハイテンションな佐天とローテンションの当麻と共に初春の買い物は続いた。





## 遊戯（後書き）

以上です。今回は早かったですが、次回はいつになるかは分かりません。

誰をツツコミにしているか分からなかったので、佐天にしましたが佐天のつつこみのシーンがあまり原作などでないためほとんどイメージのようなものです。

出来るだけ違和感のないようにしたつもりですが、  
気になった佐天さんファンの皆さん、どうもすいません

恋愛（前書き）

遅くなりました。  
載せます

## 恋愛

日も沈み、買い物を堪能した3人（正確には2名）はすっかり暗くなつた大通りから外れた道に立つていた。

「じゃあね、初春！」

「はい、佐天さん今日はありがとうございました」

「それじゃ上条さん、初春の事よろしく頼みますよ！」

「はいはい」

昼間の缶けりの所為か念を押してくる佐天を適当に流しつつ答える  
と、

どこか心配そうな顔をしながら佐天は当麻の隣にいる初春の首に腕を回すと当麻から遠ざけるように引きずって行った。

『せつかくチャンス作って上げたんだから、アタックしなさいよ！』

『えっ！でも…』

『弱気にならない！』

何やらコソコソ話をする二人を奇妙に思いつつも当麻はそこに入ろうとせず、離れた所から見守っていたが

「お前らどうかしたのか？」

「いえいえ！大したことじゃないですよ〜！」

そう言うと佐天は初春の背中を叩き、突き出すように当麻の方へと押した。

「ウワツとー!」

「じゃあね〜!!」

そう言うと佐天は手を振りながらすごい勢いでその場から離れて、その姿はすぐに暗い道に消えていった。

「じゃあ…いくか?」

「あつ…ハイ…」

それだけ言うと当麻と初春は共に暗い夜道を歩きだした。

(うわ〜二人つきりだ…どうしよう…)

隣に並んで歩く当麻を横目に内心ドキドキしながら初春はそんなことを考えていると

「今のところ怪しい奴はいねえな」

「えっ!?!」

「ストーカーだよ」

「あっはい…」

「初春もさ…誰か適当に男作りやいいんじゃないかね?そうすりゃストーカーもいなくなるんじゃないかねのか?」

「そっ…そんな人私にはいませんよ!!」

慌てる初春に気付き笑っているのか、当麻はからかう様な顔でなり、

「なんなら俺が誰か紹介しようか?いい奴いるぜ…ちょっと恋愛に不器用で陰湿だけど」

「上条さん…世間ではそれをストーカーって呼んでます」

初春のツッコミに当麻がハハッと笑うのを見た初春は今だ言わんばかりに当麻の顔を真剣な顔で見つめた。

「あの！上条さんって誰か付き合ってる人いるんですか？」

言えた、よく言った！っと心の中で自分を褒めるほどかなりドキドキして言ったのだが、聞かれた上条当麻本人はどこか軽い感じに返した。

「ん？いや…いねえーよ、いたらもつとマシな仕事についてる」

「そっ！そうなんですか…」

あまりにあっさり返されて少し拍子抜けの初春だったが、せつかく話が恋愛の方へと向いている為、もう一つ尋ねる事にした。

「上条さんは…その…誰かと付き合おうと思わないんですか？」

初春の言葉に当麻は一瞬ピクンツと肩を震わしたが初春は緊張の為、当麻の顔を見れないためそれには気付かなかった。

「あいにく…そんな物好きがいなくてな…」

当麻はヒニクを言うのとはまた違うどこか苦笑いの様な顔で続ける。

「なんつーか…苦手なんだよ」

「苦手…ですか？」

「ああ…なんつーか、こう…人から好意を持たれるってことが全然なかったから」

「でも…誰かから告白された事はなかったんですか？」

「…うん…一回あったな」

「!?!?それ?!?!?」

「……断った」

当麻の言葉に初春は驚き、えっ!?!?と言うことも出来なかったが、それでも何とか質問を続けた。

「どうしてですか?その人が好きじゃなかったんですか?」

「いや…別にそういう訳じゃない…いい奴だったしな、料理も出来て、何より優しかった」

「じゃあ…」

「ただ…俺がそいつに相応しくなかったんだ…」

「上条…さんが?」

「ああ…そんなとこかな、俺の恋バナは…」

当麻はそれだけ言うと黙ってしまったので初春もこれ以上話すのを止めた。

暫く無言の時間が続いたが、ほんの4、5分ほどで初春の住むマンションまでついたのでマンションの玄関についた初春は改めて当麻の方を向いた。

「じゃあ、ここで大丈夫です」

「ああ」

「今日は本当にありがとうございました」

「いいよ、礼なんて…それに暫くはこれが続く訳だし」

そう今回は特にストーカーらしきものはいなかったが、それだけでこの一件を終わりにする訳にもいかない、当麻の仕事はストーカーを捕まえるか、完全にストーカーがいないと証明されるまで続けなといけない。

「じゃあ、明日の夜8時にジャッジメント本部の前でいいんだな」  
「はい、よろしく願います」

頭を下げた初春がオートロックの番号を機会に入力し、10階以上あるマンションに入っていくのを確認してから当麻は家路についた。



## 恋愛（後書き）

今回は今まで書いた事のない当麻の恋愛について書いてみました  
がやはり、自分には恋愛小説は向いてませんね。

そのせいでやたら書くのに時間がかかりました。

えっ？いつ初春が当麻を好きになったかだって？

分からないけど、きっとなるでしょ、だって上条当麻だもん（適当）

まあ他にも次あたりに書くシリアス編を考えているからでもある  
んですが

そんなこんなで今回はここまでです  
ではまた後ほど

## 尾行（前書き）

出来ましたので載せます。

## 尾行

一日買い物に付き合わされた次の日。

当麻は約束通り、第一学区にある初春や白井が務める『ジャッジメント風紀委員本部』前の玄関へとつながる階段に腰を下ろして待っていた。

「上条さん！お待たせしました！！」

振り返った先には昨日の夜、家まで送った初春飾利の姿があった。

「おっす…じゃあ行くか」

「はい」

当麻に従って初春はまだビルの光が指し明るい道を歩いて行った。

「『ジャッジメント風紀委員』は大変だな〜こんな遅くまで」

「いえ…私なんてまだまだ、末端の仕事だけですから…私よりも大変な人なんて沢山いますよ…」

二人は暫くそのような話を続けていた。話した内容もたまたま通りかかった店の事や

昔、依頼を受けた人の話など他愛もないものだったが、話していると急に当麻が黙り

ため息を吐いて前を向いて歩きながら初春に聞こえるくらいの小さな声で言った。

「初春……そのまま黙って聞け……」  
「えっ!?!」

先ほどの明るい会話の時とは違う当麻の声に少し驚いていると、それは対照的に当麻は落ち着いた様子で続ける。

「静かに……つけられてる……」

当麻の言葉に初春は思わず後ろを振り向こうかとしたが、寸前のところで当麻が止めた。

「振り返るな……」

「はっはい……」

当麻の言う事を聞いて初春は後ろを見たい気持ちを抑えながらひたすら前を見続けた。

暫くピリピリとした張り詰める空気が初春を襲ったが、それを安心させるように当麻が耳元で呟く

「俺はこのままとっちめてくる……お前はここに居ろ」

「はい……」

「動くなよ……」

当麻は会話が終わった瞬間、初春の返事が聞こえるか聞こえないか、その判断も出来ないくらいの速さで振り返って一気に駆けだした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

先ほどまで2人を追いかけていた男は今逆を追われる立場となり、電柱の光しくない暗い夜道をひたすら走っていた。

男と女の2人の内、一人の男が突然振り返ったかと思うと、影で見張る男のいる方にすごい勢いで迫って来た為、男は振り向く暇もなかったが、

走り続け5分ほどたった頃、全力で走った男はついに力尽き、途中にあった電柱の近くの塀に寄りかかった。そこで漸く振り返って後ろに誰もいない事を確認した。

「ここまで来りゃ……」

と独り言を呟いた瞬間男はゾワツと妙な気配を感じた。一体どこからか分からなかったが、ふと下を見た時にある異変に気付いた。電柱の下にあるべき自分の影意外にもう一つ見慣れない影が男の隣にあった。しかし、男の隣には誰もいない、そこで男は恐る恐る自分が寄りかかる塀の上を見ると、そこには先ほど追ってきた男が何やら凶悪な笑顔を浮かべながら塀の上に立っていた。

「ワリイイゴは居ねえかアアあ!!!!!!」

「ぎゃあああああ!!!!!!」

ナマハゲ(当麻)の2m近くある塀の上からのドロップキックによつて男はなんの抵抗も出来ないまま当麻に捕まった。

「この辺りで俺から逃げようなんて…ヤムチャとセルを戦わせる位無謀な事だぞ」

「くそ!!!」

男にのしかかりながら当麻がそのまま『アンチスキル警備員』に連絡しようとする

ると、男が忌々しそうに叫び出した。

「何だよ！大したことねえから逃げ切れるって言ったのに！！」

「！？？どういう意味だ！？」

「頼まれたんだよ！俺は！！」

「頼まれた！？」

男の言葉に当麻が裏返った様な声を出したが、男は気にせず続けた。

「そつだよ！ある女から男を引き離して欲しいって、ただそれだけで1万もくれるから乗ってみたらコレだ！！」

「お前がストーカーじゃねえのか！？」

「ストーカー？何の事だ？俺はただお前をあの女から引き離して、そのまま逃げりゃいいって言われたんだよ…」

簡単に逃げられるはずだったのにと悔しがる男を抑えながら、当麻の脳裏に嫌な予感が横切った。

## 尾行（後書き）

以上です。

おそらく次回でこの話は終わります。

## 解決？（前書き）

時間がかかりましたが載せます。



解決？

当麻が男を追って10分ほどたったか、初春は暗い夜道でひたすら当麻が戻ってくるのを待っていた。

(上条さん…大丈夫かな？)

未だに帰らない当麻の心配をしていると、不意にガサツと後ろから音がした。

「上条さん!？」

安心した様な声を出しながら初春は振り返ったが、その先に居たのは当麻ではなく黒いジャンパーに黒いジーンズそして顔に覆面を被った男が立っていた。

「あつ!あなたは?」

明らかに一般人と思えない格好に初春は後ずさりしながら尋ねるが、

「初春…飾利」

男は答えず、ただそれだけを言いながらジャンパーのポケットからナイフを取り出した。

「お前さえ…お前さえいなければ…!!」  
「ヒッ!？」

叫ぶような男の声に初春は慌てて逃げようとしたが、足がもたつき転んでしまった。

そんな初春に男は容赦なくナイフを突き刺そうとした。逃げる事の出来ない初春は思わず目を瞑りナイフがその身を傷つける事を覚悟した。しかし、ナイフはいつまでたっても初春の身には届いてこず、代わりによく知る人物の声が聞こえてきた。

「狡い事しやがって…おかげで…」

初春を安心させるその声を耳にした瞬間、初春はパツと目を開け、その瞳に左手にナイフを突き刺し、初春を庇う当麻の姿が映った。

「かつこいい登場しなきゃいけなくなっただじゃねえか!!」

「上条さん!!」

「なっ!?!お前!!どうやって!?!」

慌てて下がるうとする男だったが、当麻は左手をナイフで刺されたまま右手で男の手を掴んで、それを阻止した

「生憎…ヒーローって奴は…何があってもヒロインのピンチに遅れねえんだよ!!」

「くっ!」

男はナイフから手を放すと、無理やり当麻の手をはらってその場から逃げようとしたが

「逃がすかあ!!」

距離を取る暇も与えず、当麻は一気に詰め寄り右拳を覆面で隠れる顔に叩きつけた。

男はそのまま後ろに殴り飛ばされたが気は失っていないらしく、また立ち上がるうとしたので当麻はそのまま押さえつけて、そのまま覆面をはぎ取った。

「あつ！あなたは！？」

男の顔を見るなり、初春は驚いたような声をだした。

「知り合いか？」

「ええ…工山さんです。同じ『ジャツジメント風紀委員』の支部で働く…」  
「クソツ！！」

二人の会話を遮るように男が叫んだ。

「いつもお前は！僕の前に立つ！！どれだけ努力しても！！お前は僕の上に行く！！」

当麻に押さえつけられたまま、男は唸るような声を初春に向かってはき出した。

「お前さえいなければ！一番になれるんだ！！俺は…！！」

「ハイ！ドオオオオン！！」

「ソゲフツ！！」

当麻は工山の顔面を再び右手で殴った。

「ええ！？何お前！？まだ話してんじゃん！！俺！！」

「ああ？なんだ？説教タイムか？説教タイムが欲しいのか？悪いけど…この作者は鎌池先生みたいな心に染みる説教はかけねえんだ

よ…。」



「イヤ！いい訳ないでしょ！！」

などと刺されたわりによりにあまりにお気楽な感じに話している男に木村はヤレヤレとため息をつきながら近づく。

「いつも騒動の中心にいるな…上条」

木村に気付いた当麻はめんどくさそうに答える。

「そういう仕事なもんで…」

適当に答えた後、車に乗せられた工山を見ながら当麻は尋ねる。

「あいつは？」

「工山規範…元ハツカーで、その力を見込まれ『ジャケット風紀委員』の特殊情報対策部の一員だ…」

「なるほど…同僚の初春にハツカーとしての腕では勝てず、犯行に及んだってところか…」

「ああ…そうらしい」

当麻同様に適当に返した木村は当麻の刺された腕を見ながら眉の辺りにしわを寄せた。

「まったく、無茶をする…後は俺達がやっておくから、お前はもう帰っていいぞ…」

「言われなくてもそうしますよ…」

疲れた様に立ち上がる当麻に初春が申し訳なさそうに頭を下げた。

「上条さん、本当にありがとうございまして…色々お礼もしたいんですけど、事件の関係者として取り調べを受けないといけないんで…」

「あゝいいよ…俺はこのまま病院行くから…そういうのはまた今度で」

「おい上条！病院くらいだったら送ってくぞー！」

「いいっすよ、俺は行きたい所もあるんで…」

右手を適当にシュツと振って当麻はその場に背を向けて歩いて行った。

~~~~~

「すみません…コレ下さい…」

先ほどの現場を離れた上条は病院に行く途中、コンビニを訪れていた。

「あの～お客さん…別に欲しいと言っなら、お売りしますが…お客さんに必要なものは絶対に瞬間接着剤じゃないと思うよ…」

「ああ！？なんだよ、あんた？あんたに俺の何が分かるっていうんだよ？」

「いや！？分かるよ！！全然！！あんた左腕一瞬でも見た！？ドウル！ドウル！に血イ流れてんだけど！！」

「別にいいんだよ！！傷につけりやくつつくだろ！！？瞬間接着剤を侮るな！！」

「あんた！どんだけ瞬間接着剤を信頼してんだ！？」

この瞬間接着剤万能説は…これからまだ数分間討論が続く事になる

~~~~~

「ありがとうございました」

なかなかエキサイティングな店長との討論と暫く続け、何とか接着剤を手に入れた当麻はトボトボとコンビニから出て行った。そして再び病院を目指し歩き始めた当麻だったが、その道中なぜか工事中のビルの前に来て、少し考えた後、柵を乗り越えて中に入ってしまった。ビルの中はまさしく工事中といった状態で鉄骨だけで建てられている状態で壁や階段といったものはまだ出来ておらず、上を見上げるとそのまま夜空を見る事が出来た。

「ここまでくりゃいいかな…」

そうポツリと呟くと持つていたコンビニ袋を横に投げて振り返った。

「出てこいよ…」

そう言うと、並べられた鉄骨の後ろから黒いロングコートを着た一人の少女が現れた。

「見ない顔だな…」

「上条当麻様ですね」

少女がそう言うと少女の他に数人の少女と同じ服装の者達が現れ当麻の周りを取り囲んだ。

( 1 , 2 , 3 … 7人 … いや )

自分の周りを見渡した後、今度は床のない鉄骨で作られた骨組みだけの2階に目をやった。

( 上も合わせて …… 10人か …… )

「召集がかかりました…御同行を…」

「随分と強引だな…誰の差し金だ？親船さんじゃねえだろ？俺にこんなマネしてくるって事は…新入りか？」

「何も答える事は出来ません…」

少女は無表情にそれだけを言うとコートを脱ぎ棄てて、全身をピッチリと包む黒いスーツを露わにした。

(見たことねえタイプだ… 『タークマターぶたい未元物質部隊』の特殊スーツをパワーアップさせたか…)

「従っていただけなら…強行手段を取らせてもらいます…」

少女の言葉に反応するように、取り囲む彼らも少女と同じ特殊スー



ツを着ており、それぞれの手には武器らしい物も持っていた。明らかに戦う気満々の彼らを見た当麻は「はあ」とため息をついた後、右手の袖を捲りながらめんどくさそうに言う。

「…別にかまわねえけどさ…手加減できねえから死ぬけど、いいか？」

## 解決？（後書き）

以上です。え〜色々考えた結果、次回予告も兼ねて一気に書いてみました。

だけど、もちろんギャグは欠かせません。

出てきた少女については、今回だけのキャラなので説明は省きました。

なんだがどんどん話だけ進んで、

あわただしくなってしまういどうもすいませんでした。

次回からシリアス編です。もっと落ち着いて書こうと思います。

それから色々登場します。

ではまた今度

## 会議（前書き）

大変遅くなりましたが、出来ましたので載せます。

## 会議

学園都市の第一学区、学園都市の行政が集中する学区にある、とある建物の最上階ではある会議が行われていた。

「えええい！！忌々しい男だ！！」

エレベーターが最上階につき、扉が開くなり一人の30代半ば程の男がドシドシと長い廊下を歩きながら言った。

「それでっ！私の部隊は！？」

男の後ろについて歩く秘書の女にイライラした様に尋ねると女は落ち着いた様子で答える。

「はい…特殊武装部隊の6名に能力者4名は全滅です。今は治療中の為、暫くは戦闘に参加できないでしょう…」

「おのれ…！！上条当麻め！！」

「それはやつあたりだぞ…米倉…」

男の振り向いた先には彼よりも一回りほど年上であろう一人の男が立っていた。

「貝積…」

「どうやら我々が最後のようだ…急ごう…」

貝積と呼ばれた男は米倉とは違い秘書らしい者を誰も付けておらず、一人で黙々と長い廊下を歩いて行き、米倉もそれに続いた。長い廊下を歩いて行くとその先に大きな扉があり、その前に黒いスーツで

身を包んだ二人の男が立っていた。男達は貝積と米倉が扉の前に来ると一礼をし、二人に代わって扉を開けた。二人が入った部屋は薄暗く一つの円状の机を囲むように12個の椅子が並べられており、すでに7個椅子は人が座って埋まっていた。

「よく来てくれました、御二方とも…」

扉から一番離れた所にある椅子に座る60、70代程の女性がニコリと笑顔を浮かべながら言った。

「遅れてすいません。親船さん…」

貝積は頭を下げながら部屋に入ると、未だに5つ空いた椅子を目をやり眩く。

「我々が最後かと思ったのですが…まだ来ていない人がいるみたいですね…：まあ一人は仕方がないとして」

「ええ…その事についても色々説明しなければいけませんね…どうぞ、空いている席に…」

二人が扉から少し離れた所にある椅子に歩き出すと、扉の近くの椅子に座る男達が米倉を見るなり口を開く。

「聞きましたよ…米倉さん…上条当麻に喧嘩を売ったらしいですね…：」  
「そのせいで貴重な部隊を失ったそうで…」

多少ヒニク交じりに聞こえる彼らの言葉を振り払うように米倉は歩き続けた。

やがて椅子の前に来るとドシツともたれかかる。

「ふんっ！何がいけない！！私はただ召集に応じないであろう暴れ馬の手綱を取るうとしただけだ！！」

「だからってねえ」

「やり方が強引すぎますよ…いや、相手が上条当麻の時点で力に頼ること自体間違ってますね…」

彼らの呆れると言うよりは笑っているようにもとれる顔を横目に米倉は続ける。

「そもそもあの男をこの街で野放しにしておくことが私には理解できません！！あんな危険な男を！！」

ドンツと机を叩く米倉を諭すように今度は丁度米倉の正面にいる男が話に参加してきた。

「確かに上条当麻は暴れば手に負えんが…自分から世界をどうこうしようとは思わないでしょう…」

「触らぬ神に祟りなし…ですね？」

「…まあそういうことです…むしろ問題に上げるなら、彼よりも浜面仕上の方でしょう…」

そう言うと男は皆の前にそれぞれ置かれているパソコンのキーボードの様に設置されているボタンを押し何やら操作をすると、丁度、机の真ん中辺りに浜面仕上の顔写真と経歴らしきものが映し出された。

「今は大人しくしているが…いずれ奴はこの我々に牙を向けるかもしれん…早めに手を打っておく事も考えておいた方がいいですね」

彼の言葉に何人かの者かが頷くと、親船はそれらを諭すように笑みを浮かべて語り出す。

「確かに…彼はこの街を変えようと思っている事は確かでしょうが…彼は上条君と違って自分の立場をよく分かっています。下手に彼がこの街に喧嘩を売ればそれに乗じて学園都市に攻め込もうと考える者達がいることも理解しています…」

皆の注目が親船に向く中、彼女は先ほどと変わらぬ顔で続ける。

「『学園都市の二枚看板』などと同等に扱われていますが、彼は自分の力が上条君に遠く及ばない事も分かっています。何より…彼も上条君とは戦いたくないでしょう…」

親船がそこまで言うと、今度は先ほどとは別の男が目の前の機械に手を伸ばした。

「確かに問題は山積みだ…だが、今問題なのは…」

男がピッピッと機械音を鳴らしながら黙々と操作を続けると、今度は3名の子供達の写真が机の真ん中に浮かび上がった。

「『<sup>ルキース</sup>新人達』ですか…」

「ええ…」

暫く続く沈黙の後、親船のポツリと呟いた言葉が部屋の空気をさらに重くした。

「特別な訓練を受けず、自力で『超能力者（レベル5）』にまで上り詰めた3名の子供達…」

「人数だけで言えば、それだけではありません」

男がさらに操作を続けると、さらに2人の子供の顔写真が浮かび上がった。

「この2人は？」

「今、この学園都市で最も『超能力者（レベル5）』に近い『大能力者（レベル4）』です」

「彼らも？」

「ええ…仲間に加わりました。」

男がもう一度、機会を操作すると今度は様々な統計を示したグラフが映し出された。

「10年前の第3次世界大戦後…浜面仕上によつて『パラメータリスト素養格付』が奪取されて以来、学園都市ではすべての学生に同じレベルの教育プログラムを施してきました。それによつてレベル2やレベル3、4の人口は確かに多くなりました…が、その代りに学園都市の代名詞でもあつた『超能力者』達の発掘は難航しています。今となつては昔の様にレベル5を我らの手中に収めコントロールすることは不可能…その存在を把握する頃には…」

「我々の手に負えなくなっている」

貝積の言葉に男は、ええ…とだけ答えて黙つた。

「今までは大人しくしていましたがここにきてその頭角を現してきました」

「すでに2名の『統括理事会』のメンバーがやられています…」

「やられた2人は？」

「嶋芳と原花です…」



2人の名前を聞いた途端、米倉は思わず立ち上がった。

「原花だと！？奴は常に『大能力者（レベル4）』を6名を護衛に付けていたはずだろ！？」

「ええ…確かにその通りです。ですが…」

男が再び機会を操作すると、机の中央に見るも無残に怪我をした人間の写真が浮かび上がった。

「その護衛もすべてやられました」

「狙いは…私達『統括理事会』か？」

「恐らくは…」

「学園都市への反乱か…」

男とは別に今度は統括理事会の中でも比較的若い男がオドオドとしながら話に入り込んだ。

「すっ！すぐに『六本柱』と『二枚看板』の二人に召集をかけましたが！…未だ誰一人として…」

男は会議に慣れていないのかどこかぎこち無い感じに話し、それを聞いた親船が顔をしかめ、ため息をついた。

「誰か一人くらい来て欲しかったのですが…やはり上条君には私から言うべきでしたね…」

「いつ！今、『アンチスキル警備員』と『ジャックメント風紀委員』の選りすぐりの精鋭たちで事態の鎮圧に取り掛かっていますか！…成果は…」

若い男のその言葉のつまり具合から、その場の全員がうまくいって

いない事を悟った。

「やはりそれだけでは足りませんな…相手が『超能力者（レベル5）』なら全軍を送り込む、かつ暗部の精鋭達もかり出すくらいの事をしなければ」

「ローマ側の動向が気になる今、下手に騒ぎを大きくするのは…」  
「暗部も下手には出せませんね…」

対抗手段の検討も全くつかないまま、9人の『統括理事会』のメンバーは何も言葉を発せずにいた。そこに

「まあでも…」

突如、若い女の声が聞こえた。声は扉の向こうから聞こえ、皆が扉に視線を集まると扉がガチャリと音を立て開いた。

「いくら代えがきくといつても『統括理事会』が2人もやられて黙って見てる訳にはいかないですよね？」

女の姿を見た途端、親船を含む全ての『統括理事会』が啞然とし中には信じられない物でも見るような目で椅子を後ろに押し倒しながら立ち上がる者もいた。

「おっ！お前は!？」

「あなたは！？……何時お戻りに！？」

驚く『統括理事会』とは対照的に若い女はニヤリと笑みを浮かべ、『統括理事会』を見渡しながら言う。

「私が行きますよ、親船さん…夕方までには決着<sup>ケリ</sup>をつけて置きますので御心配なとらず…」

## 会議（後書き）

以上です。次回はオリキャラを出します。

と言っても今回も何人かの統括理事会のメンバーをオリキャラとして出しましたが

まあこれから使うことはあっても活躍はさせないと思います。

前回の話を考えている途中にこのシリアス編を考えついて、

前の話しの最後につながるように無理やりラストを付けましたが

そのせいでどこか急ぎすぎた感じになったことを、今ここでお詫びします。

そして、次回からは構想はねってあるんですがキャラクターの名前など能力が

決まっていないので次回はかなり時間がかかると思います。

それでは今回はここまでとさせていただきます。

では、また今度

## 新人（前書き）

遅くなりました。

一様読み直しましたが、まだ間違いがあるかもしれませんが、とりあえず載せます。

## 新人

第七学区から少し外れた郊外にある他の学区とを繋ぐ橋のように聳える高速道路の上で戦闘は始っていた。普段なら他の学区へと向かう一般の車や物資を運ぶためのトラックなどが頻繁に利用される道路であるが、今はすべての車が通行止めとなつている為、今は道路にあるのは「警備員」<sup>アンチスキル</sup>が使う車がバリケードの様に道を塞ぎ、その前で銃を持った警備員が待機していた。

「狙いを定める！！一斉に砲撃する！！」

「……了解！！」

車のバリケードの前に並べられた警備員は自分の前に防弾ガラスで出来た盾を置いて、一斉に銃を構え照準を合わせた。

「撃てえええ！！！！」

合図と共に放たれた銃弾は目標に向かって雨の様に降り注いでいった。数十人の警備員からの一斉射撃、もし当たればその身が八チの巢になるのは目に見えていたが、銃撃の的であつた者達は何事もなかつたかの様にバリケードに向かって一直線に向かつて来た。

「くそっ！撃て撃て！！撃ち続けるオ！！」

隊長の命令に再び一斉射撃を始めたが、標的達は何事も無かつたかのようにひたすら警備員の方へとゆっくり歩いて来る。弾は決して

標的から外れている訳ではない。ただすべての弾が標的の前に来ると見えない壁にめり込む様に止まってしまふ。やがて、バリケードの数メートルほど前に来た標的の一人が手を前に翳すと銃を構えた警備員が急にバタリッ！と地面に倒れ込んだ。

「へっ！大したことねえな！！『学園都市』！！」

警備員達の標的となっていた集団の一步前に出た男は十谷重、じゅうたにしげる『新人達』イクシズの超能力者の一人である。

「いくら大したことないからって、油断しすぎだぞ…重」

後ろからそう言ったのは空道浮遊、くうだうぶゆう目の前にいる十谷と同じく『新人達』イクシズの超能力者の一人である。

「別に、油断はしてねーよ」

適当に答える十谷にやれやれとため息を漏らした後、後ろを振り返り自分達が倒したきた警備員や風紀委員を見ながら空道は隣にいる自分より背が低い中学生くらいの男に話しかける。

「やはりお前をスカウトした甲斐はあつたな…」

「いえっ！そんな大したことは…」

話しかけられ、ビクツとしながら答える彼は雨水連司、つすいれんじ5人いる『新人達』イクシズ達の中で2人いる大能力者の内の一人である。

「そんなに謙遜することも無いですよ…現にあなたが加わったおかげで私の能力は以前より強力になりましたから」

「いえいえ！！そんな…僕は…」

挙動不審ともとれる彼の態度にイライラした様子で十谷が振り返る。

「オドオドすんじゃないやねえ！！弱く見えんだろっが！！」

「はっはい！すいません…」

「仕方ないでしょう？これがこの子の性格なんだから…」

雨水を庇うように会話に入り込んだのは小歩里こほりみぞれ、ルキーズ「新人達」唯一の女子であり超能力者である。言い争う十谷と小歩里、その二人をオドオドと見つめる雨水、緊張感の足りない雰囲気、空道はため息をつくと彼らから少し離れたところで遠くを見つめる少年に近づいて声をかける。

「どうした？ヒロ」

「……………どうやら…まだ暗部は動き出していないようですね」

最後に冷静にそう言ったのは相楽イヌ広々（さがらひろびろ）、ルキ「新人達」の大能力者である。

「ああ…今んとこ『警備員』アンチスキルや『風紀委員』ジャッジメントだけだ」

「私達を止めたいんでしょうけど……………この程度じゃ役不足ですね…」

淡々と告げる相楽だったが、ピクンツと何かに反応するように先ほど倒した警備員の奥を見つめた。

「いや…」

相楽が見つめた先には数名の怪我をした風紀委員達が「新人達」ルキーズ達の方を見つめていた。



「あの『空間移動者』は少々やりみたいですね……」  
「ただの『大能力者』とはいえ、流石は『風紀委員長』だな」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「はあ……はあ……今ので警備員は全滅のようですね……」  
「まだ……傷の手当てを出来ていない者達もいるのに……」  
「白井さん！やはり駄目です！ここは撤退しましょう！」

白井の後ろで仲間に肩を借りて立っている男が白井に向かって叫ぶ。

「駄目ですわ！……このまま行けばこいつ等は第七学区に……何として  
もここで食い止めなければ……」  
「なかなか立派な心意気だが……」

白井達の会話を聞いていたのか十谷が話に割って入ると、虚しそう  
に手を前に出した。

「やはり力の差というのは……残酷だよな……」  
「クウウウツ！！」

うるような声を出すと白井はスカートの下に仕込んでいた金属矢  
を手に空間移動させ、それを掴むと白井自身も空間移動した。

「前に3 m、上に6 m…」  
「了々解」

十谷の上に空間移動した白井であったが、十谷は相楽の指示された所を見るとその視線の先に空間移動した白井と目が合った。

白井は、なっ！？と驚いた顔をしたが、居場所がばれているのも構わずに持っていた金属矢を十谷に向かって投げつけた。

「無駄だ…」

十谷は冷たくそう言い放つと右手を宙に浮く白井の方へと向けた。すると金属矢は引きずられように地面に叩きつけられた。

（やはり！攻撃が…！）

白井は少ない情報で敵の能力を何とか理解しようとしていたが、そんな暇も与えず先ほど投げた金属矢のように宙にいた白井は突然地面に叩きつけられた。

「グガッア！ギイイ！！！！」

「ここまでか？」

「しっ 白井さん！！！」

苦しむ白井を見た風紀委員達は傷ついた体を動かさず、白井のもとに行こうとした。が、

彼らを遮るように空道が風紀委員達の前に現れた。

「邪魔だ…」

そう言って手を前に出すと、風紀委員達が何かにぶつかったかのよ

うにバゴンツ！と吹き飛ばされた。

「くくくぐあああ！……！」「……」

仲間の叫びに押し潰されるような攻撃を受けながら、何とか後ろを振り返ろうとした。

「み……みんな……」

「さーて、どうするか……このまま押し潰すのもいいが……」

（くっ……！……テレポートが……！！出来ない！！）

白井がこの状況を打破しようと頭の中で必死に策を巡らせていると、突然、ビシッビシッと道路に亀裂が走った。

「おい！やりすぎだぞ、重！」

道路の様子を見て危険を感じた空道が叫んだが、

「安心しろ……崩れんのはここだけだ……」

そう言うと白井を押し潰そうとする力がより一層強くなり、さらに道路に亀裂が走った。

（ダメッ！崩れる！！）

白井の予想通り、道路の亀裂はどんどん大きくなり、遂に道路を支えていた柱ごと崩れていった。そのまま落ちると思った白井だったが、暫くして白井は気づいた。確かにヒビが入って粉々に崩れた柱の鉄柱は未だに倒れず道路を支えていて柱に支えられていた道路の地面はまるで何かに繋ぎとめられたかのようにその形を保っていた。

「おいおい……」

「これは……」

その道路の状態を見た十谷達は冷や汗をかきながら道路を見つめた。

(もう……この道は……崩れてもおかしくないのに……この力は……!?)

痛む体を起こし何とか状況を理解しようとしていると、

「下がってなさい……黒子」

聞き覚えのある声に白井は思わず血で滲む口を動かしてポツリと咳く。

「お……姉……様？」

## 新人（後書き）

えゝまず遅くなったことを深くお詫びします。

新人達の容姿も載せようかと思いますが、

自分の中でのイメージが定まらず、下手に長くしない方がいいと思  
い止めました。

そして、なんだか最近うまく言葉がまとまらず、書くのに時間がか  
かってしまいました。この話もうまく説明出来た感じがしないので、  
また後で書きなおすと思います。とりあえず今回はここまでとさせ  
ていただきます。

次回は出来るだけ早く載せるように努力します。

強者（前書き）

おそくなりました。

年内に終わらせたいんですが、出来るかな？  
まあとりあえず載せます

## 強者

先ほどまで白井と戦っていた新人達ルキーズの視線は今、新しく現れた一人の人物に集まっていた。

女は白いTシャツに黒いスーツに合いそうな長ズボン、その上に独特な刺繍を施し、丈が足まで伸びるロングコートを羽織っていた。

「なんだ？」

「新手か……」

「重！浮遊！下がって！！」

突如叫んだ相楽の指示に従うように二人はバツ！と後ろで構える仲間の元に下がった。

「大丈夫？黒子」

戦う意思を感じ取れなかったのか、お姉様と呼ばれた人物は特に警戒もせずに道路に倒れる白井に近づくと屈んで右手を差し出した。

「ええ……ありがとうございます。でも、なぜお姉様が？」

「上もゴタゴタしててね、結局対処法も思いつかなかったから私に来たってわけ」

謎の女性に手を借りて立ち上がる白井の姿を遠くから見つめながら、新人達ルキーズは呟く。

「崩れた道路も支える途轍もない力に、茶色の髪、統括理事会のメンバーに渡される黒いロングコート……間違いないね『雷帝』の異名を持つ……最強の電撃使い……」

「それぞれがいくつかの手駒をもつ統括理事会の中で唯一護衛を持たずに自ら戦場に立つ……」

「史上最年少で統括理事会のメンバーに選ばれた……」

「御坂美琴……学園都市を支える『六本柱』の一人だ」

緊張の面持ちで自分を見つめる新人達ルキースに気付くと御坂はどこか笑いながら白井の前に出ると、

「さてと……ここじゃ無理ね」

とだけ告げ、右手をシュツと横に振った。すると突然、新人達ルキースの周りを光の刃が走り、道路を切り裂きガクツと陥没しだした。

「ウオット!」

「ここから遠ざけるつもりだな」

「いいじゃねえか……少しばかり早いけど、どっちにしろ暗部とはやり合うつもりだったんだからな」

御坂の意図が分かったのか新人達ルキースは抵抗せずに重力に従い足場とともに下へと落ちて行った。

「黒子、あなたは部隊を下げさせなさい」

落ちていく新人達ルキースを見送った後、御坂はゆっくりと歩き出す。

「お姉様!」

「そんな心配する必要ないわよ……所詮、ガキの戯れよ……」

心配そうに見つめる白井にそう笑いながら言うと御坂は先ほど壊された一帯に行き、道路を支える力を弱め、ボロボロと崩れる道路と



共に下に向かった。残された白井は傷を抑えながらその様子をただ見つめていた。

「どづか……」無事で……！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

御坂が下りると、そこには御坂を待っていたであろう新人達ルッキーズが構え、御坂を見つめてた。

「じゃあ、やるうか？御坂美琴……」

彼らの一歩前に出ているこの集団のリーダー各、十谷重が御坂を見つめて言う。

「無理よ……あんた達じゃ……私に勝てない」

ロングコートのポケットに手を突っ込みながら、つまらなそうに言う御坂に十谷は苛立ちながらも冷静を装った。

「言ってくれるぜ……」

「あんた達と私じゃレベルが違うの……どうする？今大人しく捕まれば、利用価値があるってことで命だけは助かるはずよ」

「はっ！ここまでしといて、後に引ける訳……ねえよなっ！！」

攻撃をするため十谷は右手を前に出したが、その向けた先に御坂美琴はいなかった。先ほどから一切視線を逸らしていなかった十谷は何が起きたのか理解できず戸惑ったが、

「『グラビティイマスタ重力効果』の十谷重ね」

答えはすぐ真横から聞こえてきた。

「なっ！？」

声のする方を見ると、そこには先ほどまで目の前にいた御坂が立っており、十谷のように右手を出していた。どうような方法で自分の真横に現れたのか分からず、それを考えたようとしたが差し出された右手からバチツと流れる電撃がそんな余裕がないことを告げた。十谷は完全に不意を突かれたため、避けるとういう答えを導き出せても体がそれに追いつかず一切の身動きが出来なかった。敵を自らが望んだ状態にもって行った御坂は一気に勝負を決めるため、一撃で倒せるほどの力を込めて電撃を放とうとしたが、突如、目の前の十谷が後ろから何かに押されるように前に吹っ飛ばされた。あの状態から逃げることは出来ないと思っていた御坂は不思議に思ったが、十谷のように戸惑うことはなく落ち着きながら横を見てみると、十谷の後ろにいた新人達ルキースの一人、空道が手を前に出していた。他のメンバーは変わった様子がなかったため、御坂はおそらくこの男が何かをしたのだらうとすぐに理解した。

「バラけるっ！！！」

一連の流れを見ていた新人達ルキースはただ啞然としていたが、空道の放っ

た言葉にハッと我に返ると全員御坂から離れるように距離を取った。他の全員の視線が御坂に集中している中、御坂はそんな事を気にせず十谷を吹き飛ばした空道の方を向いた。

「あんたは『エアロシヨック空流衝撃』の空道浮遊ね」

「ッ!?やはり、もう情報が漏れていたか…!」

「今のはいい判断だったわ」

そう言った瞬間、御坂は右手をバツ!と空道の方へ出し、空道を丸ごと飲み込んでもあるほどの巨大電撃の塊を放った。

(でかいッ!!)

ズババババツ!と地面を削るように迫る電撃に対し空道は両手を前に出して、自身の持てるだけ力を集中し空気の壁を作って電撃を受け止めた。だが、

(くっ!!押し…負ける!!)

全力を込めた空気の壁だったが御坂の電撃は物ともせず、空気の壁ごと空道を吹き飛ばした。

「ぐああああ!!」

「浮遊さん!!」

雨水の言葉に反応するように今度は雨水と小歩里の方へと視線を移した。

「あんた達が私に勝てない理由は2つあるわ…一つはただ単純に私より戦闘経験が少ないってということ」

そう言うと御坂はロングコートの懐に手をつ突っ込みなんの変哲もないこの学園都市ではよく見かける銃を取り出すと、彼女から少し離れた所に立っている小歩里と雨水に向けた。

「なめているの？そんな銃で私達を…！！」

「連司！囊！！受けるな！！避ける！！！！」

「！！！！」

相楽の言葉に二人は一瞬戸惑ったが、次の瞬間、銃を構える御坂から何かゾワリと嫌な気配を感じ取り、二人は左右に分けられるように横に飛んだ。

そして、御坂が銃の引き金を引くと、その2人の間を一筋の光がビュゴオン！と突き抜けた。

「なっ！！？」

「なにッ！！？」

光は二人の間を抜けた後も、暫く光輝きながらまっすぐ飛び続けるとやがて消えていった。それを目で追っていた小歩里はキッ！と御坂の方を鋭く睨んだ。

「磁力を使って…銃弾の威力を！」

「ご名答…超電磁砲レールガンって言うのよ。これでも昔は「常盤台の超電磁砲」と呼ばれていたエースだったのよ…」

懐かしそう語ると御坂は再びロングコートに手をつ突っ込みもう一丁、銃を取り出した。

「さあ、さっきの倍撃つわよ…」

「クツ！連司！！」  
「はいッ！！」

連司が叫ぶと彼の周りにポツポツと小さな水の塊が現れ、それを一か所に集め巨大な水の玉を作ると今度はその姿が龍のように象っていった。

「ほお〜（形のない物をここまで繊細に操れるなんて…）結構、芸術家なのね…あなた」

「水龍弾っ！！」

大きな口を開き迫ってくる水の龍に御坂は銃の照準を合わせ一気に引き金を引いた。

銃から出た銃弾は水の龍に当たるとその体を抉り貫通した。しかし、貫かれた龍は動きを止めず御坂に向かって来た。巨大な龍が近づいてくる中、御坂は慌てることなく再び銃の引き金を引いた。一回だけではなく、今度は何度も、

連続で放たれた銃弾は次々と水の龍に当たりその体を抉っていき、最後に全て粉々に消し飛ばした。

「良い攻撃だったわ…」

素直に御坂が称賛していると不意に自分の吐く息が白くなっていることに気づき、なんだ？と周りを見渡すと御坂を囲むように槍の形をした氷が次々に生まれた。

（…なるほどね…あの水流使いが空気中の水分を集めて、空気を水分で満たし…それをあの子の力で攻撃力のある物（おし）に変える…良いコンビプレーね）

「アイス、ブロックランス  
氷の塊、槍！！」

小歩里が叫ぶと同時に数十本もの槍が一斉に御坂に襲いかかってきた。360。無数の槍に囲まれ、完全に逃げ道を塞がれた御坂は、それでも一切焦ることなく、

「これじゃ数が足りないわね」

それだけ呟くと持っている銃の空のマガジンを外し、磁力を使いロングコートの中に備えてある別のマガジンを素早く装填し、引き金を引いた。

銃は先ほどのようなレールガンで放ったが先ほどと違うところは撃った弾が途中で無数に分裂し花火のように飛び散った。それだけでもかなりの数の槍を破壊できたが、御坂はそのまま両手を広げ引き金を引きながらクルンツと一回転をし、360。まんべんに銃弾が行き渡るようにし、放たれた弾は次々に氷と衝突し、やがてすべての氷を撃ち落とした。

「なっ！？」

「レールガンで……弾幕を張った……」

「いいでしょ？専用の拡散弾よ……まっ一発一発の威力は落ちるけどね」

自分達の攻撃が簡単に防がれたのを目の前にし二人が啞然としていると

「連司！震！どけえ……！！浮遊……！！」

「ああ……！！」

二人の前に十谷と空道が現れ、十谷の言葉に応えるように空道は両

手を前に出して、御坂に的をしぼると自らの能力で空気を圧縮しそれを弾丸のようにいくつも放った。

最初のうちは先ほどと同じように御坂はレールガンの拡散弾を放ち、攻撃を防いでいたが弾が切れ、それでも止めどなく放たれる空気の弾丸を前に避けるように、空高く飛び上がり攻撃をかわした。

「ここだ！！（空中では身動きできまい！！）くらえええ！！！！」

重力を操る十谷の攻撃は十数メートルほど地面から離れた御坂を信じられない速度で地面に叩きつけた。落下距離としては十数メートルほどだが、御坂が叩きつけられた所には、まるで隕石でも落ちたかのような穴があき凄まじい地鳴りと砂煙を起こした。完璧に手ごたえのあった十谷はニヤリと笑みをこぼしたが、

「狙いはよかつたんだけどね……」

その言葉が聞こえた瞬間、十谷だけでなくそれを見ていた他の新人<sup>ルキ</sup>達の顔も凍り付いた。砂煙が張れると攻撃をくらった御坂は何事も無かったかのようにパンツパンツと服のホコリを掃いながら現れた。

「おしかったわね……」

強がりやはったりなどではなく、本当にダメージを受けていない御坂の姿に十谷の顔は遂に恐怖へと変わった。

「なっ！なんでだ！？俺は全力で！！」

「ありえない…重の攻撃をまともにくらって」

一部始終を見ていた空道も思わず声を漏らした。

「どうなってるんだ！？重の攻撃は間違いなく決まっていた…！相楽！！奴は一体何をしたんだ！？」

「……奴は…別に何か特別なことをした訳じゃない…！」

「何！？」

「やっていることは…ただ単純に自身の生体電気を強化して、自分の肉体を強化しているだけだ…」

「馬鹿な！…だったらなんで！？同じ超能力者なのに！！なんでこれだけの差が」

「違う…」

ガタガタと震えながら相楽は呟いた。

「こいつは…超能力者じゃない！！」

「ああ！？」

「何を言ってるんだ！？ヒロ！」

「正解よ…レベル4の探知能力者となれば流石に気付くわね…」

相楽を見ながら御坂はいったん言葉を止め、再び十谷達に視線を向け続ける。

「あんだ達の勝てない理由はそれよ」

「どういう意味だ！？」

「言ったでしょ？あんだ達と私じゃレベルが違う…」

まるで、何も分かっていない子供を憐れむような目をしながらニヤリと笑って御坂は告げる。

「私は…『絶対能力者（レベル6）』よ」





## 強者（後書き）

ここまでです。

もうどんな感じに進めていくは決まってるんですが

年末までにまとめられるか…

次に書くギャグも決まってるんでなんとか終わらしたい。

そしてこれは一人ごとですが、勘のいい人はどんな流れになっていくか

分かると思います。まあ少なくとも次回でどうなっていくか分かると思います。

## 絶対（前書き）

あけましておめでとうございます。  
新年一発に行かせてもらいます

## 絶対

御坂の言葉を聞いた新人達<sup>ルキーズ</sup>はただ言葉を失っていた。『絶対能力者』、学園都市に住んでいるものならば誰もが一度は聞く言葉である。学園都市の目指すものであり、存在理由として知らされてきた。だが、その存在は聞かされても実際に見たものはいなかった。中には科学者が考えた、ただの空想上の存在であると言う者もいた。しかし、目の前の彼女は言っている。そんな馬鹿げた空想上の生き物が自分であると、

「なっ…何を…?」

「言ってるんだ?」

「何よ…若いくせにそんなことも知らないの?…まあでもあんた達はどっかの研究機関に属していた訳でもないみたいだし、当然って言えば当然なのかしら…」

御坂が面倒くさそう頭をかいていると十谷がしびれを切らしたように叫びだした。

「バカな!! あんなものは馬鹿な科学者が描いた夢物語だろ!？」

「はあ…まったく、そんなことも知らずによく学園都市に喧嘩を売ったもんだわ…」

御坂は、そう馬鹿にする様に言った後、コチラを睨むように見つめてくる新人達<sup>ルキーズ</sup>を見て、何かを悟ったように語りだす。

「まっ、言っておけば戦う気も無くなるかもしれないしね…教えてあげるわ、かつて不可能とも言われていた絶対能力者(レベル6)は、もう夢物語じゃない」

そこまで言っ言葉で言葉を区切ると自分を指し示すように右手を胸にあてた。

「この学園都市には超能力を超えた力を持つ者が私を含めて7人いるわ」

「はあ!？」

「7…人」

「お前と…同じレベルが…」

驚く彼らを見無視し、御坂はさらに続ける。

「私に麦野、食蜂、焰、削板、そして…一方通行、アクセラレータかつてこの街の7人の超能力者…学園都市の最終兵器と言われた内の6人がレベル5の壁を超えたのよ……」

一人は死んじゃってね。まっ…でも生きていれば同じようにレベル6になっていたでしょうね…げんに死ぬ前にその足がかりを掴んでいたみたいだし…まあ、つまり『六本柱』はみんな絶対能力者(レベル6)以上ってわけ…理解した?掻い摘んで言うと、仮に私を倒せたとしても他にまだ私同等もしくは、それ以上の奴らがこの街にはいるってわけ…」

御坂の言葉を聞いていた彼らはただただ呆然としていた。

つい先ほどまで存在しないと思って絶対能力者が現れた思ったら、終いには彼らのまったく歯の立たない能力者があと6人いると言っている。普通ならそんなことを信じる方がどうかしているが、彼らの目の前のいる自分達の力がまったく通用しない圧倒的な存在。それだけで、その突拍子のないことを信じるのには十分であった。突然の信じがたい事実を目の前にし、困惑する彼らに追い打ちをかけるように御坂は続けた。

「そしてさらに絶望的な事を教えてあげる…学園都市には私よりも強い能力者もいるわ」

「ああ!？」

「どつという意味だツ!？」

「さつき言ったでしょ?…私と同等もしくは、それ以上つて、つまり私達『絶対能力者』の器に収まっていない奴がいるってことよ…  
…例外があるの、私達『絶対能力者』よりもさらに上、『神上』…  
レベル7がね…」

それを聞いた瞬間、絶望に落とされていた彼らの思考は遂に凍りついた。

「はっ!？」

「レベル…7…」

「ええ…『六本柱』の一人…嘗て最強の超能力者であった一方通行アクセラレータ…  
そして『学園都市の二枚看板』…上条当麻…名前くらい知ってる  
でしょ?この二人は私よりもさらに上…レベル7よ」

先ほど以上に事態を理解するのに時間がかかる彼らを見無視して御坂は続ける。

「はつきり言っておくけど…この二人の力は私の能力これとはまったくの別次元よ…」

「!？」

「そんな…バカな…!？」

「まあ…この二人は名前を知っていても能力までは知らないかもね…  
…特に当麻に至ってはその存在自体をまとも知られてないしね…  
あんな達もよく分かってないでしょ?」

今まで新人達をバカにしたような態度をとっていた御坂だったが、  
上条当麻の名前を出した途端どこか笑っているような顔を語りだ  
した。

「当麻のことを語るとなるとあまりにも話が多すぎるけど…学園都  
市の統括理事長、アレイスターとの間に起きた『第一次科学・魔術  
戦争』、その後に現れたアレイスターのように伝説と言われていた  
魔術師達が起こした『第二次科学・魔術戦争』、その両方を勝利に  
導いき、この世界を救った男って言ったところかしらね……私の  
恩人であり…憧れであり…世界一バカな男…」

よく見る学園都市の風景とは違う、普通の家や店が並ぶ通りにある。  
とある喫茶店『佐天』では亭主の佐天涙子が休憩用のコーヒーを入  
れていた。

「ふ〜さぶつ！」  
「る〜い〜こ〜まだ〜？」

暖房など特にない台所で寒さと闘いながらコーヒーができるのを待っている佐天のすぐ後ろでは畳を敷く和室でコタツに足を突っ込み暖かそうにしている少女が眠そうにそれが出来るのを待っていた。

「はいは〜いつ〜！ちよつと待って〜！」

適当に返事をした後、後ろで待つ彼女が飲む用に砂糖とクリームを多めにいれたコーヒーと自分とさらにもう一人が飲む用のコーヒーをお盆にのせると佐天は足早に台所を去り、温かいコタツへと向かった。

「はい、どうぞ」

「わ〜い！ふ〜あつたか〜」

ズズツと甘いコーヒーをすするインデックスに目をやった後、佐天は部屋を見渡しもう一人コタツで待っているはずの人物がいないことに気付いた。

「あれ…当麻さんは？」

「う〜ん、なんか風にあたってくるって」

「この寒いのに？」

佐天はやれやれと呟くと渋々コーヒーを淹れ終えたことを伝えに外に向かった。

「当麻さ〜ん！コーヒー淹れましたよ〜」



いつもの喫茶店の入り口から外に出ると特に通行人もいない道路にポツリと立ち空を見上げる当麻姿があった。返事をしなかった当麻を不思議に思いながらも横から覗き込むように佐天が尋ねた。

「どうかしましたか？」

「いや、なんだか…街が騒がしいと思ってな…」

「そうですか？」

そう言われて黙って耳を澄ませてみたが佐天には何も聞こえなかった。

「初春の奴、まだ取り調べの最中かな？」

「さあ…多分そうだと思いますけど」

「そうか…早く家に帰るように伝えておいてくれ」

そう言うと当麻は空を見るのを止め、店の中に入って行った。

当麻の後に続き店に戻った佐天は扉を閉める前に、もう一度先ほどの当麻と同じように空を見た。

「大丈夫なんですかね？…この街は」

「……………そんな、心配する必要はねえよ……………この街が騒がしいのは何時ものことだ…それに」

「それに？」

「この街にはいい奴が大勢いる」

~~~~~  
~~~~~

「つまりあんた達が何をしようとするの？この街を攻略するなんて出来ないって訳……どう？大人しく捕まってくれれば気が済む？」

「……………今更大人しく捕まったらどうなる？つーんだ？」

彼らの戦意を削ぐ為に言った真実だったが、彼らから出てきた言葉は御坂の望む言葉ではなかった。

「確かに今捕まれば命だけは助かるだろう……だが、そこから先は違うだ！？ただの実験動物になるだけだろ！？」

空道の言葉に十谷が何かを思い出したような顔をした。

「そうだ……俺達はそうやって人生をただの無茶苦茶にされた奴を何人も見てきたんだ！！」

二人の言葉で全てを悟ることが出来た御坂は顔を顰めた。

（まだ、そんなことを続けている奴らが……）

彼らの事情を察した御坂は複雑な気持ちを抱きつつも、一回溜息をついた後に再び覚悟を固めた。

「統括理事会のほとんどがクズだって言うのは認めるけど…少なくとも理事長の親船さんはまともよ…」

「だったらなんだよ!? 上がどれでけいい奴かなんて知らねえが、結局大人達は俺達能力者を食い物にする!!!」

「まっ…否定はしないけどね……じゃあどうするの? 負けるの覚悟で続ける?」

「続ける…とはいってねえだろ………重!!!」

空道の言葉を合図にするように十谷は手を前に出すと御坂の周りの地面を重力操作で押しつぶし、御坂の周りを砂煙で覆った。

(目くらまし?)

「走れエエエ!!!」

「今は逃げるんだアアア!!!」

「なっ!?!」

煙が晴れて新人達の姿を確認すると、彼らはすでに御坂からかなり遠くにいた。

「まったく…腹が立つほど潔いわね………はあ仕方ない…」  
『雷翔』  
ライカ

~~~~~  
~~~~~

十谷の起こした砂煙に乗じて、御坂からかなり距離を置いた所に逃げる事が出来た新人達は必死に走っていた。

「まさか暗部の力があれ程とは…」

「取りあえず逃げましたけど…これからどうするんですか？」

「一先ず逃げて暫く身を隠す…」

「でも…これからどうするんですか？あんなに力の差があるなんて

…」

弱気な雨水の後ろから十谷が話しかける。

「無駄じゃねえさ…そうだろ？浮遊…」

「ああ…確かに絶望的な力の差だ、だがそこで終わりじゃない…あいつにだってなれたんだ…俺達だって超えられるハズだ！超能力の壁を」

空道の言葉に皆が啞然とした。あれだけの力の差を目の当たりにしたばかりで、どうすればこんな考えを出せるのか不思議にも感じた。しかし、戸惑う彼らを気にせず希望を言葉に出すように空道は続ける。

「ここで終わりなんてするか！俺達はまだまだ強くなれる！！そして、いつかこの街を変える！！変えてみせる！！」

そう言い張る彼につられる様に彼らの中に希望の光が見えた。だが、

「前向きない意見ね……」

絶望はすぐ後ろへと迫っていた。

「だけどそれって私に追いつかれたら……意味がないんじゃない？」

突然、声が聞こえたかと思えば一筋の光が彼らを横切り次の瞬間はるか後ろにいたはずの御坂が目の前に現れた。

「なっ！？」

「くそ！」

考えるよりも先に反撃しようとした十谷は右手を突き出したが、彼が手を突き出した一瞬の間に彼らの数メートル先にいた御坂が十谷の目の前に現れた。

「えっ！？」

十谷が反応できない程一瞬で間合いを詰めた御坂は又しても反応できないほどの蹴りを十谷に叩きつけられた。その蹴りをくらった十谷は蹴られたとは思えない速さで数十メートル先に吹き飛ばされた。

「しっ！重！！」

十谷を地面に叩きつけられるの見た空道はすかさず御坂に反撃をしようとしたが、すでに御坂は空道の方を見て両手を重ね、それを空道に向けた。

「雷豪：鉄槌！！」

御坂が言葉を発した瞬間、空道の上から巨大な柱のような円柱の形をした電撃が空道を押しつぶした。

電撃の柱はその巨大からの質量だけでなく、電撃としての特性もあり、空道を押しつぶしながらもスバババツ！！と轟音が響いた。

「がああああああああ！！！！！！」

「浮遊さん！！」

空道に一撃を与えた後、御坂は雨水、小歩里のほうを向いて右手を出す。

「雷電燕」

そう言つて放たれた御坂の無数の電撃は御坂の周りをクルクル飛び回っていくうちに鳥の形に変わっていき、一斉に二人に向かって飛んできた。

「連司！」

「はっ！はい！」

雨水は水を操って目の前に水の塊を作ると、小歩里の力でそれを堅い氷へと変え二人の前に氷の盾を作った。

「それじゃだめよ」



空道には反撃する力も立ち上がることもできない、誰もが空道の命を諦めたが  
引き金を引いた瞬間、銃を構える御坂の腕が不自然に上を向き銃弾レールガン  
が空に放たれた。  
なぜそのようなことになったのか御坂は分からなかったが、その正  
体を掴むよりも先にその場から離れることを選び、バツとその場か  
ら飛び去って10メートル程の距離を取った。

(あの女が…距離を取った!?)

先ほどの場所から距離を取った後、自分の攻撃を邪魔した正体が分  
かったのか御坂は自分が離れた所を、正確にはそこにいる人物を見  
つめながら忌々しそうに言う。

「たくつ…あんたの出る幕?…」レベルキラー「能力殺し」…浜面仕上」  
「…それで呼ばれんのも久しぶりだな…」

御坂の攻撃を防いだその男は御坂とは違い笑いながら御坂と向き合  
った。

「『雷帝』ともあろうお方が、弱い者イジメすんなよ…こついう奴  
らが這い上がってくるから、捨てたもんじゃねえんだよ…この街は  
…」



## 絶対（後書き）

かなり遅れましたが、今回はここまでです。

みなしましたが間違いがあるかもしれないのでまたあとで書きなおします。

では、また今年一年がんばっていきますので、よろしく願いします!!!

妨害（前書き）

どうも、出来たの載せます

## 妨害

御坂の視線が突如現れた男の向いている中、相楽は倒れる十谷のもとに向かった。

「重！大丈夫か……」

「痛っ！……ああ、なんとか……それより」

手を借り立ち上がるとすぐさま視線を突如現れた男へと向けた。

「今、あいつ浜面って……!？」

「浜面仕上……『二枚看板』の一人」

驚く新人達を最早眼中に入っていないといった感じに御坂は浜面から視線を外さず、睨みつけた。

「来るとしたら当麻だと思ったんだけどね……まさか、あんたが出てくるとわ……あんたは能力者嫌いの無能力者で通ってるんだけど、こんな奴等のカタを持つなんて……当麻に頼まれたの？それとも同じ負け犬人生をおつてきた身としてはこういう負け犬を見ると助けにはいられないの？」

「……たくっ、昔と違って可愛げがなくなったな……まっ質問に答えると、当麻は関係ねえよ……ましてその程度のことです『六本柱』を敵に回すほど俺はお人好しじゃねえさ……ただ、こいつらがこの先役に立ちそうだから……」

「相変わらず、革命家にでもなったつもり？」

「そんな大層なものになるつもりはなねえよ……だが、最近の暗部での有様は目に余るもんがある」

「確かに、せつかくクズ共を一掃したっていうのに……また同じよう

な奴は出てくるもんね…こいつ等みたいに…」

「4、5年合わない間に随分と雰囲気変わったな…けど、あんまり負け犬を舐めすぎねえ方がいいぞ…そのうち…：…：…：噛みつかれんぞ」

そう言った瞬間、その場にいた誰もが浜面の纏う空気が変わるのを感じた。

その場にいた者全てにピリピリとした空気が突き刺さり、いかに浜面が本気であるかを訴えた。

「でもまあ…なんだ、昔のよしみだ…見逃してもらえないか？」

「そうはいかないでしょ…：…：替えがきくって言っても統括理事会がやられてんのよ…：それに仕留めるって言い張って出てきたのに誰一人仕留められませんでした。じゃ私の立つ顔がないのよ…：でも、あなたやり合うとなるとこっちも色々と覚悟を決めないといけないからね…：ホント面倒なことになったわ…：」

お気楽な提案をしながらもあからさまに発せられる殺気に答えるように御坂も今まで新人達<sup>ルキース</sup>全員に散りばめられていた殺気を浜面ただ一人に集中した。御坂の明らかな殺意を感じ取った浜面はこちらを黙って見つめる十谷達の方を見た。

「お前ら、行け！」

「あんた…：…：どうして俺達を？」

「さっさと行け…：…：…：今のお前らじゃどう足掻いたってこいつにはかなわねえよ…：」

「っ…：…：おい！行くぞ…：」

「ああ連司！糞！」

相良は浜面のちょうど後ろで倒れる空道のもとに行き、十谷は少し離れたところで立ち上がりうとしている雨水と小歩里のもとに行っ

た。

「立てるか？」

「ええ……」

「なんとか……」

空道ほどダメージを受けていなかった二人は一通りの出来事を見ていたようだが今一つ状況を理解出来ていなかったが、二人が考えすぎ逃げ遅れないように十谷が要点だけを的確に述べた。

「なんか知らないが時間を稼いでくれるらしい……浮遊はヒロが担いでく！さっさと行くぞ！」

「ええ……連司！」

「はっ！はい！あつあの！ありがとございました！！」

礼を述べた後、皆から少し遅れて雨水が駆けだしその場から離れたが、その数秒後に突如一筋の光が彼らの横を通り過ぎた。

「なっ！？」

「誰が行っていいって言ったの？」

突如現れ冷酷にそう告げる御坂の右手にバチバチツと電気が走り、  
新人達は身構えたが

「誰が行っちゃだめだって言ったんだ？」

御坂のように突如現れた浜面が先程持っていなかった刀を振るい御坂に斬りかかった。

一瞬の出来事であったが御坂はうまく剣筋を見て、一太刀喰らってもおかしくない攻撃を頬を掠めるだけに済ませた。そして、素早く

距離を取ると刀を掠め切られた頬の血をロングコートの袖で拭くと刀を見つめた。

「（この状態の私を切れるなんて）『雷切』ね…」  
「ああ…その昔、嘘かホントか雷を切ったと言われる剣だ………まったあのレプリカだけだな…」

浜面はまだ何かを言う途中であったが、御坂は気にせずにとっていた銃をコートの懐に戻し何かを包むように両手を合わせると手の中が輝きだす。

「鳴神十剣…『雷桜剣』」

手の中の光を伸ばすように両手を広げると刀のように刃が真っすぐと伸びた、光り輝く鏢のない刀が現れた。

（雷その物の形態を刀の形にしたのか…）

浜面が御坂の持つ刀を分析する中、御坂は刀を構え、そして次の瞬間には消えてなくなっていた。

目の前でそれを見ていた新人達ルッキーズは何が起こったか分からなかったが、さらに次の瞬間には浜面の姿も消え彼らの頭の中は余計に訳が分からなくなつて混乱した。だが暫く経つと彼らから離れた所でギイン！と鉄と鉄がぶつかる音と共に爆発が起こり、理解するよりも先に視線をそこに向けた。

「雷翔か！昔よりずっと速いな！！」  
「だったら追いつてんじゃないわよ！！」

全員が視線を向ける頃には浜面と御坂の斬り合いはすでに始まって

おり、その太刀筋はとて目で追える速さではなかったが、時折聞こえてくるギーン！ギーン！と刃物ぶつかる音が二人の戦いの激しさを表していた。

「信じられねえ…あいつとやり合ってるなんて…」

「噂では『二枚看板』の二人は無能力者らしいけど…」

「ついさっきその一人がレベル7だって言われたばかりだろ？あいつも能力者なんだよ」

皆、茫然と絶対能力者と突如現れた『二枚看板』の男の戦いを見る中、雨水だけは相楽だけは何やら難しい顔で戦いを見つめていることに気付いた。

「相楽さんどうかしましたか？」

「んっ？いや、なんかあの男もなんか変な感じがするんだ」

「……あの人もレベル6なんですか？」

「いや、そうじゃないんだ…あいつから感じるものは…何か違うんだ…能力者のそれとは違った感じがするんだ」

相楽の話聞いた十谷は戦いを見つめながら呟く。

「何にせよ『二枚看板』は独特な力を使ってるらしいな…」

~~~~~

はたから見れば電撃の刀と普通の刀との激しい鏝迫り合いが続いていたが、そんな中でも御坂、浜面は先ほどと変わらずに会話をしていた。

「やれやれっ！昔よりずっと強えな！」

「あんたは少し弱くなったんじゃない？」

「挑発的だな…正直に言えよ！本当は俺が邪魔に入って安心してんだろ？あいつら殺さずに済んで…」

「……さあ…何の事だか…」

「たくつ、相変わらず素直じゃねえな…そんなんだから何時までたつても当麻に告白できねえんだよ…」

その瞬間、御坂の放つ殺気が一気にドス黒くなった。

「言いやがったな、コラアアア…」

「……………あの〜御坂さ〜ん」

御坂から少し離れて浜面が機嫌を伺うような感じに尋ねると、突然御坂の全員からズバババツ！と轟音を轟かせながら電撃を出した。

「上等だアアアア！やつぱりお前から消し炭にやるウウウー！」

「お〜い、口調変わってんぞ〜（麦野みたいだな）」



そこから始まった怒涛の攻撃をうまくかわし続け、御坂の攻撃が弱まった瞬間、隙を見計らったように距離を取った。

「たくつ…分かんねえな、当麻への気持ち薄れた訳でもねえだろ？」

「なっ！…だっ！だったら何よ！？」

顔を少し赤くした御坂を見て浜面は安心したように笑顔になった。

「へっ！やっとお前らしくなったな…なんでわざわざ出てきたんだ？レベル5くらい学園都市はいくらでも対処できるだろ？もし駄目でも当麻の奴がいる…あいつにまかしときゃ大丈夫だろうに…」

「…あいつを巻き込むことなんて出来ないわよ…今…あいつは自分の望んだ生き方を出来たんだから…」

「まあ好きなように生きてはいるよな…」

「…あんたはどれだけ覚えてるの？あの戦争を…」

自分の方を見ずに尋ねてくる御坂に浜面は気まずそうに頭をかいた。

「…一日足りと忘れる訳ねえだろ…あれがあったから俺がいるよ  
うなもんだから…何より、俺達を結びつけたのはあの戦争だったからな」

「…そうね…でも、人生を狂わされた奴もいるわ…」

「はあ…まったく、随分とバラバラになっちまったなあ…」

始まりはみんな…同じだったのに…」



## 妨害（後書き）

以上ここまでです。

次回はちよつと過去の話混ぜながら進めていくので少し分かりずらく

なるかもしれませんが、がんばります。

独り言ですが、読み直すと『○○が××した』って文があまりに多すぎる気がします。直したいんですが、なかなかいい文が思いつきません

## 過去（前書き）

今回は過去編

本当は本編も一緒にのせるつもりだったんですが

過去の話が思いのほか長くなったんでこれ一本にしました。

## 過去

5年前のとある日…

学園都市のとある建物の一室にて、上条当麻と親船最中は向かい合  
って話していた。

部屋は円を描いた何十畳もある広い部屋で、その部屋を囲むガラス  
の壁からは学園都市

全体を見渡すことができた。部屋の中央にあるのは高級感漂うソフ  
アーに外国の王室で

見かけそうなテーブル、それらが置かれている床もただの木ではな  
い特別なフローリングを施してあった。ソファーに座る二人の内は  
親船最中は普通の女性らしい座り方だったが、向かいに座る当麻は  
右足に左足をのせて足を組むような態度を取っていた。

統括理事会の一員を前に随分と無礼と思われる態度だが、特に親船は注意することがなく、気にしてもいなかった。だがそれでも親船の態度は不機嫌そのものだった。長い沈黙が続いたがやがて短いめ息の後、親船は口を開いた。

「止めましたけど…アクセラレータ君は職を降りました」

「そうですか…やっぱり」

「ですが、外部の組織に対する抑止力としてこの街に残ってもらうことになりました。もしも將軍を辞めるというならあなたもそうして下さい当麻君…そうすればこの街で何を

仕様と他の者達に文句は言わせません」

「……………ええ、そういうことならいいでしょう…そういう生活も悪くない」

「はあ…まったく、戦争が終わってこれから忙しくなるというのに…みんなガツカリしますよ…あなたと共により良い世界を作っていけると楽しみにしていたのに…」

「別に俺は世界を作っていくことになんか興味はありません…ただ世界を下手に混乱させるあいつらをほって置けなかっただけです…軍に入ったのだからこの方が戦い安いと思ったからだけですし…」

けど、と言いながら当麻は足を組み直す。

「偉くなんてなるもんじゃないですね…平和になつてみて分かりましたが、

普通に暮らすには地位なんて邪魔なだけです。動くたびに誰かが付いて来るし、

自由に動けねえ…やっぱり俺は元の無能力者の方が合ってます…」

「…あなたが決めた以上私が何を言っても無駄でしょうから…何も言いませんが」

「時代が変わっていくようにいい世界も新しいものになんて変わっていきま  
す……  
それよりも親船さん……次の將軍トツプに俺は土御門の奴を推薦したいです  
が……」  
「……！以外ですね、あなたは浜面君か御坂さんを推してくるかと思  
ったのに」  
「俺もそのつもりだったんですがね……」

これより数日前。

「なあ！浜面！」  
「イヤだっ！！」  
「いやっ！まだ何も言ってるねえだろ！！？」  
「おめえーの魂胆は分かっている……面倒なこと全部俺に押し付けて！  
お前一人軍を抜けるつもりだろ！！」  
「……………バレてたか」  
「当たり前だ！……何年お前の補佐官やってたと思ってるんだ？」  
「ハハツ、そうだな……」  
「せっかく生き延びた命だ。俺は残りの人生を滝壺と一緒に過ごし  
たんだよ……何よりお前がいない軍なんて、何の興味も湧ねえ……」  
「そうか……まあお前がそう言うんだつたら仕方ねえな……」

「見事にふられましたよ……」

「御坂さんの方はどうだったんですか？」

「アイツはまだ少し若いですし、目標もある…軍には残らないと思  
つて声はかけませんでした。」

「まあ正直浜面も残らないと思ってましたけどね……」

「そうですね……」

この後、暫くの談笑をした後、部屋に入ってきた秘書に次のスケジ  
ュールを急かされ、

親船は仕方なく部屋を後にした。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

親船の会議の後、当麻は最近の拠点としていたとある高級ホテルへ  
と戻り、

荷物をまとめると部屋を出てチェックアウトするため、一先ずエレ  
ベーターに向かった。部屋を出て豪華な廊下を歩いていると、途中



に当麻のよく知る人物が壁に寄りかかっていた。

「よっ！」

当麻は明るく挨拶をしたが、笑顔の当麻とは逆に待っていた人物、御坂美琴は不機嫌そうな顔をしていた。やがて当麻が近くに来て立ち止まると、ようやく口を開いた。

「聞いたわよ…軍を辞めるんですって？」

「ああ…親船さんの許可も貰ってる」

「そう………凄<sup>ツ</sup>い騒ぎよ、科学・魔術戦争の最前線で戦ってきた將軍が二人とも現場から離れるなんて…親船さんも大変みたいよ、イギリス側からなぜあんたが表立った地位にいないのかって苦情が来てるみたいだし」

「女王陛下にはちゃんと俺から訳も話したし、親船さんは信頼できるって伝えた。後はみんなで何とかすればいいさ」

「…ホント…自分勝手ね…」

そこまで言うと御坂は壁に寄りかかるのを止めて、当麻と一緒に歩き出しエレベーターに乗り込んだ。部屋は最上階にあつたため1階につくには時間がかかり、その間も二人は会話を続いた。

「お前はこれから『統括理事会』に入るんだろ？」

「………まだ決まったわけじゃないけど、親船さんには推薦してもらうように頼んであるわ…」

「そうか…まあお前なら大丈夫だろうけど…もしなつたら最年少『統括理事会』メンバーだ！…すげえーな！」

「別に…あんたのしたことに比べたら、私なんて」

最初の別に、までは聞くことが出来たが最後の方はボソボソっとい

った感じで当麻は聞こえなかったため、当麻は御坂の方を向いた。

「なんだ？」

「なんでもない」

当麻はもう少し尋ねようとしたが、チンツ！と音と共にエレベーターのドアが開いたので先に降りることにした。そして、フロントに行き簡単なチェックアウトをし、出口に向かった。その途中、今度は聞こえる声で御坂が尋ねる。

「あんたこれからどうすんの？」

「そうだな、特に決まってるねえけど……やりたいことならあるな」

「ふん……何？」

「それはな……万事屋だ！」

「……はあ？」

意気揚々と言う当麻に若干戸惑いつつも御坂はなんとか言葉を出せた。

「知らないのか？何でも屋って意味だ！」

「イヤ……知ってるけど、何でまた？」

「んツ？好き勝手やるにはこれが一番だと思ったんだけど……」

「何でも屋って……あんた……」

「ほら……これなら、なんにも囚われずに人助けできるだろ？」

「えっ？」

「軍にも国にも……人にも縛られず……自由気ままの方が俺らしいだろ？」

子供様な無邪気な笑顔でそう語る当麻に御坂はここにきてようやく笑みを漏らした。

「そつ…つまりあんたは限りなく二トに近いフリーターになりた  
いってことね…」

「随分辛口だな！？オイ！！」

御坂にツッコミをした後、当麻はホテルから出てホテル前にあるタクシー乗り場に向かった。タクシー乗り場にはあまり利用者がいなかったらしく、タクシーは何台も止まっており当麻は順番を守って一番前にあるタクシーに向かうと後ろのドアの窓をコンコン叩くとガチャとドアが開いた。

「じゃ…俺はこれで…」

「うん…元気だね…」

「そんな一生の別れみたいに言うなよ！またその内、会えんだろ？」

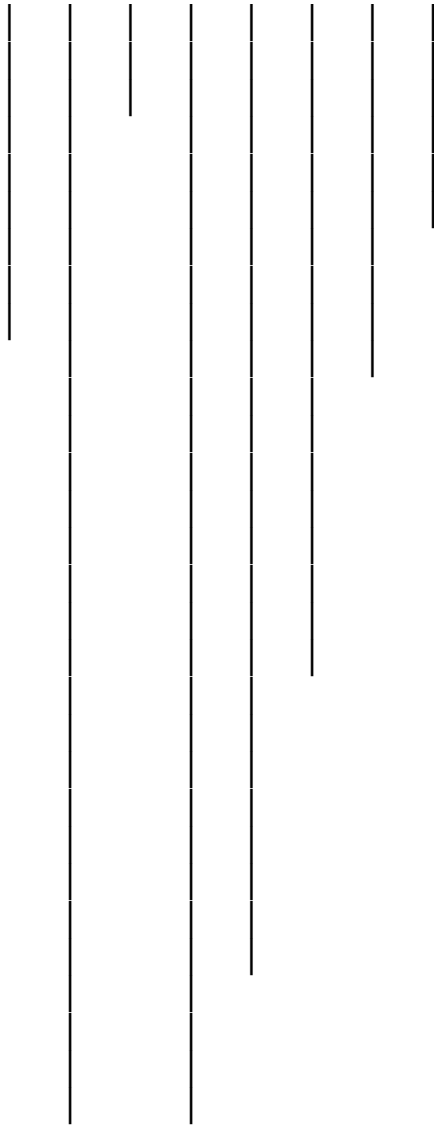
「……ただのなんでも屋が『統括理事会』の私に会えると思ってるの？」

「ははっ！…おっしやるとおり……じゃあな」

「うん………いつでも会いに来なさいよ……」

タクシーに乗り込んだ当麻は一瞬なにかを聞き逃したような気がしたが、

乗り込むと同時にドアが閉まったので何も聞き返せないままタクシーはゆっくり走りだし乗り場を後にした。



## 過去（後書き）

以上です。

この『新人達編』が終わったらまた過去のことをやるつもりですが  
今回はここまでです。

## 覚悟（前書き）

どうもおお久しぶりです。  
随分と遅れましたが出来たので載せます。

## 覚悟

「あいつが軍を抜けた途端みんな…バラバラになっちまった…昔のメンバーも今は何をやってんだか…」

浜面は懐かしそうとも悲しそうにも取れる顔で続ける。

「もともと地位や名誉つてもんに興味のない奴だったからな…俺は別に驚かなかつたがな…随分と、まあ拍子抜けていうかガス抜きされたみたいにする気をなくしちゃったよ」

「落ちたものね…能力殺しレベルキラー恐れられた姿も見ると影もない…」

「なんだよ…將軍補佐に選ばれなかったことまだ恨んでんのか？言っとくけどあれはお前を危険な目に遭わせたくないっていうあいつなりの…」

「分かってるわよ、それくらいガキじゃないんだから…」

「どうだか…俺としては滝壺の手前あまり危険なことはしたくなかつたんだがな…」

「それこそ、「どうだか…」じゃない…戦場に立った回数だけなら私よりも上なくせに…」

御坂の指摘に浜面は不貞腐れのような顔をうかべる。

「別に戦うのは好きじゃねえよ、ただ…あいつと戦うのは楽しい、それだけさ…」

「そうね…それは認めるわ、ロクな戦いじゃなかった…けど、楽しかった」

不貞腐れた顔から少しの笑みを浮かべる浜面につられるように御坂の口元が緩む。

「でも、あいつだって戦うのは好きじゃないわ…味方だけじゃない、敵さえもあいつは救いたいと思ってる…だけど世界はそんなにあまくない、だからいつも振るいたくない拳を握って戦ってる。傷つけたくないって涙を堪えながら…分かるでしょ？あいつは戦っちゃいけないのよ…」

「……………」

「私はこの街を良くしたいなんて思ってない…私はただあいつが戦わなくていい世界を作りたいだけ!!」

「………そのために若い命を奪ってもいいって言うのか？」

「構わない！私がやっていることはただ自己満足…でも、あいつが一瞬でも幸せでいられる時間を作れるのなら、私はそれで構わない！！」

どんだけ罪な男だよ当麻…と心なかで呟きながら浜面は、なぜか当麻との再会を思い出す。



10年前……とある日。

とある大学で、浜面と当麻は向かい合っていた。

「仕方ねえだろ。こうでもしないと俺達無能力者は生きていけねえんだ！どこに行ってもバカにされて、居場所を作れば景観の美化つー名目で全部壊されれ。……そんな状況で、他人を食い物にする以外に、無能力者にどんな道があるつーんだ！？」

嘗てスキルアウトとして活動していた浜面は、その集団を守るためにある人物を殺すことを依頼され、その途中にそれを止めんとする当麻と戦わなくてはならなかった。

「……………一緒にすんじゃねえよ」

そして、その時当麻は浜面に向かってある事を言い。それは浜面自身がすでに分かっていたことかもしれないし、誰かに言ってもらいたかったモノだったかもしれない。

「ふざけるな！俺と同じ無能力者のくせに！！」

「テメエらバカにされてきた理由は、力のあるなしなんかじゃなえ。今からそれを見せてやる」

そして、浜面はその戦いで、文字通り無能力者こもののようにやられ、それが原因で暗部へと落ちていくことになった。だが、落ちて行ったその先で、彼の運命を大きく変える出会いがある事を彼はまだ知らなかった。

昔のことを一通り思い出した後、浜面はどこか笑ったような顔をし語る。

「まっ俺もあいつに大恩のある身だ…だからお前の気持も分からない訳じゃない…」

そして、改めて覚悟を決め雷切を握りなおす。そんな浜面の覚悟を感じたか御坂も剣をしっかりと握りしめ構える。

「まったく、まいるなぐやりずれえんだよ…お前みたいな覚悟のある奴はなあ！」

~~~~~  
~~~~~

一時戦いが収まり静かな時間が続いたが再び激しい戦闘音が新人達の元に届いた。

「また始まった…」

「まったくんでもねえ奴らだ…」

「一先ず離れよう！せつかく貰ったチャンスだ！逃す手はねえ！！」

感知能力の相良以外、皆がボロボロで戦え状態でない以上彼らに出来ることは逃げることだけだった。

一番ボロボロな空道には相良が手を貸し他の3人も傷ついた体を何とか動かしその場から離れようとしたが

「新人達ね？」

そんな彼らの前に再び敵が立ち塞がる。今度の敵は御坂同様女であったがその容姿は御坂よりじゃっかん大人びているようだった。

「お前…誰だ！？」

「結標淡希…『グループ』よ」

女の言葉に全員が身構える。

「また暗部かよ！？」

「俺を置いてけ…相良…」

相良に担がれた空道が彼の背中であいた。

「えっ!?!」

「動けない俺は狙われる…お前は行け!!」

「何言ってるんだ!?!みんな一緒に……」

「あんたが一番弱ってるわね……」

二人の会話を遮って、一番後ろにいたはずの相良と空道の目の前に突如結標が現れた。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

「いつの間に!?!」

皆が突然のことに驚いている中、空道だけはその状況にパニックにならず自分を担いでいる相良を無理やり横に突き飛ばした。

「いい判断よ……そして…さよなら……」

淡々とそう述べた後、結標は空道の肩に手を置きその数秒後、空道の姿が消えた。

「えっ!?!」

「浮…遊…?」

皆、唖然と空道がいた場所を見つめたが、どれだけ見つめようと空道の姿はどこにもなかった。



## 覚悟（後書き）

以上です。

もう気付いた方もいると思いますが

この話の最後は私の大好きな話のオマージュで行きます。

斬新な終わり方を期待してた方、どうもすみません

でも、この部分で書きたいことはもう書いたので

パパッと終わらせようと思います。

とりあえずこの「新人達編」次回でバトル部分は終わりです。

ではまた今度

## 終息（前書き）

どうも、出来たので載せます  
バトル編は今日ので終わりです

## 終息

「なんだ！？何が起こった！？」

御坂と激しい鏝迫り合いをしながら浜面は逃げているはず新人達へと視線を移し、彼らの視線を浴びる一人の女を見つけた。

「なっ！あいつは！！なんだって暗部の主力部隊の一人が！！」

「余所見していいの？」

突然の暗部の登場に驚きすぐさま援護に向かおうとする浜面を御坂が容赦なく斬りかかる。

「チツ！！」

「なんであいつが来たか知らないけど……始末してくれるならそれに越したことはないわ……」

そう言うと御坂は今までのように浜面を早く倒して新人達を仕留めるという考えを改め、時間を稼ぐためか剣の構えが変わった。その構えを見た浜面はより一層険しい顔をする

(まいったな……こりゃ崩せねえぞ……)

顔に出さず浜面が焦っていると又、新人達の方から何か叫んでいるのが聞こえ、状況を把握したい浜面は隙が生まれるのを覚悟で新人達の方を横目で見る。最初は何を彼らが騒いでいるのか分からなかったが、やがて一人少年がいなくなっているのに気づく。





「分からない…感じないんだ、どこにもいない」

今まで明かさなかったが、相良は大能力（レベル4）の感知能力者である。感知能力のレベル4となると、それは相手の力の大きさ、相手がどのような能力か判断、仲間の居場所など様々なものが分かってくる。だが、どういう訳か相良が言うには空道の力は感じ取れず、どうなったか分からないらしい。レベル4となってくると普通、そのようなことはありえない。が、相良の表情は、それが本当であると信じさせる程困惑していた。相良の言っていることが本当ならば空道の身に何が起こったのか分かるすべはない。皆、何が起こったのか理解しようとするが、パニックになっている状態で理解できるほど事態は分かりやすいものでない。

「くそっ！！くそっ！！とにかく今は逃げるぞ！！浮遊のことはあとで考えよう！！」

今は一先ず生き残るため十谷も苦渋の決断をし逃げることを選び、皆もそれを仕方なく了承するが、又しても結標が彼らの前に立ち塞がる。

「逃げられると思う？」

「空間移動か！？」  
テレポート

「…正確には違うんだけど、説明する気もないから今はそれでいいわ…」

それだけ言うと結標は又その場から一瞬で消えると、後ろの方で構えていた雨水の目の前に現れ、彼に触れるように手を伸ばす。

「えっ！？」

「なっ！？」

結標の移動にいち早く気づいた小歩理はすぐさま雨水に駆け寄り、  
とした。

「連司！！！」

近づく小歩理に気がついた雨水は助けを求めようとに縋るような眼  
で彼女の方を見て手を伸ばした。

「霧さん！！！」

小歩理の手が触れるか触れないかくらいところに来た瞬間、先ほど  
の空道のように雨水の姿は一瞬で消え去った。小歩理は雨水に飛び  
つくように走っていた為、目標を失った彼女の右手は誰もいない空  
間を空しくすり抜けた。

「連司……？ウツ！ウワアアアアア！！！」

雨水のいなくなった場所を一回見つめた後、小歩理はその近くに  
いた結標を睨みつけ叫んだ。

「（無茶だ！）待て！霧エエ！！！」

冷静さを失い、小歩理は能力も使わず殴り掛るように拳を振り上げ  
結標に近づく。

誰がどう見ても無謀であり、十谷も止めようとしたが時すでに遅し、  
結標は小歩理の拳をヒラリとかわし彼女の後ろにまわると彼女の肩  
に手を置く。そして、小歩理は消えた。空道と雨水と同じように一  
瞬で

「震！！」

「くそっ！？あいつみんなに何を…！？」

時間にして5秒、見ていた方からすればもっと短かったかもしれない。

僅かな時間で3人の仲間を失い、十谷も相良も冷静でいられる訳はなく。

「敵を前にして、その気の抜き用…乙女みたいに呑気ね…」

今度は相良の前に敵は現れる。

「逃げろ！！重！！！」

逃げられない。そう感じた相良は消される最後の瞬間まで仲間を思い叫び、そして消える。

「ヒロオオオオ！！！」

残された十谷はただ茫然と膝をつき、今まで築き上げた力も自身も仲間も全てのを失った消失感に押しつぶされていた。

「くそ…くそっ！！俺は…俺は！！！」

「想いだけじゃね…力がないんじゃ、この街では何の意味もない…」

戦意を失った十谷の前に来ると結標は無表情にそう言って彼の肩に手を触れる。

「終わりよ」

結標は無表情でそう言った。そして、本当に全てが終わった。すべての新人達が消えた後、御坂は浜面との戦いを止めて結標にゆっくりと近づいてきた。

「まったく…どういうつもり？…これは大問題よ」

「ちゃんと説明するわよ…」

こうして学園都市で起こった10年前の『暗部抗争』以来の暗部内での事件『新人達の暴走』は、

奇しくも『暗部抗争』で生き残った現暗部の活躍によって最小限の混乱で収拾した。

## 終息（後書き）

あゝとりあえず終わりました。

まず分かってると思いますけど…この展開はぼつジャンプ作品から取りました。

正直に言ったんで許して下さい。

とりあえずここでバトルは終わりますが、実際にはまだこの話は続きます。

今回はギャグ編、あの人も登場するよ！

平穩？（前書き）

なんか出来たんで載せます  
今日はおの人が出るよ〜

平穩？

『今日は一日快晴！傘を持たずに出かけても心配いりません！』

「ああ…デートには丁度よさそうだ」

天気予報を見るなりそう呟いたのは浜面仕上。まだ寝起きといった感じにポリポリと頭をかいて歯を磨いていた。

「滝壺、おかわり…」

「私も」

呑気に朝ごはんを食べるのは上条当麻とインデックス。米がないからという理由で非難してきた。

浜面は歯を磨いていた手を止め、当麻の向かい側の席に座った。

「昨日は随分騒がしかったっていうのに、呑気だな…」

「お前こそ…昨日は随分学園都市に刃向ってたそうじゃないか…」

「はっ！よく言っぜ…結標にあいつらを逃がすように言ったのはお前だろ？」

「……………さあ…なんのことやら？」

何やら意味ありげな笑みを浮かべる当麻の顔を見て、やっぱりな…と浜面は心の中で納得した。

何にせよ事態は收拾した。今日から再び平穩な日々が始まる。そう心の中で安堵していると

『そして、恒例の星座占い！』





「たくつ！何だつてんだ！？気分悪い！大体そんな簡単に乙女座が死んでたまるか！世の中男だらけになるぞ！なあ当麻！」

随分馬鹿なことを言ってる、そう当麻にも笑ってもらいたく当麻の方を見てみたが、

当麻は何故か一枚の名刺を浜面に差し出していた。

「これイギリスの教会の電話番号…きつといい棺桶職人紹介してくれるよ…」

真剣な顔で渡してくる当麻に浜面は何も言い返せないまま、名刺を受取った。

「インデックス、もう帰るぞ…」

「えっ！？ご飯は？」

「もう、食ったる？行くう…」

まだ食べたりないといった表情を浮かべるインデックスの手を握ると、当麻は出口に向かった。

ポーっとその様子を見ていた浜面は、ようやく一人になっていることに気付いた。

「ちよっ！なに？急に…？まったく、心配性だな、当麻は…」

などと言いながらも、浜面は名刺をマジマジと見つめたいた。

すると、おかわりを頼まれた滝壺が2つの茶碗にご飯を盛ってやってきた。

「あれ？かみじょう帰ったの？」

「あゝ今帰った」

すると当麻が家を出てから一分もたっていないころ、浜面の家のチャイムがピンポンと鳴り彼を呼びだした。

「忘れもんでもしたのかな…は…い今開けま…す！」

ドアを開けるために取っ手に手を置こうとした瞬間、

「ばあかあづうらあああ…！！！」

「アビヴァアア…！！！」

突如、ドアが蹴破られ、ドアの開く勢いに押され浜面は吹っ飛んだ。何が起こったか分からなかったが、浜面はドアを蹴破った人物を知っている。

「…いつて…なっ！おっ！お前は…！むっ！麦野オオ…！！！」

扉を蹴破って入ってきたのは、かつての宿敵であり、かつての暗部組織のリーダーであり、かつての戦友でもある麦野沈利であった。

「立て浜面…3秒以内立たなきゃ、その頭ぶち抜く…は…い、1」

ビュゴオン！と浜面の顔目がけビームが放たれ、浜面はそれを間一髪でかわした。

「2と3はアア…？」

「うるさわね…女はね、1だけ知ってれば生きていけるのよ」

「どんな横暴！？いくら暗部の人間だからって簡単に人を殺そうとすんじゃねえ…！！！」

「何言っただ？こらあ…！！お前のせいだな…お前のせいで…私は

ね…破滅しそうなのよ…」

「はあ!？」

何を言っているか分からない浜面は、ただ明らかに怒っている麦野に困惑した。

「あゝあれ何時だったかしらね…あなたがスキルアウトおわれり途方にくれてた頃、何の因果かお前なんかを拾っちゃった…今思えばあれが私の人生の転落の第一歩だったわ…ああ！やり直したい！！全てやり直したい！！出来ることなら！

あんたが父ちゃんの手 夕マに入ってた頃からやり直したい！！」

「こらこら女が下品な言葉を使うんじゃない…！」

「前々から馬鹿な奴だとは思っていたけど…まさか新人達を逃がすなんてね…」

「はっ?何?…新人達を…脱がす!?おい!人聞きの悪いこと言うな!!俺が脱がすのは滝壺だけだ!!」

「脱がすじゃねーよ!逃がす!!ちなみに私は脱がされたい派よ…!」

「いやっ!知らないけど!」

「あああ!!せっかく老後の為にホテル経営とか、やり始めたっていうのに!お前のせいで全部差し押さえじゃあああ!!!!」

そう言うと麦野は再びビームを放つ、浜面に向かって容赦なく。

「ぎゃあああああああ!!」

浜面の悲鳴に気付き、滝壺がキッチンの方からやってきた。

「あつ!むぎの、いらっしやい…」

「ああ滝壺、久しぶり…」

「何か食べる？」

どう見てもかなりの大惨事だが、それでも冷静でいられるのはかつての仲間としての信頼があったからだろう。

「ああ、大丈夫よ…それよりも、浜面ちよつと借りていい？」

「いや！俺の了承は！？」

「はまづらを…？何するの？エツチなこと？」

「滝壺オオ！浮気以外に心配する事っていっぱいあると思う…！！」

「安心しなさい…ほんの腕を4、5本折るだけだから…」

「いや！無理イイイ！！無理だから！！俺、腕4、5本ないからねえ…！！」

「そう！じゃあ大丈夫だね…」

「滝壺オオ！耳鼻科行って！！しっかり耳を見てもらって…！！」

浜面は必死な訴え（ツッコミ）をしたが、二人は全く気にしておらず、麦野は乱暴に浜面の襟元つかんで引きづり出した。

「ほら！行くわよ…！！」

「いや！だからちよつと待って…！！」

浜面は藁にもすがる思いで滝壺の方を見たが、滝壺はとうとう、とても可愛らしい笑顔をこつちに向け、いつてらっしゃいっつと手を振っていた。

平穩？（後書き）

いや〜ギャグはやりやすい…スラスラ書けます。

といっても、このシーンもある漫画をオマージュしたんですが。

とにかく。こういった感じに新人達の後の後処理の話をやります

もちろんギャグで（笑）

とりあえず今回はここまでです

## 騒動（前書き）

最近、暗いニュースばかりですね。

まあ当たり前の事なんでしょうけど、毎日これでは気がめいってしまします。

こんな、パクリみたいな作品ですが、

被災者の皆さんや暗いニュースでブルーになっている皆さんが少しでも笑顔になることを願って22話いきます。

## 騒動

麦野に連れ去られた浜面は、とある高級車に乗せられていた。

普段なら車の運転は浜面の仕事だが、今回は運転手が付いていおり、浜面は後ろ席に麦野と一緒に座り、麦野が、なぜお怒りだったのか説明を聞いていた。

「ええ！！何それ！？つまり俺が新人達を逃がしたことになるん  
の！？」

「一々でけえ声出すんじゃねえ！鬱陶しい！！」

「すつすまん…でも！おかしいだろ！？逃がしたのは結標だし！し  
いて言うなら命令したの当麻だし！」

「そんな事だろうとは私も思ったわよ…だけど結標の奴を尋問した  
ら…」

---

「ごめんなさい…本当は私だってこんな事したくなかったんですけど…でも…もしやらなかったら『お前を二度とお嫁にいけない体にする』って浜面仕上に脅されて…！」



「って涙ながらに語ったのよ…」

「言ってるねええ！！俺がそんなことする訳ねえだろ！！誰が相手にするか！あんなシヨタコン！！！」

「分かっているわよ…ただあいつがそう言ってるんだから、こっつして呼び出しがかかることは仕方ないでしょ…！」

「いや、だからって…！」

「依頼主が一枚上手だったてことよ…」

依頼主。という言葉聞いて浜面は今朝のことを思い出す。

『これイギリスの教会の電話番号…きつといい棺桶職人紹介してくれるよ…』

「あの野郎…さては、こうなることを…」

浜面は、頭を抱え恨めしそうに言葉を漏らす。

「でっ？どうなるんだ？俺達を呼ぶってことは…始末されるってことか？」

「いえ、下手に私達に罰すれば、今回のことが明るみにではず。そうなれば奴らが超能力者を手に負えなくなっている事を世間に知られてしまう。」

それだけは奴らも避けたいはずよ…むしろ危ないのはこの向かう途中よ、」

「向かう途中？」

「この向かう途中は奴らは干渉していない。もし殺してもただの事故で片づけられるってことよ。つまりよ…私達が集まった所を…まとめて…『吹き飛ばせ！ブリタニア！』的にことをしてくるかも…」

「……………」

「表向きは、外の勢力による過激なテロって所でしょうね…」

冷静に分析をしている麦野の隣で浜面は今朝のテレビで言った事を思い出す。

『今日死にまゝす！』

その言葉を思い出した浜面は、何かを思い立ったように車のドアを開けて、外に飛び出そうとした。

「お家帰るウウウウウウ！！」

「こらあ！待ちやがれ！！」

浜面を逃がさぬよう麦野が後ろか羽交い締めにする。  
それでも浜面は暴れ続けた。

「嫌だアア！！！！こんな24時間365日デンジャラスガールの隣でなんて死にたくないイイイ！！死ぬなら滝壺の膝枕or胸の中で死ぬウウウ！！！！」

「てめえ！男なら生きることが死ぬことと託つけんかい！！」

「いやあだああ！もっとエッチにスケベに欲望まみれに生きたい！！！！」

「だから落ち着きなさい！！」

麦野は浜面の外に出かけている体を無理矢理中に引きずり込み、浜面と入れ替わるようみ位置を変え、空いているドアを閉めた。

「まだ処分されるって決まった訳じゃない！！奴らだって私達を呼び出した所で奴らだって下手に私達を処分する訳にいかない！！生き延びれば何とかなる！！」

「生き延びれば……！！」

そう。生き延びれば何とかなる。確かに学園都市は脅威だが、今前にいるのは超能力者の麦野である。

ならば、彼女さえいれば何とかなる。今日の彼女の運勢だって自分の様に悪くない筈だ。だったら彼女の幸運を信じよう。そう考えた浜面だったが、一つだけ確認したい事があった。それは今日の彼女の運勢であった。

「なあ麦野……お前ってさ……何座？」

「ああ？……乙女座だけだ」

それを聞いた瞬間、再び車のドアを開けて浜面は逃走を計った。

「最悪だあああ！純度100%で『死』に向かっている！！！」

「おらあ！分けわかんねこと言ってるじゃねえ！！！」

「うるせえ！！大体なんでお前が乙女座！？どう考えてもヤク座だろ！？もしくはアネサンの存在だろうが！！！」

「ごちゃごちゃうるせえな！何だったら今すぐお前を消してもやっ  
ていいだぞ？…燦々と輝くチンピラ座にしてやるつか！？あ”あ！  
！」

「二人とも止めてください！」

二人の喧嘩ぶつりをバックミラーで確認していた運転手が、後ろを  
向いて止めに入った。

だが、一瞬でも目を放したのが悪かった。

しつかり制御されていない車は、前に止まっていたトラックの荷台  
の角にぶつかってしまった。大したスピードもなかったし、当たっ  
たのが角だったので車の中は大して揺れずエアバックもでなかった  
が事故は事故である。

「ああ！しまった！！！」

「おいおい！何してんだよ！？！」

ヤレヤレと浜面が運転手に話しかけると

「すみません！取りあえず、謝って…！！！」

運転手はシートベルトを外して外に出ようとしたが、

「待ちな！…私が行く…！」

そう言って麦野が代わり外に出て行った。

「ちょっとちょっと！何してくれんの！？自分ら！」

トラックの運転手である男は何やら関西弁で話していたが、髪は日本人には珍しい青い髪をしていて関西人とも日本人とも思えなかった。

最初は怒っていた青髪のトラック運転手だったが麦野を見るなり目の色を変えた。

「うおっ！めちゃくちゃ美人やん！！ねえこれから暇？」

ぶつかった事はいいのか。急に麦野を口説き始めた。

(あああ。まったく命知らずめ)

と浜面は心の中で呆れたが、青い髪の男は気にせず口説いた。

「どっ？一緒にお茶でもせえへん？」

「……………お前…殺し屋だろ？」

「へっ!？」

麦野の言葉に青い髪の男は変な声を上げた。

「だからお前殺し屋何だろ？」

「えっ？何どっういうこと？あっ！あれか！君は追われてんのか!？」

最初は戸惑っていたが、直ぐに彼女が天然キャラだと判断したらしく。

麦野に合わせる様に男はキャラを変えてきた。

「確かに俺は殺し屋さ…でも殺すのは君じゃない。君の心さ」

と齒の浮くような台詞を言っていると、麦野は荷台に右手を置き。

ビュゴゴオオオン！

原子崩しでトラックを吹っ飛ばした。

「「なっ……………！？」」

運転手と一緒に驚いていると、麦野が運転手席の窓をコンコンと叩き。

「あんた…もう帰んなさい。こつから先は覚悟がないと死ぬわよ」

「はっ！はいいいいいいいい！！！」

運転手は慌てて運転席から降りて、代わりに麦野が運転席に座った。

「ちよっ！麦野！お前何してんの！？あれ、どう見ても一般人だろ！？」

「馬鹿…あれ、殺し屋だから…」

「何言ってるんだ！？お前！？」

「自分で殺し屋だつて言ってたじゃないの？」

「あれはお前に合わせたんだよ！！むしろワザワザ合わせた事に敬意を払え！！！」

「それにほら…あいつ髪青かったでしょ？青い奴は大抵殺し屋なのよ」

「何訳分んねえ事言ってるんだ！？」

「ちなみにこれ、特別に教えてあげるけど…ドラえもんいるでしょ？あれ、殺し屋だから…誰にも言うんじゃないわよ…」

「言えるか！そんなふざけた幻想！！殺されるわ！！！」

後ろの席で必死に突っ込んでいた浜面だったが、ある事に気付きキョトンとした。

「あれ？つてゆーか…お前運転できたっけ？」

「安心しなさい……………仮免はとってるから」

「安心できるかアアア！！！」

後ろから麦野の座る席を掴んで浜面は叫ぶが麦野は気にせず車を走り出させた。

「代われ！！今すぐ代われ！！！」

「大丈夫よ。私シューマツハだから……」

「何なのお前！？さっきから変なキャラになってるし！！ワザとだろ！？ワザと俺を困らせたいんだろおおお！！？」

浜面は泣き叫ぶが車は止まらない。

## 騒動（後書き）

以上です。遅れてすみません。

実は試しに賞に送ってみようとオリジナルの小説を書いていて、期限がぎりぎりだったので詰め込んでいたらこんな遅くなってしまいました。

すみません。

これからはちょいちょい書いていけると思います。

そして最後に東北地方太平洋沖地震により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますと共に、被害を受けられた皆さま、そのご家族に、心からお見舞いを申し上げます。どうか震災に負けないで下さい。



## 暴走（前書き）

どうも！出来たので載せます！！

## 暴走

浜面の制止も聞かず、麦野は車を走らせ続けた。  
速度のメーターを見てみると針が120キロを超していた。

「おいイイイ！！飛ばし過ぎ！飛ばし過ぎだから！！」

「はっはっはっ！！最高よ！！もう誰もわたしを止められない！！」

「何！？どうした麦野！？何か新しい世界を開いたみたいになってるぞ！！」

浜面の必死の説得を無視し麦野がひたすら車を走らせていると、サイレンを鳴らし、上に設置されたランプを真っ赤したパトカーが近づいて来た。

パトカーは車の窓を開けると中から一人の女性が、手に拡声器を持って現れた。

「あゝ！あゝ！その車！！大人しく捕まるじゃん！！」

何やら聞いた事のある声、正確には語尾だったので、まさかと思いついてパトカーの方を見てみると

そこには浜面のよく知る人物。教師兼警備員の黄泉川愛穂がいた。

「黄泉川アアア！！助かった！助けてくれエエエ！！」

黄泉川と同じように車の窓から浜面が顔を出すと黄泉川が驚いた様に声を上げた。

『おっ！？浜面じゃん！どうした！？こんな所で』

『何でもいいから！！助けてくれ！！』

『あゝ風が喧しくて全然聞こえないじゃん…！！』

聞こえないと言ってはいるが、それでも浜面は諦めることなく叫び続けた。

だが、黄泉川はそんな浜面の叫びに気付かず、浜面の乗っている車を見渡し運転席の麦野を見るなりニタ〜と笑みを浮かべた。

『おいおい、浜面〜！滝壺というものがいながらすみにおけないじゃん』

『あア！？』

『お前は優しい奴だから、自分に好意を持ってくれる子を無碍には出来ないっていうのもよく分かるじゃん！！』

『おい！何言ってるんだお前！？』

『だけどな！世の中には順序つてもんがあるじゃん！！ちゃんと滝壺を一番にしてやるじゃん！！それが筋じゃん！！』

『何の話してんだ！？お前は！！』

『だからちゃんと最初の子供は滝壺とにするじゃん！その後は、まあバランスよく行くじゃん！！』

『おい！こいつ教師のくせに二股肯定したぞ！！』

言いたい事だけ言った黄泉川は満足そうに笑いだした。

『じゃあ私達は帰るじゃん！おい！鉄装！知り合いだから引くじゃん』

『おい！待てコラ！テメエ捕まえに来なくていい時に捕まえに来る』

くせに！こついう時に見捨てんのか！？」

『じゃあ浜面！お幸せに〜』

笑顔で手を振って浜面を見送る黄泉川。

もちろん浜面は納得できる訳もなく。

「だから違うつってんだろ！？頭で言葉の処理の出来てんのか！？このクソババア！！」

『誰がクソババアだ！！！？殺されたいか！！！！』

「何で悪口は聞こえんだよ！！！？」

漫才の様なやり取りをしていると黄泉川の隣で車を運転している黄泉川の同僚鉄装が戸惑ったように話しかける。

「あの黄泉川先生。あの人攫われてるみたいなんですけど…」

『何！？そつなのか浜面！？』

「だからそつ言っただらろうが！！！」

事の重要性に気付いた黄泉川は漸く真剣な顔になった。

「何でもいいからコイツを止めてくれエエ！！！！」

『任せるじゃん！今すぐに！！！！』

ガシャン！と黄泉川はどこからかバズーカを取りだす。

『止めてやるじゃん…！！』

「何を止める気だアアア！？」

浜面の全力の絶叫を無視して、黄泉川はバズーカの照準を合わせる。

「俺は助けてくれって言っただよー!!」

『安心するじゃん。直ぐに助けてやる!』

「何を助ける気だ!? 葬儀屋の景気か!?!?」

『くたばれエエ!?!』

構えたバズーカからドカアーン!! 弾が勢いよく発射される。

「ぎゃああああ!!!! 麦野オオオ!!!!」

「チイイ!!!!」

浜面の言葉に反応するように麦野は右手を翳して、自信の能力である『原子崩し』を使い車の外側にバリアを張る。バリアは間一髪で砲弾の爆発から車を守ったが、爆発が近かった為、爆発の衝撃を受けた車は道路から逸れて近くの倉庫らしき物に突っ込んだ。凄まじい衝撃の後、車が止まったのを確認した浜面は一先ず衝撃でボロボロになったドアを開けて外に出た。

「だあ…!! 死ぬかと思った。ありがとう麦野…」

「くそ…やるな。あの殺し屋」

浜面に続いて麦野も車から降りてきた。

「もう間違っただねえからツッコメねえよ」

そう浜面が溜息をつきながら呟いていると、どこかがショートしたのかバシュー!と車から火花が飛んだ。

「おい! 離れようぜ…この車はもう駄目だ。爆発する前におさらばしよう」

浜面が離れようとした瞬間、彼の足もとに何かが転がってきた。丸く、紙の様な物で包まれ、どこか懐かしい感じがした。

(あれ?これ何か前にも…)

浜面は思い出す。

その昔、半蔵と駒場と一緒に黄泉川と激しいカーチェイスを繰り広げ、花火で吹っ飛んだ日の事を。  
それが走馬灯である事に気付くのは、もう少し後の話。

~~~~~

暗く周りが確認出来ない部屋の真ん中。

唯一光がスポットライトの様に当たっている部屋の中心に浜面と妻野は立っていた。

周りには、彼らを囲むように人が座っているのが僅かに確認できる。

「ではこれより今回の事件についての報告会を進めようと思います。ですが」

浜面達の丁度前の方に座る男が声を出したが、それは何故か区切られ、

「その前に……………あなた達、何かあったんですか？」

男が不思議に思ったのも無理もない。

浜面に麦野の服は至る所が黒く焦げており、髪型に至ってはドリフの一騒動後みたい髪型になっていた。

「いえ…ちょっとシリアスをコミカルに変えられて…」

と今回の二人は今までにないほど息ひつたりに報告した。

「ふふっ相変わらずのやんちゃっぷりの様ですね」

「聞いた話によると御坂さんとやりあって傷一つ負わなかったそう  
で」

「上条当麻の右腕と恐れられた力は今だ健在のようで」

「またいずれ、その力が必要になる時が来るでしょう。だからそれ  
まであまり…無茶はしすぎないように」

「……………」

~~~~~

会議の後、解放された浜面と麦野は近くの公園のベンチに座り缶コーヒーで一服していた。

「は〜凄い戦いだっただわね！」

「……………なあ、もしかして俺達何しなければ結構スムーズに今日を終われたんじゃない？」

「凄い戦いだっただわ！！！」

無理矢理話を交える麦野にどこか不満を抱きつつも、これ以上この話題をふるのはよくないと思い浜面はこれ以上何も話さなかった。  
そこに

「とりあえず無事みたいね」

「御坂……」

つい先日戦った御坂が二人の元にやって来た。

「借りができたな」

「何が？」

「お前なんだろう？色々処分されないように手え回してくれたの」

「別に、『新人達』を逃がした事より、あんたを失うことの方が問題だと思ったからよ」

「そうかよ……………悪いな。もう会う事もないと思ってたのに」

「そう思うならもっと頭を使ってほしいわね……」

御坂は不機嫌そう言うと言が終わったのか、二人に背を向けて歩き出す。

「まあでも……………どうせまた会う事になるわ」

「ああ？どつという意味だ？」

「……………言葉の通りよ」

御坂は振り返りもせず、その言葉だけを残し公園から出て行った。



「どう言う事だ？麦野」

「私もよく知らないけど、近いうちにどっかとドンパチするみたい  
よ」

「俺達が招集されるくらいの敵なのか？」

「さあね…でも聞いた話じゃ……『一方通行』の奴を呼び戻すみた  
いな話になっているらしいわ」

「ッ！？あいつを！？そりやお前とんでもない事が起こるってこと  
だろ！？」

「さあね。詳しくは知らないわ」

麦野は空になった缶をゴミ箱に放り投げベンチから立ち上がる。

「そういう訳だから、あんた危ないと思ったら滝壺はどっか余所に  
移しなさい」

「ああ…でも、あいつは大人しく行くような奴じゃ」

「……一応言ったからね。じゃ私はもう帰る」

「ああ、麦野！」

「何？」

「たまには飯食いに来いよ」

「……………」

麦野は無言のまま、はいはいと言った感じに手を一回振って公園か  
ら出て行った。

一人残された浜面は座ったまま呟く。

「はあ…当麻が守って、救って、変えた善なものな……何で同じこ  
との繰り返しなんだろうな」

麦野が聞いていたらきつとガラでもないと笑うであろう台詞を言っ

だが公園には誰もおらず、浜面を笑う者もいなければ、質問に答え  
てくれる者もいなかった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「あゝ散々な一日だった」

会議にかけられた長い時間よりも遥かに長い時間をかけて浜面は家  
であるマンションに帰って来た。

今日一日の出来事を振り返り改めてウンザリしていると、

「はまじら〜」

「おっ！滝壺」

マンションの入口あたりで滝壺が手を振って浜面を出迎えた。

「なんだ待っててくれたのか？」

「うん…ずっと待ってた」

「そうか」

俺を待っててくれたのかと感動にも近い感情を抱いていると、

「はまじら…これ」

「んっ？何だこれ……」

浜面に一枚の紙が手渡された。

上の方には『修理費請求』と何だか嫌な予感をさせる文字が書かれている。

「修理費の請求書」

「……いやそれは書いてある文字を見れば分かるんだが」

浜面が問題に思ったのはそこではない。

問題はその下に書かれている0がたくさんの金額だ。

「滝壺さん…これ…なに？」

「今朝、むぎのに開けられた穴…あれ一階まで貫いたんだって、だから修理費」

滝壺の説明後、嫌な殺気を感じた浜面が後ろを振り返ってみると、

そこには

何人ものマンションの住人達が待つてました言わんばかりに立ち並んでいた。

「待つてましたよ。浜面さん」

「払ってくれるんですよね？」

「いやでもそれって麦野が勝手に……」

「……払って貰いますよ……」

住人達の威圧に押された浜面は、

「ははっ……これはあれだ……不幸だアアアア……」

どこかの不幸な少年ばりに叫び散らした。

## 暴走（後書き）

以上です。

ちよつと長くなりそうだったので、微妙なところはカットしました。少しあっさりしすぎたかもしれませんが、

もう新人達は出てきてませんが、この『新人達編』は次回で終わります。

次回もあの人が登場

映画（前書き）

どうも！出来たのでせまうす！！

## 映画

『わはははっ!!!!』

『うっ!なんて強さ!!!』

『ここまでの様だな!』

『フフッ!それはどうかしら!!!』

『何!?!』

『これを見なさい!!!』

『そっ!それは!!!』

『そうよ!この『カナミンステッキ』はマジカルチョコレートで出てくるの!!!』

『おのれええ!!!』

『勝負はこれからよ!!!』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「カナミン!!!いけええ!!!!」

「いや行けじゃねえよ...何してんの彼女?」

目の前の大スクリーンに広がる映画を前にし、興奮するインデックスとは対照的に当麻は冷たく尋ねた。

「知らないの当麻?カナミンはこれから歌って、戦って、食べるスパー魔法少女になったんだよ!!!」

「何なんだよ食べるって？何でそんな訳の分かんねえワード付け足してんだ！？」

「それに、ただ食べるだけじゃないんだよ！カナミンは食べる事によつて体内の細胞をパワーアップしてどんどん強くなるんだよ！！」  
「その設定すでに存在するからな！！何なら結構最近アニメ化したから！！」

当麻はインデックスがあまりにごねるので仕方なく買ったポップコーンを貪りながら、

「まったく映画見ようって言ったけどよ…なんでアニメだよ」

「当麻！カナミンをバカにしちゃいけないだよ！！カナミンはこのシリーズで遂に第10期を迎えるんだからね。この『マジカルパワードカナミン・インテグラルバージョン？ミラクルアタツチメントファンタステックマクロスオーバードライブグルメF』はカナミン10周年作品の超大作なんだよ！」

「そんな中2の好きそうな言葉を片っ端からくっ付けた様な作品に子供は引っ掛かる訳ねえだろ！！しかも何か違う作品も混ざってるし！！第一なんだよグルメって！！」

「このカナミンには、自分が太り過ぎてるって思い過ぎて拒食症になつてしまう子供たちの為に、「そんなこと気にせずたくさん食べるんだよ」っていうメッセージが込められてるんだよ！！」

「そんな風に何でもかんでも理由つければカッコいいと思うなよ！本当にカッコいい奴って言うのはな！『天才バカボン』の赤塚先生みたいに！「なんであんなバカなパパと美人なママを結婚させたんですか？」っていう質問に「理由なんてないよ！」って答えるのが一番カッコいいんだよ！！」

「も〜当麻うるさい…それよりもこれ見てたらお腹すいてきたかも」  
「おい！製作者連れて来い！一番影響受けちゃいけない奴が影響受けてんぞ！！！！」



「映画館では静かになんだよ。当麻」

「静かにつて…俺たち以外誰もいねえじゃねえか」

当麻は改めて映画館を見渡した。確かに暗くなった映画館の中には誰もおらず、映画館の経営状況の深刻さが窺える。

「でも、あんまり騒がないでよ。私トイレ我慢してるんだから」

「行って来いよそれくらい」

「やだよ！言ってる最中に大事なところが終わったらどうすんの」

「……じゃあ聞くけどよ…映画の中で、大事じゃないシーンつて…

……あるのか？」

「何その微妙に深いセリフ」

「行って来いよ。俺が見てやるから後で教えてやる」

「む…絶対だよ！」

そう言うとサッと立ち上がりインデックスは映画館を出て行った。残された当麻は、インデックスとの約束通り映画を見続けた。

二人の見ている映画、カナミンの10周年大作というのは、特別珍しくもない普通の子供向けアニメ映画であるが所々によく分からない設定が組み込まれ、普通と言うには若干の戸惑いが生じた。

「こんな映画…見に来る奴の気が知れねえな」

当麻が呟くと後ろの方にある扉が開いて誰かが入って来た。

インデックスの可能性もあるが、それにしても早すぎるので別人であるのは明らかであった。

「なあそう思うだろ？」

当麻は顔も見えないインデックスでない人物に話しかける。

話をかけられた人物は迷うことなく当麻の横に座った。

「久しぶりだな……土御門」

「簡単に呼びだされても困るんだがな」

不機嫌そうな顔で当麻の横に座ったのは、かつての友であり、クラスメイトであり、学園都市を陰で支える部隊『グループ』の実質リーダーでもあった土御門元春。今の学園都市の軍の最高責任者でもある人物だ。

「たくつ！映画見に来るのも一苦労だ」

「大変そうだなお前も」

「誰のせいでこんな地位にいると思ってる!？」

「さあな……」

土御門の苛立った声を気にせず当麻はポップコーンを食べた。した。

「この前の一件。お前が絡んでんのは分かってるだぞ。ワザワザ結標まで使って」

「あいつがやりたいって言ったんだよ」

「……!？それは初耳だ。どういうことだ？」

「雨水連司って奴知ってるか？」

「ああ、水流使いの大能力者だろ」

「最初は乗り気じゃなかったんだけど……あいつの写真見せたら、怪我するだろう雨水を1週間家で匿わせてくれるなら、タダでやってくれるって言ったんだ」

「お前：それで？」

「頼んだ」

「何してんの〜!？」

土御門は自身でもびっくりするくらいの裏返った声で叫んだ。

「いいじゃねえか…ほんのちよっと早く大人になるだけだ」

「それがまずいんだろ!!」

「まあ冷静に考えてみる……年上の女に襲われるなんてさ…男のロマンだろ？」

「お前の物差しで測るな!!もう連司君のトラウマ決定だぞ!!」

「大丈夫だって1週間なんてあっという間さ」

「ああ…犯罪者がまさかの被害者になるってどういことだよ」

土御門は頭を抱え蹲るように座ったが、直ぐに話題を戻し椅子の背もたれに凭れかかった。

「何にせよ。お前が関わったのは、ばれてんぞ……お前に手を出すような事はないだろうが、やり過ぎれば奴らも黙ってないぞ」

「ああ…そりゃ怖い」

全然怖がった様子のない当麻に土御門はただただ呆れていた。

「はあ……なあカミヤん戻ってこいよ。お前なら皆大歓迎だぞ。俺じゃあまり人徳がないからな……舞夏の奴にも全然会えなくなったし」

「世界中を駆け回ってたスパイでも、今となつちゃ妹にまともには会えない哀れな男になり下がったか」

「あの頃とは時代が違っただよ!!」

イラついたように土御門は当麻の持っていたポップコーンを奪い、ムシヤムシヤと頬張り始めた。

「今は友とか仲間とか家族の為じゃなく、国とか政治家とかそーい

うくだらないモノのしがらみの中で生きていかなきゃいけないんだよー！」

「……………俺はいつだってやりたいようにやるだけさ」

「言つたろ…あの頃とは時代が違うんだ。俺達も大人になって力と地位も手に入れた…ずっとあの頃みたいに純粹ではいらねえんだよ…」

「……………ほんと……………最近よく思うんだ。あの頃が懐かしいってな」

「ああ…俺もだ」

二人は暫し口を閉じ、会話をしないでいると唯一の音の発信源である映画のスピーカから主人公のカナミン、正確には声優の可愛らしい声が映画館を包んだ。

『私は絶対に負けない！私には皆がついているから！！皆と繋がってるこの思いが…私の力よ！！』

今となつては珍しくもないアニメの台詞であろうが、土御門や当麻にとつてはあまりにも純粹無垢で途轍もなく綺麗な言葉に聞こえた。

「良い映画だな…」

「……………ああ」

「あんまり派手に動くなよ。やりすぎると佐天や初春。御坂にだって迷惑が掛かるぞ」

「……………それぐらい理解してる」

それを聞くと土御門は黙って立ち上がり出口へと向かう。

その途中、土御門は一旦立ち止まり、当麻の顔を見ず呟く。

「じゃあな…戦友」

また一人になった当麻はただ黙って映画を見ていた。  
そこに、

「ふう〜！当麻！どうなったの？」

トイレに行ったインデックスが慌てて席に戻り、当麻に尋ねた。

「ああ…悪い。ちゃんと見てなかった」

「え〜！何それ!？」

当麻の返事に頬を膨らませ、あからさまに怒ったような態度をとるインデックスに当麻は映画を見ながらこの後の予定を言った。

「なあ…この映画さ…結構気に入ったから、もう一回見ようぜ」

## 映画（後書き）

以上です！

ギャグは書きやすくいいね〜

ちなみにこのシーンの一部はとある超有名映画のワンシーンからとってます。

試しに何か当ててみてね！！

と、まあ〜とりあえず長かった新人達編はここで終わりです。

まあ正直言つてこの回は他のキャラを出すために無理やりつくたんで途中からグダグダになってる感じもしましたが、

ちゃんと最後に大人になった禁書キャラを描けたんで良かったです！！

次回からは暫くはギャグ回。といっても今回もギャグ回みたいなものですが（笑）

## 特別編（前書き）

お久しぶりです。

タイトルの通りの特別編です。

えっ？何の特別編かって？

そりゃもちろんあれです。

ついでに言うておくと、本編とはまったく関係ないので  
いやだなと思った人は見ないで下さい。

また本編に出ている意見は掲示板によるものです。

そんなこんなでいきます！





…という訳で』とある魔術の禁書目録?』DVD第4巻みんな買ってね」

土御門「先生、無理やり番宣しないでください」

当麻「ばかこれから重要なんだ…いいか、大体世の中は3で失敗するようになってるんだ。調子に乗るのは2まで」これは俺の敬愛する銀パチ先生が言った言葉だ。メモっとくように」

姫神「先生、じゃ」とある?」はやんなくていいんですか?」

当麻「ああ必要ない」

姫神「断言するんですか…」

当麻「バカ野郎…いいか2までだったらスタッフとかも次につなげよう、次につなげようってがんばれるんだが3になんてやってみる、どうせスタッフ達が調子に乗って手エ抜いて作るようになるんだ…「ゼロの使い」見てみる1、2結構面白かったぜ…2の最後で才〇が敵の軍勢に向かっていくところ、俺アレ泣いたけど、よく売れもんだから3になった途端、複線ばっかはって「どうせ4やるからこれでいいだろ」っていう手抜きが見え見えだったじゃねえか。案の定それで訳分かんないまま終わらせちゃったもんだからDVD全然売れなくて…結局4につながらないっていうか、4の制作の話が出てこないじゃないか」

姫神「先生…リアルです…」

当麻「え、つまり先生言いたい事は調子にのるのは2期までという事、たらたら3なんてやらなくていいってことだ!」

青髪「でも先生！けい ん！は2期よりも1期の方が好きです！なぜですか！？」

当麻「それはOPの違いだ：第一期のOP、あれマジでよかったから可愛さ満点だったから：それで、すげー売れた事をした制作側が「けい んの曲なら、なんでも売れるだろ：なんたってけい んだけ：」みたいな空気がヒシヒシと伝わってきたんだよ：でもあれOPは微妙かもしれないけどアニメ本編は変わってないから：だからOPを飛ばして本篇から見るように：それとこれは、NEP I E C EのとあるOPにも同じことが言えます：つまりヘキサ：あれっ？違うか：え〜っとペンタゴン？

まあいいや、そいつら歌ってた時のOPは飛ばして本編から見るとに

フィアンマ「先生！！ちょっと待って下さい！！せつかく2期も大好評で終わって、これから3期に向けて頑張ろうって時にそんな意気込みでどうするんですか！？ここはこのまま4期どころか5期だつてやる！そのくらいの意気込みで行かないと駄目なんじゃないんですか！？」

当麻「はいフィアンマ君：いくら2期で自分が登場しなかったからつて必死にならない」

フィアンマ「べっ！別に必死になってねえし！！」

当麻「別にさ〜3期やりたかったらやってもいいけどさ：そうなたら損するのお前だぜ」

フィアンマ「どっどっいことですか！？」

当麻「いや〜よくネットであるじゃん？このキャラに声あてるとしたら誰がやるか？みたいの

とある掲示板でのお前の第一候補誰か知ってるか？宮野君だぜ」

フィアンマ「何がいけないんですか！？最高じゃないですか宮野君！

当麻「いや、もちろん宮野君は良い声優だよ。だけどよりもよつてお前の声なんてな〜」

フィアンマ「なんですか！？」

当麻「だってさ…お前の声なんてやったら宮野君に迷惑だろ？」

フィアンマ「なんでだあ！！何でいけないんだ！？俺は神の右席最強の男だぞ…！！」

当麻「はい。もうそれがダメ…もうその俺様キャラが宮野君の株を下げる」

フィアンマ「俺のキャラ全否定！？」

当麻「ただでさえさ〜俺がガンダムだ」とか「計画通り」とか「俺がウルトラマンだ」とかネタにされてんのにさ」

フィアンマ「最後の直接本人言っていないからね…！！」

当麻「これ以上、宮野君にお前みたいな奴のキャラやらせてみる…最早ネタどころか負の遺産だよ」

フィアンマ「なら、神谷君はどうですか!？」

当麻「神谷さんは、小説のような台詞口調でその力をいかせるんだ。お前にはそれが無い」

フィアンマ「じゃあ櫻井さんは!？あの声!俺のような役にもピッタシだろ!！」

当麻「櫻井さんは、俺とお前が絡んだ時に腐女子達が喜ぶからダメだ」

フィアンマ「……………雁字搦めじゃねえか!！」

????「まあまあ、そんなに怒らないでフィアンマ」

フィアンマ「はっ!！この素敵ボイスは!？」

テッラ「別にいいじゃないですか。出番がなかったくらい」

フィアンマ「うるせえ!！テメエだって直接出てないだろう!！」

テッラ「そうですね、私なんて、宣伝PVに少し出されて、声を当てる方があの大物声優『大塚芳忠』さんってくらいの出番しかなかったですからね」

フィアンマ「ぐっ!！」

テッラ「ホント、ヴェントさんにアックアさんはいいですよね、本編に出されて…私なんてホ・ン・ペ・ンには声だけで、P・Vにはワンシーンしか出番がなかったですからね、フィアンマさんの気持

ちもってあれ？……フィアンマさんってP.V.に出てましたっけ？」

フィアンマ「このー！」

アックア「止めるフィアンマ。殴ったら負けである」

フィアンマ「うるせえ！出番がある奴が俺に触るなー！」

ヴェント「止めないさいよ……だいの男が」

フィアンマ「うるせえ！お前なんか俺の気持ちがわかるかー！」

ヴェント「分かんないわよ……あんたみたいに出番ない訳じゃないし」

フィアンマ「てめえ三期になったら覚えてろー！その舌の十字架と顔のピアス全部引っこ抜いて平凡なキャラにしてやるからなー！」

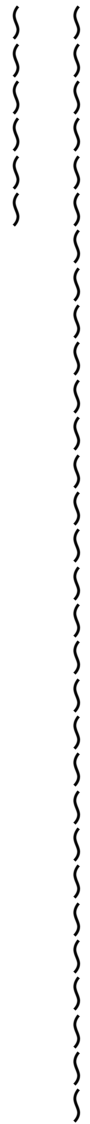
ヴェント「あら、別にいいわよ。知らないの？私ってピアス取ったら結構美人なのよ」

フィアンマ「このおー！」

アックア「落ち着くであるフィアンマー！先生止めてくださいー！」

当麻「えーつまりだ、この制度が国民に及ぼす影響は……」

アックア「先生！いつそんな話になったんですか！？」



キンコーンカーンコーン

当麻「では今日の授業はここままで…ちゃんと復習しとけよ」

一同「はい」

一方通行「……………転校しよ」

## 特別編（後書き）

すいませんでした!!!

と第一声にすぐ謝ってみます。

元ネタはもちろん銀パ〇先生です。

前々からやってみたいと思ってました。

最近スランプ気味なので、たまにはこういうのもいいかもと思います。

それと、何度も言いますが、ここに書かれている意見は

様々な掲示板を寄せ集めて書いたネタです。

あくまで、様々な個人の意見ですので、私を責めないで下さい。

まあ書いたのは自分なのですが…

ああでもワンピース〇のくだりは本心です。

まあ、また気が向いたら、こういったものをまた書こうと思います。

それでは今回はこれで

## 和訳（前書き）

どーもです。

久しぶりにギャグ回です。

特に珍しくもない短編ギャグ回です。  
よろしければどうぞ。



## 和訳

平穏な日々に戻ったとある日の事。

上条当麻は頭を抱えて家に帰宅していた。頭を抱えている理由は、何かに悩んでいるといった理由ではない。単純に飲み過ぎて頭痛が襲っていたのだ。

「あゝ気持ちわりゝ飲みすぎたかなゝ」

ほぼ一晩かけて呑み続けた当麻の頭は、酒飲みの者なら一度は経験した事があるであろう頭痛に襲われていた。

「ただいまゝっと、インデックスゝ佐天に迷惑掛けなかつたかゝ？」

たまには一人でノビノビ呑みたいと思った当麻はインデックスを佐天に任せて出かけたのだった。

だが、いつもならすぐに玄関にやってくるインデックスは今日は見る影もなかった。

「あれ？寝てんのか」

疑問に思いつつ、当麻が玄関に繋がる廊下を歩いて、その先にある部屋のドアを開けた。

「あっ！当麻さん」

声のする方を見ると、そこには佐天とインデックスがソファに座らず、床に直接腰を下ろしていた。

「何だ佐天。来てたのか？」

「ねえ〜とうま〜スフィンクスのおかしいんだよ」

そう言われ、当麻が座っている二人の前をある物を見ると、そこには当麻とインデックスの飼猫であるスフィンクスが寝転がっていた。ただ寝転がっているだけなら普通の昼寝なのだろうが、スフィンクスは佐天やインデックスに揺すられてもまったく起き上がりずに寝ていた。

「何か体調悪そうで、ご飯も全然食べないんだよ」

「ダイエイトでもしてんじやねえのか？」

「いや、猫ですよ」

「最近の猫は分かんねえぞ。特に発情期なのはメスと一発決め込もうと躍起になってるからな」

「いや…そういうもんだいじゃ…」

当麻の台詞に佐天が戸惑っているなか、インデックスは只管スフィンクスを心配するように話しかけていた。

「スフィンクス〜大丈夫〜？」

心配そうなインデックスを見ながら、当麻はふうーと溜息をつく。ポケットに手を伸ばした。

「しかたないな〜じゃあこれを使おう（だみ声）」

そう言つて当麻がポケットから出した物は、何やら猫を模つた様な猫耳にトラの様な縞模様で黄色と茶色で彩られた機械だった。

「猫語翻訳機『ニヤンじゃこりゃ〜』（だみ声）！！」

「『ニヤンじゃこりゃ〜』?」

「何ですかその珍妙な名前の機械?」

「これはね〜猫の声を人の言葉に翻訳する機械なんだ〜（だみ声）」

「すご〜い!どうしたんですか、それ!?」

「昨日居酒屋で隣に座つたおっちゃんが枝豆と交換してくれたんだ

〜（だみ声）」

「それホントに大丈夫なんですか!?」

「まあなんだ。モノは試しだ」

そう言つと当麻は屈み、機械に付いているマイクの様な部分をスフィンクスの口元に近づけた。

「ほれスフィンクス。どうしたんだ?」

「……………」

「なんか言え!」

当麻は軽くスフィンクスの顔をパシッと叩く。  
すると

「ニャー!!!」

爪を立てたスフィンクスの右足が当麻の顔面と縦に走り、赤い線を残した。

「ぎゃあああああ!!!」



『お前二期になったら一気に出番減ったな（^| ^）』

ガシッ！と機械を激しく握ったインデックスはそれをスフィックス目掛け投げようと凄まじい勢いで振りかぶった。

「こんのオオオオオ！！！！」

「落ち着いてインデックスちゃん！！私なんて密かに出してもらったOPにさえ出して貰えなくなっただよ！！」

~~~~~

暴れるインデックスを何とか抑え込み、今度は佐天が翻訳機を持った。

「結局のところ！スフィックスの世話を一番してるのは私なんですよー」

と飼い主であるインデックスのように自信満々に佐天は述べた。確かに、家を度々留守にする当麻や腹が減れば猫の餌まで食おうとするインデックスよりはまともに世話をしている様に思える。

「さあスフィックスはどうしたの？」

「ニャー」

『ピポパッ』

『今まで見て来た君というキャラについて意見させて貰う。最初はただのモブキャラでありながらアニメでここまで人気が出たのは素晴らしいと思う。だが、正直なところの君のキャラはやはり弱い。無能力者という立場の中で敵に立ち向かっていくその姿勢は主人公である当麻を彷彿とさせるが、結局は御坂や白井といった別キャラをカッコよくするための出汁に使われてお終いだ。実際に戦いの場面になっても『当麻』の様な人を動かす説教も人を熱くさせる『浜面』の様な戦いも『御坂』や『一方通行』の様な凄まじいバトルをする訳でもないのであまりにも君は地味に見えてしまう。となると君は戦闘キアラ要員で生き残る事は出来ない。そうなると生き残る最後の手段であるお色気シーン担当いうのもあるが、それもどうだろうか：君は初春のスカートを捲るという事で初春を可愛く、かつお色気要員へと格上げしてしまっている。現に君と言えば初春のパンツを見せてくれる。というイメージが定着しすぎている。それでは君に対するサービスの期待が薄れてしまう。それでは、せっかくスタイルは4人の中でも一番いいのに、見せる機会もかなり減ってしまうので宝の持ち腐れだ。つまり君はお色気要員でも十分生き残れる素質を持っているのにそれを自らの手でつぶしてしまっているということだ。哀れな奴だ』

小さな画面に敷き詰められた小さな文字を必死に読み切った後、佐天は一先ず画面に近づけていた目を離し

「クロオオオ！！こいつ黒ちよつとしかなくせに腹ん中めっちゃ黒いけど！！てゆーか！「ニヤー」の一言にどれだけ意味込められてんの！？」

「やっぱこの機械壊れてるんだよ！！スフィックスがこんなこと思うはずないんだよ！！」

「ああーおかしいな…やっぱあのおっちゃんに騙されたのかなー」

3人が精神的に攻撃され（1名肉体的に）てそこそこ凹んでいると、

「ニヤー」

『ピポパッ』

『まあどうせ当麻君は』とある『の三期では当たり前の主役だし、  
『レールガン』の二期では途中から御坂と主役交代みたいなものだから出番には困らないよね』

その訳を見た途端、佐天とインデックスの目がギロリと嫌な光を放った。

「と〜う〜ま〜」

「当麻さ〜ん」

「えっ！？ちよつとなにその感じ！？おい！二人共落ち着け！！これは罠だ！！冷静になれ！！！」

当麻の制止も振り切り、二人が当麻に襲いかかって来た。

「「うるせえええ！出番をよこせえええ！！」」

「なんか話変わってる！！？ていうか最近こんな話多くない！？」

（因みにそのあとペット病院に行ったら、スフィックスはただの風

邪でした)



## 和訳（後書き）

以上です。

まあこれも前々からやってみたいと思っていたギャグ回だったのでやったことに対しては後悔してません。

そして、この回の佐天さんの印象ですが、これも様々な掲示板をもとに

作ったものなので、佐天さんファンのかた…怒らないで下さい。

さて、そろそろ長編をやりたいんですが、

もうちょっとギャグを入れたいんですね…

まあ気が向いたら書きます。

## 掃除（前書き）

どうも、長編をやる前にちょっとした

少し長めの話をしようと思います。

あっ！そう言えば。第五位の名前分かったんで

第16話の御坂の台詞を少し変えました。

話に影響はないけど、一様報告しておきます。

でもみさきちかわいいよね。

そんな訳で第27話行きます。

## 掃除

「あゝ面倒くさい」

季節が夏に差しかった、とある日。  
インデックスは家の掃除をしていた。

といつても、いらなくなった本を一冊片づけては休み、片づけては休みの繰り返しなのでちゃんと掃除をしているのは、

「ほら、インデックスちゃん。だらけてないでしっかり掃除してくださいよ」

ボランティアとして駆け付けた初春飾利。ただ一人であった。

「そんなこと言わないで、ほら！佐天さんもすぐに休憩様のおかし買ってきますから」

「でもメンド臭いよ！だるいよ！当麻は掃除サボってどっか行っちゃうし…」

そう、家の主である筈の当麻は佐天に掃除を進められるや否やいつの間にかいなくなり、残されたインデックスは泣いて初春に頼み込んで掃除を手伝って貰ったのだった。

「でも、たまには掃除っていうのもいいモノですよ。こうして部屋を綺麗すると自分の気分もよくなって来る気がしませんか？」

「うわ〜！懐かしい〜去年買った本が出て来たよ！！」  
「……………そうですか」

初春のちよつといいセリフを無視し、インデックスはインデックスでこの掃除を楽しんでいた。

「わあ！見て見て！『学園都市流行語大賞』の予想本だ！」

「『学園都市流行語大賞』？ああ…あの数年前から始まった学園都市内での流行語を決めるってやつですか？」

インデックスは少しホコリをかぶって、買ってからかなりほったらかしされたであろう本をペラペラとめくりだした。

「去年もいろいろノミネートされたからねー」

「私は仕事でまったく見れなかったんですけど、結構視聴率よかつたらしいですよね？」

「私はちゃんと見たんだよ！ちなみに第10位は『とある魔術の禁書目録の第7巻ありますか？』だったよ」

「いやっ！何でそんな具体的なものがランキングしてるんですか！？」

「で第9位が『もうすぐ第2期が始まるとかで孫が欲しがってるんですけど』」

「それ完璧におばあちゃんの台詞ですよね！？孫に言われて仕方なく買いに来たおばあちゃんですよね！？」

「それで第8位が『いや、灼眼のシヤナじゃなくて…』」  
「いや！それ完璧になかったですよね！？』とある魔術の禁書目録

ないから『灼眼のシヤナ』売りつけられそうになってますよね！？  
ていうか！店員さんもおばあちゃんがよく分からないからって、なに全然違うもの買わせようとしてるんですか！？」

「でも第7位の時に宅配便が来ちゃって、7〜5位が見れなかった

んだよ。で戻ったら丁度第4位の発表で、4位が『じゃあ、それにも赤毛の子が出てるんですね?』だった」

「あれ!?おばあちゃん7〜5位の間に店員さんに流されてません!?ダメですよ!!それは赤毛は赤毛でもDS少女じゃなくてツンデレ少女の方です!」

「それで第3位が『じゃあ灼眼のシャナください』だった」

「流されちゃった!!ダメですよ!おばあちゃん!!お孫さんの為にジャンプ買いに行つて間違えて赤マルジャンプ買って帰つてメチヤクチャ怒られた教訓を忘れちゃったんですか!?!」

最早、決まっていた事のなので何を言つても無駄なのであるが、それでも初春はツツコマずにはいられなかった。そんな初春を気にもせずインデックスは本を読み続けた。

「でも第2位の時、私トイレに行つてたから見てないから知らないんだよ。だけど第一位が『嘘だけど...』だった」

「...あれ?おばあちゃん「みーくん・まーちゃん」の影響受けてません!?ダメですよ!あんなドロドロしたものお孫さんに見せちゃ!もつと大人になつてからにしないと!!ていうか!2位の間に何があつたんですか!?!」

「私も見てないから知らないんだよ...うわあ!」

懐かしいモノを見つけ気分を良くしたインデックスは他に何かないかと適当に本棚を漁っていると、その手が絶妙なバランスで積み上げられていた本達の並行感覚を刺激してしまつたらしく、本棚から何冊もの本が崩れ落ちた。

「大丈夫ですか?」

「うん...でも散らかつちやつたんだよ」

本の下敷きになったインデックスであったが幸いにも怪我もなく、立って直ぐに服に付いたホコリを掃うくらいの余裕はあるようだった。

「あれ、これ…」

インデックスは崩れた本の中から一枚の紙を取り出した。

最初はそれが何か分からない初春だったが、大きさや紙の感じからいって写真であることは想像が出来た。何の写真だろうか、と初春が横から覗きこんでみると、そこには当麻が万事屋、正確には佐天の店の扉の前で佐天の肩に手を回し、笑っている姿が写っていた。

「なに…これ？」

「佐天さんと上条さんですね…」

別に当麻が写真を持っているから珍しいという訳ではない。部屋のどこかを探せばアルバムは出てくるし、当麻やインデックス、初春の写った写真はいくらかもあるだろう。

だが、当麻と佐天二人だけの写真はかなり珍しく、ましてこのような恋人のように寄り添う写真は見た事がなかった。

「なっ！仲良さそうですね」

「でも、この感じ…なんだかただの友達との写真って感じじゃないんだよ…」

初春は写真を見て、あえて一番最初に思った事は口にしなかったが、その努力はインデックスの一言で無に帰った。回りくどくしても無駄だと悟った初春は、インデックスのように思った事を口にすることをした。

「もしかして……二人は昔付き合ってたとか」

「まつまさか！……でも私が学園都市に戻ってくるまでとつまはこころで一人で万事屋やってたから」

「それに考えてみれば、何で佐天さんの所で上条さん万事屋やってるか聞いたことありませんし……」

人というのは不思議なモノで、たった一つでも不審な事があればどんどんと物事を悪い方へと考えてしまう。例えそれが、好意を抱く相手であつてもだ。

「つまりとつまは……あれってこと？昔付き合つた女の家に住まわして貰ってるってこと」

「そういう感じですかね……」

自分達の考えを言いあつた後の初春とインデックスが次に取つた行動は実に単純。

元に戻して見なかつた事にする。

悪い言い方をすれば現実逃避である。

「隠しましょう！今すぐ隠しましょう！！」

「賛成！こんなもの見たことが知れたら絶対これからの二人との接し方が気まづくなるんだよ！！」

二人は直ぐに崩れ落ちた本を元に戻し、写真を元の場所に隠す作戦に出た。

だがしかし、世の中というものは、

「お〜い！遅くなつてごめんね〜」

都合が悪くできているものである。

「はっ！帰ってきちゃいました！！」

「早く隠すんだよ！！」

二人は急かされる様に本を元に戻し始めるのだが、  
こういう時に限って人は冷静になれず的確な行動に移せない。

「ちゃんと掃除進んでる？」

「ああ！！待って下さい佐天さん！！」

初春の制止も聞かず、佐天は奥の部屋のドアをガチャリと開ける。

「うわっ！かざり！押さないで！！」

そして案の定、慌てたインデックスの手から本が落ちると一緒に写真もスルリと滑り落ち。

案の定、その写真は佐天の足元に落ちた。

写真に気付いた佐天は、何これ？と言いながら写真を手に取った。

これから、佐天と気まずい生活の始まりだと覚悟した二人であったが、

「うわっ！懐かしい！どこにあったの！？」

佐天から出た言葉は二人の思ったモノとは違った。

「えっと…この本棚の後ろに」

「ああ…そんなところに置いといたんだ。当麻さんらしいけど」

以外にも、佐天の反応は軽いモノだった。

別に何か疾しいものでない事を悟った初春は、心の中で安堵の息を



漏らしながら話しかける。

「あの…佐天さん…それ一体何ですか？」

「これ？当麻さんがイマジンブレイカー万事屋開いた頃の写真よ。懐かしいな…」

「とうまが？」

「このお店を？」

なるほど、その記念写真かと納得したのだが、初春は直ぐに新たな疑問が生まれた。

「あれ？でも何で佐天さんが一緒なんですか？佐天さんの家を借してるとはいえ…二人は以前から知り合いだったんですか？」

初春の質問に佐天は写真から目を放し、二人の方に視線を移しながら答える。

「あれ…言っただけじゃなかったっけ？当麻さんのお客第一号は私だって」

## 掃除（後書き）

以上です。これの話はあと3、4話ぐらいやります。  
それが終わったら、完全にオリジナルの話をやります。  
まあ、所々にネタや他の話のアイデアは貰っていますが、  
では、今日はこの辺で。

## 出会（前書き）

色々小説ないでの場所について考えると、

その学区は前こういう設定で使っていたとかいろいろが

結構あって、また一から設定を考え直すので、かなりメンドイ。

本当の小説家でも、そういうことあるのかな？

とマルコはコミックスの最初に書いてある作者みたいなこと  
いって  
みます。

なんつって…そんなこんなで28話行きます。

## 出会

五年前のとある日。

佐天涙子は第七学区の風紀委員八三支部を訪れていた。訪れた理由は単純。友人の初春飾利がその支部に勤めていたのだ。支部に着くなり、佐天は風紀委員の待機している部屋の扉に手を伸ばす。

普通なら風紀委員でもない佐天が部屋に入るのには不可能だが、初春が八三支部を異動した後も佐天は第一七七支部のようにこまめに通い続けた為、ここ八三支部でも前の支部同様に入室のチェックを受けなくても良くなっていた。佐天は、普通なら指紋、静脈などといったチェックをしなければ開かないドアを簡単に開けて中に入った。

「おっす！久しぶり〜！」

「あっ！佐天さんじゃないですか！お久しぶりです」

佐天に声をかけたのは、何度も訪れる内に知り合いになった初春の後輩の少女だった。初春の後輩ということは佐天よりも年下でもあるので、佐天は何の気なしに普通の挨拶を返した後、部屋を見渡し初春を探す。だがその部屋には、彼女のお目当ての人はいなかった。

「あれ〜？初春は？」

「初春さんはいませんよ。もうすぐ試験ですから」

「あつそうか！もうすぐ第一支部の情報対策部の採用試験か」  
「ええ…合格すれば、エリートチームの仲間入りです」

風紀委員の支部は学園都市内全てを合わせると数百にも上る。  
名前として扱われる数字は基本的にその支部が出来た順であり、どこに配属されても特別意味はない。

だが第一支部だけは別である。第一支部だけは風紀委員長からの推薦や統括理事会からの推薦があつた時のみに採用試験を受ける事が出来る。つまりは第一支部で働く者は俗に言うエリートと言われるものである。

「そっか…なんか遠くに行った感じがしちゃうな…」

「そうですね…………… ああ！そつえば初春さんはいないけど白井風紀委員長がお見えになつていますが…」

「えっ！？白井さんが！？」

「ええ…確かお知り合いでしたよね？」

「うん。戦争の間は、まったく連絡が取れなかつたけど…でも、どうしてこんな支部とくろに？」

「さあ…なんでも知り合いが捕まつたらしくて」

「知り合いが…捕まつた？」

「はい。まあ捕まつたと言つてもタクシーの料金が足りなかつたらしくて、ちよつと騒動になつたつてだけなんですけど」

「白井さんが代わりに払いに來たつてこと？」

「來たつて言うよりは通りがかつたらしいんですが、まあもう2、30分ほど話しているので、もう終わつてるんじゃないんですか？」

「そっか、じゃあちよつと挨拶して來ようかな」

「支部長室にいますよ」

後輩の少女に適当に挨拶をした後、佐天は部屋を出て早速、支部長室に向かった。

部屋の前に来ると昔の様にノックもなしにドアノブに手を伸ばす。

「白井さん！久しぶり〜！！」

元気よく扉を開けた佐天の耳に最初に入ってきたのは、

「ですからあああ！！！！」

怒りに満ちた白井の声だった。

「何でたったの83円しかないのにタクシーに乗るんですの!？」

「仕方ねえだろ！そういう流れだったんだから！！」

その後聞こえてきたのは佐天には聞き覚えのない男の声だった。

「そういう流れってなんですか!？」

「言っとくけど俺の所為じゃないからな！！御坂の奴がいるからなんかタクシーに乗る雰囲気になったんだよ！！」

彼女のよく知る白井とは随分とイメージが違う怒鳴り声に佐天は戸惑ったが、白井とその口論相手はまだ佐天に気付いていないようだった。

「とにかく！立て替えた分は払って貰いますわよ！！」

「ジャッジメント風紀委員長なら散々稼いでるんだろ!？タクシー代くらい奢れ！！」

「お断りしますわ！何故私があたなにタダでタクシー代を奢らないといけないのですか!？」

「ああ！あれだ！この前DVDデッキ直してやったろ!？」

「そんなんで返せる訳ないでありますよ!？大体直したって言う」

てたあれ、また壊れてしまいましたの！！おかげでこの前の『とある科学の超電磁砲』第13話撮り損ねましたの！！」

「良かったじゃねえか！お前最後のあれただの羞恥プレイだからな！俺が御坂だったらとっくに自殺してるよ！！きつと御坂も喜んでる！！」

「私の幸せはああああ！？」

この雰囲気はどことなく白井らしい感じがする。そう思った佐天の心からは少しばかり不安が消えていた。

「とにかく！タクシー代の5600円分しっかり働いて貰いますからね！」

そこまで言うと、白井は男から目を放し、扉の前で茫然と立ちすくむ佐天の姿を見た。

「あら…佐天さん！お久しぶりですわね！！」

「あっはい…白井さん元気そうで良かったです」

佐天は普通に話しかけていいか迷ったが、白井の方は気にせず佐天に話しかける。

「あの…後にしましょうか？」

「いえいえ！御気になさらず！ちよつとした野蛮なサルをとっちめていただけですから！！」

白井は昔の様に佐天に笑顔を見せた。

男の方かというと、少し気がそがれたといった感じに顔をしかめ、置かれていたソファアに座りこんだ。

「けど、ちょっとお待ちください。すぐに終わらせますから……」  
「らああ！返すあてはちゃんとありますのよね！！？」

また鬼のような形相で男の方を向く。

それと対照的に男の方は、相手をバカにするかのような笑顔を受け  
べる。

「はっはっ！！残念だったな！俺に返す当てなんてねえよ！ざまあ  
みやがれ！！」

「あなた鏡見てみなさい！ざまあみやがれそのモノの姿が写ってい  
ますわよ！！」

白井はどうしたものかと顔を悩ませていたが、佐天を見るなり何か  
を閃いたような顔をした。

「佐天さん…お願いがあるのですが」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「つまり、こいつんとこで働けばいいってことか」

「ええ一カ月千円として、取りあえず五カ月働けば許しましょう」

「白井…お前労働基準法って言葉知ってるか？」



「利息という言葉なら知っていますわ」

白井のお願いというのは簡単なことであった。

佐天の店でこの文無し男を雇って金を返金させろというものだ。

「で、お前の店はどこにあるんだ？」

「あつはい…第一九学区です」

「一九学区！？なんであんなすたれた学区に？」

第一九学区。

学園都市の学区であり、再開発に失敗し急速に寂れてしまった学区である。

五年前に比べれば幾分かまともな街になっているが、それでも他の学区に比べれば科学技術の遅れは否めない。もしかすると、『外』の街よりも随分と寂しい街かもしれない。その分、物価が安いので土地を買う者もいくらかはいるが、未だに崩れた廃墟や空の倉庫が残っている無法地帯である。

「いや、私の店って言うか…学校の先輩が昔使ってた建物で先輩が結婚するからって、そこで働いてた私にくれたんです。前から自分の店を持ってみたいって思ってたから」

「つーかあそこじゃ客なんて来ないだろ？」

「いや…一九学区っていつてもほとんど他の学区と一九学区の間みたいなものだから」

「……はあ、こりゃ従業員っていうより用心棒だな…」

先ほど述べた様に一様はまとな街にはなっているが、特別な学校も施設、研究所がない一九学区ではここを訪れる者はいない。その日の内にその学区で見かけた人〃そこに住んでいる人。

その様なレッテルまで貼られているくらいだ。その為、そこを訪れ

るものは決まってロクでもない連中である。

「という訳でお願いしますわね。佐天さん」

「ええ…まあ私も従業員の一人は欲しいって思ってたし場所が場所だけに用心棒も欲しいと思ってましたけど」

佐天は改めて白井と喧嘩をしていた男の方を見る。

見た目、容姿といったものは極めて普通で体系も一般人の平均程であり、特に珍しいところもないので、佐天が男に用心棒としての役割に不安を感じたのは仕方のない事だろう。

「大丈夫なんですか？あの人で…」

「大丈夫ですわ…腕の方は私が保証しますわ」

「まあ白井さんがそう言うなら別にかまいませんけど…でも珍しいですね。白井さんが男性の世話を焼くなんて」

「…ええまあ…それなりに、カリと恩がございましてね……………では、私はこれで」

それだけ言うと白井はそのまま『空間移動』でどこかへと行ってしまった。

残された佐天はとりあえず男と向かい合う。そして、

「自己紹介がまだでしたね。私は佐天。佐天涙子」

「ああ俺は上条だ。上条当麻」

佐天に上条。

これが二人の最初の出会いだった。



## 出会（後書き）

以上です。

まあとりあえず補足しておく、今の万事屋と喫茶点があるのは第7学区です。

他にも矛盾がいっぱいあるかもしれませんが、出来るだけ深く突っ込まないで

あまりに厳しく突っ込まれると…泣きたくなるので…（笑）  
では、今回はこの辺でまたその内に。

## 特別編（前書き）

前々から書こうと思っていたのですが、  
気晴らしに書いたら書き終えたので、  
載せます。

内容はタイトル通り当麻先生です。



超電磁少女Daysをフル演奏するだけで許してくれるそうだ」

ステイル「先生！そんなことされたら僕達一生レベル5になんてなれません！ここは谷山紀章さんの名曲under the cryにしてください！」

当麻「よくし分かった阿部敦さんの名曲ゼロからの逆襲と幻想、もしくはそれに等しいものにしよう」

神裂「先生！無理矢理変えなくてください！ここは伊藤静さんの名曲salvia farinaceaにしてください！」

当麻「は？仕方ない！じゃあ取りあえずキャラソン持つてる奴ら集まれ！くじで当たった奴の曲にしよう」

くじ終了。

当麻「はい。では、くじの結果は姫神の終焉はどちらに決定した」

一同「え〜！」

姫神「何この遠足行き先が良くなかった時の小学生みたいなリアクション」

当麻「は？いい！みんな文句言つな！姫神だって一生懸命歌ったんだから」

土御門「でも、先生！！禁書？のキャラソンって結構前だからどんな曲だったか覚えてませ〜ん」

当麻「しょうがねえな…じゃあ俺が吹いてやるから笛貸せ」

土御門「嫌で〜す吐き気がしま〜す」

当麻「こっちもゴメンだ…という訳で女子誰か貸してくれ〜」

五和「でっ！では！私のを！！」

御坂妹「いえっ！ここは私をとつとミサカ自分の笛を取りだしながら呟きます！」

神裂「いえいえ！ここは私が！！」

オルソラ「では間をとつて私が」

海原「まあまあ！女性陣の皆さん。これでは先生も困るでしょう？仕方ない、先生…ここは我慢して私の笛を使って下さい。大丈夫です私は気にしません。笛二つ持っているんで」

当麻「なんで笛2つも持つてんだ？」

海原「えっ？」

御坂「……………（二二）」

当麻「お〜い！みんな手伝え〜」



一同「は〜い！」

海原「えっ！ちょっと待って下さい！本当にやるんですか！？ちょっとホントに待って！……！」

当麻「ほらズボン下ろせ〜」

海原「先生！！ホントにちょっと待って！！心の準備を！！！！」

ズボツ！

海原「ぎゃあああああ！！！！はっ！！はっ！！はなてえええ　！！！！  
るにいいいい　！！！！きざんだああ　！！！！」

一方通行「先生……気分悪いんで保健室行ってきます」

## 特別編（後書き）

以上です。

海原ファンの皆さんすいません。

こういうのも結構息抜きになって書くの楽しいです。  
次回は本編を載せるので今回はこちら辺で…

## 初日（前書き）

ども、出来たので載せます。

若干進みが早いかもしれませんが

次の話にも進みたいので、ペースは早めに行きます。  
では題30話いきま〜す

## 初日

「へー場所のわりに結構立派な店だな」

店に入るなり、褒めているのか褒めていないのか分からない事を言ったのは上条当麻。

本日から、この店での従業員兼居候である。

「ははっ…ありがとうございます」

現、店の亭主佐天はというと若干の戸惑い笑顔を浮かべながら返事を返していた。

「店を閉めれば私は寮に帰るんで、どうぞ適当に寝床として使ってください」

「寮？お前まだ学生か？」

「はい…大学生です。将来のことはまだ考えてないんですけど…できれば、自分でちゃんと店を買おうと思って」

「へーならそれなりに儲けなきゃいけないんだろっが…」

当麻一度店の扉を開け、人がまったく通らない外の道を見た。

「……客なんて来んのか？こんな学区に」

失礼な質問だが、とりあえず当麻は思った通りの事を言った。

「おさつしの通り…お客といっても他の学区から来る人はあまりいなくて常連さんはこの学区に住んでる人達ばかりで…」

「ハツキリ言うけど、とても店がうまくいくとは思えないんだけど」  
「ええまあその通りで、一番店の収入源となっているのは、夜に始まる居酒屋です」

「ほー酒を出すのか…あれ？でも白井と同じ年代なら未成年だろ？酒を出していいの？」

「勿論ダメですよ。今は出してません。昔は先輩がやっていんですけど、先輩はもう結婚するんで都市から出て行くんです。」

だから私はそれを譲って貰ったんです。けど私はお酒を扱えないから、今はただの喫茶店です」

「なるほど、取りあえず犯罪者じゃないみたいで安心した。もしお前が違法したら、風紀委員長の友達に犯罪者！って白井が知り合ただけに笑えない状況に出くわした事になったからな」

「確かにそれは笑えないですね…でも、別にお酒目的じゃない普通に通ってくれる常連さんもいるんですよ」

適当な世間話をした後、店の準備をする為に佐天が掃除をし始めたので、取りあえず当麻も台拭きを受け取ってテーブル拭いていると、開店時間はまだだというのに店の扉を開いた。

「すみません…佐天さんいますか？」

「ヨシちゃん！久しぶり！！」

「いらっしやいませ。本日はどう言ったメニューを御望みで？」

お客様第一号のため気合いが入っていたのか、当麻はお客が入ってくるなり席にも付かせないまま注文を聞き出した。

「いやっ…あの…」  
「当麻さん。そんないきなり問い詰めないで」

~~~~~  
~~~~~

ヨシちゃんと呼ばれた少女は吉江というらしく、佐天が前通っていた高校の後輩で、この喫茶店の常連であった。

「ごめんね。驚かせちゃって…この人は上条さん。今日からここで働く事になったの」

「ああ…そうだったんですか」

「でっ、今日はどうしたの？また、例の彼氏のこと？」

「はい…」

「彼氏？」

彼女の事情を知らない当麻が二人の会話に割って入った。

「強能力者の彼氏がいるんです」

「ほ…強能力者か…だったら中々頼もしい彼だな」

「はい…彼はよく街で絡まれる私を助けてくれたんです…最初の内は」

「最初の内？」

最後の言葉に引つ掛かる当麻に佐天が吉江に代わって説明しだした。

「この子の彼氏ってのがロクでもない奴なんですよ。最初は彼女の守ってくれる頼りがいのある彼だったんですけど、最近ではその事をネタに彼女にお金を要求してきたんです」

「はあ〜まったく男の風上にも置けんな」

当麻は呆れた様なトーンで喋ったが、知り合いにタクシー代を奢って貰い、

更には見ず知らずの者に住む所と仕事を提供されている今の当麻が言々と説得力がないなと佐天は思ったが口には出さず黙っている事にした。

三人が暫し沈黙していると、そこに

「おい！佐天さんよー！吉江の奴来てねえか！！？」

店の扉をドンドンと叩き、男が訪ねて来た。

顔こそ見えなかったが、口にする言葉だけで当麻は声の主が話題の彼氏であることが窺えた。

「さっ 佐天さん！」

「適当にごまかすから、ヨシちゃんは裏口から逃げて」

「はっはいー！」

そう言って吉江を裏口まで誘導すると、佐天はカウンターに戻り、

「どっぞ開いてるわよ」

男を店に入るように促した。

「邪魔するぜ」

男が扉を開けると、店の中に扉を叩いた男以外にも2人のおとこが入って来た。

男の後ろについて歩いていて見るところを見ると、恐らくは仲間、もしくは舎弟である事が窺える。

「なんの用？ヨシちゃんなら来てないわよ」

「随分冷えなあ。まあいい…来てなくても居場所に見当はないのか？」

佐天は男の質問に答えず、カップを戸棚に戻す為彼らに背を向けた。カップをかたずける為という理由もあるが、一番の理由は単純に知り合いの悩みの種である彼らの顔を見たくないからであった。

「いらつしやいませ」

「ああなんだコイツ？」

そんな佐天の思いを知らずか当麻が真面目にもアルバイトの務めを果たそうと注文を聞き始めた。

「いいですよ上条さん。こいつらは注文なんて…」

苛立った声を出しながら佐天が振り向くと、そこには先ほどとは違い、いつの間にかタキシードに着替えた当麻が立っていた。

「どういったメニューがお好みで？」

「なんだバイト雇ったのか？」



「ちょっとなんですか？その格好は！？ここ喫茶店ですから高級料理店じゃないんですからね！ここは！！」

思わぬボケにさつきまでの苛立ちも忘れて佐天がツツコンだが、当麻はまったく気にせず仕事を続けた。

「こちらメニューになりますが…」

「ああいいよ。俺達は飯を食いに来た訳じゃねえから、っーかこつてコーヒーぐらいしかねえだろ」

「なら、本日のおすすめメニューはいかかですか？本日のフルコースはトリのフルコースとなっております」

「いや、だから飯食いに来た訳じゃねえって言うてんだろ！？ていうか何だ！？トリのフルコースって！？」

「本日は活きのいいGODが手に入りました」

「手に入っちゃたの！？GOD！？食材の神だぞ！！」

訳の分からない事を言う当麻に遂には舎弟達もツツコミ出した。

「お気に召しませんか？では本日のランチはいかがですか？」

「なんでもいいから静かにしてくれ、俺はコイツに用があるんだ」

「かしこまりました。ではmaster佐天！！」

「なんでマスターの発音だけよくしたんだよ？」

「コーヒーブラック3つお願いします！」

「…結局コーヒーかい！！」「…」

頼まれてもいないのコーヒーを出すのはどうかとも佐天は思ったが、何も出さない訳にもいかないので一先ずは当麻言つとおりコーヒーを出した。

「で、吉江の奴は来なかったか？」

「知らないわよ。最近連絡も来ないし…あんだ達が口クでもないこととしてんじゃないの？」

「へっ！こっちは自分の身を自分で守れねえ無能なあいつをわざわざ守ってやってんだ！それなりの礼を貰って何が悪い！？」

その言葉を聞いた瞬間、佐天の目がカツと見開き、佐天は何も言わず右手で男の頬をはたいた。

叩かれた男は、突然の事に驚いたのか椅子から倒れるように転げ落ちた。

「いい加減にしなさいよ！能力がどれだけ偉いつてうの！？」

あの子はね…！いいえ、ヨシちゃんだけじゃない！この街の無能力者達は確かに落ちこぼれかもしれない！でもそんな中でも必死に生きてるの！あんだ達のやってる事なんてただの弱い者から金をむしり取ってるだけでしょ！？やってることはそこら辺のスキルアウトとまったく同じじゃない！！」

床から佐天を見上げていた男も最初は驚いていたが、次第に殴られたことへの屈辱が怒りへと変わっていった。

「てめえ！言わせておけば！！」

男は立ち上がるとカウンター越しに佐天の胸倉を掴みこんで、拳を振り上げた。

殴られると思った佐天が思わず目を瞑ると

「お待たせしました〜メインの料理です」

男の後ろから当麻が声を掛けて来た。

「うるせ〜後にしろっ!」

佐天の胸倉を掴んでいた男とその仲間も一斉に当麻を睨みつけるように振り向くと、

当麻の持っていたコーヒーカップを見て啞然とした。

「ってコーヒー!? またコーヒーなの!？」

「カフェオレです。ちなみデザートはコーヒー牛乳となっております」

「何そのコーヒー三昧!? どれだけカフェインを接種したいの!？」

先ほどの怒りはどこへ行ったのか、男達は次々に出されるボケのフルコースに必死にツツコンでいると、

突如ギョルウウウウ!と腹からのある特定の状況でなければ聞こえてこない嫌な警告音が鳴り響く。

「なっ!なんだ急に腹が!?!？」

「おっ!俺も!?!」

「まさか! コーヒーの中に何か入れたのか!？」

「ちよつと...これ...やばい...トツ! トイレ!」

仲間の一人がトイレの扉を開けると、いつの間にか中に入っていた当麻が雑誌を広げながら便座に座っていた。

「きゃ〜の 太さんのエッチ〜(棒読)」

「こっ! この野郎おお!! ああああ!!」

と男とは思えないほど情けない声で嘆き、当麻の仕込んだ毒の強力が伝わる。

「おい！やばいつて！いろんな意味で！！」

「もう帰ろうぜ！！」

「チクシヨウ！覚えてやがれ！！」

脇役としか思えない台詞を残し男達は店から出て行く。

3人共お尻を押さえながら出て行くので、外で出会う人達がどう思うのか、考えるとかわいそうなのでこれ以上は触れない事にしよう。3人が出て行くのを見た後、暫くして助けられた事に気付いた佐天は少し遅れた礼を当麻に述べる。

「あの…すいませんありがとうございました」

「ああ気にすんな…：…当たり前のことだろ？俺はここのアルバイトなんだからな」

これが、当麻アルバイト初日の出来事である。

そして、その数週間後。

困った人を見捨てられない店の亭主の佐天とその店の用心棒である上条の名は一丸学区に一気に響き渡る事になる。

初日（後書き）

以上です。

ちよつと当麻君が桂っぽいけど

佐天との恋愛はないからね！

あつ言っちゃった。

この話はあと3、4話ほどで終わると思います。

では、また今度

後日（前書き）

どうも、出来たので載せます。

だんだん次回の長編の構想が進んできたので、少し早足で行きます。

えっ！？展開が早い！

すいません！！！！

そんなこんなで31話行きます！

## 後日

上条当麻を雇って一カ月程経った、とある日の朝。大学が休みである佐天は朝から喫茶店へと向かっていた。だが、彼女の足取りは重かった。なぜなら

「おい！上条って奴はいねえのか！？」

彼女の店の前に100人中100人がヤンキーと答えそうな格好した連中が店の前を固めていたのだ。

上条当麻を雇ってからというもの、面倒な客は追い払う事が楽になったが、その代わりに面倒な客が多く来るようになってしまったのだ。

「俺の後輩が世話になって聞いてな！！さっさと出てこい！」

今まで何一つ店から声らしい物が聞こえて来なかったが、男の挑発に答えるようにピシヤッ！と扉が開いき、

「うるせえええ！！！」

開いた扉の向こうから飛んできたのは、男の叫び声とコップであった。

「アベシッ！」

「りっ！リーダー！！！」

カチコミ集団のリーダーらしき男が無様に崩れ落ちるなか、  
食器洗いのスポンジを握りしめ、顔や体にあちこちに泡をつけた当  
麻が現れた。

「朝っぱらからうるせえんだよ！こつちは佐天が来る前に洗い物済  
ませないといけないんだから邪魔すんな！」

「てっ！てめえ！いきなり何しやがる！？」

「あゝやべ…また割っちゃったよ…やべーなこれ、佐天怒られる」  
「自分からぶつけといて完璧ムシ！？」

「うるせえな…ぎゃーぎゃー騒ぐと……なくすぞ！」

「…何をオオオオ！？」

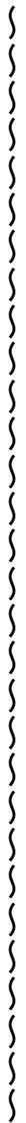
正直言っている意味はまったく理解できなかったが、当麻の何とも  
言えない威圧感に負けたカチコミ集団は倒れるリーダーを連れいそ  
いそと退散していった。

追い払ったことを確認した後、取りあえず当麻は砕けたコップの破  
片を集めて手に乗せる。

「仕方ない…ここは全部捨てて、なかった事にしよう。あつ！でも  
まずは一旦隠さないと…まずはこのカップ自体がなかった事にし  
ないと…」

「お前がなかった事になれ！！！」

ドスンっ！と密かに当麻の後ろにスタンバっていた佐天のかかと落  
としが炸裂した。





~~~~~

「ほら！危ないからさっさと片付けてください！それから一々証拠隠滅しないでください！正直に言ってくれば怒りませんから！」

「はい。ごめんなさいお母さん…」

「誰がお母さんだ！！？」

まったく反省の色が見えないが、当麻は言われた通りに割れたコップを袋に入れトボトボと店の裏へと捨てに行った。

そんな当麻に佐天が呆れていると開店してから5分としない内に一人目のお客が現れた。

当麻が朝から面倒な事をしてくれた為、まだ十分な準備も出来ていなかったが、

開店している以上お客を待たせる訳にはいかない。佐天は今できる限りの最高の笑顔を浮かべ入口の方に顔を向ける。

「いらつしゃいま！……せ…」

と、元気100倍、満面の笑みで迎えた佐天は言葉に詰まった。

なぜなら、店に入って来たのは、この廃れた一九学区にはあまりに似合わない女性が立っていたからだ。

女性は黒い髪を肩ほどまで伸ばし、ピシッとしたスーツを着こなしたスーツが似合ういかにもキャリアウーマンといった感じであり、

佐天の目から見ても十分に美人と呼ぶにふさわしい女性だった。それだけでも十分佐天の目を引く理由になったが、

中でも佐天の目を一番引いたのは、服の上からでも分かるスーツからはち切れんばかりに押さえ付けられた巨大なバストだった。

「あの……何か？」

「ここで上条というバカ面ぶら下げた男が働いていると聞いたんだけど」

あまりに意外な人物の名前が出て、一瞬何が言われたのか分からなかったが、

出すべき言葉は、わりと直ぐに出てきた。

「えっはい……ここで働いていますけど」

「そう、今は留守？」

「あっいえ……当麻さん！」

「ああ！なんだ！？面倒な客でも来たか？」

そう面倒そうに言う当麻であったが、店の入口に立つ人物を見るなり、その目つきは真剣なモノへと変わった。

「吹寄……」

「久しいな……上条当麻」

~~~~~

「ギョッぞ……」

「ありがとう」

佐天は吹寄と呼ばれた女性をカウンター席へと促すとコーヒーを出

し、彼女はそれを笑顔で受け取りゆつくりと飲み始めた。  
その女性から少し離れたカウンター席に当麻は座って、同じく佐天の出されたコーヒートを啜っていた。

「ホントに久しぶりだな…何時以来だ？」

「第一次科学・魔術大戦以来だ」

「ああ…そうかあの頃か」

彼女の返答に当麻は懐かしそうに呟いた。

「まあその頃は中がメインだったが、第二次大戦は学園都市の外がほとんどだったからな…中にはあんまり迷惑掛かんかっただろ？」

「あほっ！学校はほとんどないし、イベントも中止、大学受験さえ中止になったんだから十分迷惑だったわよ！」

「そーか…そりゃ悪い事をしたな」

「貴様はイギリスにいたはずだろう？何時帰って来た？」

「別に…ちよくちよく戻って来たぜ、こっちに住むようになったのは1カ月くらい前かな…」

何とも言えない大人の雰囲気を出す二人に少し離れた所で聞いていた佐天は何をしていけばいいのか分からず、

取りあえず邪魔にならないように少し離れた所でポツリと気配を消して突っ立っていた。

ふと、吹寄の方に視線を移して見ると吹寄の方も佐天の方を見て来たので、佐天は思わず視線を逸らしてしまった。

失礼なことをしたかと思っただが、吹寄の方はどこか呆れた様な顔をしていた。

「しかし…相変わらず女に迷惑を掛けるのが得意のようだな…ここまでくれば履歴書にも書けるだろうな」

「ああ…ホストの面接を受ける時にでも描いとくよ」  
「それは止めとけ…色々怒る女がいるぞ」

話を区切るように吹寄は出されたコーヒーを口に含む。

「皆はどうしてる？元気か？」

「姫神さんの事か？」

「姫神だけのことじゃない…青髪とかさ」

「青髪のことにはよく知らん。何をしているやら…」

「そうか…」

「あいつな…卒業式の日には姫神さんに告白らしいぞ」

「マジでツ！！？」

ここにきて今朝不良共を追い払った時以上の大声を出す当麻。  
その姿は他人の恋路が気になる学生のような無邪気さだった。

「でっ！！？どうなった!？」

「マイナス2秒でふられたらしい…」

「何だ？そのマイナスって？」

「『姫ちゃん！僕とっ…！』で断られたらしい」

「ああー」

当麻は笑えね〜つと言った感じの苦笑いを浮かべた。

「貴様は…ここに戻っては来ているが、何かこれからの事は決まっ  
ているのか？」

「いいや…な〜んも…どうすればいいか困っていた所だ」

「そんな事だろうと思った…ほら」

吹寄はポケットから名刺ほどの大きさの紙を取り出してカウンター

の上を滑らせ、当麻の元へ送った。

「なんだ？」

「私が今勉強させて貰ってる法律事務所だ…仕事に困ってるなら私から話を通しておいてやるぞ」

そこまで言うと吹寄は佐天の方に目をやり、同感を得る様な笑みで話かける。

「君もいつまでもこんな奴にいられては迷惑だろ？」

「そんな迷惑だなんて…」

と言いかけた途中で佐天の言葉は止まった。

何故なら、今の彼女の頭に横切ったのは、当麻が来てから犠牲になったコーヒーカップや絡むようになった不良の数々であったからだ。

「うーん……………」

「なんか言えばああ!？」

返答に困っている佐天に当麻はカウンターをドンツ！叩いて訴えた。

「とにかく！まだ特に何も決まってないならここに来て！雑用くらの仕事ならくれてやる！」

吹寄は鬱陶しいと言った感じに叫ぶ当麻を制した。

「……………ああ…まあ考えとくよ」

当麻は悩むような顔で紙を見つめ、吹寄はそれを無視するように出口に向かった。

「吹寄」

当麻の呼びかけに扉の取っ手に手を掛けた吹寄がピタリと動きが止まった。

「ありがとう」

「……………ふんっ！」

忌々しいと言わんばかりの怒りに満ちた最後の一言であったが、何故か不思議と当麻を嫌っているという印象は受けなかった。残された佐天、当麻は暫く黙っていたが、吹寄の使ったコーヒーカーップを片づけながら佐天は当麻に尋ねた。

「当麻さんって、あの戦争に参加してたんですか？」

「ん？ああ、まあな……………でもあんま色々と尋ねてくんなよ…あんまり楽しい話でもないし」

「そう…ですよね……………やっぱり」

少し聞きたい事もあったが、佐天はそれを押し留めた。

戦争に参加していないとはいえ、戦争がいかに残酷なモノかは彼女自身よく分かっていたからだ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

数日後、吹寄が尋ねて来た事や当麻が戦争に参加していたことが記憶の片隅に置かれ始めた頃。

佐天は携帯をカウンターに乗せて頂垂れていた。

「どうした？今にも不幸だ〜って叫びだしそんな空気出して」

「いや…実は両親が…」

「何だ？見合い話でも持つてきたか？」

「違いますよ！ある意味そっちの方が良かったです」

深刻そうに悩む佐天に当麻は真面目に心配しだしてきた。

「何があつたんだ？」

「両親が家に帰る気はないのかつてメールが来て…」

「…別に…帰るだけならいいだろ？」

「いや、帰るっていうのはただの里帰りって意味じゃなくて、実家で暮らさないかって意味なんですよ」

「あ〜そついう事か」

学園都市は基本学生の為の街であるので、学校を卒業すれば街を出て外の会社に勤めるのが普通の流れである。だが、中には街に残り新たな自分の居場所を探す者もいる。

この佐天も後者なのだと当麻が納得し、

「ま〜でも、あれじゃないか…両親もただお前の顔見たいとかが一番の理由だろうから、そんな深く考えなくていいと…」

うまい事、良い案を出してやれないかと頭を悩ましていると、突然、ドンツとカウンターを叩いて立ち上がった。

「そうだ！いいこと思い付きました！恋人ですよ！」  
「はっ？」

何を言ってるんだコイツはと当麻が間の抜けた声を出したが、佐天は気にせず語りだした。

「そうですよ！恋人ですよ！恋人がいれば離れたくないって理由が通るじゃないですか！！？」

「……………」

「よし早速メールを！！！」

「なあ……………佐天…俺、結構マンガ好きでさ、それきつとやったらベタな事に……………」

「よし！メール送信完了！えっ？なんか言いました？」

「……………いや、なんでも……………」

数分後。

帰って来たメールを見るなりぐったりとカウンターに凭れかかる佐天。

「どうした？」

「その彼に会いにくるって……………」

「うん……………だらうな……………」



## 後日（後書き）

以上です。

この話はあと3、4話ほどで終わります。

そしたら、長編をやりませう。

それには、もういろんなキャラ出しますから

たとえば…おっと、それはヒ・ミ・ツ（ウザッ）

暇があれば書いているので、この話は1、2カ月以内に終わりにしようと思います

でも、8月に新刊があるので、それを見て内容を修正するかもしれない。

そうすれば、また時間がかかります。

こんなキャラ崩壊小説ですが、出来る限り原作との違和感を取り除きたいので…

では、本日はこの辺でまた今度。

## 恋人（前書き）

展開が早いです。

今回はその一言。

といつても次回もきつとそうなります。

そんなこんなで32話行きます。

## 恋人

学園都市。

第7学区のとある駅にて、佐天は手を振って両親に自信の居場所を伝えていた。

「お母さ〜ん！お父さ〜ん！こっちこっち！」

彼女に姿に気付いた両親たちは懐かしそうに近づいてきた。

「やあ涙子！久しぶりだな！」

「ホント元気にしてた？」

「うん！元気元気！」

簡単な挨拶を済ませた後、佐天は両親と共にさっそく第一関門へと向かった。

佐天は両親を駅の入口まで誘導すると、そこで待っているとある男性の隣に立った。

「紹介するね！この人が彼氏の……」

「どうも涙子さんとお付き合ひさせて貰ってます。上条当麻です！」

ビシッ！と当麻はどっかの宇宙の歌姫の様なポーズ（効果音をつけるとしたら『キラッ』）を取って自己紹介をした。

佐天の両親が尋ねてくる数日前。

「当麻さん!!」

「だが断る」

佐天の第一声を聞いただけで早速断りを入れる当麻。

「そこを何とか!!」

「嫌だ!絶対に嫌だ!何故なら絶対不幸な感じになるから!!」

「ぐうう!はっ!じゃあ!仕事って事でどうですか?」

「仕事?」

「そうです!恋人のふりをする仕事です!もしうまく誤魔化せたら白井さんのつけは全てチャラにしてあげます」

「……なるほど」

「どうです?そこまで悪い話じゃないと思いますよ」

当麻は迷っているようだったが、

「ああくそ!仕方ねーな!!」

「ありがとうございます!!」

渋々佐天の提案に承諾した。

佐天の提案が当麻にとって良いものであるということもあるが、結局のところ困った人を見過ごせないという当麻の性分の方がこの決断を決めた原因だろう。

当麻自信もそれが分かっているので、ただただ自分という存在に呆れていた。

「はあ…何か何時も俺の周りには面倒事が蔓延ってる」

「いいじゃないですか！それを助けてれば一生困りませんよ」

---

「どうも涙子さんとお付き合いさせて貰ってます。上条当麻です！」

ピシッ！とどっかの宇宙の歌姫の様なポーズ（効果音をつけるとしたら『キラッ』）を取る当麻に対してどういふ反応を取っているのか分からず妙な沈黙が続いたが、

「お父さん！お母さん！見て！あれこの街でしか走っていない特別なハイブリットバスなんだよ！！」

「え？」

両親の視線が当麻から外れた瞬間。  
佐天はドスツと当麻の腹に拳を叩き込んだ。

「う”つうう!!!!」

「大丈夫！当麻さん!？」

当麻のうめき声に驚いた佐天の両親は直ぐに当麻の方に視線を向けたが、今の一連の流れを見なかった佐天の両親にとっては、当麻が急に腹を痛めているようにしか見えなかった。

「何か緊張したちゃってるみたいだから、落ち着くまでちょっと待ってて！」

「あっああ…」

「ここ真つすぐ行くとタクシー乗り場があるから！」

「ああ…分かった」

「じゃあ先に行ってるわね」

若干の違和感を感じている様だが、両親二人共佐天に言われた通り大人しくタクシー乗り場に向かった。

残された佐天と当麻は、第一回の臨時作戦会議を開き出した。

「当麻さん…本当に真面目にやってください」

「いや、俺だって真面目にやっただろ、すげー頑張って元気な青年を装ってるだろ」

「いや！完璧にただの変な奴ですから!!」

どうも力を込めるベクトルが間違っている当麻に佐天はただただ不安になるだけであった。

「ちゃんと真面目にやってください。じゃないと次は今の十倍の力

で殴りますよ」

「今の十倍とか、それもう界 拳だよ。悪いこと言わないから、お前今からナメ ク星行って来い。きつと 飯とクリリ くらいなら助けられるから」

何やらまたボケ始めた当麻を無視して、佐天は当麻の頭を鷲掴みにして引きずるようにタクシー乗り場に向かった。

~~~~~

タクシーに乗り、一同が最初に向かったのは二人の勤務先である喫茶店であった。

「適当に座ってて、お茶淹れるから」

「ああ」

「手伝う?」

「ああ…俺が手伝いますから、ゆっくりしてて下さい」

立ち上がった佐天の母親を制して当麻はカウンターでお茶の準備をする佐天の隣に立って、お茶を淹れる急須を取り出しながら佐天に話しかける。

「ねえちよつと何？君のお父さん…もの凄い睨みつけてくるんだけど」

当麻が座りながら一直線に当麻を睨む佐天の父をそーっと、ばれなように指差した。

「そりゃあれですよ。可愛い娘の彼氏なんですから、ろくでもない男だったらただじゃおかないってことでしょう」

「いやいや、絶対まずいつて見てよあのお父さんの目つき！メンチ切るって言うか目からビーム出しそうだぞ！」

「気の所為じゃないですか？」

佐天の勝手に困ってれば、的ない態度に当麻は自体のヤバさを理解しだしていた。

今の彼は佐天の恋人として両親に紹介されている。

となれば大抵の両親（主に父親）は娘の彼氏に敵しいものである。そんな状況下の中で恋人となっている佐天までの的になってしまったら、それはもうただの四面楚歌である。

「あつ！さてはお前怒ってるな！さっき俺がふざけたのまだ怒ってんだろ！？」

「いや、怒るのは当たり前でしょ。ていつかふざけたのは認めるんですね…」

「あつ！」

「あれっ？お茶きらしてた。あゝ夕飯も買っておきたいし、ちよつと行ってきますね…」

「おいしい！ちよつとまでこんな状況で俺を一人にする気か！？」

当麻の悲痛なツツコミを無視して佐天は続けた。



「じゃあ、一時間くらい両親の相手しててくださいね」

「おい！ねえちよつと話聞いて！お願いだから！」

「じゃあがんばって！ダーリン」

ニッコリと当麻に笑いかけ、両親に買い物に行くと言った佐天は後ろで何やら騒ぐ当麻を無視して、買い物に出かけた。

~~~~~

買い物を終えた佐天は、とぼとぼと喫茶店に向かって歩いていった。

（はあ〜結局当麻さん一人にしてきちゃったけど、大丈夫かな〜）

先ほどは少しは懲りるだろうと思って、敢えて気まずい空気の中に抛り込んで来たが、もし当麻が両親に妙な事を言えば困るは結局佐天になる。いくらなんでもあれはまずかったかなと後悔していると佐天は喫茶店の近くまで来ていることに気付いた。

（面倒なことになってなければいいけど…）

不安な気持ちを抱きつつ、佐天は玄関を開けると、

「ただいま」

『その幻想をぶち壊す!!!!!!』』

当麻と佐天の父が『幻想、もしくはそれに等しいもの（間に台詞付き（勝手に考えたヤツ））』を熱唱していた。

「……………」

自分の父と当麻が一緒に歌うのを見て、ただ茫然と突っ立っていると佐天に気付いた母がニツコリと笑いかけた。

「あら！お帰りなさい涙子」

「何があつたのおお!？」

あまりの父の豹変っぷりに今度は佐天が先ほどの当麻以上に叫んだ。

「いやね…お父さんたら、ちょっと上条君と話が合うからってドン気分良くなっちゃって」

「良くなるどころじゃないけど!?!もの凄い清々しい顔してるんだけど!?!」の 太の結婚前夜』のしず ちゃんのお父さんでもあそこまでの顔をしてなかつたよ!?!」

「まあまあ…そんなに驚かないで…見て本当の親子みたいじゃない」「どこの世界に一緒にキャラソン歌う親子がいんの!?!」

あまりにも変わり過ぎた父の態度に佐天はキャラじゃないほど驚いていたが、

今一度見直してみると父は確かに先ほどとは打って変わって楽しそうに歌っていた。

「はぁ……まっ……いつか……」

何だかおかしなことになっている様な気がするが、楽しそうな父の姿を見ている内に自然と佐天はそう呟いていた。

## 恋人（後書き）

以上です。

ええなんだか足早です。

色々佐天さん両親のボケも入れてみたかったんですが、資料は超電磁砲2巻だけという状態であんまりキャラが分かっていないので

そんなに喋らせていません。

それと、弟も出して当麻と絡ませようとも思ってたんですが、これまた、名前さえ分かっている状態なので止めました。

他にも色々当麻にボケさせようと思いましたが、あんまりいいのがあると思いつかなかったので今回は結構少なめです。

長々と説明しましたが、まあ今回はこの辺で次回もきつとこんな感じで足早に行きます。

できれば今月中にこの過去編は終わらせようと思います。

## 両親（前書き）

よし！終わり！

つて、もちろんこの過去編の話ね！

まだ終わらせる訳にはいかない！

なぜなら次回は俺が一番やりたかった話になるから！！

そんなこんなで早足だけど、第33話行きます！！

## 両親

佐天の両親が尋ねて来てから数日後。

「ほらっ！お父さん！当麻さん早く！」

「へい！」

当麻、佐天にその両親は第七学区へと買い物に来ていた。

と言っても買い物をするのは、佐天と母だけで、残った男二人は勿論荷物持ちである。

「は〜どこまで続くんすかね〜この男の宿命『NIMOTUMOT  
I』は……」

「当麻くん。女の欲望が続く限りはその宿命から逃れられんさ」

「なるほど勉強になります。お父さん」

「……当麻君：確かに君は気にいったが、その呼び方は止めてくれ」

「分かりました〜おじさん！」

「……………腹立つな〜君……」

先日は、娘を思うあまり途轍もなく熱い死線を父であったが、今は極めて穏やかで、今となっては義理の息子とは言わないが、ふざけ合えるくらいの関係は作れていた。昨日会ったばかりで、かつ娘の彼氏と紹介されておきながら、ここまでの関係を築き上げたのだから、そこは流石当麻君と言っべきであろう。そして、暫くそんなやり取りをしながら、わいわいと買い物を楽しむ女二人の後をつけて歩きまわると、二人が公園前で立ち止まった。

「お父さん、当麻さん！お疲れ様！」  
「だいぶ歩いたし、休憩にしましょ」

先ほどのテンションから今日一日中買い物に付き合わされると思っていたが、

どうやら気分が良いらしくかなり早い段階で休憩タイムが訪れた。

「じゃあ何か飲み物を…」

荷物を下ろしながら当麻がそう言ったが、佐天が遠慮するように手を振った。

「いいですよ！私とお母さんで行くから！行こ！お母さん」

「はいはい」

佐天は子供の様な無邪気な様子で母を手を引き、母もそれに従って公園から出て行った。

「いい娘さんですね。ホント」

「ああ…私達の宝だ。だから、出来れば帰って来てほしいんだ」

「昨日の続きですか？もういいじゃないですか…帰りたくなったら勝手に帰りますよ」

「だが、あんな事があつたばかりで…」

「戦争の事ですか？」

今から約5年前学園都市では戦争があり、学園都市内でも多くの子供たちが参加させられた。

「今は平和になっているが、また何時あんなことが起こるか…」

「まあ否定はしませんけど、でも戦争が始まればどこにいたって同

じでしょう？ だったらせめてやりたいようにやらせてあげるのが一番じゃないですか？」

「……だが、戦争だけじゃない。それ以外にもこの都市では危険な事が多い」

「それも否定できませんね…でも、まっ大丈夫ですよ。あいつなら……」

~~~~~

暫く間、この街の事や佐天のことについて話していた二人だが、30分程経つても佐天も母も戻って来なかったので、だんだんと心配になってきた。

「にしても遅いですね……」

「ああ…飲み物を買に行くでここまで掛かるのか」

「いや…そんな事ないと思いますけど……」

ここ第七学区は学園都市の中でも比較的寮や学校が多く、デパートなどの建物が多く並び見た目通りの若者の街である。少し歩けばファミレスも見つかり、カフェも見つかる。自動販売機に至っては見ない方が難しいくらい設置されている。まして、佐天はこの街に住



んで何年も経つ。その佐天がついていながら飲み物一つ買ってくるのに何十分も掛かるのはいくらなんでも不自然である。何かあったのではと不安にかられた当麻と父は、一先ず公園から出て二人を探しだした。

探し始めてホンの数分後、歩道に4、5人の人が集まって何かを囲んでいるのを見つけた。

嫌な予感がして二人が近づくと、彼らが囲んでいたのは電柱に凭れかかって座る一人の女性であることが分かった。だが、それはまったく知らない他人ではなく、二人が良く知る人物であった。

「おい！どうしたんだ？」

「おばさん！大丈夫！？」

「ええ、足を挫いただけです。大丈夫です」

その女性は先ほど佐天と飲み物を買に行った母であった。それが分かった当麻と父は、周りを囲む人達の間を抜けて、彼女の傍まで行った。

「母さん大丈夫か？」

「何があつたんですか！？」

「お父さん！上条君！涙子が！涙子が突然来た車に！」

「っ！？どんな車でした！？」

その言葉で全てを悟った当麻は直ぐにやるべき事をやった。

「黒いワンボックスカーで男が5人ほど乗ってて…」

「何だつて涙子を！？」

「人攫いか…私怨か…どっちにしてもここまじや佐天の身が危ない」

学生の街と言っても、この街の闇の奥底では未だに人攫いや人殺し

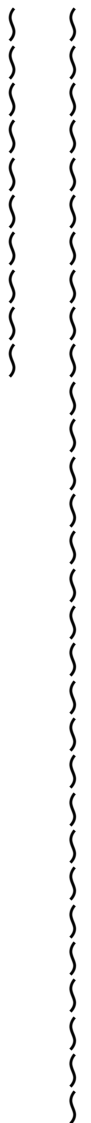
が日常として起きている。  
それをイヤという程理解している当麻は、顔を顰めた。

「じゃあ！涙子は！？」

「大丈夫ですよ。」

そう言うと当麻は笑い。携帯を取り出した。

「あいつがこの街で立派にやっていける事を証明しますよ」



ここはどこだろう。目を覚ました佐天が最初に思ったのはそれだった。

佐天が辺りを見渡すと辺りは薄暗く、床や壁に傷があり広さ的にはどこかの倉庫のように感じ、また、かすかに差しこむオレンジ色の光から夕方である事が窺えた。

しつかり、周りを見渡そうと立とうとしたが、うまく動かせず腕に圧迫されるモノを感じたので縛られている事を悟った。

「目が覚めたか？」

「あんたは……」

声をした方を見てみると、6人程の集団がいて、その中にはかつて佐天の喫茶店を尋ねて来て当麻に追い払われた佐天の友達吉江の彼氏、正確には元彼氏だった男が立っていた。

「あんたのあの用心棒がやっかいでな……中々いい機会に恵まれなかったがついてたぜ」

「こんな事して……私をどうするつもり？」

「なんだ？ 売り飛ばすと思ってるのか、まあそれも選択肢の一つだが」

そう言うと、男は佐天の髪を掴んで頭だけ持ち上げるようにして佐天の耳に口を近づけた。

「吉江はどこだ？ 言えば売り飛ばすのだけは勘弁してやるよ」

まだ諦めてなかったのかと驚くと同時に佐天は、この男の執念を恐れもした。

だが、それ以上に佐天の心の中は、絶対に喋るモノかという決意も固まった。

「……………」

「言わねえっていうなら別にいいぜ……まあお前程度じゃ大した額にならないだろうが、小遣い稼ぎくらいにはなる」

「……………最低よ。あんた」

バチンツと男の手が佐天の手を叩いた。

「うっ！」

「言わんねーなら別にいいさ！お前がいなくなれば吉江の奴も頼りがいなくなり俺の元に戻ってくる！」

「……………あの子は、そんな弱くないわ」

「はっ！無能力者のアイツに何が出来るって言うんだ！？無能力者ってというのは字の通り無能って意味なんだよ！！」

佐天は言い返したかったが、その言葉が見つからなかった。

今、まさに自分のこの状況こそが無能力者である自分が引き起こした結果であると佐天は自分の力の無さを

「なんだよ…結局俺が一番のりか」

恨むよりも先に男の声が聞こえて来た。

その場にいた者全てが声のする方を向いた。

「まあ俺が言えた義理じゃねえけど…あんまり女の子を殴るもんじやないぞーガキ共」

男は日の当たらない陰の中にいた為、最初はその姿を確認する事が出来なかったが、歩くその先に丁度日の光が差し込む場所があったので次第に男はその姿を表していった。

「誰だ！お前は！？」

集団の中の誰かがそう言うと、男は丁度姿見えるように日が差している所に来ると立ち止まった。男はぼさぼさの茶髪にジャージとジーンパンを着こみ、見るからに不良といった印象を受ける、それ以外は普通の男であった。

「別にその子とは何の関わりもないんだが、ダチの頼みなんでな…」

ちょっと、懲らしめてやるつか？」

男の余裕な態度を嘲笑う様に吉江の元彼は強気な態度で他の仲間達の一步前に出た。数だけなら、戦力でいうところの6倍である。強気であるのも当たり前のことである。

「さっさと帰りな！おっさん！」

「うおらあああああ！！！」

突如男が発狂したように叫ぶと、そのまま吉江の元彼に飛び蹴りを喰らわせた。

「オヴアアアア！！！」

「リッ！リーダー！！！」

「おっさんじゃない！俺はまだ20代前半！ピチピチだ！こらあ！」

戦いが始まる前にリーダーを失い残った舎弟達に動揺が現れる中、突如現れた茶髪の男のちょうど反対側に位置する普通より大きめな扉がガラガラと錆びた鉄の擦る音を立てながら開いた。

「ようやく来たか……」

茶髪の男は扉から誰かが入って来る前に、その人物が分かったらしい。

案の定、開いた扉からは男の知り合いの黒髪ツンツンヘアの男が入って来た。

「よお！浜面！やっぱり一番のりか！」

「お前が遅いんだよ！」

「いや、準備に手間取ってな」

人がピンチの時によく聞いた緊張感を感じさせない喋り方、それは茶髪の男と同様に佐天も知っているモノだった。

「当麻さん！」

「よお！佐天無事みたいだな。でも俺だけじゃないぜ」

そう言うと当麻の後ろからぞろぞろと何十人もの人が倉庫の中に入ってきた。

「大丈夫か！？佐天ちゃん！」

「助けに来たぞ〜！」

「怪我はないか！？」

入って来たのは、男性に女性、中学生ほどの子供もいれば大人もいた。

そして、それは皆佐天がよく知る店の常連の者達であった。

「みつ！みんな何で？」

「俺が呼んだんだよ」

ニヤリと笑いながら当麻が1つの携帯を取り出して佐天に見せた。それは、当麻が持っていたモノではなく佐天のモノであった。

「私の携帯！」

「襲われた時に落したんだろ？おふくろさんが見つけてな…ちよつと俺が預かってちよ〜つと知り合い達に声かけたらこんなに来ちゃった〜」

当麻はいつものようなお気楽な感じで続ける。



で倉庫の壁に凭れかかる茶髪の男に近づき、ペットボトルのお茶を手渡した。

「ほい」

「これが呼び出した手間賃か？」

「何だ？ツリでもくれるか？」

当麻の冗談に男は忌々しそうにそのお茶を受け取った。

「久しぶりに連絡が来たと持ったら、これかよ……」

「つまらなかったか？」

「はあくまっ誰かを助けるのに楽しいもつまらないもないけど……」

「これでも悪いと思ってるんだぜ」

男の横に並ぶ様に当麻は壁に凭れかかる。

「ちょっとした保険さ……俺一人じゃ失敗するかもしれないけど、お前がいれば問題ないからな」

「よく言っぜ、今回俺絶対いらなかったと思っぜ」

「って来てくれんだよな……お前は」

「……まあこつちも現状報告したくてな」

「現状報告？」

「俺は今第七学区に住んでる」

「学園都市に残ったのか？」

「ああ……黄泉川に部屋を探して貰ってな。仕事も、小さいけどバイクとか車の修理をやってる会社を紹介して貰った」

「そうか……ちょっと意外かな……お前はアックアみたいに騎士になるのかと思った」

「まあ女王陛下から良い条件は出されてたけど……あんまり気分がのんなくてな……今まで随分忙しかったから、暫くは滝壺と平和な時間



を楽しみたい」

「そうか…」

そこまで言うと男は壁に凭れるのを止めた。

「じゃあ俺は行くな。またその内住んでる場所くらいは教えてるわ」

「ああ」

「それと、あんまり女と面倒なこと起こすなよ。色々怒るぜ…御坂とかインデックスとか」

「そりゃ怖いな」

「じゃあな」

そう言うと男はどこかへ歩いて行った。

それから、少し経つと常連たちにお礼を言い終えた佐天が当麻の元にやって来た。

「当麻さん！あれっ？さっきの人は？」

「ああ帰ったぞ」

「そうですか…助けて貰ったんでお礼を言いたかったんですけど」

「……まっそんなもんは、別にいいだろ。あいつもそうというのはあんまり慣れてないからな…」

それに、これを解決したのはお前の力だ」

「私…の？」

「ああ…お前が世話焼いて助けてきた奴らがお前を助けたんだ。だからこれは俺でも浜面アイツでもない。お前の力だ」

「私の…力か」

「ほらっ！それよりも…やることがあるだろ？」

佐天は当麻の視線の先を見つめた。そこには、たった今到着した警備員チスキルの車から降りる佐天の両親の姿があった。

そう、二人にはまだ無事を報告しなければならぬ人達がいた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「はあくまったく疲れました」  
「それはこっちの台詞だ」

二人は喫茶店のカウンターに座りながら、面倒事から解放されたかのように会話をした。

結局、あの事件の後、無事を確認した両親はその日最後の外に出る電車に間に合わせるために

二人は直ぐさま駅に向かった。あんな事件の後なので、もう少し残りたそうであったが、佐天が一言、大丈夫だよ。と言い、渋々両親はその言葉を信じて外行きの電車に乗った。

「なんやかんやありましたけど……でも、まあうまく行ってよかったです」

「……………」  
「……?どうかしましたか?」

「いや別に……………まあ俺もこのことはおさらばかなって思ったただけだ」

「えっ!？」

「そうだろ?白井の力は返したからな」

「そういえばそうですね」

「そうだ!これ、渡しとくぞ」

当麻はズボンのポケットから封筒を取り出して佐天に渡した。

「これは?」

「お前のおふくろさんから預かったんだ」

「お母さんから?」

「ああなんて書いてあるかは知らないけどな」

なぜ当麻に渡したのかと不思議に思っているながらも、佐天は封筒を開き折りたたまれていた紙を広げる。

『涙子へ』

まず元氣そうでなによりでした。でも嘘つくのは感心しません。

それに嘘をつくなら、もつと現実感のあるものにしなさい。

まあお父さんは、嘘だと思いつつも当麻君に話を聞くまでは、気がでないようでしたけどね。それと、約束やぶって私達に本当の事を言ってくれた当麻君を怒らないであげてね。彼が色々とあなたの事を話してくれたから、父さんと母さんは安心したんです。涙子が店に来る人達の悩みを聞いてあげたり、ケンカで怪我した不良の子達を手当てしてあげたり、涙子がみんなから慕われている事を話してくれたから、父さんも母さんも安心しました。ちよつと変わった子だけど、何で涙子が彼を頼ったのか少し分かった気がします。最後に、母さんは難しい事はよく分からないけど、あなたが立派にやっているそれだけ分かれば十分です。

どうか体には気をつけてね。

『母より』

手紙を読んだ佐天の心中は複雑だった。  
母の優しい言葉に感動する気持ちも若干あったが、それと同時に嘘  
が初めからばれていたという事実もあるので恥ずかしい気持ちも正  
直あった。

「……………」

「じゃあ俺は行くな！」

当麻は約束を破ったのがばれたのを感じ取ったのか、素早く身支度  
を整え店から出て行こうとしたが、

「ちよつと当麻さん」

「はっ！はい」

「別に怒ってませんよ。まあ嘘をつこうとした私も悪いですし」

「そっ…そうか」

「それより…これからどうするんですか？」

「どうするって…別にブラブラするだけだ」

「つまりノープランってことですね…実はこの前、第七学区で良  
い物件見つけたんですよ」

「引っ越すのか？」

「ええ…でも、そこ二階建てで私一人だから使い道がないんですよ  
ね。どうですか？家賃を払ってくれるんだったら住まわしてあげま  
すよ」

「家賃って俺には払う当てなんてないぞ」

「でも、ちゃんと働いてくれるんですよ？万事屋で…」

「いや、まあそうするつもりだけどよ…そう儲かるものでもねえぞ」

「そんなの分かってますよ。だから、私が依頼者を紹介するってい  
うのはどうですか？」

「どづいことだ？」



「まっ当麻さんはあんまり自分の事を放す人でもないしね…」

佐天がそう良い感じの話でオチをつけようとしていたが

「お〜い！やったぞインデックス！今日は玉の神様が俺に微笑んだ！今日はかなりの大勝ちだぜ！！」

「うおらあああ！」

大喜びで入って当麻の顔に佐天の飛び蹴りが直撃した。

「あじゃばああ！テメー何しやがんだ！？」

「あんたこそ家賃滞納しといて何パチンコ行ってきてんじやく！！」

「いやいや！落ち付けって！ほらっ余った玉で交換してもらったヤクルトやるから」

「いるか！そんなもん！！」

と先ほどのちよつといい話はどこへ行ったのか、二人はガヤガヤと騒がしいケンカ（佐天が一方的に殴るだけ）が始まる。しかし、普通に見ればひどいケンカなのだが、あの話聞いた後のインデックスと初春が見ると、なぜか二人の絆の深さを感じる事が出来た。

## 両親（後書き）

とこんな感じですよ。

ちよつと足早で上×佐の人に物足りないように感じたでしょうけど、私は違うので特に感じませんでした！！  
ここ言い切ります。

まあホントはじっくりやろうかなと思っていたんですが  
今の私には次回の長編の事しか頭にありません。ホントすいません。  
そのかわり、次回はじっくり作ります。といいながらも作ってま  
すが…

と言つ訳で過去編はここまでです。

また機会があれば書きますが、

一先ず今は次回に集中します。

次回の長編は結構長めです。

では、今回はこの辺で、

## 招集（前書き）

来たぜ来たぜ！一番やりたかったところに来たぜ！

色々書こうと思ったけど、たらたら書くことはない！

しいて言うなら、私の歌を…！あつ間違えた…

俺の小説を読めエエエ！

そんなこんで、34話行きま〜す！！

あつちなみに誤字あつたら教えてください。お願いします。



## 招集

日差しが強くなり、いよいよ夏の訪れを感じ始めた6月のこの日は26日。

佐天と初春はがやがやと騒がしく綺麗に飾りつけられる街中を今日買った食品が入るビニール袋を持ちながら歩いていった。

「うわーやっぱり凄いですね」

「そりゃ年に一度のお祭りだからね。豪華に行きたいんですよ」

「まあお祭りには違いないんですけど…いいんですかね『終戦記念祭』をこんな豪華にやって…」

初春は申し訳なさそうに呟いた。

嘗て起こった『第一次科学魔術戦争』と『第二次科学魔術戦争』。

その二つを合わせて人々は『科学魔術大戦』と一つの名称として記憶に刻んだ。

そして、その大戦が終わった日を『終戦記念祭』として故人をしのぶ日とした。

学園都市では学校を休みにして、一部の学区では、街を色々と飾り付けて終戦日とは思えないお祭り騒ぎとなる。故人をしのぶ日として決められた日を、ここまでお祭りとして賑やかにやっていいモノかと初春はだんだんと疑問に思い始めた。

「まあいいんじゃない。確かに不謹慎かもしれないけどさ…あんまり、昔の事をただ後悔して悲しむだけなんて、それこそ死んでいった人達に悪いよ」

「それも…そうですね」

過去にあった事は変えられない。人に出来る事は、その過去を振り返り学んでいく事それが残された人達のやるべき務めある。そう感じた初春は、そう笑顔で佐天に返した。

「そういえば上条さんはどうしたんですか？インデックスちゃんもいなかったし」

「ああインデックスちゃんはイギリスに里帰りだった」

「里帰りって…何かあったんですか？」

「さあでも帰るように言われたんだって」

「へ～じゃあ上条さんは？」

「ん～いや～よく分かんないけど、仕事だったさ」

「仕事？万事屋のですか？」

「さあでも…本人曰く古い友人に会いに行くんだって」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

場所は変わって、第七学区。

学園都市のほぼ中央に位置する高層ビル。

学園都市全ての情報が集まる場所でもあり、

嘗ては『第一次科学魔術戦争』を引き起こした張本人アレイスター・クロウリーが住んでいたとされるそのビルは『窓のないビル』と呼ばれ学生達の間で様々な噂の元となった。

だが、アレイスターがいなくなった今そのビルは見る影もなく、今では一般的な高層ビルとなり、戦争の敗者であるアレイスターへの皮肉を込めてか現在では『窓のあるビル』と呼ばれ、学園都市の新たなシンボルとし街全体を見下ろしている。

アレイスターがいなくなった今は学園都市の実質的な統治者である『統括理事会』が、会議や情報収集の際に利用されている。

そして、今そこでは重要な会議が始まるうとしていた。

その会議室では外からの干渉されないように窓は一切なく、盗聴防止の為の妨害電波も設備され、部屋の中央には会議にはお決まりの円卓の机が設置され、椅子はそれを囲むように置かれた20だけ。中に入れるのは『統括理事会』と彼ら認めた部下、そして招待された客人のみであり、その他は入る事が出来ないようになっていた。この中で襲われるということはまずありえない。

「ぐああああ！何をやる止める！！！」

その安全なはずの会議室で『統括理事会』の一人である米倉が首を絞めようとしてくる男に向かって叫んだ。だが、男は米倉の言葉に聞く耳もたずといった様子で、ただ無言で米倉の首に手を伸ばしていた。

「おいっ！何をやっている！」

「何があつたんだ！？」

周りで見ている他の『統括理事会』も何が起こったか分からないと困惑している様子だった。

彼らが困惑している理由は襲っている人間がまったくの知らないか

らという訳ではない。

今米倉を襲っているのは彼が雇っているボディガードだったからだ。

だが、一番驚いているのは米倉自身だろう。彼を襲っているボディガードは彼が最も信頼する部下の一人で今回の様な重要な会議には必ず同行させているほど、信頼する人物であった。

「知るか！コイツが急に！おい！お前らコイツをさっさと何とかしろ！！」

自体を掴めない米倉は他にも連れて来ていた部下に向かって指示を出した。

だが、彼らはまったく彼の言う事を聞かず、ただ突っ立っているだけだった。

彼らはただ聞こえないふりをしているというわけではなく、むしろ今、目の前で起こっている事も正しく認識できていないそんな様子でただ目の前を瞬きもせずに真っすぐに見つめていた。

「くそっ！なんなんだ！？」

「おい！お前ら助けてやれ」

見かねた一人の『統括理事会』の男が自分の連れて来た部下に向かって指示を出したがそれも、米倉の部下と同じであった。指示を出された部下は何も聞こえない、感じない、分からない、本物の人形のようにただ黙って立っているだけだった。

「これは！？一体！？」

他の『統括理事会』達も自分の部下に向かって指示を出したが皆同

じだった。

「くそっ！離れる」

米倉は部下の男の腹を蹴り、何とか距離を取った。

蹴られた男は一旦は倒れはしたものの直ぐに立ち上がり、着ているスーツのポケットから恐らくは護身用であるナイフを取り出し、米倉に向かって突き付けた。

「ばっばか！何をやる気だ！？」

先ほどは何とか反撃出来たが、今回ばかりはそうはいかない。

長年ボディーガードに身を守られてきた彼ら『統括理事会』にはナイフで刺してくる人間の対処など知る訳もなく、周りで見ていた他の『統括理事会』も一部を除いて対処の仕方が分からず、ただ何もせずに米倉を見殺しにしようとした。

「ええい！みつ御坂！！何とかしろ！！」

追いつめられた米倉は彼から離れた所に座る同じ『統括理事会』のメンバー御坂美琴みづかみことに助けを求める。彼女だけはこの『統括理事会』の中でも特別な存在であった。元『超能力者』でもあり、今では『絶対能力者』でもある彼女はこの中で唯一、一切のボディーガードをつけずに様々な交渉場所に赴き、成功させてきた『統括理事会』の光と影の両方のエースと呼ばれている。

その為、ある交渉先では彼女が来たらそれはただの脅迫であると言う者もいるくらい恐れられている存在であった。名前を呼ばれた御坂は、襲われる米倉から少し離れた椅子に腰掛けており、先ほどから今までの事を一部始終見ていたというのに御坂はまったく興味がないという様子だった。

「悪いけど私この『統括<sup>なか</sup>理事会』でも良心的な存在だから、何の罪もない人を殺すのは出来ないの」

「なっ何を言っている!? コイツは今まさに!!」

刺そうとする男をまるで無実の容疑者のように扱う御坂に米倉が反論しようとしたが、

ナイフを持った男はそんな暇は与えないといわんばかりにナイフを振り上げた。

「まつ待て!!」

「お止めなさい!!!」

ピタッと今まで誰の言う事も聞かなかった男は、米倉と反対側に座っている老人、親舟最中の言葉に従う様にナイフを持つ手を止めた。だが親舟はナイフを振り上げる男の方を見ず、備え付けられた椅子にではなく会議用に設置された円卓の机の端に腰掛ける一人の女の方を溜息混じりに見つめる。

「はあ…あなたでしょ食蜂さん? いい子だから止めなさい」

親舟はまるで子供の悪さを優しく怒る母親のように穏やかな口調で語りかけた。

「ふっ! あっはっはっはっ!」

食蜂と呼ばれた女性は黙っていたかと思うと、急に女王様の様な高笑いを始めた。

「はあゝあっ! まったく…天下の『絶対能力者』に向かっている子

だからお止めなさいって… ホント親舟さん、あなたの包容力には敵  
いませんねえ」

「しよっ！食蜂！！貴様仕業だったか！？早く止めさせる！！」

『統括理事会』の目が一気に彼女に集まった。

しよくほつみさき  
食蜂操祈。

元超能力者であり能力は、メンタルアウト心理掌握。

そして、今は御坂と同じ『絶対能力者』である。

彼女の力は簡単にいうと人を操る力であり、他にも記憶の読心・念  
話・想いの消去・意志の増幅・思考の再現・感情の移植などなど  
精神に関する事ならなんでもできる力であり、その凶悪さから嘗て  
御坂は十徳ナイフのような能力と例えた事もあった。

「貴様こんな事をして、後でどうなるか分かっているのか！？」

漸く諸悪の根源が分かり、米倉は強気に怒鳴ったが、食蜂は先ほど  
からの女王様の様な余裕は変わらなかつた

「あらあゝどうなるんですかあゝ？あんた達みたいな権力しか取り  
柄のない人達が」

米倉を殺すことを何の気にもとめないといった言葉に米倉はジワリ  
と嫌な汗をかきだした。

「でも、そうですねえゝいい加減飽きましたから…」

そう言うつと食蜂はパチンツと指を鳴らした。

それが何かの合図だったのか米倉の襲っていた男はナイフを下ろし  
て大人しく後ろに下がった。

ふう〜と安堵のため息を吐いて落ち着いていると、食蜂が邪悪に笑

う。

「さっさと終わらせましょ」

食蜂は再度指を鳴らし、男はそれに反応するようにスーツの下に隠してあった銃を取り出した。

「なっ！止める！」

再び慌てだした米倉を今度はおもちゃを買った子供の様な無邪気な笑顔で食蜂は見つめる。

「おいつ！何とかしろ！！麦野！！」

御坂から助けを求められないと思った米倉は次に御坂の隣の席に座り、興味なさそうに爪をいじる御坂、食蜂と同じ『絶対能力者』である麦野に助けを求めた。

「あー後にして…今マニキュア乾かしているから」

「貴様！暗部だろう！？」

「正確には金で雇われる傭兵よ。助けてほしかったら金よこさない現金キャッシュでな」

「この…！おい！焰！」

次に米倉が頼ったのは、机から離れた所で椅子にも座らずに床に直に座る同じく『絶対能力者』焰であった。

「あー俺も後にして下さい…ほら削板さんどうするんですか」

「うおーよし！ではライズだ！！」



その正面には、これまた同じ『絶対能力者』削板軍覇。  
二人は向かい合って、どちらが持ってきたか分からないがトランプでポーカールをやっていた。

「削板さんはツーペアで俺がフルハウス。俺の勝ち」

「うおー！また負けた！もう一度だ！」

「次は違うのにしましょうよ。飽きました」

と先ほどの後で助ける的な発言はどこへ行ったのか、焰はどうでもいいやといった感じにトランプをきりだした。一樣この時点でまだ削板が残っているが、焰と同じくトランプにハマっているという理由からすでに選択肢から削除されている。結局のところ米倉を助けるように思う者など誰一人もいないという事になる。

「貴様ら！」

「はあ〜あつ！まったく年下に命乞いだなんて…みつともないこと」

再び食蜂は指を鳴らすように構える。

その合図が出た時、米倉は自分の最後だと本能で感じ取った。

「おいつ！よせ！」

「止める食蜂！」

今まで誰の言う事の聞かなかった食蜂が、その指の動きを止めた。

「お前、戦争でもしにきたか！？」

「これはこれは土御門将軍。あなたまでいらっしやるとは…まるで同窓会ですね」

どうやら食蜂は土御門が命令したから止めたという訳ではないよう

で、ただ単純に土御門の登場が予想外であるかのようなようだった。土御門はそんな食蜂の心を読んだのか、久しぶりに悪友にあつたかのような笑みを浮かべて部屋に集まった。「絶対能力者」達に目をやる。

「まあなんだ：よく来たな。学園都市のクズども！」

自分は殺されない、もしくは殺されそうになっても大丈夫という余裕からか土御門はそう言い放った。

「ふふっ言ってくれますね」

もう米倉に興味がないのか食蜂が鳴らそうと構えていた指を戻しながら言った。

「それ私も含まれているのかしら」

食蜂から少し離れた所で椅子に座る御坂が不機嫌そうに言った。

「ひでー言われようっすね〜」

机から離れ、椅子にも座っていない焰がお気楽な感じに言った。

「まあ間違ってないけど」

御坂の隣に座っている麦野が爪のマニキュアに口で風を送りながら言った。

「うおー！焰！！もう一回だ！！」

焰の目の前に座る削板が土御門の事を一切気に掛けずに叫んだ。

『統括理事会』、『絶対能力者』、『学園都市軍の最高責任者』と  
錚錚たる顔ぶれが会議室に揃う中

「おお〜何か懐かしい奴らが集まってんな…！」

その場に似合わぬ、明るく、この暗部の空気らしからぬ優しい声が  
部屋を包んだ。

「飛び入りだけど、俺の席あるかな？」

飛び入りの男に皆が驚く中、親舟最中だけは笑って彼を招き入れる  
ように一つの席を手を使って指し示す。

「お久しぶりですね上条君：あなたの席は常にご用意してあります  
よ」

## 招集（後書き）

以上です。

さて、まず食蜂ですが、彼女の口調が少し困りました。

あ、い、うといった小さい母音を使うことが多いらしいですが、自分が想像してたよりずっとチャラくて、構想を練るのに苦労しました。

まあとりあえずお嬢様なので基本敬語で、だけど相手を下に見るって感じに

話しているイメージです。

それと焰ですが、知っている人は知っているとと思いますが、俺が考えたキャラクターです。

まじめに見た目を考えようと思いましたが、考えてもこれといったものが浮かばず、絵心もないので頭のイメージを

直接描くことも出来ません。

だから、これからも書きません。

せめて髪の色くらい赤と決めようかと思いましたが、どっかの神父とかぶるので止めました。

まあ彼はあまり物語に絡ませようと思わないのであまり気にしなくていいです。

では今回はこの辺で

集結（前書き）

さあて、やっぱりやりたいとことだと  
どんだん執筆が進みます。  
そんなこんなで35話行きま〜す!!!

## 集結

自分の席を紹介された当麻は申し訳なさそうに頭をかきながら、その席に向かう。

「いやゝ悪いっすねゝ急に来ちゃって…」

「あなたなら何時でも大歓迎です。謝る事があるとしたら、今まで来なかつた事にです」

他の『統括理事会』が当麻の登場に驚く中、親舟だけが慌てる様子なく当麻を優しく向かい入れた。

「うおおおお！上条！！我が永遠のライバル！！」

「ちよつと削板さん！？」

削板は急にトランプを投げ出したかと思うと、

「勝負だ！上条！！！」

いきなり当麻に向かって拳を握りしめながら突っ込んで来た。

元超能力者で学園都市第七位であった削板軍覇は超能力者といつても、

誰もその力の根本を理解できておらず、彼が力を使うと普通の理論ではありえない現象が起こり、その全貌は科学者も削板自信も把握

出来ていない程である。

そんな力の為、彼は世界最高の原石とされており、その昔、科学と魔術がまだ手を結ばなかった頃の世界においても彼の名前は知れ渡っていた。そんな彼も様々な試練、鍛錬によりその力を高め今では御坂と同じく『絶対能力者』として学園都市にその名を刻んだ。

その『絶対能力者』削板は理論ではありえない力を拳に込めて、当麻に向かって放つ。受ける側の当麻は大して珍しい事をする訳でもなく。ただ単純に右手を前に出し、削板の拳を受け止めた。

削板の拳はやはり普通の能力とは違った力が込められていたのか、当麻の右手に触れてもその力が完璧に消えた訳ではないようで、二人を中心にブワツと突風にも似た風が巻き起こり、机の上に置かれていた書類や焰の持っていたトランプが吹き飛んだ。

「相変わらずだな削板……でも腕は上げたみたいだな、力の込め方が今までと段違いだ」

それを受け止めた当麻は一切表情を崩さずに削板を称賛した。

「でも、勝負はまた今度な！」

そう言つて当麻は削板の拳を握る右手を放すと、その手で削板の顔を掴んで近くの椅子に向かって投げ飛ばした。

「……くう〜！流石だ！」

何も出来ず投げ飛ばされた削板は悔しいというよりも、興奮しているような顔で当麻を称賛した。それが削板にとっての挨拶代わりなのか、当麻は他の古い友人達に挨拶をしだす。

「よお焰！元気そうだな」

「上条さんもお変わりないようで…」

吹き飛んだトランプを拾いながら、焰は在り来たりな挨拶で返す。

「食蜂も元気みたいだな」

「ええ…当麻様も、お元気そうで何よりです」

食蜂は、お嬢様らしい優雅な振る舞いで頭を下げ挨拶をした。  
だがその声の調子は、女王らしい余裕な雰囲気は抜けていない。

「麦野も元気みたいだな」

「あんた程じゃないけどね」

麦野は相変わらずマニキュアを乾かす事に夢中の様で、それ以上の事は何も言わなかった。

「御坂も…元気そうだ」

「フンツ！」

この中では一番関わりがありそうな御坂は、たった一言だけ言うと当麻かわ目線をそらした。

だが、その顔は心なしに赤くなっている様にも思える。

「そういえば上条君…その手の縄はなんですか？」

当麻の左手に縛るように着けられた縄を見て、親舟が尋ねた。

「んっ？ああこれですか？」

そう言うと当麻は縄を手繰り寄せる。



「痛い痛い！ちょっと待て！！引きずるな！！」

「お土産をちよつと！」

縄を手繰り寄せた先にいたのは、体をグルグル巻きされた当麻と同じ『二枚看板』の一人と言われる浜面仕上であつた。

「なるほど、確かにいい人を連れて来てくれましたね」

完全に引きずられた状態の浜面はたまつたものではないのだろうが、そんな事は気にせず親舟は満足した様な笑みを浮かべた。

「いや〜こいつじゃダダこねて来ないだろうから、無理やり連れてきました」

「テメエーいきなり家に来たと思ったら、急に縛りつけやがって」と恨めしそうな声と目つきで睨んだが、当麻は全く気にしていなかった。そのままでは会議に参加することはできないので親舟は後ろの部下に目配せをし、浜面を縛っている縄を切らせた。

「どうも、浜面くん。お久しぶりです」

「ええまあどうも…」

ここまで来たらどうしようもないと観念したのか、浜面はヤレヤレといった感じに引きずられた時にできたかもしれない怪我を簡単に探しながら挨拶をした。

「どうぞあなたも座ってください。上条君と同様あなたの席も常に用意してあります」

こうして、学園都市に存在するほぼ全ての主力が集まり、いよいよ会議の準備が整った。

「さて、色々あったが会議を…」

「ちよつと待ちなさい！」

現、学園都市軍の最高責任者である土御門が空気を一転し会議を始めようとその場を仕切ろうとした矢先、御坂美琴が遮った。

「どうした？御坂」

「一人おかしい奴いるでしょ！食蜂！あんた何でそこに座ってんのよ！？」

ピシッと御坂は食蜂に向かって指を刺した。

御坂の言う『そこ』とは当麻の膝の上のことであり、食蜂は何故か自分の用意された席に座らず、当麻の膝の上に座り、両手は当麻の首の後ろに回して、ほぼ抱きついてしている状態であった。御坂に怒鳴られた食蜂は御坂を挑発するような小悪魔的な笑みを浮かべる。

「あらあゝ自分が出来ないからってひがんでるんですか？」

「なっ！！何を！？」

顔を赤くし慌てる御坂を見て、どこか懐かしく感じるのは錯覚であろうか、ただ何にせよ御坂の機嫌が悪いのだけは確かであった。

「少なくとも御坂さんにあれこれ言われる筋合いはないですよあゝ当麻様が退けと言うなら退きますが」

「くっ！！ほらっ！当麻！邪魔なんでしょ！？さっさと退くように言いなさいよ」

「えっいやそんな邪魔なんて…」

「そんなの膝に乗せてどうせ重いんでしょ!？」  
「いや、まあ重いけど」

とここに来て当麻の伝家の宝刀『無神経』が炸裂した。  
女性に向かつて重いなど言うのは古来より伝わる禁句である。  
うまい事それを引き出す事に成功した御坂は、しめた!といった感  
じに笑い。

「ほらっ当麻も重いって言うてるじゃない!それで、もう十分邪魔  
になってるのは分かったでしょ!？」

「そうですか…重いですかあ…仕方ないですね。じゃあ退きましょ  
う」

だが、今回は食蜂の方が上手であった。

「残念ですわねえ…もう少し膝こに乗っていれば……………おっぱいが  
当たってしまったかもしれないのに…」

その瞬間、当麻の男の枷が外れた。

当麻は右手の5本指全てを立てて前に付き出した。

「前言撤回!!!会議の5時間先延ばしを要求する!!!」

だが、それと同時に御坂の今まで演じてきたクールキャラも崩壊し  
た。

「このおおお!!!そんなに胸が好きかあああ!!!?!?!？」

御坂の体からビリビリッと怒りと共に電気が漏れ出した。

その電気の一部が当麻と食蜂の所に飛んだが、当麻はそれを右手で

受け止め、電撃を掻き消した。

「きゃー！怖い！当麻様！！」

食蜂の声は明らかに余裕綽々といった声質だったが、当麻はそんな事を気にせず自身の胸の辺りに感じる柔らかい感触に夢中であった。

「うおっ！いいぞ御坂！！もっとこい！！バッチこい！！」

当麻はまるでキャッチャーのように右手を前に差し出して構えた。

「このっ！！！！」

完全に理性というものがブチ切れた御坂はコートで隠れた両脇に手を突っ込んでガシャンと銃を取り出し構えた。

「ちょっと落ち付けて御坂！！！！」

シヤレじゃなく本気ガチでぶっ放しそうな御坂にすかさず浜面が後ろから羽交い締めにする。

「うっさい！！離せ浜面！！まずあいつのムカツク顔面に風穴開けてやるうう！！！！」

「落ち付け御坂！！お前は確かにツンデレキャラとしてある程度の地位には上りつめているが！まだツンデレおたくの女王には、まだ遠く及ばないぞ！！！！」

「うっさい！！黙れ！！バカづらああ！！」

「はまづらだからね！！バカづらぶら下げてるかもしれないけど浜面だから！！！！」

「黙れヅラアア！！！！」

プチンツと先ほどから当麻にいきなり気絶させられた事や気付けばこのように連れて来られていた事など色々和我慢してきた浜面だったが、遂に限界が来た。

「誰がツラだああ！！？フツサフツサだコラああ！！！」

浜面は後ろから押さえ付けていた御坂を放して、向かい合うように御坂の前に出る。

「上等だ！！この前の決着着けてやる！！！」

「こつちだつてこの前のこと全て水に流した訳じゃないんだからね！！！！」

一触即発のこの状態に『統括理事会』は、ただ震えて怯える事しかできず、

この自体を止められる兼この自体を招いた本人である当麻は、ただ見て笑っているだけだった。そこに。

「オオイ……」

たった一言だけだが、声が聞こえて来た。

その声は決して大きい訳ではなかったが、誰もがその声にビクツと反応し一斉に声のする方を見た。声が聞こえて来たのは入口の扉であつて、閉まっていたので誰がそれを言ったのか分からなかったが、その正体に気付いた『統括理事会』と『絶対能力者』達は、ただただ驚いて扉の方を見つめた。だが、その中で恐らくその声の主と同等の力を持っている当麻だけは、ニヤリと嬉しそうに笑った。

声の主は扉を開けるや否や部屋の中の現状を見て、つまらなさそう

に眩いた。

「つまらねエ言い争いが聞こえるなア…俺は来る所を間違えたかア？」

## 集結（後書き）

以上です。

いや〜いろんなキャラたくさん出るの楽しいです。

基本的シリアスに話を持っていきますが、

今回のように多少のギャグも入れます。

では、今回はこの辺で、

## 相棒（前書き）

どうも！本当は新約2巻を見た後に載せようと思いましたが出来たので載せようと思います。

って今日が発売日か…早く見たいぜ…

ってあつ！今日俺誕生日だった…まっどうでもいっか

新約2巻の方が俺にとっては重要なことだし！

そんなこんなで36話行きま〜す！！！！



## 相棒

「一方通行君!!?」

一番始めに扉を開けた人物の名前を言ったのは、『統括理事会』のリーダーである親舟最中。先ほどの食蜂の一件でさえ冷静に見ていた彼女の表情は驚きで満ちていた。

「これはこれは…一番意外な方が来ましたね」

当麻の膝の上に座る食蜂も相当驚いたのか、その頬には僅かに汗が伝っていた。

「いつ『奥』から戻った!?!」

そう言ったのは浜面仕上。

彼の今の境遇を知ってる為か、この部屋の中で一番驚いた様子であった。

「戻ってくるとは聞いていたけど…」

「まさか本当に戻ってくるなんてね」

構えた銃を下ろしながら呟く御坂に麦野が続けて呟いた。

「うおおお!一方通行!!我が宿敵のライバル!!」

「削板さんライバル何人いるんですか？それと宿敵とライバルって同じ意味ですからね…」

他の者達と違い、かなりの歓迎空気を出す削板に焰は諭すように間違いを指摘した。

親舟や浜面、『絶対能力者』達が声に出して意外な人物の登場に驚く中、他の『統括理事会』達はいきなりの学園都市最強の能力者の登場に声も出さずにただ茫然としているだけだった。ただ一人、当麻だけは、彼の登場を予感していたようで、大して驚いてはいなかった。

「権力者に能力者、ついでに二枚看板と…対立する奴らだけ揃えちまえば、その円卓は意味がねエだろ？」

「おい！今、俺と当麻合わせてバカって言ったろ！？」

浜面のツツコミに一方通行は何も答えず、ただ黙って部屋の中に入る。

この部屋に入るまで色々な者に話しかけられ、それらを全て無視してきた一方通行であったが、まだ話しかけられてもいない当麻の近くに行くと、淡々と進めていた足を止めた。

「相変わらずだな一方通行」

「デメエーもな」

何時以来ぶりの再会か分からないが、二人のした挨拶はそれだけでそれだけ言っと一方通行は誰の席かも分からない一番近くの席に座った。

一方通行が席に着くのを確認すると当麻は膝の上に座る食蜂に目をやり。

「食蜂：悪ふだけは終わりだ…席に着け」

「…当麻様が言うのでしたら」

当麻のどこか真剣な表情に何かを悟ったのか、食蜂は最初の挨拶の時に見せたお嬢様らしい気品あるお辞儀をし当麻の膝から降りた。他にも先ほどまで戦う気満々だった御坂と浜面も急な来客にガス抜きされたか、

二人は、食蜂に続いて自分の用意された席に着いた。

「さてと…これで全員か…随分と懐かしい面子が揃ったな…」

「土御門君…気持ち分からないでもないですが、そういう話はまた今度でお願いします」

集まった嘗ての仲間達を前に土御門が正直な感想を漏らしていると、親舟が軽く注意を促す。

「これは、失礼しました」

軽く頭を下げて謝った後、土御門は部屋の隅の方で立っている部下に合図を送って今回使う資料を配らせた。

「まず今回招集をかけたのは他でもない…ある情報機関から外部の勢力が『学園都市』に攻め込もうとしているという情報が入ったからだ」

配られた資料に目を通しながら食蜂は訝しげな顔を浮かべる。

「そんなの今までいくらでもいたでしょう？」

「ああ…確かに今回が初めてじゃない…だが今は時期が時期だからな…」

土御門は前に設置されたパソコン用のキーボードのようなモノを力タカタといじると、机の中心に学園都市の様子と警備状況がホログラムで写された。

「今は『終戦記念祭』です。都市内は普段より警備が厳しくなりませんが、その分外部から入る者に対してはかなり甘めになってきます」「侵入には打って付けの時期だな」

親舟の説明に浜面が付け足す。

「ああ…だが、例え中も外も相当な警備を整えても、学園都市でいうところの『大能力者』や『超能力者』クラスの敵が入って来ては学園都市の軍では警備は難しい。そこで…」

「俺達の登場…か？」

土御門の説明を遮り当麻が尋ねる。

「ああそうだ」

「でもよ…『六本柱』に『二枚看板』。間違いなく『学園都市』の奥の手だ。それを出さなきゃいけないほど、危険な相手なのか？」

浜面が一番問いたかった疑問を尋ねた。

『六本柱』に『二枚看板』は、間違いなく『学園都市』の切り札。どれもこれもクセ者ぞろいで、一国の軍隊と戦ってもお釣りがくる程である。

そんな彼らをただの祭りの警備の為に全員集めるなど、余程の心配性かただのバカである。だが、土御門の顔は真剣そのモノだった。

「ああ…今回の奴らは今まで奴らとは別物だ」

「これが今回攻めてくるであろうと予測される者達の写真です」

今度は親舟がキーボードを操り、中央のホログラムにとある人物達を写し出した。

「ほオ……」

「コイツらは……」

真つ先に反応したのは一方通行と当麻。

元学園都市の將軍を務めた二人であった。

二人の反応から、今回の件に対する心境の変化を感じた親舟はどこか安心した様な笑みを浮かべる。

「懐かしいでしょう？だからあなた達を呼んだのです」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「さて、具体的な大作ですが…迎え撃つなら一対一より二対一の方がいいでしょう。何より彼らレベルになると『絶対能力者』」

でも相性がはつきり出てきます」

「そうですね…近接タイプと遠距離タイプ。両方を組み合わせるようによろしく」

かなりの気まぐれ二人組当麻と一方通行がやる気になった様なので、サクサクと話を進める親舟と土御門。

「皆、力が大体拮抗しているが、出来る限りパワーバランスが崩れないようにしよう」

「当麻と一方通行がいる時点でパワーバランスもなにもない気がするけどな…」

土御門の提案に浜面は反応に困った様に呟いた。

当麻は浜面と一緒に『二枚看板』と呼ばれ都市内では無能力者として存在している。

一方通行は『六本柱』と御坂達と同じ『絶対能力者』扱いになっているが、実際の二人の正体は『絶対能力者』より上、レベル7の『神上』と呼ばれる者である。

その実力は『絶対能力者』とは比べ物にならない。つまりどれだけ得意分野ごとに仕分けても、必ず力の差が出てしまうのだ。

土御門もそれは十分に分かっている筈だが、土御門は気にせず続けた。

「丁度8人いることだしな…2組を4ペア作れば、まあ戦力としては申し分ないだろう」

そう土御門提案すると、一番最初に動いたのは焰であった。

「じゃあ削板さん組みましよう」

「むっ！？俺でいいのか！？」

「ええ…俺は近・中・遠どれでも出来ますけど、あなたほど近接戦闘は得意ではないですし」

「よし！ではよろしく頼む！」

こうして一番最初にペアを決めたのは焰と削板であった。

「そうですねえ…ホントは当麻様と組みたいですけどお…そういうことなら…御坂さん組みましょう」

「はっ！？何で私が！？」

「あらあゝいやですかあゝ？まあ当麻様と死ぬほど組みたいという気持ちは分かりますけどお」

「なっ！何言つてのよ！？分かった組むわよ！組めばいいんでしょ！？」

その次の決まったのは御坂と食蜂のペアであった。

「御坂と食蜂か…まあ妥当な組み合わせだな…」

と次々と順調に決まるペア決めを見ながら浜面は呟いた。

「さてと、普通なら当麻組むところだが…一方通行がいるなら、当麻のペアは一方通行だしな…あれ…ってことは、俺の組む相手は…」

そう言うつと浜面は一旦冷静に計算してみる。

まず、『六本柱』と『二枚看板』。

数を足せば $6 + 2$ で8人。

そして次にまず焰と削板がペアとなり、残り的人数が $8 - 2$ で6人。その次に決まったのが御坂と食蜂のペアで、残りは $6 - 2$ で4人。

今浜面が言ったように当麻と一方通行のペアは決定事項なので4人で残り2人。

そんな小学生でも分かる計算の解いた浜面は疑問に思う。

残り二人という事は、もうその二人のペアは決まっている事になる。それはつまり、浜面のペアはもう決まっていると言ふ事を意味する。なら、それは誰か、浜面は残りの一人を探す為、部屋を見渡した。色々計算し、見直したが、最終的に辿り着く最後の一人、つまり浜面のペアは、マニキュアが乾いたのか、先ほどよりも手を自由に動かせるようになり、座っているはずなのにどこか仁王立ちを彷彿とさせる威圧感で手を組んでいる麦野沈利であった。

「……………CHAAAAAAAAAAAAAAAAANGEEEEEE  
EEEE!!!誰かもつと愛想のいい子をオオ!!!」

「次を守るエリアだが…」

「オイイイ！無視すんな！！今凄<sup>ク</sup>い心の底から叫んだよ!!!？」

浜面の魂の叫びに、土御門は、はあと溜息を一つ吐いて浜面の方を向く。

「だが、一方通行と当麻が組むのは当然だ。この二人が違う奴らをペアにしたら、そいつらの命がない」

「いや！だからって！」

「もしも侵入者が本気でやる事になると、当麻も一方通行も本気で行くべきだ。」

「侵入者相手だと『絶対能力者』でも絶対に勝てるという訳じゃない」  
「だったら俺と焰でもいいだろ!？」

浜面の提案を聞いた焰は、本気で言っているのかと疑うように苦笑いを浮かべた。





未だ納得できない浜面は必死に講義したが、誰も聞く耳を持ってくれなかった。

そこに、当麻がドンツと机を叩いて立ち上がった。

「いい加減にしろよ！皆！！」

「とつ当麻！！」

庇ってくれるのかと涙ながらに浜面は感激したが、

「仕方ないだろ！皆！ちゃんと心の中に刻んでおけ！！犠牲になったのだ！浜面は！！」

「まだ死んでねえよ！！ていうか！どっという流れからそっという話になった！？」

一度ポケタ後、当麻は一旦は真剣な顔に戻り、何かを考え始める。

「うゝん…まあでも確かに…」

「麦野さんが何の気兼ねもなく暴れたら…浜面さんに残る言葉は…」

「生ごみ…だなア…」

「うむ…根性でもどうにもならん」

「……………」

一方通行だけでなく、根性論バカの削板にまで諦められたのが、相効いたのか浜面はどこからか紙と鉛筆を出して遺書を書き始めた。因みに内容は、

愛する滝壺へ、これを読んでいるという事は俺はすでにこの世にいないだろう。

などと何のひねりもない出だしから始まっていた。

そんな浜面のバカっぷりを慣れてか、もしくはは待てなくなったのか、

麦野は遺書を書いている浜面の襟元を掴んで出口へと引きずるって行った。

「ほらっ！決まったんならさっさと行くわよ！」

「ああ！待って麦野！せめて遺書だけ……！！！」

切実な願いを述べる浜面を無視して麦野は、会議室から出て行き、それを見送った残りのメンバーも面倒そうに立ち上がる。

「さてと……じゃあ俺達も行きますか……」

「ああ〜ダリ〜」

「夕飯までには終わりますかね〜？」

「その気になれば根性でなんとかなる……！」

「あっ！そうだあ〜今日の取引には行けないって会社に連絡しないと！」

「きつと取引相手はあんたがなくて、大喜びでしょうね……」

などと何の緊張感もなく話す彼らを『統括理事会』は黙って見つめる。

「っってお前ら！まだ守備エリアについて決まって！っって、もういい！？」「

「親舟さん……大丈夫なんですかね……」

「何に對しての大丈夫かは、分かりませんが……もしも彼らで勝てないようでしたら、この世界のどこを探しても今回の侵入者に勝てる者はいませんよ」「



## 相棒（後書き）

以上です。

何でか分からないけど、彼らのやり取りはサクサクと考えが浮かびます。

今回の話も、予定よりだいぶ話が延びました。

やっぱ俺はギャグが合ってるのかな？

もうすぐ、バトルなのにこんなんで大丈夫か、不安になります。では、本日はこの辺で。

## 警備（前書き）

もう少し長く書くつもりでしたが、  
キリがいいところまで書けたんで、

載せませす。

では第37話行きませす！

あつ誤字脱字に気付いた方は、是非教えてくださいよろしくお願  
いませす。

## 警備

斯くして、学園都市の平和を守る事になった『六本柱』に『二枚看板』は、それぞれペアに分かれて決められたエリアの守護に就いていた。

「はあ…まさかコイツに乗る事になるとは…」

少しうんざりとした口調で呟いたのは浜面仕上。

彼は今第七学区の道路をバイクで走っていた。

ただ、そのバイクはただのバイクではない。

ドラゴンライダー Mk2。

嘗て、浜面がとある人物から授かったドラゴンライダーを元に作られた新たなドラゴンライダー。最高時速は元のドラゴンライダーに及ばないが、大きな重装備もなくごく普通のバイクに見え、専用の『駆動鎧』パワードスーツ もいらない為、急な場合でも、すぐに乗ることができ、見た目も普通のバイクと大差がないので街で走っていても不自然じゃない。

と色々な利点を述べては見ても、結局の所は性能ではドラゴンライダーの方が断然にいい。

ドラゴンライダーと違い、ほぼ自動で運転する機能もないので、一歩間違えれば事故も起こるし、事故にもなれば『駆動鎧』パワードスーツ がないので大怪我を負う事になる。つまり、ほとんど普通のバイクであり、違う点があるとすれば普通にはない装備や最高時速が500kmとという事である。最もそれだけ出れば普通のバイクとは言い難いが、実際に浜面は、このMk2で全速力は出した事はなかった。というより、出す機会はなかった。

『いいじゃねえか…そんな改造バイク乗れる機械めつたにねえぞ』

浜面の被るフルフェイスヘルメット内の丁度耳の辺りに設置されたスピーカーから当麻の声が聞こえてきた。今浜面が被っているヘルメット内には無線機が仕込まれており、今は警備就いている当麻や一方通行、『六本柱』と何が起こっても直ぐに分かるように常に繋がっている状態になっている。

自分が気付かずに咳いていた独り言が聞かれていた事が分かり、浜面は若干恥ずかしそうに口元に設置されたマイクに話しかける。

「乗らない乗らないでそれに越したことはねえと思うけどな」

『いやいや、今のお前は凄い輝いてるって、ハマツライダー』

「止めてくれない！？それ！結構色んな掲示板で浸透してるから！！」

『ハマツライダー』 千切れた鼻ピアス』

「どつという歌詞だ！？」

『ちよつと浜面、バカやってないでさつさとシャケ弁買ってこい！』

当麻とのおかしなやり取りに機嫌が悪そうに口を挟んで来たのは浜面のペア麦野であった。

「あつはい！すいませ〜ん！」

『って、おい！何だお前ら一緒にいないのか？』

「うるせえ！麦野様は疲れてんだよ！だから今俺がシャケ弁買いに言っただよ！」

『いや、なにお前時速500kmも出るバイクでシャケ弁買いにパシられてんだよ？』

「うるせえよ！麦野様のご機嫌損ねたら俺の命がねえんだよ！！そりゃ必死こくだろ！！？」

マイクからでも伝わってくる鬼の様な形相の浜面の威圧に押されて当麻は、ただ、おつおつ。とだけ返事をした。



『ていうか、役割分担はこれでいいの?』

漸くまとまな事を聞いてきたのは第七学区の西から南にかけての守備についている御坂であつた。

「まっ大ざっぱだが仕方ない…そもそもたった8人で『学園都市』全てのカバーは出来ないだろ、軍も動いてんだし…全体的な守護は軍に任せればいいだろ」

『学園都市』の面積は大よそ東京都の3分の1。

それだけの広さを全て守れるほど、彼らの力は万能ではない。その為、まず彼らは守るべき場所を集中的に守る事した。

『だけど守備範囲を3分割して真ん中に当麻と一方通行つてそれでいいの?』

「こいつらの場合は、そこら辺をウロチョロされるより、守るべき所を重点的に守らせた方がいい。それに真ん中ならどういふ敵が来たか直ぐに伝わってくるしな、そうすれば直ぐに援軍に来れるだろ?」

浜面の言う真ん中とは具体的に言うところ『窓のあるビル』であり。

現『統括理事会』や他の主要な役職の者達も集まっており、『学園都市』全体の情報が直ぐに集まってくる所である。

「もう一度確認するがな…まず当麻と一方通行が『窓のあるビル』を中心とした第七学区全体。

俺と麦野が第七学区の北側のエリア。

焰と削板が東から南のエリア。

御坂と食蜂が西から南のエリア。

大ざっぱだが、ここは第七学区の守護を一番に考えよう。  
他の学区の守護も考えると、大して価値のない学区まで守らなきゃいけないからな、まっ…とりあえず、『窓のあるビル』さえ無事なら『学園都市』の全ての機能はつぶれはしないからな…奴らもそれを理解してるだろうから、下手に動きまわらず、一点集中で守ろう。つまり、作戦は敵が攻めてきたら、それぞれ近くの奴が対応。敵の数が多ければ、都市の軍で対応出来そうな敵を判断して連絡する」  
それから、と浜面は一日間を置いて。

「特に麦野！！絶対俺がいいって言うまでビームは撃つな！いいな！？お兄さんと約束だぞ！！」  
『はいはい』

本当に分かっているのか能天気な声で返事をする麦野に浜面はやれやれと頭を抱える。

「はあ…まあ後は自分の持ち場はしっかり守ろう！いいな！！皆でがんばろう！！」  
『了解…<sup>フジャー</sup>ウイ…ツス…了解…いいからさっさとシヤケ弁買ってこい…はあ…い！！…了解です…ZZZZZZZZ…』  
「はあ…まったく、何で俺が……ってあれ！？今ZZZZZZZZって言ってる奴いなかった！？」

何やら嫌な予感がした浜面は一先ずバイクを止めて、今度はしっかりとスピーカーに集中する。

「もっ回点呼取るぞ…皆ちゃんと返事しろ！」  
『ウイ…ツス…了解…シヤケ弁！…はあ…い！！…了解です…ZZZZZZZZ……ドドドッ！…ンキ…あっ！やべ…』

最後の男（恐らく当麻）はうまく途中で無線を切ったが、その最後に僅かに聞こえた来た来た愉快な音楽を浜面は聞き逃さなかった。

「オイイイイイイ！今間違えなく、ンキホーテ行ってる奴いたろ！！！！？」

浜面はヘルメット被っていたので最初の方の会話は外に漏れる事はなかったが、

その叫び（ツツコミ）は歩道を歩いている学生の足を止めるには十分なものだった。

「帰って来い！ンキの奴！！今すぐ帰って来い！！」

『ド ド ド ツ！ ～ンキ～ ウィ～ッス：一方通行ちよつと金貸して…あれ～やっぱシャケ弁はないか…あつ懐かしい！ゲコ太のパジャマ！！…御坂さん、まさかそれ買いませんよね…ZZZZZZ…ちよつと削板さん！こんなところで寝ないで！』

今度は先ほど聞こえて愉快な音楽が全員のバックコーラスとして無線から聞こえて来た。

「全員、ンキいつてんじゃねえか！！…ていうか『ZZZZZZZZ』の奴、ンキで寝てたの！？どういう状況！？しかも麦野！テメエ自分で買いに行くならそう言えよ！！  
ああ！もう何のなのお前ら！？行くなら行くで誘ってくれればいいじゃん…！！別に行きたくねえけど…！！」

仲間外れにされた悔しさを慣れないツンデレで隠そうとしてみたが、あまり似合わなかったので、次回からは使わないにしようと思面は心の中で決意した。





## 警備（後書き）

以上です。次回からはガチバトルになると思うので結構時間かかると思います。

ので、早く書けたところはさっさと載せました。

本編ですが、Mk2の設定はかなり最初から考えていたんですが、具体的に浮かばなかったので、あまり説明がありません。それからドン〇のくだりは…ただやりたかっただけです。すいません。

と言う訳で次回のバトルまでは結構間が空くと思います。では、今回はこの辺で失礼します。

分断（前書き）

どうもです！

色々言いたいことはあとがきに載せるので

第38話いきま〜す！！

## 分断

浜面が敵の存在に気付いた数分前。

「あの野郎…帰っちまうんじゃないのか？」

「大丈夫だって…なんやかんや言って浜面はやってくれる奴だ…  
それより！さつさと金貸してくれ」

そう言う当麻の手には色ペン、イヤホン、うちわ、のり、腕時計など何の統一性のない日用品で溢れていた。

「生憎金は持ち合わせてねエ…カードにしる」

そう言うと一方通行はポケットからカードを取り出して当麻に投げる。

「…お前これブラックカードじゃねえか！」

「それしかねえんだよ」

「安さが売りの　ンキで…家も買えるカードって…」

結局持ち合わせもないので、当麻は渋々そのカードで支払いを終えた。

唯一の救いは、レジのお姉さんがブラックカードをただの黒いクレジットカードと思い大して驚かなかった事である。もしも、このカードの事を知っている店だったら、常連になって貰おうとサービスを提供してくるので、かなりの時間の無駄になっていただろう。



「ありがとございました〜またお越しく下さいませ〜」  
「はいはい」

レジのお姉さんは当麻が使ったカードがどれだけ凄いものかも知らない様子で、恐らく全ての客にしているであろう在り来たりな挨拶を当麻と一方通行に送り、当麻もそれを適当に返すと店を後にした。

~~~~~

買い物を終え、当麻、一方通行は普段と違い、祭りで人の数が増えた街の中を歩いていて、傍から見れば、普通の友人同士が歩いているようにしか見えないだろうが、彼らの正体を知っている者達が見れば、発狂したくなるほどおかしな光景であろう。  
何せ、その気になれば本当に世界を崩壊させるほど、パワーのインフレが起こっている二人のペアなのだから。

「来やがったなア…」  
「ああ…そうだな」

人込みを避けつつ当麻の隣にいる一方通行が無表情で呟き、当麻は

ただそれに頷いた。

「なあ一方通行…どうしてお前は戻って来たんだ？」

当麻は一方通行の方に顔を向けて尋ねたが、一方通行は変わらず前を見たまま歩き続けた。

「招集が掛かったからなんて真つ当な理由じゃない筈だ」

「……お前も薄々感ずいてるんじゃないのか？」

「……『奥』で何かあったのか？」

「俺もよく分かってねエ…ただ、異変に気付いたのは風斬の奴だ…」

風斬。という懐かしい名前に当麻はピクツと反応する。

「昔は、極稀にある変わった力を感じる事があったが、今ではほぼ毎日感じるらしい」

「…どんな？」

「だから、気付いてンだろ？おかしな力に……じゃなきゃお前が『統括理事会』に力を貸す訳がねエだろ…」

やっぱりお見通しか、といった感じに当麻は口元が緩んだ。

「でも、それが何なのか分からないっていうのは本当さ…でも絶対面倒なことになる」

「何かあったのか？」

「……この前パチンコで大当たりした」

「アア…そりゃ世界の終わるなア」

割りとは本気で頭を抱える一方通行にイラツとしつつ、

当麻は先ほど買った日用品の入ったビニール袋を一方通行に見せ。

「まっ！そんならないようにがんばりましょっ」

~~~~~  
~~~~~

（クソッ！何だっただ！？急に魔力があちこちで感じるようになってたぞ！！）

先ほどまでメンバーのやる気のなさにウンザリして帰ろうとした浜面であったが、  
今は何時になく真剣な顔つきでバイクを走らせていた。

（今回の侵入者の主力は『あの3人』。例え他に仲間を増やしてたとしても、主力と呼べる連中は増えない筈だ。つまり、今感じる複数の魔力は囿…）

今回の侵入者は、『絶対能力者』でも手こずると予想される程の者たちであり、

『絶対能力者』の強さを良く知る浜面は、それほどの戦力をすぐに用意できるとは考えられなかった。

(けど、何だコイツら！？一人一人感じる魔力の桁が違う！！)

普通なら、その強大な存在を隠すために自身の力を抑えるのがセオリーであるが、

今回の敵は違っており、力を抑えるどころか全力ではないかと思う程の魔力を放出し、感じられる数も明らかに3人などと少数ではなかった。事の深刻さを感じた浜面は無線に向かって怒鳴る。

「おい！バカ共！呑気に買い物なんてしている場合じゃねえぞ！さつさと持ち場に戻れ！！」

『何よ…急に騒がしいわね…』

一番初めに応答したのは御坂だった。

「敵が来たんだよ！！」

『えっ！？』

「みんな仲良く買い物なんてしてる場合じゃねえんだよ！ちゃんと持ち場に着け！！」

『うん…ていうか、実際に皆同じ場所には集まってないわよ…当麻があんたをからかうから皆近くの店に行けって言ったから…』

「そっそうか！そいつはいいニューズだ！」

俺をからかう為だけにあんな事したのか。

と若干の怒りは感じるが今は素直に喜ばうと浜面は心に誓う。

「当麻達はどうした！？無線にでねえぞ！！」

『知らないわよ…でもあんたが気付いてるなら、アイツらだって気付いてるんでしょ？』

「だから、それを…！！」

言いかけた途中で浜面は口を閉じる。

今感じている複数の敵以外にも新たな力が、この街を包んでいる事を感じ取ったからだ。

だが、その力を浜面は知らない訳ではなかった。寧ろ良く知っているモノだった。

「この感じは敵じゃない…一方通行か!？」

~~~~~

当麻、一方通行は『窓のあるビル』の屋上に来ていた。

「おお、流石は風水。父さんが『御使墮し』エンゼルフォールを発動させた原因なだけの事はある」

地面に手をつけて敵の探知を行う一方通行を見ながら当麻はそんな事を口走る。

今、一方通行は自身の能力を使ってこの学園都市にいる魔術師の探索を行っていた。

だが、ただ一方通行の力だけを使うのではなく。

彼を周りに色ペン、イヤホン、うちわなどを囲むように置き、風水

による力の増幅を行っている。傍か見れば、それほど大した事をしている様には見えないが、その効果は絶大である。何せ、嘗て世界を混乱に陥れた魔術『エンゼルフォール御使墮し』を引き起こしたのは、この風水が大きな影響していたのだから。最も、その様な回りくどい事をしなくても一方通行は都市を囲うに十分な力を持っているが、敵の戦力も考え、力を温存できるこの方法を選んだ。

「確かに…ここまでとは思わなかった…大した出力じゃねエのに都市を一気に包み込みやがった」

「でっとうだ？」

「まだ、包んだだけだ…これから…何だア！？コイツら！？」

突如、一方通行が大声を出した。

「どうした！？」

「見てみる…！」

見てみる。と言われた当麻は一方通行に近づくと左手を肩に乗せ、集中するように目を閉じた後、何かを悟った様にその顔色を曇らせた。

「これは…」

「コイツは想定内か？」

「信じられない…他にもいたのか…」

「あア…これが奴らが今まで攻めてこなかった理由か…」

「…ずっと探してたんだ…コイツらを…」

「だが、なんつウ数だ…！」

「ああ…コイツは予想外だ…いやそれ以上だ…」

「どうやら、本気で『学園都市』に喧嘩売るつもりらしいなア…」

状況を把握した当麻は一方通行にの肩に乗せていた左手を放す。

「どうする気だ？」

「場所を変える…まさかここまで本気で来るとは考えてなかった。もしもコイツらと学園都市（こく）で本気でやりあったら…この街は終わる」

そう言うと、当麻は左を地面につけ。

「神の右手は全ての幻想を破壊する。そして、神の左手は全ての幻想を生み出す」

次の瞬間。当麻を中心とした地面に円が描かれ、その中心や外側に見た事もない様な模様や文字が浮かび上がった。

「空間移動型の魔法陣だな…だが、こんな式は見た事がないな」

「『混沌（カオス）の産声』…この世に存在する空間移動型の魔法陣において…最強の魔法陣だ」

「……確かア、ギリシャ神話では、この世のカオスから始まったっていう言い伝えがあつたなア…始めから存在していた筈のカオスの産声。つまりはカオスの始まりを意味する…随分と矛盾した名前だなア…つまりそれだけ無茶苦茶な魔術つて事だア…」

「詳しいな…勉強したのか？」

「魔術の生い立ちに関わりそんな神話や逸話は一通りなア…だが、ギリシャ神話を元にする魔術は珍しい…何より、その式…お前が考えたのか？」

「いや…これはアレイスターが考えたものだ」

アレイスターという嘗ての宿敵の名前を聞いて、一方通行の眉がピクツと反応した。

「…あいつの遺産か」

「実験の産物だ…まっ理論を考えたはアレイスターで完成させたのは俺なんだけどな…」

「それで、どうするんだア？」

「これで俺達とコイツらだけを移動する」

「そんな事、出来んのか？」

「言つたる？これは最強の空間移動魔法陣だ。魔法陣内に入っているものだったら、人でも物でも異動させたいものだけ好きな所に移動出来る。ただ、的確に異動させるモノを位置を把握しとく必要がある

だから、お前には引き続き探知を続けて貰う」

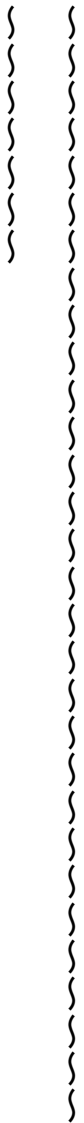
「アア…分かった…」

「一様言つておくけど…この魔術はこんだけチートっぽい説明しているが、片道だけだ。帰りの手段は用意されてないぞ」

「いらねエ心配だア…俺を誰だと思ってる？」

余裕の様子的一方通行に当麻はニヤリと笑って返す。

「ふっ…そうだな…アクセラレータ一方通行」





急に現れた多くの魔力に浜面はどう対応すればいいか迷っている。新たな問題の発生を感じさせる魔力が浜面の神経を刺激する。

「今のは……………魔術だな…当麻か!？」

『ちよつと今の何!？』

「…当麻が何かやった……………恐らく空間移動型の魔術で…どこかに行った」

『何でそこまで分かるのよ?』

「さつき感じてた何十つて魔力が急に消えた。恐らく当麻が危険と判断して、この街から外に異動させたんだ」

先ほど不吉を予感させた魔力の数々が減った事は喜ぶべき事なのだろうが、

それと引き換えに当麻と一方通行がなくなった。

それはつまり、最初に考えていた作戦が使えない事を意味する。で、浜面にとっては一つの問題が消えた事よりも、当麻と一方通行がいなくなった事の方が重大であった。

「これも相手作戦か…!」

『でも、あの二人が態々場所を変える相手って一体何よ!？』

「さあな…とにかく俺達は当麻と一方通行なしで戦<sup>や</sup>るしかない…ちやんと連携しろよ」

『いや…それがさ…』

急に無線の向こうから御坂の申し訳なさそうな声が聞こえてくる。

「どづした?」

『食蜂の奴、どっか行っちゃってさ…』

「……………」

『あーあー！聞こえますか？』

今度は無線の向こうから御坂ではない男の声が聞こえて来た。

「その声、焰か！？」

『あつ！浜面さん漸く繋がった！何か無線の調子おかしくて…』

先ほどから感じていた疑問を言葉に出され浜面は少し考え込み。

「おい、焰、御坂お前から今どこにいる？」

『私は、そうね…ここからだと言盤台寮が近いかしら』

『自分は…そうですね…あつ元三沢塾の近くです…』

「麦野がいるのは第三学区のホテル…他の二人も違う学区に行つてるとしたら…届くのは大体第七学区内だけか…範囲が狭まされた」

『無線これつて範囲は都市全体でしょ？』

「ああ…最初に感じた魔力の時に何らかの魔術発動したのか…少なくとも神殿タイプの魔術だったしな…」

『まだ影響があるの？』

「さあな…今は魔術それも感じないし、無線機が完璧にダメになるって訳でもないみたいだしな…何にしる長距離の無線は無理だ…」

『あつそうだ！』

「どうした？焰…」

『いや…連絡したのはこれを伝えたくて…』

「何だ？」

『実は…削板さんとはぐれちゃいました…』

「……………」

『何か急に…この感じは…奴だ！！』とか新しいタイプみたいな事言い始めて、そのまま音速でどっかに行っちゃいました』

「あ”あ”あああああああ！！何なのアイツら！？どいつもこいつもあいつもそいつも！好き勝手動きやがって！！」

『今更の様な気もするけどね…』

と御坂が付け足したが、浜面はそれにも気付かず呪文のように文句を言い続けた。

だが、暫くするとそれがピタリと止まり、忌々しそくに自分のいる地点から北の方角を睨む。

「チッ！おい！後は各々で対応しろ…」

『どうしたの？』

「俺の仕掛けた探知魔術に誰か掛かった…間違いなく魔術師だ…」

『敵！？』

「分かんねえけど…恐らく態と…分断させる気らしい」

『俺が一緒に行きましょうか？』

「いや、最初の予定通りにお前は削板のサポートだ…」

『大丈夫なんですか？』

「相手が向かったのは第一学区の方だ…それなら第三学区の麦野にも近い。暴れてりゃアイツも気付くだろ…恐らく無線も通じないからこれが最後だ！お前らは自分勝手なDSの相方を探しつつ侵入者の相手をしろ…！それと」

途中で区切る浜面に二人は改めて無線に聞き入る。

「死ぬなよ…」

『…お互いに！』

言いたい事を述べた後、浜面は学区を出れば無線の意味がないと考え、無線機ごとヘルメットを脱ぎ捨てると、アクセル全開にし、第一学区へと向かった。



## 分断（後書き）

以上です。

次回からガチバトルって言うっておきながら、まさか次回に続くとは思いのほか長くなりました。

そうですね…まず言うておくことは当麻が使った『カオスの産声』のネーミングセンスについてですが、まず、空間移動をさせる魔術を考えた時、

空間を司る神を調べたところ、ギリシャ神話のカオスが出てきて、ある一説では、すで存在している筈のカオスの誕生する時、奇跡が起こるという一節が載っていたので

誕生＝産声みたいな安易な考えで、この名前にしました。

まあ、あくまでネット調べなので本格的に調べた訳ではありません。もし、詳しい事を知っている方がいれば教えてください。

これからの参考にします。

まあ「そんな話はないよ」って言われても、もう他のを考えるのも面倒なので

ずっとこれで行くんですけど…（笑）

そんなこんなで、今回はここまでです。

次回こそガチバトル！になる予定です。

ちなみにネットで空間の神って調べたら、

一番多く出てきたのバルキアでした。

いや…使えないって…

## 狼煙（前書き）

39話！

39話ですよ〜

いや〜まさかこんなに長くなるとは、

一番長い作品では当麻VS学園・ローマの38話でしたからね〜  
それを超えるとは…まあ長くなるとは思ってましたけど、

このペースで行けば100話くらい行けるかなって気になります。

などと調子にのってる私ですが、

これからもがんばっていきますので、

新たな決意と共に39話いきま〜す！

## 狼煙

### 第一学区。

そこは、学園都市の行政が集中している学区であり、他の学区と比べレストランやコンビニが少ない為、学生には住みづらい人気のない学区である。都市内での重要度でいったら中々高いものになるのだろうが、この学区いるのは大抵政治家なので、もし学園都市に何らかの危機が迫った場合はまっさきに避難指示が出され、他の場所へと移動する。つまり、今のこの学区にはこれと言って戦略的に目ぼしいモノはない。だが、一般人を気にしなくていいと言う点では、ここは戦いの場には打って付けだった。

「又オオツ!!」

変な声を漏らしながら、浜面は自身に飛んできたコンクリートの塊を間一髪で避けた。

「この野郎！テロリストは引かれても保険降りねえんだぞ!!」

そう言っつて浜面はバイクのアクセルであるハンドルを強く握るが、速度は限界地を出していない。理由は地形であった。人が余り住んでいないと言っつても、やはり学園都市の行政機関の集中。辺りにはズラツとビルが立ち並び、道路も他の学区と繋がる道路が入り組んで複雑なモノとなっている。そんな中でMAXの500km/hなんてものを出したら、曲がり角を曲がれずビルに衝突するのが関の山である。





経過しつつも、何の攻撃も来なかったので浜面は黙って敵のいる方へと歩く。

敵の気配に段々近づいて行くのを感じながら、進んでいくと自分の先に今までの道とは違う広い道路がある事に気付いた。出来れば直ぐに敵に見つかる事は避けたいので、浜面はビルの壁に張り付いてゆっくりと道路を覗きこみ様子を窺った。道路には人影はなく車も走っていない為、四車線という広いスペースがある道路ではあまりに寂しく、面積の無駄遣いのように感じた。

(誰もいないな…人払いか。なるほど一対一を御望みか…)

あまりにも異臭いがここまで来て何もせず時間をつぶす訳にもいかないで、浜面は覚悟を決め道路に飛び出した。

「おい！ワザワザ来たんださっさと出てこい！」

浜面の放った言葉に敵は驚くほど簡単に従い、その姿を現す。

3、4ブロックは先のビルの角から出て来たので、顔はしっかりと見えなかったが、遠目から見える、渡された資料の中どの人物かは直ぐに悟った。

「『侍女』か『なりそこない』が来るかと思っただが…お前か」

浜面の呟くような声が聞こえたのか、相手はニヤリと笑った。

「それはこっちの台詞だ。まさか上条当麻の右腕とやり合う事なるとはな…」

「お前はとっくにアイツの右腕とやり合ってるだろ？」

「ふっ、なるほど…確かにその通りだ。面白い言葉遊びだ」

敵は浜面を称賛しながら、ゆっくりと近づき、次第にその顔がはつきりと見える距離まで来ると立ち止まった。

「まあ、出会った以上やり合うしかない。そうだろ？浜面仕上」

「そうだな…右方のフィアンマ！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

（浜面はああ言ってたけど…当麻に一方通行抜きでどこまで出来るか…）

不安かられつつ第7学区を駆け回っているのは御坂美琴。

と言っても、ただ我武者羅に走り回る訳ではなく、自身の能力でビルからビルへ飛び移って本当の意味で駆け回っていた。その理由は自分の相方である食蜂操祈を探す為である。

（第7学区は殆ど見たけど…やっぱりいい……浜面の考えでは学区外にいて考えてみたいだけ）

敵の策略が無線の範囲が絞られた為、届いたのは同じ学区内にいる浜面と焰だけだった。無線が使えないとなると、この都市である特

定の人物の居場所を知るのは探査能力でもない限り不可能である。

（あれを使ってもいいけど…下手に都市にダメージを与える訳には  
いかないのよね…）

どうすればいいかと八方塞になつていと、

不意に次のビルに飛び移る途中で、何やら人込みの様な物が目に止  
まった。

本当なら一般人のトラブルなど無視して自身のやるべき事に集中す  
るべきなのだろうが、そこは、当麻に負けず劣らずのお人好し御坂  
気になつて少し離れた所に着地すると、そのまま人込み駆け寄る。

「どうしたの？」

「ああ…それが急に倒れたらしくて…」

答えたのは、警備員でも風紀委員でもないどこにでもいる普通の男  
性だった。彼が説明しながら指を差す方向を見ると一人の中学生ほ  
どの少女が道路に横たわっていた。

「事故？」

「いいえ…ホント急に倒れて…ああでも、その前に何かブツブツ  
いていたとか…」

今回の一件には関係ないかな。と判断し御坂はその場を離れようと  
したが、

突如、横たわっていた少女はムクツと起き上がった。

「君、大丈夫か？」

「…うつ…うつわあああああああ！！」

心配した一人の男が近づくと、少女は急に叫び声を上げ男に殴りかかった。

殴られた男はあまりに突然の事なので驚いていたようだが、少女自体にあまり力がないのか、ただシリモチをつくだけで済んだ。

「どうしたんだ！？コイツ！？」

「ううわッ！わぁッ！！」

「おい！落ち付け！！」

ただ暴れる少女に危険を感じた野次馬達は、とぼつちりを避け少女から距離を取った。そんな中、御坂だけは逃げずにただ少女を見つめ立ち尽くしていた。

「おい！君！逃げろ！！」

「うわあああああ！！！！」

「ああもう！うっさい！！」

御坂は面倒臭そうに少女のパンチを避けると、少女の肩に手を置いてビリビリっと軽い電撃を体に流す。

軽く、と言っても人一人気絶されには十分なモノであり、少女は悲鳴一つ出すことなく糸の切れた人形のように御坂に倒れ掛かった。

「きつ君は…能力者だったのか」

「救急車は？」

「あっさつき呼びました…でも時間が掛かるらしいです。どうやら同様に急に倒れた人が何十人現れたらしくて…」

「何十人も？」

奇妙な現象に御坂がこの学園都市襲撃の関連性を疑っていると、

「……………と……………を……………索……………止め」

答えは少女から伝えられた。

「何？」

「上条当麻と一方通行を詮索…足止め…上条当麻と一方通行を詮索…足止め…上条当麻と一方通行を詮索…足止め…」

「なっ！何を言ってるの！？どついう事！？」

御坂が大声で問い詰めたが少女は気を失ったらしく、それ以上何も言う事はなかった。

「チツ、折角の手掛かりが！」

「もしも…し！御坂さ…ん？」

突如、御坂の頭に女の声が聞こえてきた。

「食蜂！？」

「どうも…無線の調子が悪いから直接頭に語り掛けてま…す！！  
「色々言いたい事あるけど！今どこにいんの！？」」

急に一人で喋り出した御坂に周りで見たいた野次馬は戸惑っていたが、御坂は一々気にしている暇もないので気にせず続ける。

「敵が来たの！直ぐに合流するから！」

「ああ…ちよつと待って下さ…い。場所も含めて、今から合図を出しますから」

「合図……………？何の？」

「決まっているでしょう？」

食蜂がバカにするような声が頭に響き、  
その後、ドゴオオオンツと現実世界に爆音が鳴り響く。

「なっ！何だ！？」

「あの方角は…二三学区か！？」

野次馬達が慌てふためく中、御坂の頭の中では、爆発の当事者である本人からその意味が伝えられた。

開戦の狼煙だゾ

## 狼煙（後書き）

以上です。

すいませんでした！！！！

とガチで謝ってます！

あんだだけ次回はバトル、次回はバトルと言っておきながら

また、戦い前に終わらしてしまいました。

すいませんでした！！

まさか銀○をリスペクトしてくらって、

映画やるやる詐欺とか終わる終わる詐欺のまねごとまでするとは…

なんか○魂よりも銀○スタッフに似てきてるきがします。

いい訳としては、この後の戦いが思いのほか長くなりそうだったので、

題名の狼煙の名の通り、それらしく終わらせたいと思いここで一旦区切りました。

他にも、この後は食蜂が戦うので、

今月号の電撃大王のレールガンから得た新しい食蜂の様子を観察し、もう少し食蜂のイメージを変えて作ろうと思いました。

ただ、次回のレールガンで食蜂がピックアップされそうなので、もう少し、待とうかなとも思っています。

と、言い訳はこれくらいです。

とりあえずすいませんでした！！

## 勃発（前書き）

どうも。出来ました〜第40話です。

長！！

つといきなり後書きにみたいになりましたが、

長い！なぜバトルになると俺はコンパクトに書けないのでしょうか…

長いです。まあ詳しい事はあとがきに載せるんで

行きま〜す！



## 勃発

食蜂の上げた狼煙は、第二三学区から遠く離れた第一学区にまで届いていた。

「何やら騒がしくなってきたな……」

二人が無言で向かい合う中、先に喋ったのはフィアンマだった。

「まあ、たらたら話していても何も変わらん。さっさと始めようか」

フィアンマの提案に浜面は何も答えず、ただ刀を鞘から抜くという方法で答えた。

「日本刀のことは詳しくないが……なんだ？その普通の刀は？何も魔術的要素も吹きこまれていないぞ」

「そんなもん使わねえよ。相手が分からねえのに、何か一つの力しか持っていない刀を持って相手と相性が悪かったらどうする？」

「なるほど……確かにな。賢い選択だが、それは自分に切り札がないって言ってるものだぞ……」

「生憎。無能力者は必殺技って言葉から無縁の生き物なんだ……よ……！」

最後の一字を述べると同時に浜面は、地面を駆ける。

ただ、普通に足を走らせる訳ではない。魔術の力を最大限に生かし、人間の出せる速度を遥かに超えた速度。それは、十分にフィアンマの視界から抜け出せるものだった。浜面を完全に見失ったフィアン

マは、予想外の出来事に体が一瞬の膠着状態となる。

だが、あくまで一瞬のこと。フィアンマは浜面を探す為、即座に後ろを振り向く。

後ろ向いたのは特に理由があつた訳ではない。単純に前の視界から消えたなら一番敵を仕留めやすい後ろに異動した可能性が高いだけだが、今のフィアンマは頭でそこまでの思考が進んでいなかった。振り向いた理由は、悪寒とも思える嫌な予感、もっと具体的にいうなら殺気が背中から感じたからだ。振り向くまでに掛かった時間は1秒と掛からなかった本当に一瞬のこと。

だが、フィアンマの後ろには、その一瞬を利用した浜面が既に迫っていた。

「くっ！」

完璧に虚を突いた浜面は容赦なく右手に持った刀で切り掛かる。

狙うはフィアンマの首。人体の急所である。

防御は間に合わない。

唯一防御できる右手は、まだ腰の位置にある。

防御される事は出来ない、ほとんど無抵抗な状態のフィアンマに浜面は右手に持った刀でフィアンマの首を右側から刀を振り下ろすが、グチャン！

奇妙な音だった。肉と肉が何かがぶつかった生々しい音に金属と金属のぶつかった鈍い音を足したような不思議な音だった。その音源は浜面の刀がフィアンマの首を切ったモノではない。

浜面の刀をフィアンマの右肩から出た第三の腕が受け止めた音だった。

「チィー！！」

浜面の刀は、別に第三の腕で掴まれた訳ではないので、そのまま2

度3度攻撃をすることは可能だったが、浜面は欲張らず、後ろに下がって第三の手が届かない所まで距離を取る。

「初太刀で決めるつもりだったんだが、そうはうまくいかねえか……」  
「いやいや、今のはかなり驚いたぞ。まさか完璧に学園都市の人間でありながら、魔術であそこまでの速度が出せるとはな」

フィアンマは斬り付けられた第3の腕を傷口を手でなぞりながら呟いた。

斬られた腕が痛いという訳ではないらしく、ただ切り口から浜面の力を観察している様だった。現に傷口を一通り見た後、なるほど。とだけ呟いた後、斬られた腕の切り口は綺麗さっぱり消え去り、元の禍々しい赤い腕へと戻った。

「流石に5年近く経てば力も戻るか……」

「とんでもない。第3次世界大戦の頃に比べれば話にならんよ。やはり禁書目録がなければまともに扱いきれん」

「だが、前のように空中分解はしねえだろ？俺からすればそんな腕振るえるようになっただけでお前は十分チートキャラだ」

「いや、そうは言い切れん。今の右腕は長時間維持を目的として改造したんだ昔と違って、相手に合わせて安定した出力が出来るのが難点だ」

「……………なるほど」

フィアンマの説明に今まで無表情だった浜面の顔が余裕の色で溢れた。

「それだけ間抜けにヒントをくれれば十分だ。勝つ算段が出来あがった」

「そうか……なら、来い！」

「言われなくてもッ！」

次も、先に攻撃を仕掛けるのは浜面。

先ほどのように不意を突いた訳ではないので、フィアンマは即座に対応を取る。

やることは単純。ただ右肩から伸びる第三の腕を振るう。フィアンマの第三の腕は「倒すべき敵や試練や困難」のレベルに合わせて、

自動的に最適な出力を行う性質がある。第3次大戦の時は禁書目録<sup>タス</sup>の力も借り、さらにこの力を強大かつ完璧なモノとし、その力を目の当たりにした当麻は「RPGのコマンドに『倒す』がついてるようなデタラメさ」と評した。

だが、それほどの力があるにも関わらずフィアンマの攻撃は決定力に欠けた。

腕を振るっても避けられ、当たっても刃で受け止められる。

自分の出力が悪いのか、腕の不調か、フィアンマが悩んでいると浜面が先ほどと変わらぬ余裕の表情で語りかける。

「どうした？うまく出力出来ないか？」

「ッ！？」

核心を突かれて少なからず動揺したフィアンマの一瞬の隙を突き、浜面は斬りかかるがフィアンマも決して怯むことなくそれを受け止める。

「まっ無理もねえよな…俺みたいな無能力者相手じゃ…」

「そうか…考えたな」

納得した後、フィアンマは浜面を振り払って距離を取る。

「お前…最初から本気でやってないな」

「ああ正解だ」

浜面は手品の種を簡単に明かした。

「お前の力が強力なのは十分承知だが、それだけに安定させるのが難しい。それを常に展開出来るようにしとくつて事はかなりの欠点を残しとかなきゃいけないはずだ。少なくとも俺が考えられる欠点は……出力の不安定なのか、もしくは出力する相手の限定」

浜面の指摘にフィアンマは何も答えない。

「いや、どつちもかな？出すべき出力が不安定だから最初から俺を倒せる攻撃は出来なかつたし、相手を限定されてるから、思った程の出力が出せない。当麻の話じゃ、お前は昔、世界蔓延る悪意なんてとんでもないモノを相手に出力してたみたいだしな。最初からそういうモノを相手に出力出来るならしてるだろうし、何らかの制限がされてんだろう？」

浜面の質問に最初は無言だったフィアンマも、観念した様な笑いと共に語りだす。

「フフツ、流石だな。あの上条当麻がその力を見込んで補佐官に任命しただけの事はある。アイツの右腕、いや懐刀だったか？まあ絶大な信頼を寄せられていたらしいからな」

「別に俺は気にしたことはねえよ……あいつにとって仲間を信頼することは息をする事と同じくらい当たり前のだったからなまあでも、あいつの周りの女どもからは嫉妬に似た眼差しを向けられてたな。中には「上×浜」なんて本を作るうした奴がいたから、全・力で！阻止したしな！」

最後に強調的に言ったので、若干気まずさが生じたが、浜面はウホ  
ンツと咳払いをし空気を改めた。

「お前は今、一人の人間に対してしか出力が出来ないようになっ  
てるんじゃないのか？」

「だったら俺に対して最適の出力が出来ていない事が納得できる」

「別に確認を取らなくても核心してるんだろ？今の俺ではお前を一  
撃で倒せない事くらい」

見透かすようにフィアンマは質問を質問で返す。

「お前は始め、全く魔術で強化をせず俺の前に現れて、ただの人間  
の状態のお前に対して出力させるように仕組んだんだ。そうすれば、  
俺の力はただの人間な力へとなり下がる。そうして俺を弱体化させ  
たお前は、その状態より強い力で戦い、俺がそれに対応する前に倒  
すつもりだったんだろ？良い策だが、どれだけ元がひ弱でもいずれ  
強化の限界は来る。現にお前は先ほどから速度が上がっていない」

フィアンマの指摘に浜面は何も返さなかった。それはフィアンマの  
言っていることは、言い返す必要のない紛れもない事実だからであ  
った。始めに浜面は魔術を一切使わずにフィアンマの前へと現れ、  
その状態を力の対象とし、フィアンマの本来なら敵と同等の力を持  
てる能力を逆手にとり弱体化させた。

だが、弱くなったといっても、フィアンマの能力は「倒すべき敵や  
試練、困難のレベルに合わせて出力する」といったモノである。つ  
まり、相手に合わせて普段より弱くなる事があるが、その力は必ず  
相手より強い力になるということであるので、それでは、いくら弱  
くさせても浜面に勝ち目は無い。

だから、浜面はフィアンマを弱体化させた後に自身の力を強化し、  
それを越えた力でフィアンマと戦うという戦法を取っていた。だが、

それは浜面の強さに生じて新たな出力を生み出していけるフィアンマにも同じ事が出来るので、フィアンマが強くなれば浜面も強くなり、浜面が強くなればフィアンマも強くなるという事を繰り返し行う事になる。

もし、そうなった場合。どちらが、先に限界を迎えるかは言うまでもない浜面である。最初から相手に合わせて出力を変える力を持っているフィアンマとは違い。浜面はただの人間である。常に限界を超え続けながら戦える訳もなく。戦っていく内にその差は徐々に埋まって行くのは目に見えている。

それはフィアンマ以上に浜面自身が良く分かっている事だったが、それでも

「ああ……………速度だけならな……」

浜面の顔から余裕の色は消えない。

「なに？」

「お前の言った通り、俺は最初から決めていたよ。お前とは最初から本気でいかずに徐々に力を一つずつ上げていくことを……」

だから、と一旦間を置いた後、今まで片手で握っていた刀の両手持ちに変える。

「速度スピードが無理なら……………次は力パワーだ！」

そうやって浜面は一直線にフィアンマに向かう。

最初から見せた様な速度でもないの、フィアンマは第3の腕を浜面に向かって振り下ろし、浜面もそれに合わせるように刀を振り下ろす。そして、互いの武器はぶつかり合った次の瞬間には、フィアンマの体は後ろへと吹き飛ばされた。

「ガアアア！」

受け身も取れず、地面に叩きつけられたフィアンマは軽い悲鳴を上げる。

「クウツ…！なるほどな…さっきまでの速さだけを強化していたのか…」

予想していなかった事なのか驚いてはいたようだが、直ぐに何が起きたのか悟り体を起こす。

「自分の持っている能力をそれぞれ順番に上げていき、どれかで俺を倒そうってわけだな」

「ああ正解だ」

浜面は誤魔化しもせず、正解を認めた。

浜面がやるうとしてしている事は難しい事ではない。

寧ろ余りに単純で策とも呼べないモノだった。

簡単に説明をすると、浜面はフィアンマの破壊力・速度・硬度・知能・筋力・間合い・得物といった戦いに必要な要素に対して必要な出力を出来るという能力に対して、まず最初にそれらの力を全て弱体化させる。その後、先ほど述べた様にそれを越えた力で戦う。だがその時、始めから全ての要素において本気になる訳ではない。まず始めに一つの要素で戦い、それが限界に着たら別の要素に変えて戦う。それがまた限界になったら次の要素と言った感じに、それぞれ違う戦闘要素で戦っていきどれかで勝つ。それが、浜面の選んだ策であった。

「悪くない作戦だ。だが俺の力は、お前が別の分野で力を発揮した



からといって衰える訳ではない。

俺の右手は浜面仕上に対して必要な出力をするように設定している。お前が別の分野で強くなるにつれ、一つ一つの能力が強化されていって、最後には完璧にお前を越える事になるぞ」

「そんなこと分かってるさ…」

「単純明解でいいな。つまり、お前が俺を越えらる内に倒せれば、お前の勝ち俺がお前の限界まで耐えきれれば俺の勝ちって事か…だが、いいのか？この戦いは俺が圧倒的に有利だぞ」

「んな事は分かってる。けど、リスクなしに勝てる敵じゃねえだろ？」

それから、暫しの沈黙が続き、先に仕掛けるのはやはり浜面。

自身の出せる力のギアをうまく使い、策の通りにフィアンマの力を追い越し、それを追い越されればまた追い越す。一見終わりのないシーソーゲームに思えるが、それはフィアンマだけであり浜面の限界は必ず訪れる。

「どうした？<sup>パワー</sup>力の強化もそろそろ限界か？」

浜面の剣戟を受け止めながらフィアンマは浜面に向かってそう述べた。

また一つ、フィアンマに勝てる要素が減っているというのに、浜面は刀を握る手の力を一切緩めなかった。

「自分の勝率が減っていく中、大した精神力だ」

武器を合わせながら間近で見える闘志の消えない浜面の目にフィアンマはただただ称賛の言葉を送る。

「普通なら俺の出力が間に合わせないようと急ぐもんだが、お前

にはそれがない。

というよりは迷いが無いな。俺をまったく恐れていない証拠だ」

「なんでお前なんか恐れなきやいけない？」

フィアンマの嘘偽りのない称賛に対して、浜面はバカにされたかのような怒りが芽生えて来た。

恐らくそれは浜面だからこそ芽生えた感情であった。

「そもそも能力者でも魔術師でもなかった頃に第一次科学魔術大戦に放り込まれて、あの化物共の背中バカどもを守ってきた俺からしてみれば……お前ほどの力の差のある敵とは、暗部の頃から何千何百と数えきれねえほどやりあってきたんだよ！」

そう言っただけでフィアンマを力で押し付け、間合いを取ると左手をズボンのポケットに突っ込み一枚の黒い紙を取り出す。

(黒の紙：時空間系の霊装だな)

フィアンマが冷静に分析している間に浜面は霊装を自分の足元に投げ付け発動させる。黒い紙は張り付くように地面に着地すると、その形を四角から円に変わっていき、地面に黒い手のひら程の穴を作りだすとその中から狙ったかのように新たな刀が浜面の手元に向かって飛びだし、浜面はむしり取るように乱暴に掴むと、柄を握り振り回し鞘から抜き出し構える。

(二刀流。今度は手数で勝負ってことか……)

浜面の次の狙いを理解したフィアンマは笑って尋ねる。

「新しい一手か……さて後どれだけ奥の手があるのかな？」

「安心しろ、全部見せる前に片づけてやるよ…。」

短いやり取りの後、無能力者と元神の右席の二人は再びその力をぶつける。

## 勃発（後書き）

以上です。いや〜しんどかった。

書いてる途中で「もうええわ！どんだけ書くんだ！？」と訳の分からないツッコミをパソコン、正確には自分の作品に向かって言う自分にひいて、

途中で新約2巻の某おでこの広い先輩のように自墮落になっていました。

やっぱギャグとバトルでは断然バトルが難しいです。

世の中のラノベ作家はよくあれだけ厚い本の分だけ書けますね…  
やはりプロって奴か…

ああそういえば、謝ることが一つ、次回は食蜂の戦いみたいなこと言ってたのに、実際に浜面になってしまっていて、がつくりきた食蜂ファンがいるかもしれないので（そこまでたくさんファンはいませんが…）謝っておきます。

どうもすいませんでした。

これからの戦いで食蜂と削板がでるんですが、二人ともなんだか次の電撃大王に出そうなので、もうちょっと待とうかなって思います。

となると、結構先になってしまいますが…

それと、もう気付いていると思いますが、私は浜面大好きです。譲れません。この気持ち…あつても滝壺には負けますよ。

だから、納得できないくらい強くなっていますが、

アドバースは一つ。我慢して！！

これが終われば元の浜面に戻るから（笑）！！

もしくは数話前に戻ってください。あれが本当の浜面です！！

まあまたその内浜面の力とかについても本編で触れます。

と、まだ説明したい事もありますが、長くなりそうなので止めます。  
では今回はこの辺で

なんだか最近、後書きがブログよりも長いこと書いてる気がする。

## 特別編（前書き）

題の通りです。

何か書こうと思って、数分の構想を練った後、すぐ出来ました。

製作時間は1時間ほどです。



を求めてみたり!!」

一方通行「たくっあのクソガキ、何してやがんだ？」

浜面「あの青髪バカもバカだけど、あの子も何であんな状況になっただ？」

当麻「まあほっとく訳にもいかねえだろ…取りあえず俺達は時間を稼ぐ。その間に神裂とアニューゼ達は何とかうまく潜入してくれ」

神裂「了解です」

アニューゼ「わっかかりやした〜」

番外个体「でも先生。どうやって時間稼ぐの？」

当麻「そうだな…」

青髪「おらぁ！ワイの要求聞く気あるのか!？」

当麻「取りあえず、『何言っているか聞こえない』って書いて見せる」

番外个体「は〜い」

浜面「おいおい…それで大丈夫か？」

番外个体「見せたよ」

当麻「何だって」



番外個体「ご丁寧に向こうも書いてくれたよ。双眼鏡貸して」

浜面「ほい」

番外個体「なにになに…俺の要求はちゃんと叶えられるのか?」だつて」

当麻「女子生徒全員メイド服ってやつか? そうだな…まず相手の注意を違う事に逸らそう…よし、こつ書け、『裸エプロンじゃなくないんですか?』つてな」

浜面「何要求のグレードアップさせてんだ!? 全校女子生徒裸エプロンつて!!! ニューズが世界中巡るぞ!!!」

番外個体「『可能なんですか!?!』だつて」

浜面「のつてきたよ! 流石、男の欲望だな!!!」

当麻「よし、ここは一旦多少の困難感を出して、現実味を出そう『頼めるのは俺が知っている女子だけだけど、それでもいいか?』つて書いとけ」

浜面「全然困難感出てねえよ! お前が言うとりアリティが増すわ!!! マジで何人か女子やりそうだぞ!!!」

番外個体「『そうやって、モテない俺をバカにして笑うんだろ! 先生は何時だつてモテモテだもんな!』だつて」

浜面「メンドくせえ!!! 果てしなくメンドくせえよアイツ!!!」

当麻「チツ、刺激しすぎたか…よし、今度は現実感をなくして、  
そつだな…『俺のおこぼれでよかつたらやるぞ』って書いとけ」

浜面「どこが刺激なくなつてんだ!? 明らかにプレイボーイの嫌が  
らせ挑発だろうが!! それにお前が言うつとすっげーリアルなんだよ  
!!!」

番外个体「『後で写真を見せてくださいだつて』」

浜面「のつてきたああ!! もうプライドも何も捨てて欲望のまま  
にのつてきたああ!!」

一方通行「もう、くだらねエ時間稼ぎなんて止めて、直接ぶつ殺せ  
ばいいだろオ?」

当麻「確かにその方が楽だが、人質を一瞬でも危険にさらす訳には  
いかねえだろ?」

一方通行「チツ、ン? おい、また何か書いてあんゾ」

番外个体「んっ? なになに……………」お前達が俺言う事を聞く証  
拠が欲しい。3回まわつてワンと言え』だつて」

一方通行「チツ、調子に乗りやがつて」

番外个体「(一方通行限定)だつて」

一方通行「嘘つくんじゃねエよ! 明らからに付け足したろオが!?!」

当麻「仕方ねーだろ？打ち止めの為だ、アー君」

浜面「そうだ、仕方ないだろ？アー君」

一方通行「何で急にアー君呼ばわりしてやがんだア！？？」

青髪「オラア！どうした出来ないん言うんか！！？？」

打ち止め「わゝ助けてゝってミサカはミサカはちょっと飽き始めながらも助けを求めてみる！」

当麻「おい！アー君！！！」

一方通行「クソがア！」

クルクルクル。

一方通行「ワン！」

浜面「うお！本当にやった！！！」

当麻「何か無駄にカツコ良くやろうとして明らかに失敗してるな」

(注) どういう「3回まわってワン」か知りたい人は、銀 を読んでね

一方通行「……………」

番外個体「あつごめゝん間違いだった。『腹減ったからカレー作れ』だって」

一方通行「どんな間違いだアア!!!?」

当麻「仕方ないカレーの用意!」

一同「はい」

浜面「おい、また何か書いたぞ」

一方通行「今度は俺が見る!!!なんだア?『退屈だロボットダンスをやれ』だア?たくつぶざけやがって...因みに(番外個体限定)だ」

番外個体「そう。じゃあやるね.....ロボットパンチ!!!」

一方通行「アバアア!!!テメエ、ロボットダンスって言っただろっがア!?!」

番外個体「ロボットパンチから始めるロボットダンスなんだ」

ビシッ!ビシッ!

一方通行「微妙にうめーじゃねエか!?!」

浜面「おい、また新しいの出たぞ」

一方通行「今度は何だア?『モノマネ』やれだア?

チツ、仕方ねエ今度俺がやってやる.....番外個体の真似で、ロボットパンチ!!!」

スラリ!

ガシッ!

番外個体「エビの真似」

バコンッ！（バックドロップで一方通行を地面に叩きつけた音）。

一方通行「なア……………番外個体。お願いだから一発だけ殴らせてくれ。頼む…すっげエ優しくするから」

番外個体「いゝやです」

一方通行「ふざけるクソガキイイイ！！！！」

浜面「おい！もう何か全然違う事件起こってるよ！どうすんだよ先生！！」

当麻「仕方ない。こうなったら最後の手段だ！小萌先生お願いします！！」

小萌先生「はゝい！こらゝ青髪ちゃん早く下りてきなさい！」

青髪「はゝいすぐ行きまゝす！！」

当麻「流石小萌先生。これにて一件落着」

一方通行「納得できるかアアア！！！！！！」



## 特別編（後書き）

いや〜ギャグはいい。

おちが適当でも怒られることはそんなないしね！

は〜でも、すっかりギャグ書いたの久しぶりだから、すっげ〜楽しかったです。

一方通行と番外個体の流れは、頭で想像しやすくて書いててすっげ〜笑えてきました。

どいうのか想像できない人は○魂を読んでね（笑）

浜面もやっぱこういう浜面が一番好きかも…

では今回はこの辺で…

## 逢引（前書き）

どうもです。

42話！42ですよ！

何気ない数字に見えるかもしれないですけど、

実は結構意味のある数字なんでよ。

例えばドラゴボールのコミックスは42巻が最終巻なんですよね

他にもえ〜と…他にも…え〜

そんなこんなで42話行きます！！



浜面とフィアンマ、二人の戦いは死闘と言ってもおかしくない激しい攻防を繰り返していた。パワー、スピードと限界を抜かれた浜面が次に選んだ戦闘手段は刀を二本持って攻撃の手数で勝負を挑むというものだった。最初の内は浜面有利であっても、次第にその力に対応していくフィアンマに互いの力を越えては越え越えては越えの泥沼の戦いが再び続いたが、一瞬の間に生まれた隙を突き、フィアンマの防御をくぐり抜けた浜面の刀がフィアンマの頬をシュツ！と掠める。

「うおっ！」

隠そうともせず驚きの声を出すフィアンマに浜面は続けて太刀を浴びせようとするが、そうする前にフィアンマは後ろへ飛び、浜面の刀の届かない距離を取った。

「チツ掠ったな……」

「傷がつけんのが嫌だったら、あんまチヨロチヨロ動くんじゃねえよ。その微妙に長い髪はっさり切っておかっぱにするつもりなんだからよ」

浜面の余裕にも取れる挑発にフィアンマは何も言い返さず。切られた頬を親指でなぞり、ついた血を見ながらフツと笑う。

(なるほど…これが浜面仕上か。絶対能力者や聖人のような派手さはないが、こいつは文句なしに強い)

暫く、ただの沈黙が続いた。

あまり時間を掛けたくない浜面は一旦呼吸を整えた後、再びフィアンマに挑む為に地面を蹴ろうと足に力を入れてみると。ピリリリッ!。と浜面のポケットに入っている携帯がなった。タイミングを外された浜面は出ようかどうか迷っていると。

「別に出ても構わんぞ。恐らくお前の大將だろう…」

とフィアンマが余裕の笑みで許可を出してきた。

どうするべきか迷ったが、フィアンマの言った大將からという言葉が気になった浜面は覚悟を決め、フィアンマから視線を外さずにポケットから携帯を取り出すと通話ボタンを押し、耳当てる。

そして、携帯から聞こえてきたのは。

『あつもしもし!浜ちゃん!?俺だよ俺、実は事故つてさ〜今から言う口座に100万円振り込んで羽毛布団買ってくんね?後、結婚しよう』

ピツと短い音と共に即座に電話を切る。

間違い電話だ。と心の中で納得させようとするが、やけに聞き覚えのある声だったので本当にそれでいいのか頭を悩ましていると、再び浜面の携帯が鳴る。

ツツコマない。絶対にツツコマないと心の中で繰り返し、いざ携帯を耳当てる。

『もしもし浜面か?そっちはどうなってる?』

「さっきの何だったんだ!？」

浜面の決意は2秒で無に還った。もしもまたふざけてきたのだったら、

まだ無視できたのかもしれないが自らのポケを無かった事にすると  
いう高度なボケを前には、

浜面のツッコミ魂が黙っていなかった。

「まず第一に俺、お前に浜ちゃんとか呼ばれた事一度もねえだろ!  
!それとオレオレ詐欺とねずみこうと結婚詐欺って犯罪重複しすぎ  
だ!！」

『おっおう…取りあえずこっちの状況を説明しようと思ってるんだ  
けど…』

「何で若干引いてるんだよ!?!100%お前のせいだろがああ!!  
!」

最早、目の前のフィアンマの事も忘れ浜面は本気のツッコミを続け  
たが、流石にのどの限界がきたので一旦落ち着く事にした

「はあ…はあ……………まあどうしてんのかは聞いときたい事だな。

一体どんな理由で学園都市を出て、今どこにいるんだ?」

『え〜つと……………どこにいますか?』

「一方通行出せエエエ!お前とクイズ大会する気はねえんだよ!」

普通に聞いてきたのなら、まだ聞く気はあったが女子高生の様なお  
どけた感じの声に浜面はのどの限界も忘れて叫んだ。

『いや〜一方通行はちょっとね〜テンション上がっちゃってさ〜聞  
くえる!』

そう言った後、携帯の向こうからガサガサッと何かを動かす音が聞こえた。

恐らく当麻が携帯を動かしているのだろうと浜面が推測している。

『ヒャーハアー！どうしたアア！！？もうちよつと碎き応えのある奴はいねエのかアア！！？』

その後、再びガサガサッと携帯を動かす音が聞こえ、数秒間沈黙が続いた後。

『…なっ』

「何があつたんだよ！！？すつげえー」「ヒャーハアー！」してんじやねえか！！今どこだ！！？」

『今…？今はね……………ハワイに来てまゝす！』

「……………ハア？」

『ワゝイ！』

「そんな一発ギャグ求めてねえよ！！どういうことだ！？何で俺達在必死こいてつ戦つてる時にお前等はハワイにまで観光してんだ！！？」

『まあ正確にはハワイのもつとの南の方で海しかない所だけだな』

「この際どこでもいいわ！！何でそんなところ行つてるんだ！？何してんだ！？ビキニガールとランデブーか！？」

浜面の問いに当麻は若干の間を置いて。

『あゝビキニガールとはランデブーしてないけど……………26体の天使ちゃん達とならランデブーしてるぞ』

「……………はっ！？」

冗談でも言っているような口調で当麻は言ったが、浜面はゾクツと

襲う嫌な寒気に体を震わした。

「なっ何言って…!? に…じゅう…ろく?」

「ああ、やってくれたぜ…あの野郎ども」

ここにきて漸く当麻の軽い感じが消えた。

「よくもまあ…こんなに集めたもんだ」

「天使って…あの天使か!？」

「天使」。

それは天界に住む生き物。神の使い。

様々な呼び方が存在し、魔術師の間では異能の力の塊と認識されてきたが、『第3次世界大戦』以降その存在が明るみに出てからは、その名の意味は大きく変わって、多くの国で核に代わる新たな『兵器』として、世間に知れ渡っている。

それがどれほど強力で凶悪なものか浜面は実際に戦った事がないので知らないが、嘗ての戦友。風斬氷華という似た様な力を持つ能力者を見た事がある為、その力の凄さは大体の想像が出来た。

「ああ。純粹なものとは言い難いが、かなりそれに近い出来だ」

「あの膨大魔力は…天使のものだったか…」

浜面が一人で納得していると、当麻は気にせず続けた。

「恐らくサーシャの様な特殊な体質の人間に天使を宿したか、元から風斬みたいな素質をもっていたのか…どっちにしても力でいったら本物の天使とはちよっと違うけど、そんなちよっとした違いでどうにかなるほど優しいモノじゃないからな。取りあえず学園都市でやり合う訳にはいかないだろ? だから、ハワイまで飛んで来た

んだよ』

「……………倒せるのか？」

『俺達を誰だと思ってたんだ？倒す分には問題ねえよ。ただ、かなり時間が掛かる。お前の方はどうなんだ？』

「今、当事者と戦ってる所だ」

ほとんど携帯にしか意識を向けていなかった浜面だったが、当麻の質問に合わせるようにフィアンマに目を向ける。

『そうか。まあそいつらを倒したところでコイツ等は消えないだろうからな。結局戦う以外に道ないみたいだ。まっ、そんなこんなで少なくとも俺達は暫く帰れないから学園都市はお前に任せる。頼んだぞツラ』

「ツラじゃない桂！って間違えた。浜面だ！！っーか何言わせんだ！！」

『取りあえず俺達さ。この戦い終わったらハワイでビキニガールとランデブーするんだ…』

「どっかの『重い物体』の次回予告っぽく死亡フラグを立てるな！！」

『そんなこんなで『ヘビーオブジェクト第4巻』みんな買ってね』

「…」  
「宣伝すんなああ！！」

既にガチャッと音と共に携帯は切れていたのだが、そんな事も気にせずツツコム浜面。因みに敵を目の前にし、そんな風にツツコムにいる浜面の姿が演技なのか本気なのか分からずフィアンマが攻撃するのを戸惑っていることを浜面は知る由もない。



## 逢引（後書き）

以上です。

ようやく天使が出た事が説明出来ました。

正直38話のあれだけじゃなんのこんちゃっ分からないので

早く説明したかったんですが、

どこで入れるべきかと迷って書くのが遅れていったので

最終的にここにしちやいました。

また、途中でギャグを入れるのはやりやすいんですが、

どういう風に戦闘場面を挟んでいくのが難しくて、時間がかかりました。

まだまだやりたいこともあるので、きつと次回の更新も遅れると思います。

それから読んでるうちに気付いたでしょうけど、ランデブーって言葉ちよつと気に入ってます。

タイトルの逢引って今回の話と何の関係もなく見えるでしょうけど、ランデブーの意味として逢引があったので、ただそのまま使っただけです。

深い意味はないですから

それとなぜかこういう長編を書き始めると他のギャグ回の構想が浮かんで、

無性に書きたくなってしまいます。

まだまだ書くことはあるので、正月までに終わるか…

あっこれちなみに予定ギャグ回のヒントです。

では今回はこの辺で



11月に第5巻だって！？新約の方で頼むよカマチー…

天使（前書き）

どうも、43話ですね…

あっこれ以外言う事ありません。

しいて言うなら…遅くなってすいません!!  
そんなこんなで43話行きます!!

## 天使

当麻からの携帯を切った後も浜面は携帯を鬼の様な形相で睨みつけてきた。

「はあ！はあ！」

「……………」

思いきり息を切らしている浜面にフィアンマは喜怒哀楽のどれでもない無表情でただただジーっと視線を送り続けていた。

「何だよ！？」

「いや、少し待っててやろうか？」

「氣イ使ってんツじゃねえよ！！！」

浜面は今に戦いを再会しそうな雰囲気を出したが、フィアンマはそれに応えようとしなかった。

「まあ落ち付け。俺も少しばかり休憩したいと思っていた所だからな……………話がしたい」

「話だあ？」

何を今更と浜面が吐き捨てるように言ったが、フィアンマは気にも止めず続ける。

「ああ。お前が相手になったのは丁度いい。少し尋ねたいことがある

ってな」

「……………俺に？」

「上条当麻の事だ。一体に何があった？」

隙あらばフィアンマが話している内に攻撃を仕掛けようと思っていたが、

当麻という一言に浜面の方が興味を持つてしまった。

「昔と随分と…変わった…根っこの部分は変わってないんだろうが…どこか、こう…」

「無理してるか？」

うまく例える言葉の出ないフィアンマに浜面が後押しするように言葉を出す、

フィアンマはどこか納得するように頷いた。

「そうだな。確かにアイツはどこかおどけたところがあったが、昔はあれほどじゃなかった……………あいつに最後に会ったのは第二次科学魔術大戦が終戦した後、それもほんの僅かな時間だったが、俺は悟った。何かあったってな……………」

フィアンマは一旦言葉を区切り。

「一方通行と共にアイツと肩を並べる存在だったお前なら何か知ってるんじゃないか？」

フィアンマの問いに浜面は無表情だったが、その脳裏ではとある事を思い出していた。

「別に俺はアイツから直接聞いた訳じゃない。たまたまその場に居



帯をたたむと。

「まっ……こつちも人の心配してられる程、楽な事態じゃないんだけどな……」

バゴンツ！バゴンツ！と轟音が響く空を見上げた。そこにいるのは、当麻と同じくこの太平洋に連れて来られたとある『神上』が今まさに強烈な一撃をおみまいし、ボロボロと白い肉体が崩れる天使の喉元を掴んでいた。

「天使って言っても本物じゃなきゃこの程度かア……」

そうつまらなさそうに呟いたのは、背中から噴出する黒い翼を羽ばたかせて宙に浮く一方通行。彼は天使の様子を少し観察した後、投げ捨てるように手を放し天使を海に落した。落とされた天使の方はというと、指一つ動かさず重力に従うがまま海に落ち、ドバアン！という音と共に波と水しぶきを上げた。

（浜面にあーは言ったけど、『あの状態』の一方通行でやれるならそこまで時間は掛からないかもな……）

などと一人で納得していると一方通行が当麻の方を向き。

「おい！当麻アア！！いい加減お前もやれ！俺にはつかやらせてンじゃねエ……」

「はいはい今行きますよ………ッ！？一方通行下だッ！！」

当麻の言葉に一方通行は反射的に体を横に振る。

その直後、一方通行の真横を氷の槍が突き抜ける。

「チイッ！」

思いもやらぬ攻撃に態勢を崩された一方通行は次の攻撃を避けるために

バツ！と黒い翼をはばたかせ直ぐ様その場から離れようとしたが、その行為を一方通行は直ぐに後悔する事になる。

普通なら慎重に移動する先にも注意を払う一方通行であったが、急な反撃に驚きそれを怠った為、一方通行は気付けなかった。

移動したその先に口らしきものから光を放ち何らかの攻撃の準備を済ましている天使がいる事に。

「ッ！（受け切れるか！？）」

どんな攻撃も跳ね返す一方通行の能力であっても、例外は存在する。受け切れるか分からない天使の一撃に一方通行は完璧に防御の態勢に回っていると。

「オラアアッ！」

突如割りこむように現れた当麻が右腕で天使に殴り飛ばした。

殴られた天使はそのまま海に叩きつけられると、その数秒後に海の中で放ちかけていた力を爆発させ、

隕石でも落ちたのではないかと錯覚させる程の水しぶきを上げた。

それを見た後、当麻は翼で宙に浮く一方通行の方法がバカにも思える程簡単に、まるでそこに地面があるかのように宙に立った。

「大丈夫か？」

「あア問題ねエ……だが、どういう事だア？」

一方通行は海に落ちる天使を見つめた。

それは先ほど一方通行に向かって氷の槍を飛ばしたものでもあり、なお且つ先ほど一方通行に強烈な一撃をくらって動けなくなっただけでもあった。

「仕留めてはいねエだろうと思ったが、体はもう使い物にならなかつた筈だア」

と一方通行が腑に落ちないといった感じに呟いていると、答えは直ぐに分かった。

難しい事ではない。動けない程壊れた体を動かす手っ取り早い方法はその体を治せばいい。ならばどうやって素早く体が治せるのか。答えは海水にあった。

天使の崩れた体に海水が磁石の様に体に吸い寄せられて、崩れ部分を補うように手や足など体の一部へと形を変えていった。

「コイツら…全部『神の力』。ガブリエルか!？」

「ああ…水の象徴とされる天使」

「体がぶっ壊れても水で代用が利くって訳かア…」

「おまけにここは海の上。体を失ってもいくらでも再生できるな」

当麻はヤレヤレといった感じに溜息をつく。

「周りに迷惑をかけないつもりでここにしたが、場所が悪かったな。これもアイツ等の策か…」

言いかけた途中でドパアーン!と当麻が先ほど殴り飛ばした天使が海から現れ、他にも先ほど一方通行と戦いでやられ、海水で完全復活を遂げた天使達、合計26体が当麻と一方通行を囲んだ。

「だが、何をどうすりゃこれだけの数を揃えられるんだア？」



「お前の感知結界の中だと、サーシャと同じ天使を宿した奴の存在を感じたんだが…これはミーシャの様な本物ではない」

「だとしたらコイツはア」

「人工天使」

当麻と同じ考えであることが分かり一方通行はもう一つ確認したい事があった。

「つまりは…アレイスターの遺産か？」

「……………いや…ありえない。アレは完璧に破壊した」

「なら、ほぼ独学でコイツ等を作ったって言うのか？ありえねエぞ、本物に比べりゃ出来底ないだが、今まで魔術師が作ってきた人工天使とこれではレベルが違う。格段に精度が上がってやがる」

「ああ調べる事が色々ありそうだが…」

と当麻が一旦区切った瞬間。当麻に向かって天使の造り出した氷の槍が襲いかかり、当麻がそれを右手で受け止め、一瞬で破壊した。

「まずはなんとかしねえとな…」

「でっ、どうすりゃコイツ等を倒せる？」

「どんな天使にも元になってる力、つまりは核がある筈だ。それを壊せば…」

と今度は言い終える前に2体の天使が二人に襲いかかり、当麻は拳で一方通行は翼を使い一撃で天使を返り討ちにした。だが、それだけではやはり天使は死なず。直ぐに海水を体に吸い寄せて修復をした。

「さっさと片付けないと海が干上がって今年の海水浴は中止になっちまうな」

「生態系の変化を心配するのが普通じゃねエか？」

呆れたように返した後、当麻と一方通行は横並びから背中を合わせるように位置を変え。

「さて…どうだ？そろそろ鈍った感を取り戻してきたんじゃないか？」

「ハッ！リハビリなんてしなくても、俺は何時でも本調子なんだよ」

そうかよ。と当麻が笑って返すと、一方通行は首の電極チョーカーに手をやる。

そして、昔からある『私生活用』と『能力使用用』のスイッチとは別にもう一つの用意された特別なスイッチをスライドさせる。

「ミサカネットワークを遮断。天界とのネットワークを構築。オペレーション『Angel』」

一方通行の言葉に反応するように電極チョーカーはピツピツという機会を出した後。

突如、一方通行の目の色が赤から7色の色が交互に光る虹色の目へと変わり。

その体からはバチバチツと普通の電撃とは明らかに違う火花が飛び散り、

頭上には光る丸い輪っかが現れる。

そして力の象徴であったドス黒い禍々しい翼が神々しい白い光を放つ翼へと変わった。

「さて、飯の時間だ。たらふく食わせてやるぜドラゴン！！」

そう言いながら当麻は右腕の腕まくりをし、右手の調子確かめるよ

うに2、3回閉じたり開いたりを繰り返した後、当麻の右腕、正確にはその周りの空間が不自然に歪み、透明な『何か』が姿を現す。

「油断すんなよ。最強！」

「テメエもな。最弱！」

上条当麻に一方通行。

世界最強の力を持つ二人の力が解き放たれる。

## 天使（後書き）

さて、ここまでできましたよ。

最初に言っておきますが、天使との戦いはそこまで具体的にやらな  
いと思います。

なぜならしんどいから！！

天使とか、一方通行の天使かと当麻の戦闘態勢とか、言葉で表すの  
すごい難しかった。とりあえず一話書きあげること、作家つてす  
げーなつて思います。

さて、色々頭の中で話しの構想は進んでいるんですが、それで複線  
を多くいれすぎて回収できなかつたらどうしようって、若干不安に  
なってます。

では、とりあえず今回はここまでで、次回はいいい加減あの人を出す  
よ！

正直今回の話は最後のやり取りがやりたかっただけです。

## 食蜂（前書き）

さて皆様：お待たせしました。

題名の通りです。

待ちに待ったあの方が戦います。

食蜂が出る小説はあっても戦う小説は見た事がなかったので、

苦労しましたが、がんばりました！！

それでは44：あつ忘れてた。

とある魔術の禁書目録映画化決定おめでとう！！！！

ちなみに私は先に3期で19巻までやってロシア編を映画化が希望です。

最後当麻君がアレした所で終わるとか：かっこ良くない？

そんなこんなで44話行きます！！

## 食蜂

二三学区。航空、宇宙開発などを目的とした学区であり、学園都市の中で最も未来的と言える学区である。空港としての役割の他に、学園都市の制空権を守る為の戦闘機や無人ヘリなどの開発も行われている。そのため学園都市の中でも機密度が高く、荷物を送るときにも学区名以降を記さない嚴重さである。

だが、戦闘が始まってから数分後。

今となつては、その姿は見る影なく。

広い飛行場には何十と置かれていた飛行機の殆ど無残に壊れ、管制塔の役割をするいくつもの建物は崩れ廃墟と化していた。そんな戦後間もなくといった状態の学区にいるのは絶対能力者の一人である食蜂操祈。

その場に似合わぬ整った服装に傷や汚れ一つとない彼女は今、その身を数十メートル程の高い位置に浮かべたコンクリートの塊に足を組んで座り、ジーっと崩れた建物の一か所を見つめていた。

「まったく！隠れるなんて往生際が悪いゾ！シルビアさん」

人をおちよくなるような態度で食蜂が話しかけると、突如崩れた建物がグラグラと揺れ出す。

「……………あゝまったく！！派手にやってくれろ！！」

と忌々しそう漏らしながら崩れた建物から出てきた、とある人物。

肩までかかる金髪に青い瞳、パツツン前髪の額のさらに上には大きなゴーグルを掲げ、作業着のような服に白いエプロンを纏い、動き易そうな靴を履いた女性。

『聖人』シルビア。

嘗てイギリス正教に属していた魔術師であり、とある理由でイギリス清教を抜けた人物である。

最初は戦う気がなかったのか食蜂の攻撃に避けてばかりシルビアであったが、どうやらやる気なったらしく、プカプカと自身の上に浮かぶ食蜂を睨みつけた。

「こんなにも早く見つかるとはな……」

「あなた達魔術師がこの街にいる時点でAIMSアイムスの探知力に引っかけられない訳がないですからねえ」

「アイムス？」

聞き覚えのない言葉にシルビアは思わず聞き返す。

「ああ〜そういえば、AIMSは戦争後に開発された技術でしたからねえ〜知らなくて当然ですね〜別に難しい言葉じゃありませんよ」AIMSはAIM・Searchの略称です」

「AIM……AIM拡散力場の事か？」

「あら、意外と知識力の方はあるんですねえ〜ええそうですよ。AIMSはその名の通り、AIMを探知する技術です」

「……AIM拡散力場と感知するって事は能力者の存在を感知するだけだろうか？なぜ私の居場所が……」

「学園都市で誰か特定の一人の能力者を見つけるより、あなた達のような特殊な力を持っている人達を見るける事の方がずっと簡単なんですよ〜」

ふざけた感じに答える食蜂であったが、シルビアはどこか納得した

ような顔をし。

「なるほど、能力者じゃない者を探しだしたってことか………そんな力が開発されていたとはな……作ったのは上条当麻か？」

「いいえ。この力は魔術よりも科学向きですから……でも当麻様も開発には携わっていますよ……何でも、このAIMSの理論を考えたのは学生時代の恩師らしくて、それを元に天然のAIM追跡能力を持つ『AIM拡散力場』のスペシャリスト滝壺理后と『解析・理解』でこの世に右に出る者はいない一方通行が開発した理論上では無能力者でも使う事の出来る探査能力」

「無能力者でも……だと!？」

「ええ……と言つても理論上は、……っただけで実際には広まってないんですけどね……」

「……?」

「これは自信の無意識に出しているAIM拡散力場を広範囲に広げて、その範囲内にいる人間のAIM拡散力場に触れて能力やレベルを計るモノ……だけど、これには欠点があるんですよえ……」

「欠点?」

「周りに対する影響力が凄いですよ……自身のAIM拡散力場を広げる訳ですから、それは自分の力が広範囲に広がるって事なんです。つまり、御坂さんだったら電子が麦野さんでは原子が焰さんでは熱が広がるってことなんですよ……それでは周りの人間や周辺機器に何らかの害を及ぼしてしまうんですよ。現に御坂さんがこれを使つたら、都市内の電子機器が使用不能になりましたし、焰さんが使えば温度の測定機や人間にも害が出たんですよ……だから、本来これは使用を禁止されているんです。けど……何か緊急事態っぽいしいかな……って思つて特別に使つちゃいましたあ……!!と言つても私のAIMSなら都市に影響は与えないんで、別に気にする必要はないんですけどねえ……」



一通り説明をした後、食蜂は腰掛けるコンクリートの上で足を組みかえる。

「分からなかったらもう一回説明してあげますよ。あなた達のような骨董品の理解力では分からなくて当然ですからねえ。」

「この数年の間に随分と変わったらしいな……」

自分の周りにある残骸を見つめながらシルビアが呟いた。

「だが、どういう訳だ？お前には直接的な戦闘力はなかったはずだ」

「……………戦闘力って、こういふモノの事ですかあ……？」

そう言つて食蜂が軽く手を横に振ると、辺りに建物から崩れ落ちた何百キロはあるうというコンクリートの塊が宙に浮かびシルビアを取り囲んだ。

「おいおい」

「別に驚く事でもないでしょう？私の『心理掌握』<sup>ちから</sup>は大きく分類すれば念話能力<sup>テレパス</sup>の一種なんですから……そして、念話能力<sup>テレパス</sup>とはモノに何らかの力を加える事が出来る力。つまりは……！」

食蜂がもう一度手を振るうとコンクリートが一斉にシルビアに向かって襲いかかってきた。

隙も逃げ道もない絶妙な攻撃であったが、シルビアは臆することなくそれを何も付けていないただの拳で全て叩き壊した。

「念動力<sup>テレキネシス</sup>か……！」

「……………素手でコンクリートを砕くなんて、これだから野蛮な方とは戦いたくないんですよ。」

シルビアに不快感でも持っているような目でシルビアを睨んだ後、再び人を見下すような態度に戻して自身を指し示すように胸に手を当てた。

「まあ御察しの通りですよ…6人、いえ正確には5人いる『絶対能力者』の中で私は、最も力の多様性に特化した『絶対能力者』なんですよ〜」

そう告げると、今度は何故でか態度が一変して急に健気な少女の様な表情になり。

「最も…私の様な戦闘向きに開発されていない『絶対能力者』では…」

パチンツと食蜂が指を鳴らすと、後ろで無残に破壊されたジャンボジェット機、十機が宙に浮かんだ。

「この通りジャンボジェット機を十機動かすのでやっつです」「はっ! …………… そうかい! 」

自虐とは思えない事を平気で言う食蜂にシルビアは憎たらしいそうに睨みつける。だが、その顔はどこか笑っており、それが余裕の笑いなのか、驚きを隠すための苦笑いなのか区別はつかなかったが、食蜂にとってはどちらでもよかったらしく相変わらずの余裕たつぷり上から目線という感じに戻ると。

「さあて! お喋りはこの辺にして、楽しみましょうよ。折角の戦争なんですから」



## 食蜂（後書き）

以上です。えっ早い？そりやそうです。

これ自体は浜面が戦う前に大体書き終えていましたから、  
だけど、電撃で食蜂がピックアップされ始めたので、

もう少し様子を見ようと思いましたが、

流石にそろそろ出さないと話のバランスが悪くなると思ったので出  
しました。

でも書いてるうちに食蜂はここで表情変わるだろうとか、ここでは  
こんな感じに

なるだろうと色々想像が膨らみすぎて、表情の変わる説明が多くな  
ってしまつたと

思います。できればもっとコンパクトに行きたかったのですが…  
でも最近の話に比べれば少し短めになっていると思います。

と、まあ後書きはこの辺で、次回はまた浜面の戦闘に戻すと思いま  
す。

また時間がかかると思いますので先に謝っておきます。すみません。  
では次回もがんばります。

食蜂は基本人を見下す感じのイメージ書いていますが、  
このままいけば見下しすぎて逆に見上げそうです。

あれっ？たしかこういうネタ pixelivにあったような…

## 進歩（前書き）

どうも！45話です。

やっぱりバトルってメンドイっすよね〜

って、あれ…なんだか最近こんなことばかり言ってる気がする。  
まっいつか、誰かが傷つく訳でもないし、  
では45話！行きま〜す。

ちなみに11月にHOの5巻に12月は新約3巻でますから…  
カマチー凄すぎ!!

あれっブログ？

## 進歩

「あの人…だと？」

浜面の言葉に訝しげな表情を浮かべるフィアンマ。

「どういうことだ？何があった？」

「…さあな、俺に勝ったら教えてやるよ。あくでも死んだら答えられないから、殺さないようにな」

口調はふざけているが顔は真剣そのもので言う浜面にフィアンマは若干の苛立ちを持ったが。

「ふっ…手加減させる気か？」

「やってくれるならそうしてくれ」

「お前ほどの男を相手にして手加減する程、俺の力は万能ではない」  
「よく言うぜ…まあでもそろそろ休憩も終わりとするか」

そう言うと浜面は下ろしていた刀を再び構える。

「仕込みも終わったからな」

「なに？」

フィアンマが思わず聞き返した瞬間。

シュンッ！と

浜面が一瞬でフィアンマとの距離を縮めた。

(さつきよりも速い!?)

慣れた筈の速度についていけない事にフィアンマは思考が止まりかけたが咄嗟に第三の腕を出し盾にしたが、浜面はそれを気にもとめず刀で切り掛かった。

何度も受け止めてきた刀であったが、刀はいとも簡単にフィアンマの第三の腕を切り落とし、その刃は右肩にまで届いた。

「ッ!？」

浜面の間合いより半歩離れていたのがダメージは掠る程度のものであるが、第三の腕は完璧に切断され、地面にボトツと落ちると砂のようにボロボロと崩れ消えていった。第2波の攻撃もありえたのでフィアンマは直ぐに既に後ろへと移動した浜面を位置を確認した後、切られたが血の出していない右肩を手でさわりながら浜面を睨みつけた。

「ああ…忘れてたぜ、右手は義手だったな」

「何をした!？」

刀を肩に乗せながら浜面は不敵に笑う。

「…科学側出身の俺が、あんな器用に魔術で強化の度合いを調整出来るなんて本気で思ってたのか？」

疑問形で返された答えであったがフィアンマは悟った。

先ほどの戦いでもそうであったように、全てはフィアンマを倒せるレベルまで弱体化させる為の一芝居。最初は本気で戦っている様に見せかけ、油断したところを本命の一撃を喰らわせる。浜面が言っ

た事に対する答えとしては完璧だったが、それでは一つだけ腑に落ちない事があった。いくらファイアンマを弱体化させられたとはいえ、今までの浜面の戦い方は人間それを遥かに超えていた。魔術も使わずに能力者でもない浜面がそんな事が出来る訳もない。以上の事を踏まえたファイアンマが導き出した答えは、

「学園都市の軍事兵器か」

科学、という魔術とは別のもう一つの可能性だった。

「正解」

力の仕掛けを見抜かれたというのに浜面の顔から不敵な笑みは消えない。

「軍事用開発されたと言われる『ハードテーピング発条包帯』…か？」

ファイアンマが最後に疑問形を残したのは、彼の考えには少しばかりの矛盾があったからだ。本来『ハードテーピング発条包帯』の見た目は包帯テーピングというよりはシップに近く、貼りつける形で使用される。だが、今浜面の着ている半そでの夏服で隠れていない肘にはそれらしい物が付いていなかったのだ。そんな矛盾に悩まされるファイアンマに浜面は、ポケットから塗り薬などを入れるチューブを取り出し、見せつけた。

「残念不正解だ。人ってかさ張るモノが嫌いだな。今はお手軽に塗れる液体タイプハードジェル」

『ハードジェル発条液体』ってところだ。液体を塗る事によって中に含まれるナノマシンが皮膚や体内に浸透して皮膚の伸縮や関節の動きをスムーズにする働きがある。『ハードジェル発条包帯』の程の性能はないが、使えばオリンピックで活躍するアスリートを遥かに超える身体能力が手に入



れる事が出来るおまけに強化度合いも設定出来る」

「そんな物が…完成してたのか」

「ここをどこだと思ってる？一年経てば十年進歩する科学技術の精神と時の部屋：いや都市か。あの戦争から5年経ってんだ。これくらい進歩して貰わないと困る」

浜面は一旦言葉を区切ると顔を横に向け、

「そもそもいくら『これ』があるからって俺が何度も魔術を使える訳ないだろうが」

右耳に付けてある十字架のピアスをチョンチョンと軽く揺すった。

「『聖母のピアス』：その身に降りかかる災厄から守ると言われている霊装」

「ああ、確かにこれがあるから俺は魔術は使える。だが、それには限界があるんだよ。そうなった場合、俺はただの無能力者になっちまうんだよ。だったら、使えなくなった時の対策も用意しとかないといけないだろ？」

余裕に答える浜面の声を振り払うようにフィアンマは切り口から新たな第三の腕を伸ばした。

「だが腕の硬度は十分だった筈だ。『発条液体』には気付かなかつたが、その分魔術の警戒は怠らなかつた。お前は魔術は使っていないし、その刀も魔術的な要素は何一つない」

その指摘に対しても浜面は余裕の表情を変えず、刀をフィアンマに見せつけるように前に出す。

恐らくしっかり見てみるという意味なのだろうが、刀に詳しくない

フィアンマからしてみれば紛れもない日本刀にしか見えなかった。

「誰が魔術系の刀だなんて言った？こいつは学園都市製の刀だ。刃を高速振動させ、さらに刃についた微量の粒子をチェーンソーの要領で回転させ切れ味を上げる……」

「ッ、高周波ブレードってやつか！？」

高周波ブレード。振動剣しんどうけん又はヴィブロボレードと呼ばれる振動剣の刀身は超高速で振動し、この振動によって物体を切削するため、通常の刃物を遥かに越える威力を持つと言われる武器。

正確には、架空の武器、もしくは未来の兵器として知られる武器である。

学園都市の外の世界でも研究は進み、開発もされているが、大戦終了から5年経った今でも、それが武器として作られた完成品はどこにも存在しない。

一部の科学者は、ナイフ程の大きさに出来ても剣や刀といった長い武器には出来ないと言う者もいる。

「へ〜よく知ってたな。そうだ、御坂の砂鉄チェーンソーと麦野のマルチタワー『原子崩し』の力を再現した音速以上の速度で振動する刀：第一次科学・魔術大戦からの俺の相棒おとぎりまる『音切丸』だ」

始めて見た未来の武器とまで言われる科学の剣の前に多少の動揺はしていた。

だが、そんなフィアンマの口から出た言葉は。

「……………名前ダサッ！」

言いたくて言ったというよりは、思わずポロリと言ってしまった表

現した方がいいだろう。自身の軽口にフィアンマが、あつ！といった感じに気まずそうな顔を浮かべていると、何故か浜面は下を向きワナワナと振るえているかと思うと、突如、バツ！と顔を上げ。

「分かってる」

「はっ？」

「分かってさ！！仕方ねえだろ！？俺だつてダサツつて思ったよ！けど、名付け親の「大体」少女に「アホ毛」少女が涙浮かべて「ダメ？」って聞いてきてその後ろではロリの守護神『神上』アクセラレータが鬼みたいな顔で睨んできたんだから断れる訳ねえだろ！？」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

浜面がフィアンマに向かって心の内を暴露した数秒後。  
ハワイの南の海にて。

激しい戦闘を繰り広げる『神上』の二人と天使達。

どちらも決定的なダメージを与えられないなか、

突如一方通行が放った、たった一発の攻撃が天使を一瞬で粉々にした。

「うおおッ!どうした一方通行!?今の一撃、俺でも受けられな  
いくらい凄かったぞ!」

「さアな…何でか分かんねエが……さっさと終わらせて浜面ぶっ殺  
す!…!」

## 進歩（後書き）

以上です。

とりあえず、言っておきたいことは、素人の戦闘シーンにそれほど期待しないでくださいって事です。だから、戦闘描写については、もうとやかく言い訳はしません。

まあいつも言い訳ばかりなのでたまには、後書きっぽく内容について触れると、

まず、浜面が魔術を使える原因『聖母のピアス』。

これは前の作品の『上条VSローマ・学園』の時に出てきましたが、まあそれと同じ設定です。それを付けていれば魔術を使う時の負荷がなくなるという設定です。ただ、実際の『とある』の世界で魔術的負荷と科学的負荷は同じようなものに分類されるのか、どうかは知りません。

まあ所詮は自分が勝手に考えたものなので、「全部無効になる凄い霊装なんだよ」

って言っちゃえばそれまでですが、

それと浜面の使う『高周波ブレード』

これは、もう、何で今まで出さなかったんだって思うくらい気に入ってます。

『上条VSローマ・学園』を書いてる終盤くらいでこれは思いついてたんですが、

次回の作品の時でもいいやと結局出しませんでした。

正直言うと御坂との戦いの時に出してもよかったですけど…

こういうシリアス展開の時に『浜面仕上』という存在が

どれだけイレギュラーであるかを際立たせるという意味では、ここまで我慢して良かったと思います。

魔術も使い、科学も使う。何の天才でもない浜面にしか出来ない  
ある意味での最高のイレギュラーだと思います。

さて、では今回はこの辺で、次回はビリビリと聖人の対決。お楽し  
みに！

えっ最後の眩き？今回はなしで

## 交代（前書き）

どうも、ホントはかなり長くなるはずだったんですが、キリの良いところで止めました。

今回は戦いが始まる前、なので若干短めです。では46話行きま〜す。

## 交代

所変わって、第二三学区。

そこでも、聖人と絶対能力者の激しい戦闘は続いていた。

「さうて、次は何を投げつけてくるのかな？」

身の丈ほどある大剣を地面に突き刺し、シルビアが食蜂に向かって言い放つ。

「はあ〜……………まったく」

うんざりとした様子でそう呟く食蜂の周りには、

「これだから野蛮な方って嫌いなんですわ〜」

先ほどまで食蜂が武器として使っていたジャンボジェット機が無残に切り刻まれ、あちこちにその残骸が散らばっていた。

「武器になりそうなガラクタどもは全部片付けたぞ。次は何をする？」

「ん〜そうですね〜次は〜」

シルビアの言うとおり、食蜂の周りにはそれなりに大きい岩や破片



が転がっているが、ジャンボジェット機を投げつけてもこれといったダメージを負っていないシルビアに対して、投げつけても効果があるとは思えない。

だが、食蜂は焦りといった感情一切見せず人差し指を顎の当て首を傾げながら、ふざけているのかと思わせるほど単純な考え事中ポーズをとる。

「まっ交代ですかね」

なに、と聞き返す間もなくシルビアの周りをゾワツと殺気が包み込む。

そして、シルビアがその殺気の間を見つけ出す前に後ろからオレンジ色に光る物体が迫り、シルビアをそれを間一髪の所で避けた。

「ッ!? レールガンか!？」

攻撃の正体を一瞬で見抜いたシルビアは殺気の原因でもある攻撃の元を一気に叩こうとしたが、後ろを振り向いた時には殺気の間らしきものはどこにいなかった。

普通の人間ならここで動揺し、動けなくなるかもしれないが、そこは歴戦の猛者シルビア。動揺かけら一つ見せず、冷静に剣を構えりと迅速に辺りを見渡し敵を探そうとしたが、

「よく避けたわね…」

敵はそれを待ってくれなかった。

声が聞こえた次の瞬間。

後ろに何か光の様な物が走ったかと思うと、

突如現れた御坂がシルビアの蹴りを喰らわせた。

「ウオオオツ!!」

かのように見えたが、シルビアは反射的に両腕でガードし、さらに後ろへ飛んでダメージを軽減させた。

「今のをガードする奴なんて……ホント久しぶりね」

「ツッ! こんな一撃を喰らったのも久しぶりだ……『雷帝』御坂美琴だな?」

「聖人のシルビアね?」

改めて正体を確認した後、シルビアは大剣を地面に刺しガードした手がちゃんと動くかどうか、適当に腕を振り回しながら確かめる。

「今のが雷と同等速さと言われる『雷翔』だな、流石に速い」

「……完璧に決まったと思ったんだけどね。流石聖人と言ったところかしら」

互いに睨み合い一触即発の空気を醸し出していると、

「まあ、最初の一撃で決めてくれないから余計な体力使わなくちゃいけないよ。たじやないですか?」

岩に腰掛けた食蜂が岩ごと御坂の隣に舞い降りた。

緊張感の欠片もない食蜂に御坂の顔は見て分かる程明らかにイラッとした表情を浮かべるが、視線はシルビアから放さなかった。

「あんたこそ、さつさとアイツ操りなさいよ。そうすれば強さなんて関係なしに勝てるんだから」

「それが出来たらやってますよ」

「何よ、正々堂々が好みとか、かわいそうで出来ないとか言うんじ

やないんでしょね？」

「操りたくても出来ないですよ」『精神手術』プロテクトをやってるみたい  
なんで？」

「『精神手術』？」

「国の大統領や企業の社長が私のような精神に干渉出来る力を持つた人間から極秘情報を守る為に施す手術の事です。元は学園都市の技術だったみたいですけど、一部の技術が外に漏れたんでしょね」  
科学側の『精神手術』とはかなり違ってますね」おそらく魔術を  
応用させた魔術型の『精神手術』です」

ごく最近、正確には大戦前まで世界は科学側と魔術側に完全に分割されていたが、互いの持てる技術全てを出し切る事になった大戦後は、隠してきた技術のほとんどは隠す意味がなくなった為、それらの技術はオープンとなり、それと同時に科学と魔術の境界線は次第に曖昧なものになっていった。

「つまりあなたは役に立たないってことね……」

気をつかう間柄でもないので御坂は思った通りの事をそのまま口に出した。

「相性が悪いだけです」私は肉体労働派じゃなくて知性派ですか  
ら」

そう言うと食蜂の座る岩が再び宙に浮き始めた。

「じゃあ知性派の私は邪魔になるので離れてますね」ああ、それから出来れば生け捕りにして下さいね」『精神手術』の解析がしたいんで」それが無理なら脳以外なら壊して大丈夫ですから、よろしく」

自分の言っている事がどれだけ恐ろしい事か食蜂は本当に分かっている様子で、無邪気な子供のように手をふりながら自身が浮かす岩に乗ってその場から離れていった。

改めて2人だけになった御坂とシルビア。

暫く無言だったが、先に喋ったのはシルビアだった。

「いいのか？折角2対1なのに1対1になるぞ」

「元々あいつはアシスト役よ。直接戦うのは私の役目」

「そうか、まあいい。お前とは一度やり合ってみたかった」

「私と？」

意外なご指名に御坂は思わずキョトンとした顔を浮かべる。

「ああ……昔、まだお前達と共に闘っていた頃に上条当麻聞いたことがあってな」お前が思う一番強いやつは誰だ？」ってな

「そんな戦闘狂が考えてそうな事、あいつが答えられる訳ないでしょ」

「確かに、誰が一番強いという質問にはアイツは頭を悩ましていた。一方通行やアレイスターは勿論だが、フィアンマにオッレルス、浜面仕上だっけ決めてダメな訳ではないし、削板は将来かなり強くなると言っていたしな……だが」

シルビアは地面に突き刺す大剣を担ぐように持ち変え、

「だが、「お前が思う一番強い女は誰だ？」って質問には即答だった。答えは……お前だ。御坂美琴」

「……………」

「神裂やキヤリーサ、ワシリーサや自動書記モードのインデックスヨハネのペンという化物共を前にしてもアイツの考えは変わらなかった」

突如シルビアに明かされた当麻の心の内を聞かされた御坂はただ黙っているだけだった。そんな二人の会話を離れた所から自身の能力を使い盗み聞きしていた食蜂は、なぜか憐れむ様にシルビアを見つめた。

「あゝあ、まったくもう！シルビアさんはおバカさんなんだから……そんな事言ったら」

そう呟きながら再び能力で二人の会話を聞き入いてみると、

「そう。じゃあ」

まず最初に御坂の声が聞こえた。そして、

「負ける訳にはいかないわね！」

突如、御坂の体から雷を彷彿させる激しい電撃とジバババツ！と凄まじい雷鳴が鳴り響いた。

「ほぐら、やる気になっちゃった」

広く知れ渡ってる事かもしれないが、結局のところ恋する乙女が一番強いのである。

## 交代（後書き）

以上です。本当はこのまま戦いまで行こうと思いましたが、もうちょっとのばします。

あとがきで書くことがあるとしたら、

「プロジェクト精神手術」というワードです。

これは世界的名作ゲーム「MG」に出てきた言葉です。

最初どうやってシルビアは食蜂の力を防ぐか、という点に何か適当な霊装でごまかそうと思っていました、

「プロジェクト精神手術」という言葉がカッコよく

また、今後の科学と魔術の境界線の曖昧さを表現する上で

こういうのがピッタリじゃないかなと思いいこれに決めました。

「MG」を始、小島作品って何でもない一言を異常なまでにカッコよく出来ますよね。自分なあんな風に物とか人の名前考えられたらな〜

では今回はこの辺で、次回は御坂か浜面かどっちかな…

って、削板、焰のペア忘れてた。

まあでも今回ほど早くはないと思います。

えっ食蜂さんが離れた所から二人の会話を聞けたわけ？

知らね。食蜂さんなら出来んじゃない？（いい加減）

断片（前書き）

友達にこの話を見せたところ、

友「フィアンマ、バカすぎない？」

俺「大丈夫、みんなの中でフィアンマは、バカキャラになってるから」

友「でも、読んでもる人はバカじゃないと思うよ……」

なんかうまい事言われた気がする！！

そんなこんなで47話行きます！

えっ矛盾？あつたらごめんなさい！！

## 断片

「ウオツ……」

自身の刀に対する心の内（ほとんどは白髪頭の悪口）を明かした後、何故かゾクツと嫌な気配に浜面はブルブルツと体を震わせた。

「……なつ何だ？」

「なんか、ハワイの方角から不吉な電波を……」

何の事が分からないフィアンマは何か特別な攻撃の前振りかと疑ったが、下手に考え過ぎても隙が出来るだけなので、直ぐに話を変えることにした。

「さて、確かに驚きはしたが、その程度だ。次はどうする？」

「そうだな。さっきので倒せないまでも、大したダメージを与えられなかったのは痛いな。」

「だけど、だからといって斬る事を止めたら終わらねえだろ？」

「そう言って浜面は左手に持つ刀を握りなおす。」

「さあて次の一手だ。今度の剣は魔術的だぜ」



何の躊躇もなく手の内を明かしてきた浜面。

フィアンマは何かの罫かとも考えたが、注意深く左手の刀を観察すると、確かに先ほどは感じなかった魔力の流れを感じ取ることが出来た。それを悟ってか、浜面は右左に持つそれぞれの刀を見せつける様に前に出すと。

「さくで問題。右手は科学の剣、左は魔術の剣。相反する二つの力で戦った場合、お前の腕はどうなるでしょうか？」  
「ッ!？」

その問いにフィアンマは思考が一瞬止まり掛けた。  
何を言っているんだ？コイツは。と考える一方で今まで出会った事のない状況に戸惑ってモいた。そんな一瞬のフリーズ状態を見逃さなかつた浜面は空かさず一気に攻め込む。

「（ええい！惑わされるな！奴の言っている事になんら信憑性は無い！）」

そう自分に言い聞かせ浜面の攻撃を受け止まるフィアンマ。

今の所、浜面の刀に対しての出力は間違っていない。

だが、考えれば考える程彼の頭の中にはある一つの考えが浮かぶ。  
もし科学の攻撃に出力を合わせれば魔術の攻撃に適切な出力を行えなくなるのでは、と。第3次世界大戦の頃のフィアンマの腕だつたら科学だろうが魔術だろうが無言を言わず、それを圧倒的に凌駕する力を出力することが出来た。しかし、今の第3の腕は不安定であり、2つの違った力に適切な出力を出来る保証もない。この不安を取り除く為にわざと攻撃を喰らってみてもいいが、  
もし、防げず先ほどの様な攻撃を直に喰らえば致命傷は避けられない。

あまりにもリスクが高すぎる賭けだつた。

「考える考える。それだけお前の動きは鈍くなる」

「予定外だぞ。浜面仕上…お前にここまで手こずるとは…」

「地下に引きこもって本ばかり読み過ぎてるから流行に乗り遅れんだよ。だから骨董品アンティークだなんて言われるんだ」

直後、浜面の本気の一太刀が第3の腕の防御をすり抜けフィアンマ本体の右腕に斬りつけた。決して腕の出力に失敗した訳ではない。ただ、単純に隙を突かれたただけだ。

「この程度の切れ味じゃそっちの右手も切れないか…結構いい素材使ってるな」

服の切り口から少し見える機械の腕を見て浜面が呟いた。

「魔術に科学か……浜面仕上。お前は上条当麻以上にふざけた存在らしいな」

「言ってる。今は俺だけで珍しいかもしれねえけど、その内俺が当たり前前の世の中になるだろうよ」

そう言っつて浜面は刀を構える。

今までの経験から、また一気に距離を詰められると判断したフィアンマは後ろに飛んで、急な攻撃にも対応できるだけの距離を保つ。その甲斐あつてか、浜面は攻撃のタイミングをずらされたく、攻めずらさからかチツと短く舌を打つ。

「（これでいい。あの役は他に任せよう…今はコイツをここに留まらしておくのが、正解だ）」

安全を確保し目的と任務を再確認した後、次の攻撃に備えてゆっくり

りと息を整えていると、

「離れてりゃ安全だと思ったか？」

またしても不敵な表情を浮かべる浜面を見る事になった。

「生憎だがな……」

そう言うと浜面は刀、正確には右手に持つ高周波ブレードの持ち方を変えた。特に何の根拠もないがフィアンマはそれだけで浜面が何か特別な攻撃をしてくるのを悟った。そして案の定、今まで特に代わりのなかった刀とその周辺の空気が奇妙に揺れ始める。

「（何だ？）」

「こいつはこういふ事も出来んだよ！」

浜面が刀を振ると刀から炎が噴き出し、導火線の後でも辿うかのようにフィアンマ向かって一直線に突き抜ける。想定外の飛び道具に驚くフィアンマであったが、大抵の攻撃を避けられるだけの距離を取っていた為、難なく避ける事が出来た。

「やっぱり、この程度の速度じゃ避けられるな……」

冷静に分析する浜面を無視し、フィアンマは先ほどの攻撃を見極めた上で十分と思われる距離を取った。そして、先ほどの突如現れた炎の正体を理解する為、手掛かりを求めて焼けたアスファルトの道路に目をやる。

「（これは火じゃないな……どちらかというと、熱に近い）………空気振動の摩擦熱か」

「これも直ぐ見抜くとは、骨董品アンティークは骨董品アンティークでも知識はあるみたいだな」

「魔術でも似た様なことをする奴はいる。それに火は俺専門の魔術だからな…だが、所詮は機械だな。底が知れる」

「……………そうか、ならこれはどうだ？」

浜面は突然ポケットから赤と黄色の色紙を取り出すと地面に赤、黄色の順で交互に並べる。

一見の何をしているか分からないが、ファイアンマにはその意味が直ぐに理解出来た。

「（黄色い紙に赤い紙…風と火!?）魔術か…」

「俺の技は大抵誰かから教えて貰ったか、ただの真似事だが……………こいつは完全にオリジナルだ！」

ブワツ！と浜面含め刀の周りの空気が一気に変わる。

「（今までとは違う。本気の魔術を打ってくる!!!）」

刀の先を地面につけ、攻撃の準備を整える浜面。

今までの攻撃とは明らかに違う雰囲気きふきに第3の腕を完全防御姿勢で構えるファイアンマ。

攻撃をする側も攻撃を受ける側、両者とも準備が整い、そして、

「音切り丸…三の段『朱雀白虎共振砲』!!!」

マッチのように刀の先を地面に擦りつけながら振り抜く。

出だしは先ほどの攻撃と同じほどの炎が剣先が出るだけだったが、地面に並べられた色紙の上を越えた瞬間、炎の量が一気に増し、

道路を覆い尽くす程の量まで増殖すると、そのままフィアンマに向かって津波のように押し寄せて来た。

「（速い！！）」

即座に避けようとしたが、炎の津波はビルに囲まれている道路を簡単に呑みこんでしまう程の攻撃範囲で、左右にあるビルに抑えられているからか、炎は横よりも縦にしの範囲を広げ、その高さは20階近くあるビルを軽く超えており、もし横にビルがなかったら、その攻撃範囲は縦でなく横に広がってしまった事が窺えた。最初は後ろに下がったフィアンマだったが、その速さから逃げる事は諦め防御に専念する。

「（科学の力が加わっていても所詮は火！なら十分対応できる…だが！）」

頭に浮かぶ一つの危険性。

だが、今更避ける手立てはない。

意を決して炎の津波に呑まれるフィアンマ。

だが、その体はまったくもって炎によるダメージは受けていなかった。

「（予想通りだ。こんなただの火じゃダメージはない）」

フィアンマが恐れたのは炎で燃やされる事ではない。

そもそも、フィアンマは元『神の右席』で火の象徴である右方に属していた男である。どれだけ科学的であろうと火であれば、大抵の攻撃は対処できるので恐れる事はない。だが、それでも一瞬の油断もする事は出来なかった。

まず第一にフィアンマに火の攻撃が利かない事は浜面もよく分かっていた筈だ。

なのに何故効果のない火で攻撃したのか、答えは既にフィアンマ自信が体験していた。

「(クソツ！やはり、これだけの炎では息が出来ない！)」

火の波の中でフィアンマは残った息を吐き出さないように口を手で押さえる。いくら火が効かないと言っても、火が与えるダメージは熱だけではない。火が燃えるには空気が必要であり、言い換えるなら火は空気を燃やしているのである。今、フィアンマのいる火の波の中は凄まじい熱で空気は全て燃やされ、人間に必ず必要な空気を吸う事は出来なくなっていた。

「(奴の狙いはこれか！？酸欠で俺を倒す。もしくは弱らせる気だな)」

よく火事で人が死亡するのは体が燃えたからだ。と考える人もいる。決して間違っていないが、人が火事で死ぬ直接的な原因は酸欠である。

火事によって建物内の空気が奪われ、逃げようとしても空気が脳や体に回らずに体の動きが鈍る、もしくは意識を失い結果逃げ遅れて焼け死ぬ。それが、火事で死亡する人間でよく見られるケースである。

今のフィアンマはまさにそのケースに落ちいつている真っ最中であつた。

「(今の俺ではこの状況は対処できない。逃げるしかない！)」

少ない酸素の中、フィアンマは頭をフルに使い最善策を練る。

「(前に出れば間違いなく奴は攻撃してくる。左右はビルで下は地

面。後ろに逃げてても意味はない)」

ならば逃げ道は一つだけ、上である。

フィアンマは第三の腕に全神経を集中させ一気に飛びあがる。

「（あの野郎！どれだけの高くしてんだ！？いや、まさか俺が上に逃げる事を見越して）」

元々かなりの規模の炎であったが、ビルに囲まれるという条件もあつてか炎は上へと上へとその勢いを伸ばし、その高さはフィアンマが最初に予測していたモノよりも遥かに高いものになっていた。

「ウオオオオオツ！！」

体内の酸素が一気に減る事も気にせずフィアンマは上に飛ぶ力に乗せるように叫び、上を目指した。そして、体内から酸素がなくなり意識を失いかけた次の瞬間。ズバツ！と長い炎のトンネルを突きぬけて何もない空へと飛び出した。

「バアアアツ！！ハア…ハア…」

空気を吸い体内に足りない酸素を補充をフィアンマだったが、すぐに辺りを見渡した。まだ完全に酸素が体に回っていない今の状態で浜面に攻撃されたら、防ぎ切れるか分からない。次の一撃に備えるためにも浜面の位置を把握する必要があった。幸い、辺りのビルよりも高く飛んでいるため視界は良好なのでどこにいても見つける事が出来る。だが、右、左、上、前、後ろをどれだけ見渡しても見つける事が出来なかった。そして、最後に可能性が残っている場所をフィアンマ見つめる。

「ハハッ……」

フィアンマは拍子抜けしたように笑う。

フィアンマの予想とは違い。

浜面は遙か下にいた。

ビルの上どころか先ほどと変わらぬ地面の上に立ち、ただ無表情でフィアンマを見つめていた。

「残念だったな！！お前の最後の策もこれまでだ！！」

浜面がまったく移動した様子になかったのが多少気になったが、恐らくエネルギー切れだろう。そう判断したフィアンマは勝ったと言わんばかりに浜面に向かって叫ぶ。

だが、

「そうか、そりやおかしいな……俺の最後の策は、今まだ続いてんだけどな……」

相も変わらず浜面の表情は変わらなかった。

「ああ、今のが最後の策だと思ったのか？じゃあ全然違うぞ。

今の技は俺の最強の一撃じゃない。最も速くて、最も攻撃範囲の広い技だ。

攻撃力は当麻や『六本柱』に比べりゃ大したことはない」

直後、ゾゾゾゾツ！とフィアンマに今まで浜面以上に凶悪な殺気を全身に感じ取る。

「あの程度の攻撃でお前を倒せる訳ないだろ……でも、うまく使えばお前を誘導できる。」



そうだな…丁度、偶然にも今みたいに…」

そしてフィアンマは気付いた。

今の自分は火の津波から逃れるために上に飛び出たので、先ほどのビルに囲まれていた道路と違い、今は自分を遮るモノが一切ない。

そう、つまりは。

「誘い込まれた!?!」

今までの戦いでは撒かれていた数々のピースを繋ぎ合わせ、浜面の描いていた真の策パスルに気付いたフィアンマは、それを完成させるようにまだ見つかつて最後のピースを探しだす為、周りを見渡す。

先ほどよりも遙か遠く、離れた所を。

そして、それは直ぐに見つかった。

そこから1、2キロ程離れたビルの屋上に立っている最後のピース。

「麦野…沈利イイ!!」

「色々派手に騒いでたつていうのに今頃着やがったか…俺に合わせた出力をしてたお前にアイツの一撃が受け切れるかな?」

「最初から、これが…!!」

浜面パスルの策を完成し、フィアンマは自分がただ彼の思い通りに動いていただけなのだと悟った。

最初の一撃から、高周波ブレードによる不意打ち。

科学の剣と魔術の剣を両方使うことによる思考の先導。

炎の攻撃による酸素を奪った攻撃。

フィアンマの脳裏に横切った数々の策の全て、それはただの仕込み。今までの激戦は、たった一発の『絶対能力者』の一撃を決める為の

ただの準備期間でしかなかったのだ。

「お前の敗因は俺を浜面仕上として戦った事だ」

対処法を必死に考えるフィアンマに向かって浜面は勝ちが決まったような口ぶりで呟くと、彼が一番伝えたかったことを言う。

「よく覚えとけ、俺は上条勢力である以前に『アイテム』なんだよ。地獄へ落ちても忘れるな」

浜面が言い終えると同時に凶悪な光の塊がフィアンマを襲う。

断片（後書き）

長かった

いや〜もうなんかやりきった感しか残りません。

自分で考えといてなんですが、ちょっとやりすぎじゃね（笑）？

まあとりあえず、浜面とフィアンマの激戦は一先ず一区切りです。

といっても、他のがまだまだあるんですが、

正直言つと、この学園都市攻防編は大体これで半分くらいです。

俺は一体どれだけ書きたいんだ！？と自問自答します。

最初は凄いやりたかったとこなんですけど、今はすっげ〜ギャグやりたいです。

あ〜変なジレンマが生まれる。

まあとにかく今日はこの辺で…

## 剣士（前書き）

どうもです。

出来たので載せます。

なんか長くなりましたけど、  
48話行きます。

## 剣士

己の決意を告げると同時に御坂はレールガンを放つ。

「ウオツ!?!」

凄まじい速度で飛んでくる弾丸を間一髪で避けるシルビア。

ギリギリだったとはいえ、銃の弾丸よりも早く飛ぶレールガンをか  
わせるのころは流石聖人と言うべきであろう。

「こんな危ないもん何発も撃ちやがって!」

レールガンを避ける為に外した視線を再び戻すシルビア。

だが、戻したその先には御坂はすでにおらず、

いつの間にかシルビアの後ろに移動し、次のレールガンの照準を合  
わせていた。

「チイッ! (なんて速度だ!)」

今までに体験した事のない速度に驚くシルビアであったが、直ぐに  
回避に移れるように銃口の先から軌道を予測し、御坂が引き金を引  
き、発射される僅かな時間で、すでに回避に移るといふ神技を披露  
し、見事にレールガンを避けてみせた。

「（これでもダメか：もつと速くしてみるかな）」

既に人間の出せる速度など当に超えているのだが、御坂はそんな事を心の中で呟いていた。

御坂の速さの正体である『雷翔』。

それは二つの段階を得て完成する。

まず第一段階は自分の体に電撃を通し、人体の生体電気を強化し、身体能力を上げる。それだけでも、十分に人間を越えているのだが、御坂はさらにもう一段階、速度の強化を可能にした。それは、体の強化では外側の強化であった。アウトサイド

それが第2段階、移動したい先に電気の道を造り出し、その上を移動する。正確には、運ばれるといった方が正しいであろう。体に電撃を纏い、限りなく電撃そのものに近づける事により、雷撃の流れにのる事が出来る御坂だけに許された唯一の第2段階。

その速度は雷と等しいモノとも言われている。

純粋な速度で言えば一瞬で移動する「瞬間移動」の方が早いかもしれない（雷の落ちる速度は千分の一秒と言われており、その千分の一秒と一瞬の違いを理解出来る人間がいるかは分からないが）。

だが、「瞬間移動」に必要な特殊な計算もいらさないので連続に使用する事ができ、

空間を飛ぶ間（といっても一瞬の事）に相手を完全に視界から消す「瞬間移動」と違い、あくまでその場にいる状態での移動手段なので、相手から視線を外す事はなく、急な反撃にも対応しやすい。戦いにおいて理想的な移動方法を最高の速度で行う事が出来る。これが御坂が戦闘用に開発した移動手段である。

傍から見たら何が起きているのか分からない。そんな速度で戦闘が続く戦場を御坂と同じ絶対能力者である食蜂が見つめる。

「流石は御坂さんの『雷翔』ですね。素人目からしても昔よりも明らかに速くなっている……まったく見えませんでしたよ。」

食蜂の能力である『心理掌握』は元々殴り合ったり斬り合ったりする直接の戦闘用ではない。その為、食蜂自信の戦闘能力は他の絶対能力者の中ではないものに等しい。だが、当の本人はそれを隠すつもりもないし、恥ずべき事だとも思っていない。殴り合うだけが戦いじゃない。それが食蜂の信条であった。

「（『雷翔』の速度は純粋な戦闘を得意としない私からしてみれば、それは瞬間移動に近いもの。いえ……例えば戦闘が得意でもあれだけのものを目で追えるのは、人間にはいないでしょうね）」

けど、と心の中で一区切り置いた後、今度は直接口に出し、

「流石聖人。あんなデタラメな速度に完璧に対応している」

~~~~~  
~~~~~

戦いを始めてから五分程が経過した頃か、

御坂は今までバンバンと撃っていたレールガンだったが、今はその数が減ってきていた。その理由は、御坂のコートの奥に残ったマガジンにあった。

「（予備のマガジンを合わせても残りは、30発以下…あれだけ撃つて効果がないなら、これ以上は無駄ね）」

もうすでに5、60発は撃ち、一発たりと掠りもしなかったので効果がないと判断した御坂は潔く銃を投げ捨てる。

「何だ諦めたか？」

「別に銃じゃ意味がなさそうなだけよ。この弾は1発でも結構値が張るから、あまり無駄使いは出来ないし」

そう言うと、御坂は新たな戦闘方法に取る為、まず両手を前に出し重ね合わせた。すると、突如、手の中に光の塊が現れ輝き出した。御坂はその光の塊を伸ばすように両手を広げると、光の塊は刀のようになり刃が真つすぐと伸び、光り輝く鏢のない刀へと形を変えた。

「鳴神十剣…『雷桜剣』！」



光の刀を空中で2、3回振り回しながら御坂が言う。

「雷の剣か：熟練の雷系魔術師でもそこまで精巧に作れる奴はいないだろう。大したもんだ」

刀の正体を冷静に観察しながら、シルビアはただ素直に称賛した。

「へえ、あれが御坂さんが自身の能力を最大限にまで昇華させて造り出したと言われる『鳴神十剣』。珍しいモノが見れましたね」

少し離れた空中で剣の正体の大体の心当たりがある食蜂は浮いた岩に腰掛けながら呟いていた。それから御坂、シルビア両者共ただ互いを睨むだけの時間が続く。そして、ぶつかり合う。

ガキンツ！と剣と剣のぶつかる鉄の音が最初に響いた後、今度は何度も、それも短い時間の間に同じような音が続けて聞こえて来た。何が起きているかまったく見えない食蜂であったが、戦闘が始まってから時間にして一分にも満たないであろう僅かな時間の中で、御坂、シルビアは互いの持てる限りの力を使い、数十、数百にもなるろう太刀を交わらせている事だけは理解出来た。

それほどの戦闘をしておきながら言うのはなんだが、御坂は決して剣の天才ではない。

剣を始めた時期を考えれば、浜面よりも遅いくらいである。

だが、それでも聖人の剣士とやり合えるだけの剣術を手に入れたのは、

偏に彼女の純粋な努力の賜物である。

仲間の為、友の為、そして当麻の世界を守る為、ただそれだけの為に我武者羅に費やしてきたその努力の量は恐らく我々では理解できないであろう。その甲斐あってか彼女の剣の腕は一流と表しても、誰も文句を言わない程のモノへと変わったのだ。

だが、それでも超一流の剣士には敵わなかった。

「中々の腕だが、道場剣術レベルだな。」

大剣でうまく剣の軌道を上に変えられ、完璧に無防備となった御坂のわき腹にシルビアの蹴りがおみまいされ、御坂は後ろに大きく蹴り飛ばされる。

「グウツッ!」

そのまま地面に叩きつけられてもおかしくなかったが、御坂はうまく途中で態勢を立て直し、それだけは防ぐことが出来た。完璧にダメージを受けた御坂。  
だが、ただ蹴られただけではなかった。

「ツツッ!」

一切攻撃を喰らっていないシルビアの顔が痛み歪んだ。

「…何だ今のは？電撃の鎧でも身に纏っていたのか？」

足に走った奇妙な痛みに戸惑いつつも、足を動かし調子確かめるシルビア。その様子を見た御坂は改めて聖人の力に驚いていた。

「（この状態の私を蹴って何ともないなんて、やっぱり純粋な身体能力はどの絶対能力者よりも上かも）」

「この状態」とは、御坂が『雷翔』をやる為に強化した体の事である。雷と同様の速度を出せるようになっていて、纏っているだけの電撃でも、それは、銃や剣といった攻撃を防げるだけの強固な鎧となっていた。さらに、純粋な電撃の性質を持っているの

で触れば数十、数百万ボルトにもなる電撃に感電する事になる。シルビアの足に走った痛みはまさしくこれである。

かつて御坂と戦った浜面は雷切という対雷撃専用の刀を使う事でその鎧を斬り裂いた。だが、今のシルビアはそんなものは使っておらず、そんな気配もない。つまり、純粹に身体能力だけで数百万の電圧に耐えた事になる。

「まったく本当にデタラメな人ですね…まあでも、流石は騎士の国出身の聖人といったところですかね…純粹な剣技では、神裂さんより上みたいですわね」

遠くから眺める食蜂は助太刀する気がないのか、他人事というよりは楽しんでるように呟いていた。

「（さて……どうしますか？御坂さん…）」

心配とは明らかに違った眼差しを送る食蜂。

一方、剣が通用しない事をまじまじと実感した御坂であったが目から闘志は消えていなかった。

「流石は元イギリス清教の魔術師ね…剣術では勝ち目がなさそうね」

素直に相手の腕を認めた後、剣を握る手を開き剣を握るのを止めたとたん。バチンツと電撃の弾ける音と共に剣が弾け、消え失せた。

「どうした？やめるのか？」

「いいえ…少し戦闘スタイルを変えるだけよ」

そう言って御坂は『雷桜剣』を出した時と同じように、何かを包むように両手を合わせ、手の中から光が溢れ出る。

そして、手の中の光を伸ばすように両手を広げ、形を変えた。

一見、先ほどの『雷桜剣』を出した時と同じ動作だが、今回の光の塊は剣よりもずっと細く、そして長く、フニャフニャと形を歪めて一定の形を保っていないかった。見るからに頼りのない武器にだったが、御坂がそれを持ったまま右腕を振った瞬間、それは凄まじい速度を動き回り、パシイン！パシイン！甲高い音を立て地面を駆ける動きの確認をしていたのか、一通りそれを操った後、御坂はその一部を右手で持ったまま左手にグルグルと巻き付け、両手で持てるぐらいの丁度いい長さにまで調節した。それが、何の武器かシルビアは知っている。極稀にだが、シルビアはそれを使ってオツレルスを懲らしめた事があった。

「雷の…鞭か!？」

答える義務もないし、義理もない。  
だが、御坂は敢えてその武器の名前を口に出す。

「鳴神十剣『雷光鞭』!!!」

新たな御坂の武器の出現に、遠くで観戦していた食蜂の心は驚喜で満ち溢れた。

「へえ、あの当麻様や一方通行でさえ全てを見た事ないと言われる武器を2つも見れるなんて…やっぱり、こういう戦闘もたまには悪くないですね」

新たに表れた武器、つまり新たな戦闘スタイルにシルビアの取った行動は、様子を見る事。相手の手の内が分からない以上は下手に攻めるべきではない。教えられた事ではない、ただシルビア自身が経験した事から出た結果だ。

「わざわざ待ってくれるの？」

「……………」

「じゃあ、お言葉に甘えて!！」

沈黙の了解を取った御坂は、雷の鞭を横に振るう。

かなりの速さであったが、シルビアはそれを体を屈めて避ける。

「（予想通り。なんやかんや言ってもコイツが使う武器は速さ重視だ）」

簡単に避けられてしまったが、御坂は気にせず今度は上から下に向けて鞭を振るう。その一撃もかなりの速さであったが、やはり単調な攻撃。シルビアは体を横に動かし鞭を避ける。だが、次の瞬間予想だにしない事が起こった。地面に叩きつけられた筈の鞭の先が不自然な方向に跳ねたのだった。

しかも偶然にも、避けたばかりのシルビアに向かって。

「なにッ!？」

避けた後の隙を狙う、完璧な不意打ちだったが、シルビアはそれの間一髪で避け、服の袖を掠る程度に済ませた。

「チッ!軌道を自在に操れるのか!？」

「そういう事…私に鞭術の知識なんてないわ。知っているのは戦い方よ!！」

再び御坂が鞭を振るう。

先ほどの単調なものとは違い、

今度は蛇のように地面を滑りシルビアに向かって突き進む。

「（速い上になんて変則的なんだ！軌道を読むのはまず無理だ！！）  
」

シルビアは一先ず後ろへと下がり距離を保とうとしたが、鞭はシルビアよりも早く動き、襲いかかる。

「このオオ！！」

シルビアは大剣で鞭を地面に叩きつける。

だが、その後も鞭は叩きつけられてはシルビアに襲いかかり、跳ね返されてはシルビアに襲いかかる。暫くそれをひたすら繰り返し、このままどちらが先に根をあげるかの勝負が続くかのように思われたが、突然、シルビアの右足がうまく動かず、バランスを崩した。

敵の攻撃もそうだが、自身の周りにも最善の注意を払っていたシルビアには、なにが起こったのか理解できなかったが、直ぐに原因は分かった。御坂との戦いで砕けた石がいくつも集まってシルビアの足に縄の様に絡みついて動きを封じていたのだ。

何だ！？と言いそうになったが、それよりも先に思い出す。

このような事を出来る人物はこの場に一人しかいない。

「ッ！？食蜂オオ！！！！」

凄まじい叫び声を上げながら、シルビアは食蜂の方を見ると。

「お忘れで？2対1ですよ」

宙に浮きながら、憎たらしい笑みを浮かべて食蜂がそう言うと、御坂がシルビアの遙か上へと飛び上がった。

食蜂の言う通り、シルビアの相手は御坂だけでも食蜂だけでもない。

シルビアの相手は御坂、食蜂、という名門常盤台の元エースの二人組みなのだ。

「『千手の雷』！」

振り下ろす雷撃の鞭が正しく雷のようにシルビアに向かって落ちる。だが、それだけではなかった。

鞭は途中で無数に一本から二本、二本から四本といった感じにどんどんと枝分かれし、

その数を数百まで増やした。

「（範囲が広いッ！？今からでは避けられんッ！！！）」

数百の雷がシルビアに降り注いだ。

## 剣士（後書き）

以上です。

結構時間かかりました。

正直言うとこれでも結構省きました。

ホントは鞭の技を1、2つほど披露するつもりでしたが、途中で力つきました。

それと、食蜂の最後の台詞ももう少し多かったです、同じく力つきました。

本当は、御坂のことはきらいでも上条勢力である以上私たちの思いは一つ。

的な事を書こうと思ったんですが、大事なことなのでもう一度言います。

力つきました。

ようやくここまで来ました。

後は削板とあれとあれをあれするだけ何で、

後10話くらいでここは終わりますね（多分）  
では、次回もがんばります。



## 各々(前書き)

どうも、今回は話の繋ぎのようなものなので短いです。

話的には、そこまで重要じゃないです。

まあ、ならなげやったんだって話になりますけど…

まあとりあえず49話いっきま〜す！

## 各々

麦野放った『原子崩し』のビームにより生まれた爆炎がまだ収まらず、

フィアンマの安否は確認できなかったが、浜面は特に気にすることなく他のメンバーと連絡を取ろうと携帯をいじっていた。

「御坂は、やっぱダメか…あいつらの魔術の影響かもしれないけど、御坂が本気になったら、電波はまず届かないしな」

と、一人で呟く浜面だったが、

その後、直ぐに『原子崩し』の出力をうまく調整した麦野が浜面の近くに着地したので一人ではなくなった。

「おいこら浜面、お前ちゃんとシヤケ弁買ってきたのか？」

「いや、さっきの見てた？どう考えたって買いに行く余裕なかっただろう」

「ちっ使えねー」

扱いの酷さは、もういつもの事なので浜面は特に何も言わなかったが、

今浜面が気になったのは麦野が上の部分を吹き飛ばしたビルの数だった。

「つーかやり過ぎだろ。こんなにビル破壊しちゃって…」  
「どうせロクでもない政治家どもの所有物だろ？別に気にする必要ねえだろ」

反省する様子のない麦野だったが、これもいつもの事なので浜面は特に何も言わない。

「さてと、これからどうするか…」

「奴らが三人でこっちは三ペア。ノルマは果たしたんだから、これ以上やる意味はないだろ？」

「サービス残業って言葉知らないのか？一方通行は知ってるぞ」

浜面なりに皮肉を言ってみたが、少し抑え目だったので麦野は特に気にならなかつたらしく、麦野は女子が退屈の時によくやる枝毛探しを始めた。

さて、どうするかと浜面が頭を悩ましていると、ポケットの中の携帯が鳴った。

「おっ電波障害がなくなってきたのかな…？もしもーし！」

「あゝ漸く繋がった。もしもし浜面さん？そっちはどうなりましたか？」

「あーその声は…焰か？」

「あゝようやく繋がったよよかったよ」

「ああ、こっちも色々バタバタしててな。今終わった所だ」

「じゃあ丁度よかった。こっち来て下さいよ。今、削板さんとオツレルスが戦ってて、ウワツ！」

「どうした!？」

急に会話が遮られたので、思わず聞き入る浜面。

『ちよつと削板さん！周りの迷惑考えて！！』  
『又オオオオオ！！！凄いいいムウツ！！！！』

直後、ドゴオオン！と地鳴りが聞こえてきた。  
その音がなんの音なのか、考える必要もない。

「ああ〜そつちで何とかなんねえか？」

『勘弁して下さいよ〜！俺なんてスーパーサイヤ 3の悟 と魔人  
ブ の戦いを遠くで見流弾に殺されかけるバビデ みたいなも  
んですよ〜』

「安心しろお前はベジ タだ。「がんばれカカロ ト」くらいなら  
言える」

『全然おいしくないですよ！あんなだったらミスターサタ の方  
がいいです！』

結構切羽詰まっているらしいので、このまま無視する事も出来ない  
浜面は一先ず麦野方を向き、

「どうする？」

「適当にゆっくり行って終わった頃着けばいいんじゃないの？」

「そうだな、そうするか…。」

『ちよつと！学園都市の携帯の機能見くびらないで下さい。ばつち  
り聞こえてますよ！！』

「あ〜分かった分かった…じゃあ、取りあえず今から…」

と急に浜面が言葉が途切れた。

『浜面さん？』

「あ〜前言撤回、悪いがもうちよつと掛かりそうだわ」

そう言うと浜面は電話の向こうから何かを言う焔を無視し、電話を切り爆炎を見つめた。

直後、立ち上る爆炎を吹き飛ばし、麦野の攻撃を受けた筈のフィアンマがその姿を現した。

「はあ…はあ…流石に、死ぬかと思ったぞ」

「いやいや、死んどけてそこは…」

呆れた様な声で呟く浜面だったが、その手にはしっかりと武器を持ち、刀を構えていた。

「さて、今度はさつき見たいにはいかないぞ」

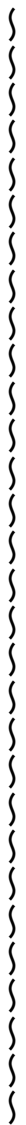
フィアンマが第3の腕を振ると、ジリジリと風の重圧が押しかった。

「お前の出力に合わせたな…こりゃ厄介だぞ」

先ほどとは明らかに違うフィアンマの様子に浜面の頬を汗が伝う。

「やれんのかよ、浜面？」

「やるしかねえだろ。上条勢力のオールマイティカードである俺が、やりかけで逃げ出す訳にはいかないからな」



~~~~~

一方、二三学区の御坂と食蜂。

御坂の攻撃を完璧に喰らったシルビアを倒したものと判断した食蜂は、

自身が座っている岩ごと御坂の元に移動させ、隣に並んだ。

「御苦労さまで〜す御坂さん。これからどうします〜？」

「……………」

「どうかしました〜？」

「……………食蜂。あんたもう少し離れてなさい」

「へっ？」

食蜂が不覚にも頓狂な声を漏らした次の瞬間。

ブワッ！と御坂の攻撃によって起こった煙が一気に吹き飛ばされ、倒した思われたシルビアがその姿を現す。

「あら、生きてたんですか〜意外とやりますね〜」

と、あまり驚いた様子のない食蜂をしり目に御坂は、シルビアの大剣をじっくりと見つめ、

「アレをガード出来るなんて、良い剣ね、それ」

シルビアの生き残れたのは剣だと悟り、

「ああ…聖人に用意された武器だからな、これくらいは出来ないとな…」

シルビアもそれを認めた。

そして、御坂は顔色を変えずに、

「防御、攻撃力、間合いといった特定のパターンをそれぞれを強化出来ると言われる。王室派から渡された剣ね」

「ほう…知っていたか…」

「騎士派のトップ『ナイトリーダー騎士団長』の『ソーロルムの術式』に対抗する為に用意されたって聞いていたけど…まさかエリザード女王陛下もこんな事に使われるとは思ってなかったでしょうね…」

「まったく、そこまで聞かされているとはな…今はお前の方がイギリスの事情に詳しくそうだ。流石は上条勢力といったところか。だが、今の話には一つ間違いがあるな、もうあの人は女王ではない…」

「そつえば、そつだつたわね…」

大して意味のある指摘でもないのだが、御坂は自然と口が緩めながら返事をした。

「食蜂…離れてなさい」

「どれくらいですか？」

「邪魔にならない程度よ」

「言ってくれますね」

若干不満がありそうな感じだったが、食蜂は素直に座る岩を宙に浮かべて離れる準備を進める。

「……………勝てますか？」

「絶対勝てないとは言わないけど、時間が掛かるわ」

二人が交わした会話はそれだけだった。  
御坂の答えを聞くと食蜂はその場から離れ、  
そこに残ったのは御坂とシルビアは2人だけ。  
そして、直ぐにそこは戦場へと変わる。

~~~~~  
~~~~~

所変わって、第二一学区。  
学園都市の水源でもあるダム施設が設置されている学区で戦っているのは、  
二人の『絶対能力者』焰と削板であった。

「削板さ〜ん！やっぱり他の援護は無理みたいで〜す！」  
巨大なビームを放つ削板から、遠く離れた所で焰が叫ぶ。

「ああ！？何だつて〜！？」  
「あ〜何でもないです続けてくださ〜い」  
「了解！うおおおおお！！根性おおおおお！！！」



そう叫ぶと、削板の手から放たれたビームが更に大きさを増し、標的に向かって突き進む。巨大なビームを前にして標的がやったことは至ってシンプル。ビームを蹴ること、たったそれだけでビームの軌道は空へと変わった。

「やはり、やるな！オレルス」

「オッレルスな…覚えてくれ」

どこか、がっかりしたような顔で答えたのは、学園都市に攻め込んだ3人の内の1人であるオッレルスだった。その実力から、色々な呼び名があり恐れられているが、その中には『魔人になれた男』という名称が、一番知られているだろう。

「腕を上げたな…昔よりさらに力が洗礼されている」

「根性さえあればなんとかなる！！」

「流星は、今、この街で『神上』に最も近い男だな…」

「上を目指す男に不可能などない！！」

「（あの人達あれで会話のペースあつてるのかな？）」

遠くで聞いていた焰はそんな事を考えていると、再び戦闘が始まる。

「（今の削板さんじゃ、勝てるかどうかは良いとこ五分五分ってところだな。」

まあ時間を稼げば上条さんか一方通行さんが帰って来てくれる筈だから、特に心配は必要ないと思うけど…だけど、これで本当に終わりなのかな…天使を使った上条さん達の誘導はよく出来てるけど、そつからはお粗末だ。『絶対能力者』達相手にただのガチバトルを挑むなんて、彼らの力は理解してるけど  
あまりにリスクいだぞ……）って、うわっ！！？」

冷静に状況を分析する焔だったが、ふとした瞬間に削板の放ったビームが自身に向かって飛んできたので慌てて、その場を離れた。避けたビームはサッカーボールほどの大きさしかなかったが、その威力は地面に隕石でも落ちたのではないかと思わせえるものだった。

「はーまあ、こっちも絶対に勝てるっていう余裕がある訳じゃないけど」

そう呟いて、焔は次に来るかもしれない流れ弾に注意を払う。

こうして『絶対能力者』、そして『二枚看板』は、各々持てる限りの力を尽くして侵入者と戦う。

上条当麻、一方通行、両『神上』の学園都市消失から、47分後。それぞれの戦闘は最終局面へと向かう。

そして、この後の歴史に記録される大事件が発生する。

## 各々（後書き）

以上です。

ええまあそうですね…

削板とオツレルスの戦いを期待してた方には申し訳ないですが、正直、あんまり思い浮かばなかったので、ちょっとだけにしました。

まあ誰も期待してなかったと思うんで大丈夫だとは思いますが、

そして、見なくていいと言った割には意味深な台詞がちらほらありました、

まあその内本編で触れますよ。…嘘だけど

では、今回はこの辺で、次回もがんばります。

おそらく次回は「特別編」やります。

## 特別編（前書き）

どうもです。

いや〜50話ですな〜

せつかくのキリのいい数字なのに、特別編って（笑）

まあでも、別に深く考える必要ないですよな。

どうせだれも楽しみにしてないし！（ヤケクソ）

そんなこんなで第50話！

本編関係ないけど、それでいいのだ！！当麻先生！！

## 特別編

放課後。

キーンコーンカーンコーン。

ガラガラガラッ、

削板「おっどうしたんだ？ 焔 窓の外を遠い顔で見つめて…もう授業は終わったぞ」

焔「ねえ…削板さん」

削板「何だ？」

焔「俺…いる？」

削板「なっ何だよ急に!？」

焔「いや〜何か最近思っすよ〜俺の存在フワフワっしてるって」

削板「いやいや、何を言っている！お前は俺と同じ『絶対能力者』ではないか!？」（この話の中だけだけど）」

焰「そうか、それでね〜じゃあちよつと質問あるんですけど…俺の顔ってどんなか想像できます?」

削板「……………いつ……………イケメン」

焰「超適当!?でもその通り!誰も想像出来ないですよ!何故ならそんな描写一つもないから!」

削板「たっ確かに…言われてみれば」

焰「思えば『当麻VSローマ・学園』の時から、俺の存在ってフワフワしてた!戦いの描写も適当だったし!口癖もなかったし!」

削板「おっ!落ち付け!」

焰「きつと俺はこのままフワフワした感じ終わるんだ!俺なんていないんだ!」

削板「ツ!?バカ野郎!!凄いパーンチッ!!」

焰「ヒデブツ!!」

ドカアァン!

焰「やり過ぎですよ…」

削板「すまん。だが、言わせてくれ!人の存在がそのものが、いないなんて事は絶対ない!」

焰「削板さん…なんかキャラ違う気がするけど、そう言って貰えて

嬉しいです！」

ガラガラッ！

当麻「おいコラ！誰だ！？教室で能力使った奴！！？」

焰「あつ当麻先生！！！」

削板「あつすいません！先生俺です！！！」

当麻「削板！お前は撮影にも行かずにこんな所で油売ってたのか！  
！さっさと行け！オツレルスが待ってるんだぞ！！！」

削板「あつ！すいませんした！直ぐ行きます！行こう焰！！！」

焰「あつはい！！！」

当麻「あゝ焰は行かなくていい」

削板「えっ！？何ですか？俺達ペア組んでるのに……」

当麻「だって、焰の戦う描写は一つもないから」

焰「……………えっ？」

削板「どっどっとういことですか！？？」

当麻「仕方ないだろ、脚本家<sup>なぐさ</sup>だって忙しいんだ。バイトとか就活の準備とか賞に出す小説の原作仕上げたり、色々あるんだ！一々、オリキャラの設定まで深く考える訳ないだろ！！！」

削板「だっだからって!？」

当麻「それから言うておくがな、脚本家は自分の作品なら仕方ないにしても、他人の作品でオリキャラを出すのは好きじゃないんだ」

焰「俺のキャラ全否定!？」

当麻「それとこれも言うておく!前のオリジナル作品である『新人<sup>ルキ</sup>達編<sup>スヘン</sup>』に出てきたオリキャラの新人達:アレもう出て来ないから」

削板・焰「マジでかアア!？」

当麻「そりゃ、そうだろ。だつてアイツらだつて名前以外、何の姿を現した描写はなかっただろ?正直な所、脚本家はオリキャラよりも、モブキャラの方が愛着わいてる」

焰「俺モブ以下!？」

当麻「さらに言うておくと、もし禁書目録とか超電磁砲のどっちかで本物が出たら、今のお前消して新たに作り直す予定だ」

焰「凄い裏側聞いちゃった!！」

削板「それじゃあんまりです!!先生!何とかして焰に出番を!!！」

当麻「じゃあ削板、お前の出番丸々カットして、焰の出番にあたるけどいいのか?」

削板「……………行ってきまゝす」



焰「削板さアアん!!」

削板「許せ焰アア!!俺も出番が欲しいんだアア!!」

ガラガラ、ピシヤ!

焰「俺の存在って何イイ!?!」

当麻「……おい」

焰「…先生ツ?」

当麻「ほら、箒。片づけとけよ」

スタスタスタ、  
ガラガラ。

(そして、誰もいなくなった)

焰「……………あっオチなしです」

## 特別編（後書き）

以上です。

え〜書きたい事を全て書きました。

まあ、本編を書かないで書くことか？って聞かれると  
そうでもありません。

でも、いつておきたかったので、今回書かせてもらいました。

上記は事実です。

正直オリキャラを考えるのは面倒なので、  
いつも存在がフワフワッしてます（笑）。

まあ犠牲になっただんです。焰は…

では、今回はこの辺で、次回はちゃんと本編やりますよ！

## 遺産（前書き）

どうも、出来たので載せます。

ここからは怒濤の展開。

色々やりすぎ感もありますが、

色々出したかったので、これでいいのです！

そんなこんなで51話行きま〜す！！

## 遺産

### 第一学区。

多くの立ち並ぶビルの上で浜面、麦野ペアとフィアンマの戦いは続いていた。フィアンマが麦野出力に合わせてからも、二人の戦い方は大して変わらなかった。まず浜面が接近戦を仕掛け、隙をついて麦野が遠距離から攻撃し、その繰り返し。正確にはそれしか出来ない状況だった。浜面の遠距離の攻撃は麦野の攻撃力には及ばないし、麦野の近接戦闘の技術は浜面に及ばない。ならば、下手に出来ない事をやるよりも、一番得意な分野をやる事が効率がいいと長年の経験から判断した結果だった。

そして、その判断は正しかった。麦野出力に合わせて強化されたフィアンマであったが、隙のない攻撃にただ防御せざる負えない状態になっていた。

「どうした？随分と手こずってるな、アドバイスでもしてやろうか？」

「いや、どうせなら手を抜いてくれないか？こっちはスケジュールが詰まってるんでな…」

「スケジュール？」

「あつ、あれはやばいな…」

「へっ？」

浜面の後ろの方を見ながらフィアンマがそんな事を言うので、浜面

は間抜けな声を漏らしながら、フィアンマが見ている方に視線を移してみると、後ろから二人目掛けて迫ってくる光が見えた。

「又アアアアアア！」

間一髪、浜面はその場から飛んで違うビルに飛び移りビームを避けた。

だが、かなり無理に回避したらしく、うまく着地出来ずズコーと無様に転げた。そして、その横にスタスタと麦野が歩いて近づいてきた。

「チツ！外すしたか」

「ちよっと！何しちゃってんの麦野さん！？今の当たってたら死んでたぞー！！」

「あらっ浜面、生きてたの？しつこいわね」

「殺気マンマンマン！？」

麦野の発言に適度なリアクションを返していると、

浜面と麦野から少し離れた所にフィアンマが余裕を持って着地した。

「流石は、学園都市の奥の手。昔と変わらん…まさかここまで手こずるとは」

「お前の方は長い間合わない内に随分バカになったらしいな。」

当麻と一方通行を天使を餌に外に出ざるえない状態に持っていったのは言い策だったが、そっからは、随分とお粗末だ。『絶対能力者』相手にガチの戦闘を挑むなんて…」

浜面が今までの戦闘からフィアンマ達の作戦の出来るの悪さを指摘したが、フィアンマは表情は変わらず、黙って頷きだした。

「ああ、確かにお粗末だな……ここまでで十分だと判断した俺はな」

「なに？」

「ここまでの策は俺が考えたが、ここからはオツレルスの考えた策だ」

「どういう…意味だ？」

意味深な台詞に浜面が食いついていると、

「一々気にするな浜面、集中切らしたら勝てるもんも勝てないわよ」

隣の麦野がそうアドバイスしてきたので一旦はフィアンマの話から意識を逸らそうとしたが、やはり、フィアンマの言った事が気になつて仕方がなかった。だが、それも仕方がなかった。実際に彼らの策に振り回されたからこそ、浜面は感じるものがあつた。彼らが本気でこの程度の策で学園都市に喧嘩を売るのか、と。そんな浜面の心を見据えてか、

「気になっているようだな…なら、ヒントをやるわ」

「……………」

「お前達は直ぐに俺達との戦いになったから、詳しい報告はまだ受けていないだろう？」

「だったら、ここに何体の天使の卵が侵入したの知ってるか？」

「んなもん知つてどうなるんだよ？浜面さつさと片づけるぞ」

「全部で27人だ」

麦野の興味なさげな態度にフィアンマはじらすような事はせず、直ぐに答えを言う。

「それが、何だつて言うのよッ！！？」

フィアンマの何を伝えようとしているのか分からない麦野はフィアンマの言った事特に気に止めずビームを放つ。迫るビームを第3の腕で受け止めた後、フィアンマは何故か浜面に視線を移し、

「説明がいるかな？」

「……………20…7人だと!？」

とフィアンマの言葉を反芻しながら、浜面は先ほどの当麻との電話を思い出す。

『あゝビキニガールとはランデブーしてないけど……………26体の天使ちゃん達とならランデブーしてるぞ』

その浜面の表情を見ながらフィアンマはニヤリと笑う。

「そういえばお前は当麻あまじと連絡を取っていたな…

そう、今、上条達と戦っている天使は全てじゃない。

最後の一人は……………ここに残っている!」

「なっ!？」

「マジかよ…」

フィアンマの言った事に麦野でさえ顔を歪めた。

「どうやら、準備が出来たようだ…」

そう言い終わると、突如浜面達のいる第1学区から南の方角が光り出した。

「あつちは…」

「第7学区だ!」

一同の目が光の放つ方に向いた直後、  
ドバァァァ！と空に向かって光の柱が立ち上り、  
数秒間空に向かって上っていただけだったが、  
やがて、それは無数の光に分かれて、  
次第にその形を翼のような物へ形を変えていった。

「ようやくか…天使は時間にルーズらしい」

最早、浜面達の方も見ず、ただ天使だけを見つめながらフィアンマが呟いた。違う学区とはいえ、直ぐ隣の学区であるので、そのまぶしい閃光と風圧はしっかりと麦野と浜面に届いていた。

「ッ！？『ヒューズ・カザキリ』！？」

「いいや、違う！！似てるが…別物だ！」

凄まじい閃光だったので、

一旦は視力を奪われた浜面と麦野であったが、次第に慣れていき、風圧も収まったので今度はしっかりと出現した天使を見つめた。

「確かに…雰囲気が違うな」

「当麻が精度が上がっているとは言ってたが、ここまでとは…」

「当たり前だ。あれは特注品だから…」

浜面が漏らした感想に余裕のある笑みで返事するフィアンマ。

「一体どうやって、あれだけのモノを！？」

浜面の問いかけにフィアンマはより一層笑みを強めた。

「アレイスターの遺産だ」



「……………アレイスターの…遺産？」  
「バカな!？」

聞きなれないワードに麦野が思わず繰り返していると、真っ先に浜面が反応した。

「アレは当麻が破壊した!！」  
「お前が言っているのは、奴の研究所にあったディスクの事だろうか？  
だが、こちらも調べてあるんだ」

話の分かる者通しでしか伝わらない二人の会話に困惑した麦野は、  
理解していると思われる唯一の味方である浜面の顔を見て、

「おい! どういう事だ!？ 浜面! ! 説明しろ! !」

麦野の問いに浜面はどこか悩んだような表情を浮かべたが、  
暫く考えた後、観念したように口を開く。

「……………第一次科学魔術大戦が終息して、間もない頃だ…俺は当麻  
とインデックス、一方通行と一緒に『窓のないビル』の調査に向か  
ったんだ。最初は『窓のないビル』を取り壊す上で、何か学園都市  
の機能に影響をもたらす物がなければ調査するだけのはずだったん  
だが…そこで、見つけたんだ…」  
「見つけた?…何をだ？」  
「……………」

まだ、踏ん切りがつかないのか、浜面が答えないでいると  
代わりに、と言わんばかりにフィアンマが答える。

「アレイスターの研究データさ!」

「！？研究データ！？」

約7年前の第一次科学魔術大戦が終結してから、間もない頃。  
窓のないビルにて、

「こりゃア…すげエな…」

そう絶賛したのは一方通行。  
彼は、目の前に電子端末に広げられた数々の設計図をただ茫然と見つめていた。

「あの野郎の頭の中は、どうなってるんだア？どれもこれも、今の学園都市でも開発できないような装置や兵器ばかりだア…」

「ああ…俺は技術屋じゃないが、これがとんでもないもんだってことはよく分かるぜ」

その横には、科学と魔術両方の知識を持った男、浜面。

「ただの調査のつもりが、とんでもないもの掘り当てたみたいだな

…当麻」

「ああ…どうやら、アレイスターは死ぬ前に身の回りの整理はしなかったみたいだな…」

予定外のお宝発掘に当麻が戸惑っていると、

「とうま！こっちに来て！早く！」

少し離れた所にあるいくつか並べられたモニターの前でインデックスが騒ぎ出したので、当麻は急いで彼女の元に向かった。

「どうした？」

「これ見て…」

そう言ってインデックスは、モニターのある文字の列を指差した。そこに書かれていたのは、

「m a … g i … c … 魔術か？」

「うん。開ける？」

当麻はどんな機械を扱えるというスキルを持っている訳ではなかったが、

インデックスに比べれば、まだ機械は得意な方であり、科学技術が世界で一番発達した街、学園都市に住んでいるだけあって、

目の前の扱った事のない機械も、まったく使えないとは思わなかった。

「あゝこうかな？」

当麻が画面の『magic』と書かれた項目を指で触れると、予想通り、画面はタッチパネル式だったらしく、当麻の指に反応して項目『magic』を開き、画面いっぱいによく分からない文字達が何かの模様のようにずらずらと並んだ、何かの設計図が現れた。

「こいつは……………魔法陣!？」

「うん…それも見た事もない。」

「あいつ…魔法の研究資料もデータにして保存してたのか…今の魔術師もこれ位、時代を先駆けてくれればな…」

倒したアレイスターへの皮肉が、それともインデックスや他の魔術師に対する皮肉なのか、当麻がそんな事を呟いたが、いつもならそういう事に敏感なインデックスも今は目の前に広がる未知の魔法陣に興味に向いたままのようで、特に反応のないまま、

「多分…時空移動型の魔法陣だと思うけど…よく分かんない…こんな術式見た事がないもん。」

多分、科学の理論も応用してるんだと思うよ。じゃなきゃ、私が解読できないなんてありえないもん」

と目の前の魔法陣についての感想を述べ始めた。

「まったく新しい魔術か……………んっ、ここ何か書いてあるぞ」

当麻が指差した先には、魔法陣に使う言葉ではない、この世界で当たり前前のように使われている言葉である英語が画面の隅に並べられていた。

「えっと…『the first cry of chaos』って書いてあるよ」

「え〜つと……カオスが…最初に泣く？」

「産声だよ。とうま……first cryで産声。『カオスの産声』って意味」

「あぁ……」

年下に英語訳され、少し悲観的になっていると、

一通りデータを見た浜面が近付いて来た。

「でっ、どうするんだ？」

「……全部破壊しよう」

「なっ！？いいのか、どいつもこいつも今から数年は開発できないような、とんでもねえ物ばかりなのに……」

「こんなもんがあっても、また新たに争いが生まれるだけだ。それに……」

間を置きながら当麻は部屋中にある様々な研究データを映し出す画面を見つめた。

「アレイスターは少し急ぎ過ぎてたんだ……だから、あいつの周りには理解者がいなかった」

どこか寂しそうな表情で語る当麻。

それが、かつて倒した敵に対する同情か、はたまた救う事の出来なかった後悔か、浜面には分からなかった。

だが、次の言葉だけは、彼の本心だと理解出来た。

「俺達は慌てる必要はない。もっとゆっくり……皆で進んでいけばいいんだよ」

「俺達はそのコンピューターを破壊した後、データが残ったHDも燃やした。一つ残らずな…」

自分の過去を一通り話した後、浜面は困惑した様子でフィアンマを見る。

「俺はその場にいた！なのにどうして!？」

「確かにアレイスターの研究データをまとめたHDはお前達が破壊した。それは間違いない。だが、奴は死ぬ前にその研究データをいくつかに断片化させ、世界中にばら撒いた。勿論、物理的な意味じゃない。ネットワークを使ってだがな」

「それをかき集めたのか!？」

「ああ…だが、俺達が手に入れたのはデータは二つだけだ。他は、あまりに断片的すぎて解読できなかった。もしくは、それ以上の物が流出していなかったのか、まあ、必要な物は手に入ったから、今となってはどうでもいいがな…」

天使という奥の手を出し、自身の優位性を感じ取ったフィアンマは

一切に慌てる様子もなく続ける。

「これほどの騒ぎならば、今は緊急退避命令が出ているだろう。そうなれば今の第7学区はモヌケノからだ。天使の卵を一般人と忍ばせておいてもリストに載っていないのだから騒ぎになる事はない…」

わざわざご丁寧に説明をするフィアンマに隙を感じ取った浜面は空き缶の様な形をした小さめの容器を投げ付ける。

「わりっ！話長くて聞いてなかった…」

直後、容器は凄まじい閃光と爆音を生み出し、フィアンマの目と耳の機能を一時的に奪った。

「閃光弾か!？」

攻撃するチャンスが生まれたのだが、浜面、麦野はそのチャンスを活用せず、

その場を離れる為に時間に費やし、第7学区の天使の元へと急いだ。

「ちょっと、どうすんのよ!？」

「あいつの始末は後だ!まずは天使を何とかする!！」

「ほつといていいの!？力でいつたらアイツだって厄介よ!」

「天使に敵や味方の区別はない!人としての理性がないぶん天使の方が厄介だ!！」

二人が会話をしながら、ビルからビルへ移っていると、

その途中、二人の上空を数基の戦闘機が通り過ぎた。

向かう先は、おそらく浜面達と同じ天使であろう。

「外に配備してあった軍が動いたみたいね…ってことは一様、土御門もあれには気付いてるってことね…」

「ああ、あれでも將軍だからな…でもいくら学園都市の兵器といっても、あれは無理だ。やり合うつもりなら最低でも3人、いや4人は『絶対能力者』レベルの奴がいる」

「私達二人だけでもダメって事？」

「俺達に学園都市の兵器、暗部も加われば足止めは出来るだろう。とりあえず、今は急ぐぞ！」

「あの程度で時間稼ぎ出来ると思っていたのか!？」

その言葉に反応し、二人は足を止める。

「チツ！お早いお着きで…！」

浜面がそう言った次の瞬間、シュン！とまるで瞬間移動のようにフィアンマが現れ、二人の行く手を塞いだ。

「お前達の相手は俺だろう？」

「くそ…」

「おいどうすんだよ…？浜面」

「俺にばっか頼るんじゃないよ…先生怒るよ…」

「余裕だな、おい…」

「強がつてるだけだ。とりあえず土御門達に連絡を取って、何とか連携を…」

「させるか!！」

最善の行動を取ろうとする浜面だったが、フィアンマが妨げた。

浜面が携帯を出そうとポケットに手をつ込んだ瞬間、フィアンマが第3の腕を揮ってきたので、浜面と麦野は別々の方向に飛び、何とか事なきをえた。



「チツ！邪魔すんな！」

「散々邪魔してきたのはお前の方だろ」

直ぐにでも土御門達に連絡を取りたい浜面だったが、相手が相手だけに安易に隙を作る訳にはいかない。だが、天使をほっておく訳にも行かない。まさしく、八方塞の今の状況に浜面が焦りと不安を感じていると、  
そこに、

「はあ…まったく」

この血なまぐさい戦闘には、あまりに似合わないおっとりとした声が浜面の耳に聞こえてきた。

「これだからまづらは、きぬはたに超はまづらだ。とか言われるんだよ…」

この独特なペースの喋り方、そしてその声、浜面はよく知っていた。

「たっ……滝、壺、さん？」

## 遺産（後書き）

以上です。

はい、浜面が好きのように、私は滝壺大好きです。

まあ、ちよくちよく彼女は出してたんですが、

滝壺の戦い方も考えたら、結構形になったので、

書いてみようと思いました。

まあおかげで削板と焰が犠牲になったんですが（笑）

というわけで、今回はこの辺で、

次回もがんばります。

次にのせるとしたら、新約3巻が出た後くらいになるとは思っていますが、

新約3巻を読んだら読んだで、また、書き直すかもしれないので、  
次回は結構先になるかもしれません。

禁止（前書き）

どうも、明日に出来ればいいやと書いていたら  
なんか出来ちゃったので、のせます。

あっそれと凄い重要な事！

今日は新約3巻の発売日！！

みんな買いに行こう！！

## 禁止

「お前は…!!」

「どうして、あんたが!?!」

「Oh~! 滝壺ッ!!」

フィアンマと麦野が真剣な雰囲気を出していると、突然浜面が妙な奇声を上げながら叫んだ。

「我が心に咲く美しくも危険な花!! どうしたんだい? こんな所で!! そうだ! 実は夜景が素敵な店を見つけたんだ! どうだい今夜二人きりで…!!」

浜面の訳の分からないテンションにフィアンマだけでなく味方の麦野も気持ちの悪い物でも見る様な目で見つめた。だが、唯一滝壺だけは、そんな目を向けず、喜怒哀楽のどれでもない表情で、ただ一言呟いた。

「はまづら…」

「はい」

何一つ声を荒げた訳でもないのだが、滝壺の言葉に浜面は今までの

テンションを嘘のように止め、普通に返した。

「約束したよね？もし何か危ない事に巻き込まれそうな時は、お互いに隠さず言い合って、一緒に乗り越えようって……」

「いやっ……あの〜俺も巻き込まれる気はなかったんだけど〜何か急に〜当麻の奴が俺を縛って、無理やり連れてかれて〜俺だって嫌だったんだけど〜」

「そう。でも、後で私に連絡くらいは出来たよね……」

滝壺の何とも言えぬ威圧感に、はいその通りです。

と素直に謝りそうになったが、浜面は、まだ諦めていないのか悪あがきをする事にし、

「いやっでも何っーか、ほらっ！連絡する時間がなっかっていうか〜そういう空気じゃなかったっていうか〜」

「はまづらー！」

「はいっー！」

往生際の悪い浜面に痺れを切らしたのか、滝壺の少し大きめのトーンで名前を呼んだ。といっても元は大人しく、ひ弱な滝壺では大した迫力はないようなものだった。

だが、浜面は知っている。

彼女を怒らせると、どうなるかという事を……。

「なっ、何でしょうか？」

「……………万死に値するよ」

「（わー滝壺がネタっぽいこと言った〜でも何でだろう。全然笑えねえやッ！〜）」

と、若干ヤケクソ気味心の中で叫ぶ浜面。

だが、それも仕方がないだろう。

今の浜面には滝壺がイ ベーター的な人ではなく、どちらかというところ、どっかの物語のツンドレちゃん的な存在なのだから。(注)分かる人にしか分かりません。

「はまづらをお仕置きするのは後、まずはあれを何とかしないと」

これからの未来を予想して、真っ白に燃え尽きている浜面を無視し、滝壺は天使を見つめた。

「おいおい、まさかあれとやりあうつもりか？」

今の台詞から滝壺の意図を悟ったフィアンマは、呆気にとられた様子で尋ねてきた。

「止めておけ、あれは正しく人外の物だからな。」

「……………えっと、誰？」

「……………ブフツッ!!」「」

滝壺の一言に盛大に噴き出す浜面と麦野。

「……………誰」って、ちょっとベタ過ぎない？」

「仕方ねえよ……………だってアイツ二期出てないし……………」

「ああそっか……………私は一応ゲームとレールガン出てるけど、アイツは出てないんだっけ？」

「『特別編』でやれえ!!」

フィアンマが浜面と麦野のやり取りにそんな風に返していると、ふと、麦野がある事に気付いた。

「あれっ？滝壺は…」  
「何!？」

三人が辺りを見渡し、滝壺の姿は既にどこにもなかった。

「バカか…死に行くようなものだぞ」  
「おい」

恐らく滝壺が向かったと思われる天使の方を見ながらフィアンマが  
呟いていると、浜面がいきなり切りかかってきた。

「うおっと!」  
「俺達の相手になってくれんだろ？」  
「何だ？やる気になったのか？」

相変わらずの余裕の表情のフィアンマ。  
その表情にイラつきを覚えながらも麦野は一人で攻撃するといった  
事はせず、浜面の隣に立つと冷静に話しかける。

「助けに行かなくていいの？」  
「行けるもんなら行きたいが、コイツもほおっておけねえからな…」  
「それに滝壺がやる気になってるなら仕方ないだろう」  
「まあ、あいつも頑固だからねえ…どっかに誰かに似て」  
「うるせえよ」

~~~~~

同時刻。

第七学区では、『絶対能力者』、『二枚看板』以外の戦士達も戦っていた。

「こちら、第七学区！至急応援をお願いします！繰り返します！至急応援を……！」

『……ジー……ガガツ……ジー……』

「だあ！クソ！隊長やっぱりダメです！無線が通じません！」

雑音しか聞こえない無線を投げ捨てながら学園都市軍の兵、田島が叫んだ。

「そうか、今別の部隊に無線も試してみたが、あちらもダメみたいだ」

部隊の隊長である倉識が貫禄のある態度で答えた。

学園都市に軍隊は存在しない。

それは、もう昔の話である。

第三次世界大戦までは、学園都市の軍は教師でもある『警備員』アンチスキルが補っていたが、『科学・魔術大戦』のおりに正式に軍を作り、それは今でも存在している。

「科学の最先端技術で作られた無線が、どうして通じないんですか！？」



「敵の策略だろ。なんにせよ、俺達の部隊だけでアレを何とかする  
しかないみたいだな」

「勘弁して下さいよ！何なんすかアレ！？俺、あんな神秘的な怪獣  
と戦う為に軍に入ったんじゃないんすよ！！円谷プ　に出てくるよ  
うな怪獣と戦う為に軍に入ったのに！！」

二人が言う「アレ」とは、彼らから数百メートル程先で光り輝く羽  
の様な紫電を伸ばす物体、『天使』のことだった。だが、そんな事  
を知る由もない二人は、その存在にただただ困惑していた。

「学園都市の物ではないな…外から持ち込まれた兵器か！？」

「もう嫌です！隊長！帰りましょうよ！！こんなの俺達がどうにか  
出来る次元じゃないですよ！」

「帰るも何も、俺の家は第七学区にあるんだ。まずはここを守らな  
いと帰りようがない」

「あっなんかちょっと、良いセリフ……………ってうわっ」

突如、今まで天使から外側に向かって吹いていた風が、その方向を  
変え今度は天使に向かって吹き始めた。

「今度は何すか！？」

「くうっ！？光が…収まってく…？」

ただ光輝いていただけの物体は次第に輝きが失われていき、  
段々と見えなかったその姿を露わにしていった。

「……………あれは？」

「…はっ…ははっ……………何か…凄く…おっきいです」

目の前に現れた天使という生き物に田島の出た感想はそれだけだっ



『人工天使』。

それに感情といったモノはない。

正確にいうと彼らにそういったものを持たされない。

何故なら彼らに求められるのは、敵のせん滅。目標の破壊。

そういったシンプルな物しか求められないからだ。

つまり、彼らには恐怖というモノがない。

あるのはプログラムされた任務をこなす事だけ、第七学区にいる天使も例外ではない。

アレイスターの遺産により、今までの天使とはまったく違う精度に仕上げる事は出来たが、行動倫理としては、今までの「はい」「いいえ」の様な2択の行動しか取れなかったのをプログラムを5択の行動をとれるように改良して、行動にバグが生まれ、おかしな行動を取らないようにする、その程度の制限しかしていない。

今、天使が動かず、ただ一点を見つめているのは決してバグではない。

今回天使がプログラムされたのは、ただ学園都市で暴れ騒ぎを大きくする事。そして、もしそれが何かの理由で困難な場合は、その理由を全力で排除する事であった。

つまりは、それほどまでに今天使の前にいる人物は自身の行動をずる上で脅威である判断されたのだ。

「私に…気付いたみたいだね…」

天使よりも高いビルの上から天使に視線に気付いた滝壺がいつもの眠たそうな瞳のままに眩き。

「風斬とまったく違った天使化だね。姿も全然違う…」

「apoggjapzsirhaeh!!!」

滝壺が冷静に分析していると、天使が先ほどの人間には理解できない言語で奇声を上げ、バチバチと紫電が迸る羽を使って、滝壺がいるビルを真上から真っ二つに切り裂いた。

「ihgssdhpoasjggjosag!!!」

ドゴオオン!と爆炎を上げながら崩れていくビルを見つめながら、天使が勝利の雄たけびなのか、再び叫んでいると、

「どこ見てるの?」

ガバツ!と巨大な体を動かし天使が声のする方へと振り向ういた。すると、先ほどまでビルの上にあった筈の滝壺がいつの間にか天使の後ろへと移動していた。

「ggaggjprrhcjggas!?!」

「そろそろ軍隊が来る頃だね…でも、こんなところで戦う訳にはいか  
ら…場所を変えよつか?」

周りから聞こえてくるヘリや戦車のものらしき騒音を聞きながら、滝壺が問い掛けたのだが、天使の方は相変わらず、何かを叫んでいるだけだった。

「siobhdas!!!ghsijasio!jhjsokdsp  
jgyaaaaa!!!」

「……言葉が通じるとは思えないけど、教えてあげる。

この街ではね…最高の危険レベル「コード：ブラック」にならないと能力を使う事が許されない能力者が4人いるの。一人は「カウンター正体不  
トッブ

明『風斬氷華の『天使化能力』。そして、次の二人は嘗ての將軍、レベル7『神上』の上条当麻と一方通行アクセラレータの二人。最後は……私の能力『能力支配（AIMコントロール）』」

「dehggdjgapsjhs oi gjk fj! !dfhjdfh  
fjhr! !」

「どの能力も強力すぎて、この街を破壊しかねないから」

言葉の通じない天使に一通りの説明をした後、滝壺は一旦目をつぶると、今まで眠たそうに開いていた瞳をクワツ！と開く。

「AIM拡散力場…コントロール・スタート支配開始」

## 禁止（後書き）

以上です。

まあ色々ギャグ入れながらなので書いてる分には楽しかったです。ただ、ツンドラちゃんのみは何人が分かるか…

あれは某、化物の話のアニメで（声）斉藤さん言っていた事なので、実際に小説の方を読んでいない私には、その中で実際に言っていたかは分かりません。

けど、使っちゃいました。だって好きなんだもんガン　ンネタ…間違いを直すとしたら、明日です。

では、今回はこの辺で

また次回もがんばります。

多分、間違いを直すときは、この後書きも書きなおすと思います。でも、それって後書きって言うのかな？

## 実行（前書き）

どうも出来ました。

新年になる前にもう一本くらいやっておきたいんですけど、

どうですかね？

実を言うと、新年一発目の回とオリジナルの小説とこれとで、  
3本書いてるんでなかなか進みません。

ふ〜困ったものです。

そんなこんなで53話行きます

## 実行

第7学区から少し離れた23学区。

そこで戦う絶対能力者の二人に敵とは違う、何か特別な気配を感じ取っていた。

「うわっ…！」

「ああ！この感じ…！」

懐かしくも感じるその気配に御坂と食蜂は体を震わして反応した。因みにそのせいで明らかかな隙が生まれたのだが、シルビアにはそれが演技かどうか分からなかった。その隙を突かれる事はなかった。

「あんたも感じたなら、気のせいじゃないってことね…！」

「何度味わってもこの感覚は慣れませんねえ〜」

そう、何度か経験したが慣れることのない気配。例えるなら、自分の存在そのものを丸ごと何か支配されているような、

「久しぶりね…この感じ………つまりが滝壺が…！」

「まさか、あの学園個人まで動き出すなんて…先ほどの天使と言い、とんでもない事になってきましねえ〜」



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

場所は戻って、第7学区。

「sgjisghhpizffgoh!!」  
「学園都市265名の空間操作系能力者を調査、サーチ解析……………全能力  
を収集…終了」

天使の上げる悲鳴とも雄叫びとも取れる奇声に滝壺は一切顔色を変えずに淡々と語りだす。そして、準備が整ったのか、滝壺はこんな事を口にした。

「……………実行」  
「fhgokgnaoirhbopaaaaa!!」

紫電の迸る翼を目の前の滝壺に叩きつけながら天使は、妙な経験をする事になった。つい先ほどまで、目の前にいた筈の滝壺が突如、姿を消した。だが、それだけではない。天使の今まで見ていた目の前の景色も変わったのだ。天使は、その巨体から滝壺を上から下に見下ろす形に見ていたのだが、今の天使は下から上、つまり空を見

上げるとような態勢になっていた。

「ここなら、少しは周りに迷惑が掛からないかな……」

天使は羽と何で出来ているか分からない白い皮膚に覆われている手の様な物を使って、体を起こした。

その様子を見守りながら、滝壺は先ほどと同じようにクワッ！と何時もより目を大きく開いた状態で

「ここは第19学区。昔はそれなりに人が住めるようになっていたけど、今ではすっかり廃れちゃって、今は私達しかいない」

だから、と一旦区切り。

「ここですらいくらでも暴れられる」

その言葉が戦闘開始の合図だった。

先に仕掛けたのは天使。

滝壺の言葉が理解できたかどうかは不明だが、天使は顔の口（と思われる所）から光が溢れだした。

「……！空間操作能力収集！！」

滝壺が何らかの力を発動した直後だった。

天使の口から溢れ出た光が滝壺に向かつて一直線に突き進む。

その輝きや大きさから、当たれば一たまりもない事は見て取れるが、その光は滝壺に当たる事はなかった。光は滝壺の目の前まで来ると、見えない壁に吸い込まれる様に消えてなくなり、何故か滝壺の数メートル上という何も無い空間から、現れ空へ打ち上げられ、滝壺の遙か上空で爆発した。

「（…あのまま天使にぶつけるって手もあるけど…これだけの威力だと飛ばす場所もしっかり計算しないと）」

光の塊の爆発を前に冷静な分析をした後。

「学園都市456名の水氷操作系能力者を調査、<sup>サーチ</sup>解析……………全能力を収集…終了」

次の一手を撃つ為、直ぐに攻撃の準備を始める滝壺。

整うまでの時間は恐らく数秒程だろう。

だが、たった数秒でも天使の前では命がけの時間だった。

準備する間も天使は次の攻撃の為、右腕を振りかぶっていた。

「水流操作、及び水の凍結を実行！！」

直後、天使の周りを巨大な氷柱のように尖った氷の塊が囲った。

「dfpijggsjgfbjbspojh!!」

「ニードル…」

滝壺の言葉を合図に氷柱は天使に突き刺さった。

「gguaaaaaaa!!」

体に痛覚があるのか、悲鳴のような叫び声を上げる天使に滝壺は一切の容赦を捨てた様子で、

「悪いけど、私にはあなたを帰してあげるだけの力がないの…だから」

バリイン！と、突き刺さった巨大な氷柱を弾くように砕いた後、天使が再び右手を振りかぶる。

そして、次の瞬間。

ポオオン！

今度はどこからともなく現れた巨大な炎の塊が天使にぶつかり、その動きを無理矢理遮った。

「かみじょうが来るまで、私が相手をしてあげる…」

「grhsaaaaagspirja!!」

防戦一方の今の状態が気に入らないのか、天使は怒りらしき声色で叫び。

その周りに先ほど体に突き刺せられた物と同じ巨大な氷柱が現れた。

「あなたも随分攻撃のバリエーションがあるみたいだね…」

それからのひたすら、多彩な攻撃の応酬が続いた。

滝壺が炎を出せば、天使も炎を出し、

氷を出せば、氷を出す。

氷に炎、時には電撃といった力を使い、天使の攻撃を止め、反撃をする。普通の人間には出来ない事を学園個人である滝壺は、それを見事にやってのけた。だが、やがて、その均衡していたように見える力のぶつかり合いに変化が起こり始めた。

きっかけは滝壺が放った一発の炎。

今まで、同じ力に同じ力をぶつける事しかしてこなかった天使が今度は炎の対の存在である水をぶつけて

炎を消し去り、そのまま滝壺に反撃してきたのだ。

「ッ！空間移動!!」

普通の滝壺なら、決して避けられる攻撃ではなかったが、空間移動で機動力を補い事なきは得られた。

「（能力の相性を理解し始めてる。ここからはもつと的確な力を呼び出さないといけない）」

互いの力量が拮抗しているなら、そこからは相性の悪さが勝敗に響いてくる。これからはミスが許されない厳しい戦いになると考えていると。

そこで、滝壺は気付いてしまった。

「はあ…はあ…あつ」

確かに天使とは互角の戦いを繰り広げているが、今の滝壺は息が乱れ、ポタポタと額から汗がにじみ出て、自身がどれだけ無理をしているのかが否応無く分かってしまう。

「（まだ、始まって5分ぐらしか経ってないのに…）」

その昔、滝壺は『体晶』という特殊な薬品を使う事で能力を暴走させて、無理矢理その力を強化していた。だが、今はその力を根本から理解し、『体晶』を使わなくても能力の暴走が出来るようになっていた。といつても、それは能力を無理矢理使用している事となんら変わりはない。その為、滝壺の能力は昔のように自分の命の危険性はないが、長時間の能力使用は出来なくなっていた。

「（5年前は16分27秒までは能力を発動出来たのに…やつぱり、実戦から離れるところなっちゃうのかな？）」

おかしなもので、人は意識し始めると今までのような同じペースを維持することが出来ず、疲れるペースがより速くなってしまふ。命にかかわる訳ではないが、その額に通る嫌な汗がかつて『体晶』で苦しんだ頃の記憶を薄らと蘇らせ、僅かながら滝壺の能力使用の計算に影響を出し始めた頃だった。

「(しまった!)」

と後悔の言葉が滝壺の心をよぎった。

別に天使の攻撃を避けられない訳ではない。

直撃は避けられるようしつかりと空間移動をする事が出来た。

だが、移動した先が悪かった。

今までのように相手の後ろならまだしも、相手が揮う拳が叩きつけられる地点からわずか数十メートルという距離では、あまりに心もとなかった。現に天使の叩きつけられた拳の余波が滝壺を襲い。キヤシヤな滝壺の体は何メートルも後ろに吹き飛ばされた。

「アゲツ!!」

地面に叩きつけられ、鈍い痛みが体に走ったが、滝壺は直ぐに立ち上がる。

「sf gk jsdf kjhaa uao!!」

「うう…空間…移動…ッ!」

次の攻撃の為、拳を振りかぶる天使を見て、滝壺は直ちに空間移動の準備に取り掛かったが、ズキツと体に走った痛みがそれを遮り、回避をさせてくれなかった。

「bagyoaigapoooooooo!!」

ダメだ、避けられない。

自身のひ弱さを知っている滝壺は覚悟を決め、目を瞑った。直後、ドカアアン！。

轟音が響いた。

しかし、奇妙な事に滝壺の体に痛みらしい痛みはなかった。代わりに、

「おい、こら…デカブツ…」

聞きなれた声が耳に届いてきた。

「人の女に手え出してんじゃ…ねエよ！！！！」

ドオオン！と再び轟音が滝壺の耳に響く。

「はまづら？」

「来たぜ相棒。地獄のそこまで…」

滝壺が目を開くと、そこには恋人でもある浜面仕上が刀を構えて立っていた。救援に最愛の人の登場。一人孤独で戦っていた滝壺の心に温かな安心が生まれ始めたのだが、

「って、カツコつけたけど、倒れてねえエし！振りかぶってるウウー！！」

恐らく魔術を使ったのだろうが、天使にこれといったダメージは与えるどころか、ダウン一つ奪えておらず、天使は再び拳を振り下ろす準備を整えており、それを見た浜面がなさけない叫び声を上げている。バコツ！と天使の顔に天使の体の3分の1はあるう巨大な

岩が飛んできて、今度こそ天使を完全に押し倒した。

「うーん流石絹旗ちゃん。超すばらしい送球です!!」

天使が倒れるのを呆然と見守っていると、少し離れた所から、浜面とは別のよく知る声が聞こえてきた。

「きぬはた…」

「おお…ナイス…」

「魔術の力を残す為にわざわざ超足を用意してやったのに、あの程度ですか？」

「足って…お前がお前がおもいつきし、ぶん投げただけだろ！死ぬかと思っただぞ!!」

苦情を言う浜面を暗部にいた頃と同じようにスルーしながら、絹旗は嘗ての同僚滝壺に視線を移し、

「どうも！暗部のスーパーアイドル絹旗最愛ちゃんの超参上です！  
！」

「きぬはた…久しぶりだね。どうして？」

「こいつの部隊はこの近くに配備されてたんだと…さっき偶然会ったんだ」

絹旗より先に答える浜面。

そして、滝壺はそんな浜面にある疑問が生まれた。

「どうして、はまづらがここに？フィアンマは？それにむぎのは、どうしたの？」

「それが、予定が詰まってるのか言って、目くらましするなり、どこか行っちゃったんだ」



「麦野は私に飛ばされるのは超嫌だ。って言ったんで置いてきました。多分すぐきますよ」

「そっか…フィアンマは探さなくていいの？」

「探したくても魔力は抑えて感じられなくなってるし、こっちも大変な事になってたみたいだしな…無茶すぎだ」

「はまづらには言われてくないかな…でもナイスタイミング…もしかして狙ってた？」

「んなわけねえだろ。でも、カッコ良く助けたから許してくんね？」

「それとこれとは別の話…」

「さいですか…」

「でも……来てくれたから許してあげる」

絞り出すような声で柔らかい笑みを浮かべる滝壺。

浜面は、そんな恋人にただ同じように笑って返した。

すると、それを横で気持ち悪そうな物を見るような視線を送る絹旗に気付き。

「何だよ？超キモイです。とか言いたいのか？」

「浜面のくせに超分かってるじゃないですか…でも、代わりに言ってくれる人が来たから止めときます」

「へっ？」

間抜けな声を漏らしていると、

ピンポイントに浜面を狙って放たれたビームが直前にまで迫っていたので、浜面は反射的に顔を横に振ってギリギリの所でかわした。

「だあああああ！何すんだア！？」

こんな事をするのは一人しかいないと、浜面はビームが飛んできた方を見ると、案の定、浜面が想像した通りの攻撃の元である麦野が

現れ、自身の力を使って空からゆっくりと着地をした。

「ラブコメは止める。うざいから…」

と、本当に不快度120%の表情で答える麦野にいろいろと言いたい事があったが、天使が起き上がって理解できない言葉で叫び出し、何か忙しくなる予感がしたので浜面は何も言わなかった。他のメンバーもそれは悟っていたらしく、同様に黙って、真剣な顔つきになった。

「浜面、魔術の方は？」

「正直言うと、無理だ…さっきので『聖母のピアス』に残されていた力は、全部使っちゃった」

「…なんだよ、使えねえな」

「つまり、浜面は元の超役立たずに戻ったって事ですな」

「ひでえ言われようだ…」

「大丈夫。私はそんななまづらも応援してる」

「……へっ、まったく…皆、変わってねえな」

何とも懐かしいやり取りの再放送に浜面は思わず、いや、ただ素直に笑みをこぼしていた。

「まあ、同窓会はまた今度やるとして…どうだい？今は…」

浜面の言葉を最後まで聞くまでもなく、他の3人は戦闘の準備を整える。

浜面もそれを確認するまでもなく悟って、剣を構える。

「『アイテム』の再結成と行こうか？」



## 実行（後書き）

以上です。

滝壺の戦いは書くのに時間かかると思っていました、結構すんなりと進みました。

かなり前から考えていたからかもしれません。

まあ今回の回では滝壺の能力の詳しい説明がなかったので良く分からないかもしれませんが、またその内説明します。まあ簡単に言うと、『多重能力者』ですね。

22巻の最後で言っただけをそのままやっただけです。

でも、きっと鎌地さんなら滝壺の口調をもっといいものに出来ると思うんですけどね…

そこだけ、うまく考え付きませんでした。

それと、絹旗の登場。これは、仕上がる直前に思いつきました。自分的にはアイテムを全員登場させられて、かなり満足です。なんだかアイテムは書いてて凄く楽しいです（笑）。

では今回は、この辺で次回もがんばります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9418n/>

---

その悩みをぶち壊す！万事屋『幻想殺し』

2011年12月20日00時52分発行